

高崎市文化財調査報告書第 426 集

多胡碑周辺遺跡範囲確認調査事業報告書第 1 集

多胡郡正倉跡

—遺跡範囲確認発掘調査総括報告書—

2 0 1 9

高崎市教育委員会

多胡郡正倉跡 正誤表

		誤		正	
巻頭カラー写真図版		左が上		左が北	
目次 2 頁目	2 頁目	第4章 第2節 遺物の検討		第4章 第2節 遺構の検討	
	2 頁目	第4章 第2節 (3) 大型土坑の検討…… 286		第4章 第2節 (3) 大型土坑の検討…… 288	
図版目次 1 頁目右 図 66	図 66	SD20 (75T 部分) 土層断面図		SD20・SD21 (75T 部分) 土層断面図	
2 頁目右 図 225	図 225	SB03・04 にともなう建物位置の検討		SD04・05 にともなう建物位置の検討	
2 頁目右 図 230	図 230	SD03 と SD18 との位置関係		SB03 と SD18 との位置関係	
写真図版目次 2 頁目右	2 頁目右	PL63 第5次調査出土土器/第6次調査出土土器		PL63 第2次～第5次調査出土土器/第6次調査出土土器	
P52 SD04 の旧名称		24T・SD01・3・29・1T・SD01		24T・SD01・29・1T・SD01	
P66 セクシヨン 2・2'	3: 褐 10YR4/4 シルト しまり強い粘性弱い褐色粒子、白色粒子少量			3: 褐 10YR4/4 シルト しまり強い粘性弱い褐色粒子、白色粒子少量 (基壇土上層)	
P66 セクシヨン 2・2'	15: 暗褐 10YR3/4 シルト よくしまる (地山土)			15: 暗褐 10YR3/4 シルト よくしまる (基壇土下層)	
P76 セクシヨン 49・49'	7: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり粘性ややあり白色粒子少量 (基壇土上層)			7: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり粘性ややあり白色粒子少量 (基壇土下層)	
P113 キヤズシヨン	図 66 SD20 (75T 部分) 土層断面図			図 66 SD20・SD21 (75T 部分) 土層断面図	
P278 キヤズシヨン	図 225 SD03・04 にともなう建物位置の検討			図 225 SD04・05 にともなう建物位置の検討	
P285 右 11 行目	小型弓 (228 頁・256 頁)			小型弓 (199 頁・229 頁)	
P298 右 5 行目	分析 12 (276 頁)			分析 12 (248 頁)	
PL63	第5次調査出土土器			第2次～第5次調査出土土器	

【P304】

遺物 番号	図 版	出土地点	種類	数量(cm・g)	厚さ	焼成・色調	胎土	成・整形技法など
133	124	PL53	N11b-Ⅲ1 樹 N11b-Ⅲ附土	平瓦	3 類 長さ:(15.0) 重量:365	2.2 やや酸化 淡灰褐色	灰色硬質石灰、軟質赤褐色粒、片岩、白色石灰	粘土組登りけ成形。凸面斜位平行タタキ。凹面粘土組登りけ成形。泥条盤築技法。凸面斜位平行タタキ。凹面粘土組登りけ成形。横方向指ナデ後、同心円文状のヤてし模様。
134	124	PL53	N11b-Ⅲ1 樹	平瓦	4 類 長さ:(13.5) 重量:310	2.1 酸化 淡灰褐色	白色石灰、灰色硬質石灰、片岩、軟質赤褐色粒、片岩、白色石灰	粘土組登りけ成形。凸面斜位平行タタキ。凹面粘土組登りけ成形。横方向指ナデ後、同心円文状のヤてし模様。

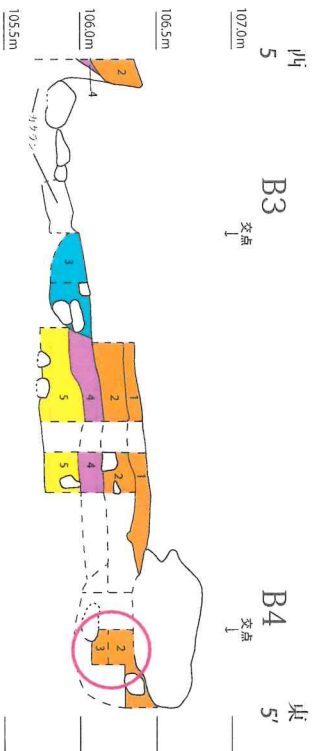
誤

遺物 番号	図 版	写真 図版	出土地点	種類	数量(cm・g)	厚さ	焼成・色調	胎土	成・整形技法など
133	124	PL53	N11b-Ⅲ1 樹	平瓦	3類 長さ:(13.5) 重量:310	2.4	酸化 淡灰褐色	白色石灰、灰色硬質石灰、片岩、炭酸に混入したフロッカ	粘土に紐登り付け成形。凸面斜位平行タタキ。凹面粘土に紐登り付け成形。
134	124	PL53	N11b-Ⅲ1 樹 N11b-Ⅲ附土	平瓦	4類 長さ:(15.0) 重量:365	2.3	やや酸化 淡灰褐色	灰色硬質石灰、軟質赤褐色粒、片岩、白色石灰	粘土に紐登り付け成形。泥条盤築技法。凸面斜位平行タタキ。凹面粘土に紐登り付け成形。横方向指ナデ後、同心円文状のヤてし模様。

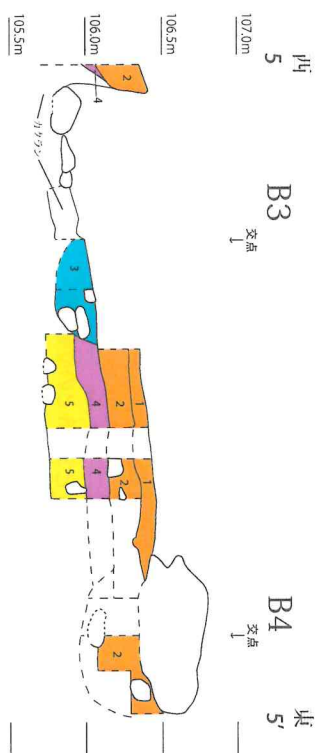
正

誤

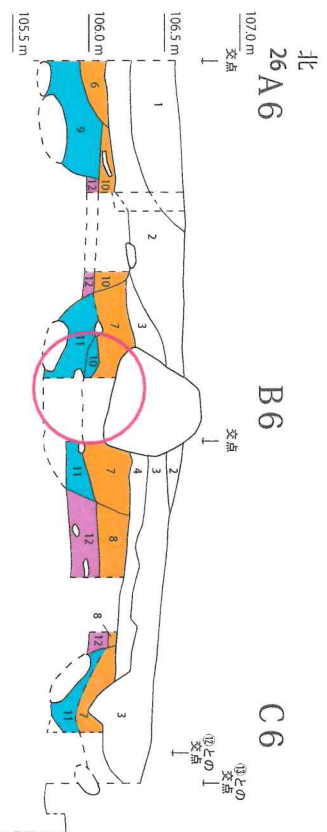
【P67 土層断面図 5-5'】



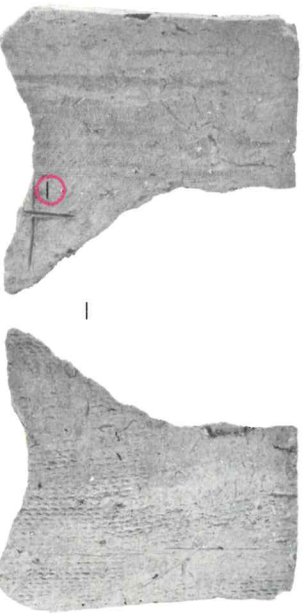
正



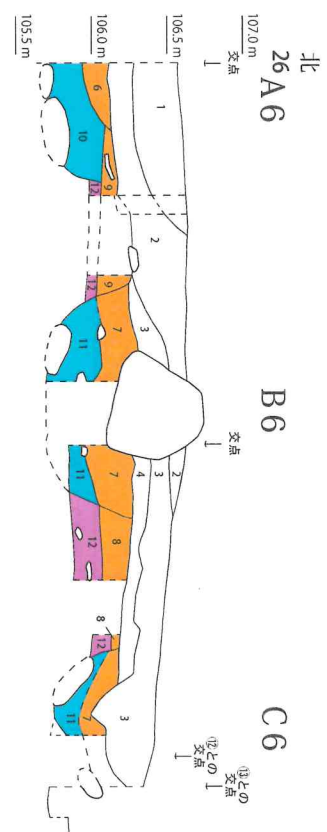
【P71 土層断面図 26-26'】



【PL44】



63



63

序

本書は、高崎市吉井町池に所在する多胡郡正倉跡の発掘調査の成果をまとめた総括報告書です。

多胡郡正倉跡は古代多胡郡が所管した正倉の遺跡で、正倉跡の真北約350mには建郡碑として著名な特別史跡多胡碑が所在し、建郡の経緯を記した文字史料と遺跡の内容とが一致する全国でも貴重な事例です。

多胡碑は平成29年、同じ古代多胡郡内の山上碑、金井沢碑とともに「上野三碑」としてユネスコ「世界の記憶」に登録されました。ボランティア団体や市民団体の方々により精力的に活用・啓発活動が行われ、本遺跡への関心も高まっています。

多胡郡衙は、多胡碑の周辺が他の郡衙遺跡と似た景観を呈していることや、周辺に瓦の散布がみられることから、周辺に所在する可能性が高いと以前から指摘されていました。

多胡碑周辺遺跡については、平成24年1月より第1次調査を開始し、平成28年に至るまでの6次にわたる調査により、正倉の所在および遺跡の範囲を確定することができました。これらの調査の成果は、多胡郡衙の解明に寄与するものと期待しています。

今回の発掘調査により得られた資料が、古代史解明と郷土理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、多大なるご理解、ご協力をいただきました地元関係者の皆様、ご指導とご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます、序といたします。

平成31年3月

高崎市教育委員会
教育長 飯野 眞 幸

例 言

- 1 本報告書は群馬県高崎市吉井町池字岡 508 ほかに所在する多胡郡正倉跡発掘調査報告書である。
- 2 本報告書では、多胡碑周辺遺跡範囲確認調査事業として実施した調査のうち第2次調査（平成24年度）から第6次調査（平成28年度）の古代に該当する内容について報告している。
- 3 多胡碑周辺遺跡範囲確認調査事業は1次調査までは高崎市費、第2次調査以降は国庫補助金（重要遺跡範囲確認）・群馬県費補助金の交付を受け、文化庁・群馬県教育委員会・多胡碑周辺遺跡調査検討委員会の指導の下、高崎市教育委員会が直営で実施した。本報告書作成も上記補助金の交付を受けて行った。
- 4 本遺跡の名称については、第4次調査までは事業範囲すべてに対して「多胡碑周辺遺跡」の名称を用いていた。その後の第5次調査において、事業範囲のうち吉井町池字岡・岡ノ西周辺（岡地区）について遺跡の性格が判明したため、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会の指導の下、この部分に対して「多胡郡正倉跡」の名称を用いている。
- 5 本報告書に先立ち、各調査年次の現地説明会資料や研究発表などで調査成果の一部を公表してきたが、調査成果について一部再検討をしているため、本書をもって正式な調査所見とする。
- 6 本報告書作成にともなう整理作業は、高崎市教育委員会が発掘調査時から基礎整理を実施し、平成31年3月29日まで行った。
- 7 本報告書の編集は多胡碑周辺遺跡調査検討委員会の指導の下、滝沢匡（高崎市教育委員会）・小根澤雪絵（高崎市教育委員会）が行った。執筆分担は以下のとおりである。
第2章第2節—滝沢匡・茂木由行（高崎市教育委員会）・久保田亜美（高崎市教育委員会）、
第3章第3節—小根澤雪絵、第3章第4節—本文中に記載、第4章第1節（1）—小根澤雪絵
上記以外はすべて滝沢が執筆した。
なお、第3章第4節自然科学分析では委託業務以外に、京都大学大学院農学研究所教授：稲村達也氏、奈良県立橿原考古学研究所：絹畠歩氏・岡田憲一氏、立正大学地球環境科学部助教：下岡順直氏に分析を依頼し、玉稿を賜った。
- 8 遺構写真撮影は各年度の発掘担当者が35mmモノクロフィルムおよびカラーリバーサルフィルム、デジタル一眼カメラ（RAW データ）で行い、遺物写真撮影は小根澤の指導の下、原誠二（高崎市教育委員会臨時職員）が行った。
- 9 遺構の空中写真撮影は（株）測研および（有）毛野考古学研究所、現況地形測量および平面オルソ画像作成は（株）シン技術コンサルにそれぞれ依頼した。
- 10 遺構記載の用例は以下のとおりである。
 - （1）座標系は平面直角座標第Ⅸ系（世界測地系）を用い、水準は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。調査途中の2011年（平成23年）に東日本大震災が発生したが、座標系・水準は震災後の調査でもこれによる補正はせずに震災前の値を用いた。
 - （2）本報告書中の方位はすべて座標北を示す。
 - （3）本報告書に使用した地図は、国土地理院発行1/20万地勢図「宇都宮」「長野」、1/5万地形図「高崎」「藤岡」「富岡」「上野吉井」、1/2万5千電子地形図および高崎市発行1/2500地形図（平成23年）、吉井町発行1/3000地形図（昭和40年）である。

SB：礎石建物 SD：溝 SK：土坑 SL：炉跡 SP：柱穴・ピット ST：墓
SX：その他の遺構 NR：自然流路

遺跡位置図・周辺遺跡図・遺跡全体図等：任意 遺構平面図：1/100 土層断面図：1/50

(7) 本報告中の火山噴出物（テフラ）は以下の略号を用いた。年代観は以下のとおりである。

始良 Tn 火山灰：AT（2.4 ～ 2.5 万年前） 浅間板鼻褐色軽石群：As-BP（1.9 ～ 2.4 万年前）
浅間 C 軽石：As-C（3 世紀末～4 世紀初頭） 浅間 B テフラ：As-B（1108 年：嘉承 3 年・天仁元年）
浅間 A テフラ：As-A（1783 年：天明 3 年）

(1) 遺物実測図の縮尺は各図にスケールを示した。基本縮尺は以下のとおりである。

土器 1/3 軒丸瓦 1/4 軒平瓦 1/5 丸平瓦 1/5 道具瓦 1/5
被熱粘土塊 1/3 木製品 1/3

須恵器断面 土師質須恵器断面

 広端部隅落とし範囲

 粘土板合せ目ライン

(4) 土器ならびに瓦観察表に記載した色調の用語は、前掲『新版標準土色帖』に従うと以下の表記に対応する。

酸化焰氣味：暗灰褐色（10YR4/1～5/1）灰褐色（10YR6/2～7/2）灰白色（2.5Y8/1～8/2）

燻し焼成：暗黒色（7.5Y2/1・N2～3）黒褐色（2.5Y3/1）

- 12 発掘調査記録・出土遺物は高崎市教育委員会で保管・公開している。
- 13 本遺跡の発掘調査、報告書の作成に当たり、多くの諸氏・諸機関からご指導・ご協力を賜った。

記して感謝申し上げたい。(敬称略・五十音順)

秋池 武、浅野啓介、新井 仁、飯田浩光、石田 真、出浦 崇、稲村達也、大江正行、
大橋泰夫、岡田憲一、神谷佳明、木津博明、絹島 歩、国武貞克、久保信太郎、栗田一生、
小林 正、小原俊行、小宮 豪、小宮俊久、桜井美枝、笹沢泰史、佐藤 信、下岡順直、
新垣清貴、神保侑史、須永光一、早田 勉、大工原豊、高井佳弘、知久裕昭、津島秀章、
永井智教、棚島道雄、棚田佳男、橋本 淳、林 正憲、平川 南、屋間孝志、前澤和之、
前田和昭、町田 孝、松田 猛、松原孝志、森先一貴、山路直充、山中敏史、若狭 徹
文化庁文化財第二課、群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県立歴史博物館

目 次

巻頭図版 / 序 / 例言 / 目次

第1章 調査に至る経緯および事業の目的・経過

第1節 事業および報告書作成の目的	1
第2節 調査に至る経緯および事業計画書の作成	2
第3節 事業の経過	4
(1) 調査対象地の選定	4
(2) 調査方針の決定	4
(3) 調査体制の整備	5
(4) 発掘調査の経過	6

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	8
(1) 吉井地域の概要および多胡郡正倉跡の位置	8
(2) 地形	8
(3) 地質・地史	11
第2節 歴史的環境	16
(1) 鎭川流域における旧石器・縄文・弥生時代の様相	16
(2) 鎭川流域における古墳時代前期・中期の様相	18
(3) 上毛野地域西部における6世紀前半の様相	22
(4) 緑野屯倉・佐野屯倉の成立と6世紀後半の様相	22
(5) 鎭川流域周辺の渡来文化	24
(6) 7世紀における多胡郡地域の様相	25
(7) 多胡郡地域の集落の動態	26
(8) 古代多胡郡と周辺の様相	26
(9) 中世以降の多胡郡および周辺の様相	32
第3節 多胡郡衙についての研究史	37
(1) 尾崎喜左雄の研究	37
(2) 尾崎研究を継承した多胡郡衙比定地の研究	38
(3) 碑文内容から推察した多胡郡衙位置への言及	38

第3章 多胡郡正倉跡の調査

第1節 調査の方法・経過および基本層序	41
(1) 調査の方法および経過	41
(2) 基本層序および遺跡の現況地形	53
第2節 古代の遺構と旧地形	57
(1) 礎石建物	57
(2) 土坑	93
(3) 溝および土橋	96
(4) その他の遺構	119
(5) 旧地形	119

図版目次

図 1	多胡碑	1	図 56	SD18 (63T 部分) 平面図・土層断面図	102
図 2	多胡碑 3D 画像	1	図 57	SD17・SD18(63T 部分)・SX58 (土橋) 平面図	103
図 3	多胡郡正倉跡の位置	2	図 58	SD17・SD18(63T 部分) 土層断面図	104
図 4	多胡碑周辺遺跡範囲確認調査事業の 調査対象地および地区	3	図 59	SX58 (土橋) 土層断面図	105
図 5	遺跡の位置および周辺の地勢	9	図 60	SD20・SD21 西辺外周区画溝 平面図	107
図 6	吉井地域周辺の河岸段丘図	10	図 61	SD20・SK14 (27-1・2・3T 部分) 平面図 ・SK14 土層断面図	108
図 7	吉井段丘の詳細図	10	図 62	SD20 (27-1・2・3T 部分) 土層断面図	109
図 8	遺跡周辺地形図(平成 23 年高崎市地形図を加工)	12	図 63	SD20 (71・72・76T 部分) 平面図	110
図 9	遺跡周辺地形図(昭和 40 年吉井町地形図を加工)	13	図 64	SD20 (71・72・76T 部分) 土層断面図	111
図 10	遺跡周辺地質図	15	図 65	SD20・SD21 (75T 部分) 平面図	112
図 11	周辺遺跡地図(旧石器・縄文・弥生時代)	17	図 66	SD20 (75T 部分) 土層断面図	113
図 12	上毛野地域南西部の主要古墳位置図	18	図 67	南辺外周区画溝 平面図	115
図 13	吉井地域周辺の遺跡位置図(古墳時代以降)	19	図 68	SD23 (57T 部分)・SK24 平面図・土層断面図	116
図 14	舟型石棺・長持形石棺分布図	21	図 69	SD23 (60T・66T 部分) 平面図	117
図 15	凝灰岩削石積石室の分布	23	図 70	SD23 (60T・68T 部分) 土層断面図	118
図 16	上毛野地域 6 世紀後半における装飾付大刀分布図	24	図 71	旧地形 平面図	120
図 17	多胡郡地域周辺の竪穴建物数	27	図 72	NR25 平面図	121
図 18	東山道位置図(8 世紀)	29	図 73	NR25 (19T・64-1T 部分) 平面図・土層断面図	123
図 19	上野国内郡界図および主要古代遺跡位置図	29	図 74	NR26 (31T・75T・76T 部分) 平面図(1)	125
図 20	多胡郡内の郷分布	29	図 75	NR26 (76T 部分) 土層断面図(1)	126
図 21	遺跡周辺字切図	39	図 76	NR26 (25T・29-1T 部分) 平面図(2)	127
図 22	グリッド原点と多胡郡正倉跡および多胡碑の位置	41	図 77	NR26 (25T 部分) 土層断面図(2)	128
図 23	グリッド設定図	42	図 78	NR26 (43T 部分) 土層断面図(3)	128
図 24	遺跡全体平面図	45	図 79	NR26 (43T・44T 部分) 平面図(3)	129
図 25	年度別調査区配置図	46	図 80	NR27 (44T・45T・46-1T・56T 部分) 平面図(1)	131
図 26	遺構配置図	47	図 81	NR27 (14T・44T・45T・46-1T 部分) 平面図(2)	133
図 27	多胡碑西地区・隣接地区 調査区位置図	48	図 82	NR27 (46-1T 部分 下層) 平面図	133
図 28	基本層序	54	図 83	NR27 (44T・45T・46-1T・46-2T 部分) 土層断面図	135
図 29	多胡郡正倉跡 現況詳細測量図	55	図 84	NR27 (67T 部分) 平面図(3)・土層柱状図	137
図 30	遺跡東端の凝灰岩露頭	56	図 85	NR28 (73T・74T) 平面図	138
図 31	SB01 (13-1T・33T・54T) 平面図	58	図 86	NR28 (73T・74T 部分) 土層断面図・土層柱状図	139
図 32	SB01 土層断面図(1)	59	図 87	NR29 (66T 部分) 平面図・土層断面図	140
図 33	SB01 土層断面図(2)・SX06 土層断面図	60	図 88	SB03 周辺出土 軒丸瓦 1 類(1)	153
図 34	SB02 (42T・13-3T) 平面図・13-3T 土層断面図	62	図 89	SB03 周辺出土 軒丸瓦 1 類(2)	154
図 35	SB03 平面図	63	図 90	SB03 周辺出土 軒丸瓦 2 類	154
図 36	SB03 サブトレンチ・土層観察用畦配置 および土層断面図位置図	65	図 91	SB03 周辺出土 軒平瓦 1・2 類	154
図 37	SB03 土層断面図(1)	66-67	図 92	SB03 周辺出土 丸瓦 1 類(1)	155
図 38	SB03 土層断面図(2)	68-69	図 93	SB03 周辺出土 丸瓦 1 類(2)	156
図 39	SB03 土層断面図(3)	70-71	図 94	SB03 周辺出土 丸瓦 1 類(3)	157
図 40	SB03 土層断面図(4)	72-73	図 95	SB03 周辺出土 丸瓦 2 a 類	158
図 41	SB03 土層断面図(5)	74-75	図 96	SB03 周辺出土 丸瓦 3 類	159
図 42	SB03 土層断面図(6)	76-77	図 97	SB03 周辺出土 丸瓦 4 a 類(1)	160
図 43	SB03 土層断面図(7)	78-79	図 98	SB03 周辺出土 丸瓦 4 a 類(2)	161
図 44	59T・62T 平面図	85	図 99	SB03 周辺出土 丸瓦 4 a 類(3)	162
図 45	16T・58T 平面図(1)	87	図 100	SB03 周辺出土 丸瓦 4 a 類(4)	163
図 46	16T・58T 平面図(2)	89	図 101	SB03 周辺出土 平瓦 1 a 類(1)	164
図 47	58T 平面図(基本層序 IV 層上面)・土層断面図	91	図 102	SB03 周辺出土 平瓦 1 a 類(2)	165
図 48	51T 平面図・SD39 (51T 部分) 土層断面図	92	図 103	SB03 周辺出土 平瓦 1 a 類(3)	166
図 49	SK07・SP08～SP13 (18T) 平面図・ SK07 土層断面図	94	図 104	SB03 周辺出土 平瓦 1 b 類	166
図 50	SK15 平面図・土層断面図	95	図 105	SB03 周辺出土 平瓦 2 a・2 b・2 c 類	167
図 51	SK41 (65-1T) 平面図・土層断面図	97	図 106	SB03 周辺出土 平瓦 2 d 類	168
図 52	SK42・SK43 (65-5T・65-6T) 土層断面図	98	図 107	SB03 周辺出土 平瓦 5 類	168
図 53	SD04・SD05 (24T) 平面図	100	図 108	SB03 周辺出土 道具瓦(面戸瓦)	169
図 54	SD04・SD05 (24T・28T・29-1T) 土層断面図	101	図 109	SB03 周辺出土 道具瓦(隅切平瓦 1)	170
図 55	北辺外周区画溝平面図	102	図 110	SB03 周辺出土 道具瓦(隅切平瓦 2)	171
			図 111	SB03 周辺出土 道具瓦(熨斗瓦)	172
			図 112	58 T -SX57 出土 軒丸瓦 3 類・軒平瓦 2 類	173

図 113	58 T -SX57 出土	丸瓦 1 類 (1)	173
図 114	58 T -SX57 出土	丸瓦 1 類 (2)	174
図 115	58 T -SX57 出土	丸瓦 2 a・2 b 類	175
図 116	58 T -SX57 出土	丸瓦 4 a 類	175
図 117	58 T -SX57 出土	平瓦 1 a 類 (1)	176
図 118	58 T -SX57 出土	平瓦 1 a 類 (2)	177
図 119	58 T -SX57 出土	平瓦 1 a 類 (3)	178
図 120	58 T -SX57 出土	平瓦 2 a 類	179
図 121	58 T -SX57 出土	平瓦 2 b 類	180
図 122	58 T -SX57 出土	平瓦 2 c 類	181
図 123	58 T -SX57 出土	平瓦 2 d 類	181
図 124	58 T -SX57 出土	平瓦 3・4 類	181
図 125	58 T -SX57 出土	平瓦 5 a 類	182
図 126	58 T -SX57 出土	平瓦 5 b 類	183
図 127	58 T -SX57 出土	平瓦 5 c 類	184
図 128	58 T -SX57 出土	道具瓦 (不明)	184
図 129	58 T -SX57 出土	道具瓦 (隅切平瓦)	185
図 130	58T・59T 以外出土	軒丸瓦 1 類・軒平瓦 1 類	186
図 131	58T・59T 以外出土	丸瓦 1 類 (1)	186
図 132	58T・59T 以外出土	丸瓦 1 類 (2)	187
図 133	58T・59T 以外出土	丸瓦 2 a 類	187
図 134	58T・59T 以外出土	丸瓦 4 a・4 b 類	188
図 135	58T・59T 以外出土	平瓦 1 a 類 (1)	189
図 136	58T・59T 以外出土	平瓦 1 a 類 (2)	190
図 137	58T・59T 以外出土	平瓦 1 a 類 (3)	191
図 138	58T・59T 以外出土	平瓦 1 b 類	191
図 139	58T・59T 以外出土	平瓦 2 a 類	192
図 140	58T・59T 以外出土	平瓦 2 b 類・4 類	193
図 141	58T・59T 以外出土	平瓦 5 d 類	193
図 142	58T・59T 以外出土	道具瓦 (面戸瓦)	193
図 143	58T・59T 以外出土	道具瓦 (隅切瓦・熨斗瓦)	194
図 144	線刻瓦		194
図 145	SB03 周辺出土土器		196
図 146	第 2 次～第 6 次調査出土土器		197
図 147	出土被熱粘土塊 (1)		198
図 148	出土被熱粘土塊 (2)		199
図 149	出土木製品		199
図 150	13T 1 グリッドの土層柱状図		205
図 151	13T 5 グリッドの土層柱状図		205
図 152	16T 4 グリッドの土層柱状図		206
図 153	18T 5 グリッドの土層柱状図		206
図 154	22T 5 グリッドの土層柱状図		206
図 155	23T-P1 の土層柱状図		206
図 156	図 161 試料写真・分析処理装置と分析状況写真		207
図 162	31T -SD54 北側セクションの土層柱状図		211
図 163	31T -SD54 西側南北セクションの土層柱状図		211
図 164	33T-SB01-D2 セクションの土層柱状図		211
図 165	31T-SD54 西側南北セクション・試料 2		211
図 166	73T 南壁の土層柱状図		215
図 167	74T の土層柱状図		215
図 168	76T の土層柱状図		215
図 169	73T 南壁・試料 1 (落射光)		215
図 170	73T 南壁・試料 2 (落射光)		215
図 171	暦年較正結果		217
図 172	暦年較正結果		219
図 173	樹木		220
図 174	暦年較正結果		222
図 175	図 180 作業工程		223
図 181	木材		225

図 182	保存処理前・処理後写真	226
図 183	多胡郡正倉跡の木材	228
図 184	小型弓保存処理状況写真	229
図 185	多胡郡正倉跡出土木製品保存処理	230
図 186	小型弓実測図	231
図 187	花粉化石群集	235
図 188	植物珪酸体含量	236
図 189	珪藻化石・植物珪酸体	239
図 190	花粉化石	240
図 191	出土米ブロック (599) の X 線 CT 画像	241
図 192	粳長と粳幅との関係	242
図 193	品種「戦捷」の脱粒粉 (a) と非脱粒粉 (b) の X 線 CT 画像	243
図 194	非脱粒粉 (ブロック e) の X 線 CT 画像	243
図 195	暦年較正結果	245
図 196	炭化米	247
図 197	炭化材	247
図 198	暦年較正結果	249
図 199	分析試料	249
図 200	測定対象	249
図 201	多胡郡正倉跡の種実	251
図 202	分析用の実体顕微鏡	251
図 203	炭化種実塊の監察	251
図 204	放射性炭素年代測定試料	252
図 205	暦年較正結果	253
図 206	59T-F2c グリッドにおける試料採取地点	255
図 207	採取した焼土	255
図 208 - 1	焼土の T グローカーブ	256
図 208 - 2	300℃における生長曲線	256
図 208 - 3	等価線量のプラトーテスト	256
図 209	測定に供した被熱粘土塊試料	258
図 210 - 1	等価線量の評価	259
図 210 - 2	低線量域補正の評価	259
図 211	丸・平瓦総破片数総重量比率グラフ	260
図 212	丸平瓦成形・類型別割合図	262
図 213	軒丸瓦 1 類範傷模式図および丸瓦部截面位置図	265
図 214	軒先瓦関連資料 (1)	266
図 215	軒先瓦関連資料 (2)	267
図 216	多胡郡出土瓦の時期と系譜	271
図 217	上野国内における礎石建物の根石例	274
図 218	SB03 旧地形等高線復元図	275
図 219	SB03 基壇土下層平面範囲および等高線復元図	275
図 220	SB03 基壇土中層平面範囲および等高線復元図	275
図 221	SB03 基壇土上層平面範囲図	275
図 222	SB03 礎石下部の掘り込み 模式図	276
図 223	SB03 周辺 出土瓦重量分布図	276
図 224	SB03 周辺 被熱粘土塊重量分布図	276
図 225	SB03・04 にともなう建物位置の検討	278
図 226	多胡郡正倉跡内の現況・伝聞での礎石の分布	279
図 227 - 1	礎石使用可能な礎の調達可能位置	281
図 227 - 2	入野橋付近の礎散布状況	281
図 227 - 3	鑄川の礎	281
図 228	外周区画溝の規格検討のための計測位置	282
図 229	関東地方の主な正倉院	284
図 230	SD03 と SD18 との位置関係	285
図 231	正倉院外周区画溝の勾配方向	286
図 232	正倉院外周区画溝および現況地形のエレベーション図	287
図 233	多胡郡正倉跡と周辺条里の検討	289
図 234	多胡郡正倉跡と多胡碑との位置関係	297

表目次

表 1	多胡碑周辺遺跡範囲確認調査事業の地区別字一覧	3	表 27	多胡郡正倉跡における屈折率測定結果	214
表 2	多胡碑周辺遺跡調査検討委員会	5	表 28	放射性炭素年代測定および暦年較正結果	217
表 3	多胡碑周辺遺跡 調査組織	5	表 29	放射性炭素年代測定・樹種同定結果	219
表 4	発掘調査の経過	6	表 30	測定試料および処理	221
表 5	整理作業における遺構・遺物検討の経過	7	表 31	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	221
表 6	図 12・13 掲載遺跡一覧表	20	表 32	多胡郡正倉跡木製品 小型弓	229
表 7	多胡郡地域周辺の竪穴建物数	27	表 33	作業工程	229
表 8	古代多胡郡の郷（里）名	28	表 34	分析試料および分析項目一覧	232
表 9	『上野国交替実録帳』諸郡官舎項 多胡郡部分	31	表 35	珪藻分析結果	234
表 10	尾崎喜左雄による「御門」地名の一覧	39	表 36	花粉分析結果	235
表 11	新旧グリッド対応表（岡地区のみ）（1）	43	表 37	植物珪酸体含量	236
表 11	新旧グリッド対応表（岡地区のみ）（2）	44	表 38	X線CT計測に供試した出土米ブロックの形状	241
表 12	各トレンチの概要（1）	49	表 39	出土米ブロックに含まれる糊の形状	242
表 12	各トレンチの概要（2）	50	表 40	放射性炭素年代測定結果	245
表 13	新旧遺構名対応表	52	表 41	放射性炭素（ ¹⁴ C）年代測定の試料と測定方法	248
表 14	礎石下部の掘り込み一覧表	82	表 42	放射性炭素（ ¹⁴ C）年代測定結果	248
表 15	礎石等一覧表	83	表 43	放射性炭素年代測定暦年較正結果	253
表 16	北辺外周区画溝 底面標高一覧表	99	表 44	59T-F2c グリッド出土被熱粘土塊の TL 年代測定結果	256
表 17	西辺外周区画溝 検出幅一覧表	106	表 45	被熱粘土塊試料の TL 年代測定結果	258
表 18	西辺外周区画溝 底面標高一覧表	106	表 46	丸・平瓦総破片数総重量比率表	260
表 19	南辺外周区画溝 底面標高一覧表	114	表 47	丸・平瓦個体数算出表	261
表 20	18T Pit 計測表	119	表 48	SB03 周辺出土瓦変遷案	269
表 21	19T Pit 計測表	121	表 49 - 1	北辺区画溝（SD17・18）外側・心・内側座標値計測表	282
表 22	テフラ検出分析結果	202	表 49 - 2	南辺区画溝（SD23）外側・心・内側座標値計測表	282
表 23	屈折率測定結果	204	表 50	正倉院南北距離計測表（外側・心・内側別）	283
付表	多胡碑周辺遺跡における調査地点と採取試料点	204	表 51 - 1	SK15 出土遺物組成表	291
表 24	テフラ検出分析結果	210	表 51 - 2	SK41 出土遺物組成表	291
表 25	屈折率測定結果	210	表 51 - 3	SK42 出土遺物組成表	291
表 26	テフラ検出分析結果	214	表 51 - 4	SK43 出土遺物組成表	291

写真図版目次

巻頭図版 1	SB03 全景 / 多胡郡正倉跡から多胡碑方面を望む 南から	PL6	SB03 遠景 南から / 全景 上が北
巻頭図版 2	SB03 北辺基壇土断面（53-53' 部分） 東から	PL7	SB03 平面オルソ画像 上が北
	SB03 北西 遺物出土状況 東から	PL8	SB03 全景 南から / 西から
	SB03 礎石下部の掘り込み（A4 北西部分）断面 北から	PL9	SB03 全景 北から / 東から
	SB03 北辺 基壇縁石 西から / SB01 全景 左が上	PL10	SB03 A1 礎石 南から / A2 礎石 南から
巻頭図版 3	SX57（58T 部分）平面オルソ画像 上が北		A3 礎石 南から / A4 礎石 南から
	SX58（土橋） 南から / 正倉院南西 湧水点 北から		A5 礎石 南から / A6 礎石 南から
	正倉院外周区画溝南西コーナー 南から		A7 付近礎石 南から / A6 礎石 北から
巻頭図版 4	NR27（44・45T 部分）検出状況 南西から	PL11	SB03 B1 礎石 南から / B2 礎石 南から
	NR27（44T 部分）As-B 下層遺物出土状況 北から		B4 礎石 南から / B6 礎石 南から
	NR27（46-1T 部分）出土米 北から		B8 礎石 南から / D3 礎石 南から
	SB03 周辺出土 軒丸瓦 1 類・軒平瓦 1 類		L1 礎 南から / L2 礎 南から
	SB03 周辺出土 被熱粘土塊 / 75T-SD20 出土 小型弓	PL12	SB03 A1 柱筋交点 / A2 柱筋交点 / A3 柱筋交点
PL1	多胡郡正倉跡 全景 平面オルソ画像 上が北		A4 柱筋交点 / A5 柱筋交点 / A6 柱筋交点
PL2	SB01 全景 南から / （B 列以南） 全景 西から		A7 柱筋交点 オルソ画像 上が北
PL3	SB01 周辺調査区 左が北		北辺基壇縁石（5・6 列付近）オルソ画像 上が北
	A1 礎石掘付穴 南から / A2 礎石掘付穴 南から	PL13	SB03 B1 柱筋交点 / B2 柱筋交点 / B3 柱筋交点
	B2 礎石掘付穴 北西から / B3 礎石掘付穴 西から		B4 柱筋交点 / B5 柱筋交点 / B6 柱筋交点
PL4	SB01 C2 礎石掘付穴 南から / C2 礎石掘付穴 北から		B7 柱筋交点 / B8 柱筋交点 オルソ画像 上が北
	C3 礎石掘付穴断面 北から / 根石検出状況 北から	PL14	SB03 C1 柱筋交点 / C2 柱筋交点 / C3 柱筋交点
	C5 礎石掘付穴 南から / D2 礎石掘付穴 南から		C4 柱筋交点 / C5 柱筋交点 / C6 柱筋交点
	D3 礎石掘付穴 南西から / D4 礎石掘付穴 南から		C7 柱筋交点 / C8 柱筋交点 オルソ画像 上が北
PL5	SB01 B-B' 断面 南から	PL15	SB03 D1 柱筋交点 / D2 柱筋交点 / D3 柱筋交点
	礎石 1 西から / 礎石 2・3 南西から		D4 柱筋交点 / D5 柱筋交点 / D6 柱筋交点
	A1 礎石掘付穴・SX06 検出状況 南から		D7 柱筋交点 / D8 柱筋交点 オルソ画像 上が北
	SB02（13-3T・42T）全景 南から	PL16	SB03 西辺（46-46' 東寄り）基壇断面 南から
	13-3T 礎検出状況 西から / 42T 礎検出状況 北から		北辺（27-27'）基壇断面 西から

北辺 (49-49'北寄り) 基壇断面 東から / 南辺 東から
 B5 礎石下部の掘り込み断面 南から
 B6 礎石下部の掘り込み断面 南から
 基壇土上層の根石と礎石下部の掘り込みの枕状礫
 (A5 礎石位置) 北西から
 北辺基壇縁石および抜き取り痕 南から

PL17 SB03 北西部 北から / 西から

PL18 SB03 基壇土上層 (13-13') 断面東端 南から
 基壇土上層 (13-13' ~ 14-14') 断面部分 南から
 東辺 (土層観察畦除去前) 東から
 東辺 (柱筋 6 ~ 8 列付近) 南から
 東辺 (柱筋 8 列以東) 南から

62T 北端部礎石転用礫検出状況 東から
 59T 南西部全景 南東から / 59T 南東部全景 南東から

PL19 SX57 X=29262.5 Y=-75247.5 付近遺物出土状況 南東から
 X=29262.5 Y=-75248 付近遺物出土状況 北西から
 X=29265 Y=-75225.5 付近遺物出土状況 東から
 基本層序IV層上面検出状況 東から

51T 全景 (Y=-75245以西拡張前) 南から
 SK07 断面 北から / SK14 断面 北から / 15T 全景 南から

PL20 SK24 検出状況・SD23 遺物出土状況 西から
 SK15 断面 南から / 遺物出土状況 東から
 SK41 (65-1T 部分) As-B 混土中遺物出土状況 南から
 (65-1T 部分) 全景 南から

SK42 断面 南から / SK43 断面 南から

PL21 SD04 全景 南から / SD05 全景 西から
 SD04・SD05 (28T 部分) 全景 南から
 29T 全景 南から / SD04 (B-B') 断面 南から

PL22 SD18 (63T 部分) 検出状況 東から / 掘削状況 東から
 西側断面 東から

63T 西壁北端断面 北東から / SD17 検出状況 西から

PL23 SD17・SD18・SX58 (土橋) 平面オルソ画像 上が北
 SX58 (土橋) 検出状況 南から
 SD18・64-1T 東壁断面 南西から
 SX58 (土橋・SD17 部分) 断面 南から / (土橋・SD18 部分) 断面 南から

PL24 SD18 (64-1T A-A' 部分) 断面 西から
 (B-B' 部分) 断面 東から

SD17 (C-C') 断面 西から
 SD18 (64-1T 部分) 遺物出土状況 南から
 SX58 (土橋) 全景 西から / SD17 (C-C' 付近) 完掘状況 西から
 SD20 (27-3T 部分) 断面 南西から / (27-2T 部分) 断面 南から

PL25 SD20 (27-1T C-C' 部分) 断面 南西から
 (27-1T 部分) 掘削状況 南西から
 (27-1T D-D' 部分) 断面 北から
 (27-1T 部分) 掘削状況 北から
 (71T 部分) 断面 南から / 検出状況 東から
 (72T 部分) 断面 南から / (76T 部分) 断面 北から

PL26 SD20・21 (75T 部分) 検出状況 南から
 (75T・A-A' 部分) 断面 北から
 SD20 (75T・B-B' 西寄り) 断面 北から
 SD20・21 (75T・B-B' 中央) 断面 南から
 SD21 (75T・B-B' 東寄り) 断面 南から

PL27 SD20・21 (75T・C-C') 断面 南西から
 SD20 (75T・C-C' 東寄り) 断面 北から
 SD21 (75T・C-C' 西寄り) 断面 北から
 SD20・21 (75T・D-D') 断面 南東から
 (75T・E-E') 断面 北西から
 小型弓出土状況遠景 南から / 近景 北から
 植物遺体出土状況 南から

PL28 SD23 (57T 部分) 遺物出土状況 西から
 完掘状況 西から / 断面 東から
 57T (南寄り) 基本層序IV層堆積範囲 南西から
 SD23 (60T 部分) 全景 西から

PL29 SD23 (68T 部分) 検出状況 西から / オルソ画像 左が北

PL30 SD23 (60T A-A') 断面 西から / (60T B-B') 断面 西から
 (60T C-C') 断面 西から / (68T D-D') 断面 東から
 (68T E-E') 断面 東から / 曲物蓋板出土状況 西から
 (60T 西寄り) 礫出土状況 東から / 完掘状況 東から

PL31 NR25 オルソ画像 上が北 / (19T 部分) 東から / 西から

PL32 NR25 (64-1T 部分) 南から / (64-3T 部分) 東から
 (69T 部分) 南から / (70T 部分) 南から

PL33 NR26 (76T 部分) 断面 北東から / (75T 部分) 検出状況 南から
 (25T 部分) 検出状況 西から
 (25T 部分) 断面 東から / (43T 部分) 南から
 NR26・27 合流点 (44T 部分) 南から

PL34 NR26 (43T 部分) 断面 西から
 NR27 (56T 部分) As-B 下面検出状況 西から
 (C-C' 部分) 縄文樹木出土状況 東から
 (C-C' 部分) 断面 南西から

PL35 NR27 (45T 部分) 南から / (B-B' 部分) 断面 北から
 (46-1T 部分) 南から / 下層 南から
 (A-A' 46-1T 部分) 断面 北から
 (A-A' 44T 部分) 断面 北から / (D-D') 断面 北東から

PL36 NR27 (E-E') 断面 北東から / (F-F') 断面 東から
 (46-1T 部分) 下層礫出土状況 南西から
 (46-1T 南端) 下層礫出土状況 西から
 (14T 部分) 南から / 67-1T 全景 西から

NR28 (73T 部分) 南から / 北壁断面 南東から

PL37 NR29 (66T 部分) 北東から / 南から
 (A-A') 断面 西から
 平成 24 年度 (第 2 次) 空中写真 多胡郡正倉跡 遠景 南から

PL38 SB03 周辺出土瓦 (1)

PL39 SB03 周辺出土瓦 (2)

PL40 SB03 周辺出土瓦 (3)

PL41 SB03 周辺出土瓦 (4)

PL42 SB03 周辺出土瓦 (5)

PL43 SB03 周辺出土瓦 (6)

PL44 SB03 周辺出土瓦 (7)

PL45 SB03 周辺出土瓦 (8)

PL46 SB03 周辺出土瓦 (9)

PL47 SB03 周辺出土瓦 (10) / 58T-SX57 出土瓦 (1)

PL48 58T-SX57 出土瓦 (2)

PL49 58T-SX57 出土瓦 (3)

PL50 58T-SX57 出土瓦 (4)

PL51 58T-SX57 出土瓦 (5)

PL52 58T-SX57 出土瓦 (6)

PL53 58T-SX57 出土瓦 (7)

PL54 58T-SX57 出土瓦 (8)

PL55 58T-SX57 出土瓦 (9)

PL56 58T・59T 以外出土瓦 (1)

PL57 58T・59T 以外出土瓦 (2)

PL58 58T・59T 以外出土瓦 (3)

PL59 58T・59T 以外出土瓦 (4)

PL60 58T・59T 以外出土瓦 (5)

PL61 出土瓦成形拡大写真

PL62 SB03 周辺出土土器

PL63 第 5 次調査 出土土器 / 第 6 次調査出土土器

PL64 出土被熱粘土塊 / 出土木製品

第1章 調査に至る経緯および事業の目的・経過

第1節 事業および報告書作成の目的

多胡郡正倉跡について 群馬県高崎市吉井地域は、古代には律令制における地方行政単位である上野国多胡郡に属していた。各郡には郡衙（郡家）と呼ばれる役所が設置され、その行政区を治めていた。郡衙は政務や儀式の場である郡庁、租税等として徴収された穀類を収納・貯蔵する倉庫である正倉、役人の宿泊施設である館、饗宴などの給食に関わる施設である厨家などから構成されていた（文化庁文化財部記念物課 2013 など）。多胡郡正倉跡は、多胡郡が所管する正倉の遺跡である。

本報告書作成の目的 本報告書は、群馬県高崎市吉井町池に所在する多胡郡正倉跡の発掘調査総括報告書である。発掘調査事業が進み、多胡郡衙に関連する諸施設のうち、多胡郡正倉の所在地およびその範囲を確定するに至った。そこで、この多胡郡正倉跡の発掘調査成果や当遺跡の価値についてまとめ、広く公表し活用してもらうことを目的として発掘調査報告書を作成した。

特別史跡多胡碑 多胡郡正倉跡については、多胡郡建郡の経緯を記した特別史跡多胡碑の存在が特筆さ

れる。多胡碑は、多胡郡正倉跡の真北約 350m に所在する。この碑は、奈良時代の 711 年（和銅 4 年）、この地に多胡郡が新設されたことを記念して建てられたと考えられている。

多胡碑（図 1・2）の碑文には「弁官符す。上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡并せて三郡の内、三百戸を郡と成し、羊に給いて多胡郡と成せ。和銅四年三月九日甲寅に宣る。左中弁正五位下多治比真人。太政官二品穂積親王、左大臣正二位石上尊、右大臣正二位藤原尊」（高崎市 2000）とあり、多胡郡の設置を伝えている。また、『続日本紀』和銅四年（711 年）三月六日条に「上野国甘良郡の織裳・韓級・矢田・大家、緑野郡の武美、片岡郡の山等の六郷を割きて、別に多胡郡を置く」（高崎市 2000）とあり、多胡郡設置に関して同様の内容を伝えている。

そして、古代の書の遺例として、国内だけでなく東アジアにおいても高い評価を得てきた。その碑文内容から地元住民によって「羊さま」と呼ばれ、崇敬の対象とされてきており、群馬県民に広く知られる「上毛カルタ」には「昔を語る多胡の古碑」と詠まれている。

この多胡碑は、その重要性から 1921 年（大正 10 年）に史蹟指定、1954 年（昭和 29 年）に特別史跡



図 1 多胡碑

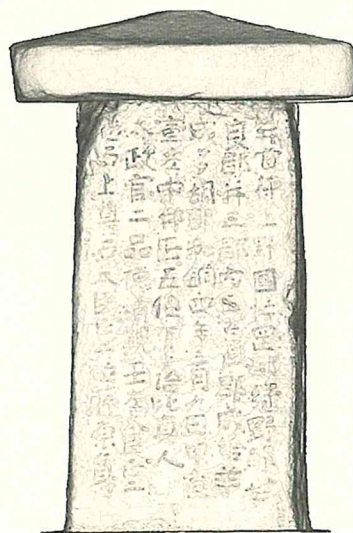


図 2 多胡碑 3D 画像

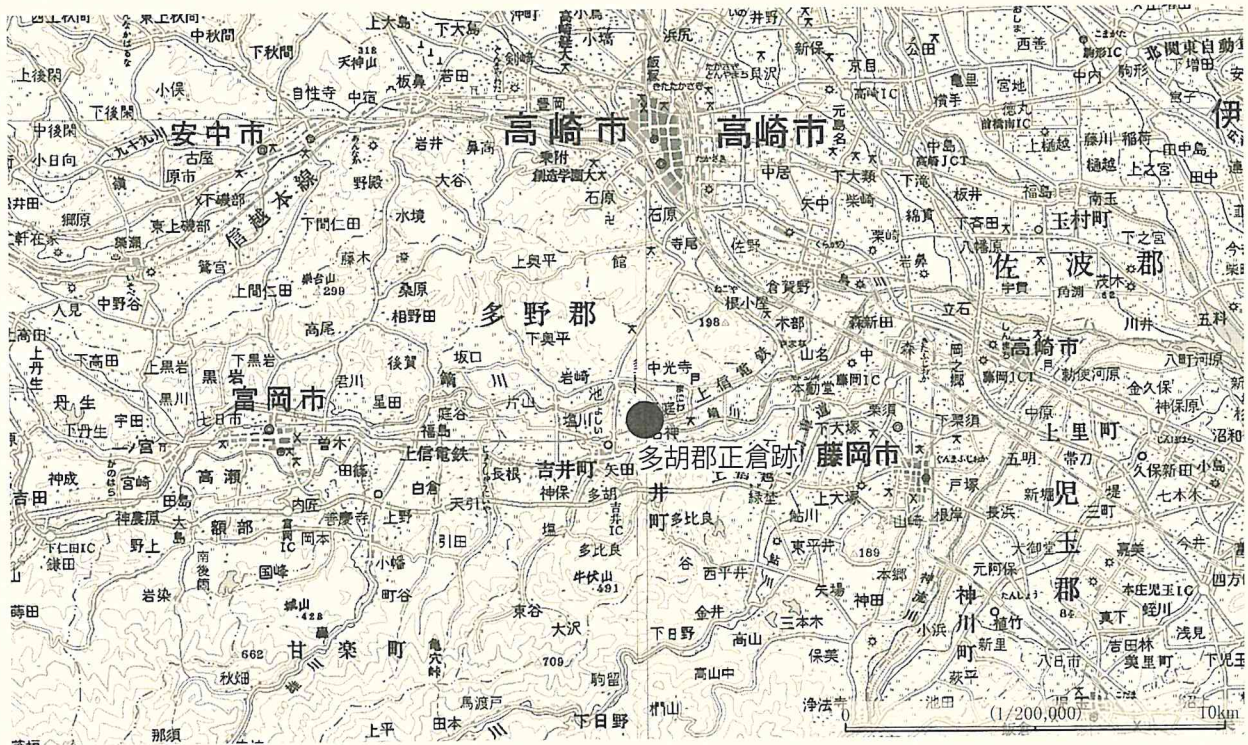


図3 多胡郡正倉跡の位置

に指定されている。また、2017年（平成29年）10月31日には、同じ多胡郡内に所在する山上碑・金井沢碑とともに「上野三碑」としてユネスコ「世界の記憶」に登録され、その価値が世界的に認められた。

本事業の目的 高崎市教育委員会では2011年（平成23年）に作成した多胡碑周辺重要遺跡発掘調査計画書の中で、本事業の目的を以下のように定めた。「多胡碑の史跡としての価値をさらに高める。そのために以前から碑の周辺に推定されている古代多胡郡家および関連遺跡の場所を明らかにする。これは建群の経緯と遺跡の内容が一致する全国初の事例になる。そして多胡碑および確認された遺跡の保存と活用を行う。」

多胡碑周辺は高崎市街地に近く平坦地が広がっていることから、住宅開発が活発な地域である。都市計画道路の建設も予定されており、多胡郡衙に関連する遺跡を発見し保存するためには早期に発掘調査事業に着手する必要がある。

第2節 調査に至る経緯および事業計画書の作成

旧吉井町における取り組み 多胡碑が所在する吉井地域は、平成の大合併により2009年（平成21年）に高崎市に合併する以前は、多野郡吉井町（以後、旧吉井町と呼称）の管下にあった。旧吉井町では2001年（平成13年）より多胡碑の研究を行い、その成果を広く伝えることを目的とした事業を開始した。その集大成として2004年（平成16年）7月4日に東京の全国市町村会館においてシンポジウム「多胡碑と東アジア」を開催し、この内容は同名の書籍（東野・佐藤2005）にまとめられた。このような動きの中で、多胡碑が建てられた時代背景についてより鮮明にして、多胡碑の文化財的価値をさらに高め地域で活用していくためには、碑文に関連する遺跡（多胡郡衙）を発見することが重要であるとされ、多胡碑周辺の計画的な確認調査の必要性が検討されていた。

その後、平成の大合併が全国的に進んでいた2008年（平成20年）、旧吉井町と高崎市は合併協議会を設置した。合併協議会の中では発掘調査事業も取り上げられ、2009年（平成21年）6月1日の合併後、

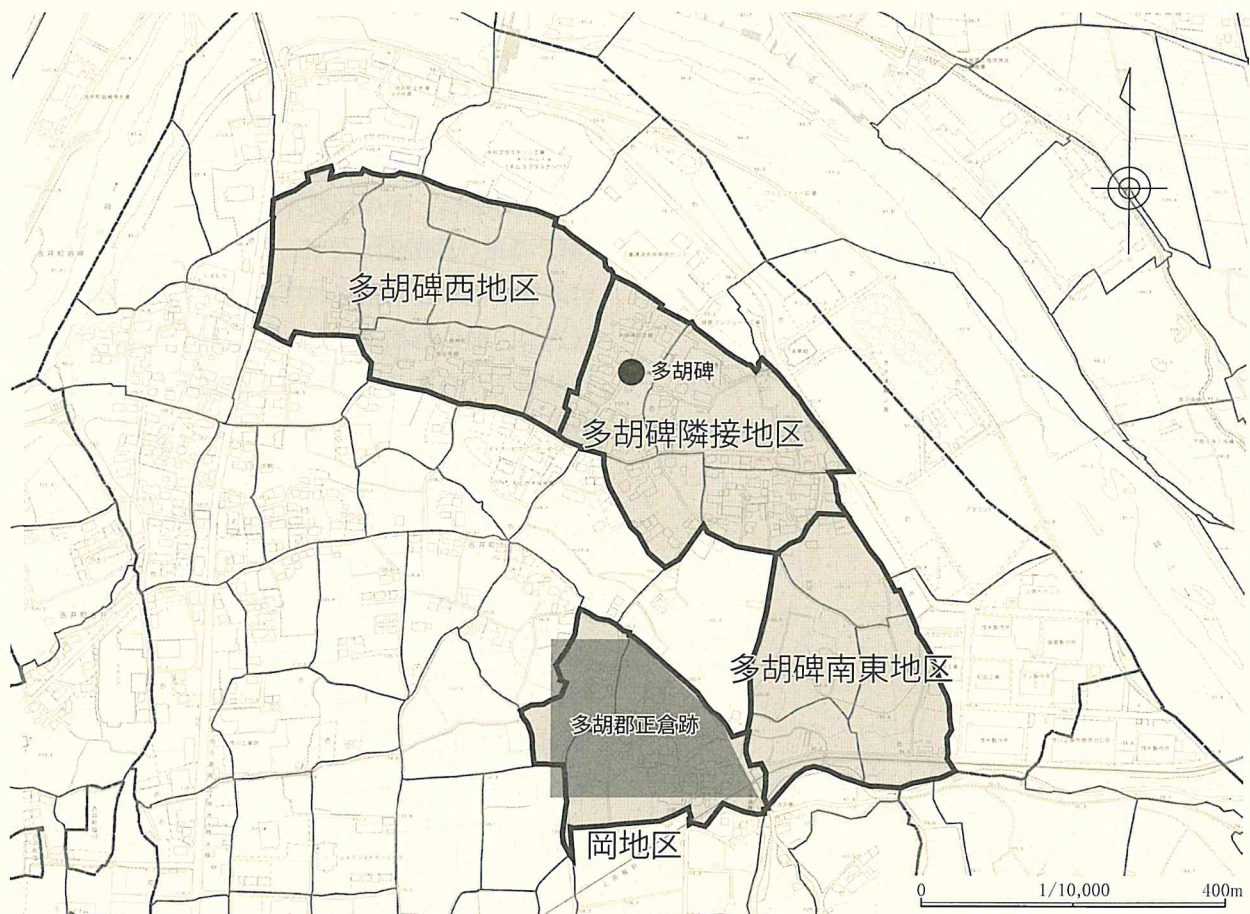


図4 多胡碑周辺遺跡範囲確認調査事業の調査対象地および地区

表1 多胡碑周辺遺跡範囲確認調査事業の地区別字一覧

地区名	字名
多胡碑隣接地区	御門、東御門、前打出、谷津
多胡碑西地区	北久保、伊勢森、中井、宮ノ西、宮裏、大宮、西裏
多胡碑南東地区	高木、若宮、河原田、姥子前
岡地区	岡、岡ノ西

高崎市の新市基本計画（高崎市・吉井町合併協議会 2009）および第5次総合計画（高崎市 2013）の中で多胡碑周辺重要遺跡範囲確認調査事業という市の重点事業として位置づけられた。

多胡碑周辺重要遺跡発掘調査計画書の作成 多胡碑周辺重要遺跡範囲確認調査事業は、合併当初は旧吉井町教育委員会生涯学習課から移行した高崎市吉井支所内の吉井教育課が所管したが、2010年（平成22年）4月からは高崎市教育委員会文化財保護課が承継した。そして2011年（平成23年）3月まで1年をかけて多胡碑周辺重要遺跡発掘調査計画書（以

下、計画書）（高崎市教育委員会 2011）を作成した。

都市計画道路との調整 これとは別に、吉井地域の南北・東西の基幹交通路である県道矢田岩崎線および国道254号線の慢性的渋滞を緩和させるため、バイパスを通すという群馬県の事業計画があった。旧吉井町は、合併前から、この都市計画道路建設の早期着工を要望していた。そして、合併後の高崎市において各事業をすり合わせていく中で、このバイパス計画と多胡碑周辺重要遺跡範囲確認調査事業の対象地域が重なることが明らかとなった。そこで道路建設事業が本格的に開始される前に遺跡の範囲を確

認するため、2011年(平成23年)6月に群馬県道路整備課・高崎土木事務所と群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市都市計画課・吉井支所建設課と高崎市教育委員会文化財保護課が協議し、道路通過予定地を優先的に調査してほしいとの申し入れを受け、多胡碑周辺遺跡範囲確認調査事業は2012年(平成24年)1月より多胡碑西地区から第1次調査を開始した。

その後の経過は表4のとおりであるが、結果的には多胡碑西地区では郡衙に関わる重要遺構は確認されなかった。

第3節 事業の経過

(1) 調査対象地の選定

多胡郡衙は、その比定地に関するこれまでの研究(第2章第3節参照)では、多胡碑の周辺に立地する可能性が高いと指摘されてきた。多胡碑が所在する周辺は、他の郡衙遺跡と似た景観を呈しており、段丘や河川からなる地形が広がっている。また、瓦の散布が見られる場所もあり、郡衙周辺に所在する寺院との関係も指摘されていた。

これらの考古学および地理学的所見から、計画書では「多胡郡衙の位置特定に向けての課題は、郡衙が多胡碑周辺に存在したと仮定して、池周辺における遺構分布状況の確認、瓦散布地の性格の特定が挙げられる。」とし、多胡碑の周辺である池地区を、多胡碑隣接地区・多胡碑西地区・多胡碑南東地区・岡地区の4つの地区に分けて調査対象地とすることにした。これを基に調査開始後に変更を加えたものが図4・表1の区分である。

なお、調査対象地として選定した場所は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、吉井地域 No.62 遺跡・No.64 遺跡および池城として登録されている。

(2) 調査方針の決定

調査の方針 この事業における発掘調査は保存目的のための確認調査である。このため計画書では、郡衙遺跡の研究成果や発掘調査事例に基づき、調査の方法について以下の方針を定めた。

- ①確認調査に先だって、1/500 か 1/1000 程度の縮尺の地形図を準備する。
- ②座標北を基準として調査区を設定し、グリッドを配置する。
- ③トレンチ設定にあたっては、幅 3 m 以上を基準とする。
- ④遺跡の主要部(郡庁・正倉)と思われるところの調査を優先とする。
- ⑤調査段階に応じてトレンチを拡張し、遺跡の範囲を確認する。
- ⑥個々の遺構の性格・分布を正確に把握する。
- ⑦全面的な遺構掘り下げは行わない。

表 2 多胡碑周辺遺跡調査検討委員会（五十音順）

委員長	秋池 武（下仁田町歴史館 館長）
委員	佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授：平成 29 年度まで） （大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事：平成 30 年度より）
委員	山中敏史（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所名誉研究員）
オブザーバー	文化庁文化財第二課文化財調査官 群馬県教育委員会事務局文化財保護課埋蔵文化財係・文化財活用係
事務局	高崎市教育委員会事務局文化財保護課埋蔵文化財担当

表 3 多胡碑周辺遺跡 調査組織

教育長	飯野 眞幸（平成 23 ～ 30 年度）
教育部長	岡田 秀祐（平成 23 年度） 深澤 啓二（平成 24 年度） 上原 正男（平成 25 ～ 28 年度） 小見 幸雄（平成 29 ～ 30 年度）
文化財保護課長	落合喜久夫（平成 23 年度） 松本 伸（平成 24 ～ 25 年度） 富加津 豊（平成 26 年度） 若狭 徹（平成 27 ～ 28 年度） 角田 真也（平成 29 ～ 30 年度）
埋蔵文化財担当係長	田口 一郎（平成 23 ～ 26 年度）文化財保護課長補佐兼務 角田 真也（平成 27 ～ 28 年度） 矢島 浩（平成 28 ～ 30 年度） 神澤 久幸（平成 29 ～ 30 年度）
調査担当	滝沢 匡（平成 23 ～ 28 年度） 手島芙実子（平成 23 ～ 25 年度） 小根澤雪絵（平成 26 ～ 28 年度） 飯塚 光生（平成 27 ～ 28 年度） 田村 孝（平成 27 年度）
整理担当	滝沢 匡（平成 29 ～ 30 年度） 小根澤雪絵（平成 29 ～ 30 年度） 久保田亜美（平成 30 年度）
事務担当	須田奈保子（平成 23 年度） 神澤 久幸（平成 24 ～ 25 年度） 山田いづみ（平成 23 ～ 25 年度） 針井 修（平成 26 ～ 28 年度） 加藤志津代（平成 26 ～ 29 年度） 金井 英一（平成 28 ～ 30 年度） 金山 悟（平成 29 年度） 岡田 清香（平成 29 ～ 30 年度） 小暮 里江（平成 30 年度） 小池 圭子（平成 30 年度）
多胡碑周辺遺跡発掘調査計画書 作成担当	田口一郎・滝沢 匡・山本ジェームズ・手島芙実子（平成 22 年度）

⑧本調査は学術調査であるため、調査時に現地での検討を十分に行う。

⑨主たる目的は郡衙関連遺構の確認であるので、それ以外の遺構に関しては原則、郡衙関連遺構の発掘作業に支障がある場合や郡衙関連遺構に関わりがある場合のみ調査を行う。

⑩なお、調査にあたっては有識者による指導・助言を受ける。

（３）調査体制の整備

多胡碑周辺遺跡調査検討委員会 本事業は、初年度（平成 23 年度）である第 1 次調査については高崎市単独事業として実施し、2 年目（平成 24 年度）である第 2 次調査以降は国庫補助事業（重要遺跡範囲確認）として採択され実施している。これに伴い、第 2 次調査では有識者に発掘調査指導を依頼し、この指導を基に平成 25 年、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会（表 2）を設置した。

表 4 発掘調査の経過

平成 23 年度		
平成 23 年	11 月 25 日	事業説明会（地元住民対象）
平成 24 年	1 月 22 日	第 1 次調査開始
	3 月 18 日	現地説明会
	3 月 30 日	第 1 次調査終了
平成 24 年度		
平成 24 年	12 月 4 日	第 2 次調査開始
平成 25 年	2 月 5・8 日	個人住宅建設に伴う工事立会
	2 月 26 日	有識者による現地指導
	3 月 17 日	現地説明会
	3 月 29 日	第 2 次調査終了
平成 25 年度		
平成 25 年	8 月 23 日	第 3 次調査開始
	11 月 1 日	第 1 回調査検討委員会
	12 月 10 日	文化庁林調査官現地指導
平成 26 年	2 月 17 日	第 2 回調査検討委員会
	3 月 9 日	現地説明会・秋池委員長現地指導
	3 月 13 日	山中委員現地指導
	3 月 17 日	佐藤委員現地指導
	3 月 31 日	第 3 次調査終了
平成 26 年度		
平成 26 年	5 月 23 日	第 4 次調査開始
	9 月 17 日	第 1 回調査検討委員会
	10 月 29 日	第 2 回調査検討委員会
	11 月 16 日	現地説明会
	11 月 21 日	個人住宅建設に伴う工事立会
	11 月 28 日	第 4 次調査終了
平成 27 年度		
平成 27 年	5 月 25 日	第 5 次調査開始
	9 月 17 日	第 1 回調査検討委員会
	12 月 9 日	第 2 回調査検討委員会
平成 28 年	1 月 30 日	現地説明会
	2 月 6 日	現地説明会
	2 月 22 日	現地説明会（地元向け）
	3 月 9 日	文化庁国武調査官現地指導
	3 月 31 日	第 5 次調査終了
平成 28 年度		
平成 28 年	4 月 1 日	第 6 次調査開始（前年度より継続）
	4 月 13 日	第 1 回調査検討委員会
	8 月 9 日	文化庁浅野調査官現地指導
	8 月 26 日	第 2 回調査検討委員会
	9 月 30 日	現地説明会（地元向け）
	10 月 1 日	現地説明会
	12 月 15 日	佐藤委員現地指導
	12 月 16 日	秋池委員長・山中委員現地指導
平成 29 年	3 月 31 日	第 6 次調査終了

調査組織 本事業における確認調査は、高崎市教育委員会直営で実施し、調査組織は表 3 のとおりである。

（４）発掘調査の経過

調査の着手 2011 年（平成 23 年）に調査準備、2012 年（平成 24 年）に第 1 次調査を開始し、2016 年（平成 28 年）に至るまで 7 次にわたる調査を実施した。調査地はすべて民有地であり、地権者の協力を得て、土地の賃貸借契約を交わして調査をした。また、農地の一時転用が必要な土地については、その手続きをとり許可後に調査に着手した。各次調査の概要については以下に記し、主な経過を表 4 にまとめた。

第 1 次調査 第 1 次調査は計画書で定めたとおり多胡碑西地区において高崎市単独事業として実施した。多胡碑西地区には都市計画道路矢田岩崎線が通過する計画があるため、その予定地を優先的に調査した。調査の結果、多胡碑西地区は古代において東西にのびる谷と微高地が幾筋もある起伏に富んだ地形であったことがわかった。微高地上には 7 世紀代の小円墳（下池古墳群）が点在し、9 世紀以降には竪穴建物で構成される集落が展開していることが判明したが、8 世紀代の明確な遺構は確認できなかった。

第 2 次調査 この調査から国庫補助事業（埋蔵文化財緊急調査費国庫補助金：重要遺跡確認緊急調査）に採択された。第 1 次調査から引き続き多胡碑西地区において調査を実施した。その他、都市計画道路吉井北通り線（国道 254 バイパス）の計画があった岡地区において調査を実施した。岡地区の調査では 8 世紀を中心とする瓦が大量に出土し、寺院もしくは郡衙が存在する可能性が高いと判断された。

また、この年度に正倉院西寄りにおいての個人住宅建設に伴う文化財保護法第 93 条届出が提出された。これに伴い高崎市教育委員会が平成 25 年 2 月 5 日および 8 日に工事立会調査を実施した。瓦の出土はあったが、明確な遺構は確認できなかった。

第 3 次調査 岡地区で確認された遺跡の性格を把握することを目的とした。調査の結果、古代の倉庫と思われる総柱礎石建物（SB01）と西辺区画溝（SD20）を検出した。この時点では、建物は 1 棟を検出しただけであり、遺跡の性格について郡衙か寺院かは確

定できなかった。しかし、多胡碑と関連する遺構が発見されたことから、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会が都市計画道路計画の見直しを求める意見を出した。

第4次調査 引き続き岡地区の性格を把握することを目的として調査を実施した。SB02付近では、動かされていたが礎石とみられる礫が出土し、谷地形であるNR27からは穀類が出土した。これまでの調査結果から岡地区が古代の正倉院であることがおおむね推定できるようになった。

また平成24年度に工事立会調査を実施した同じ地番に対して、車庫建設に伴う文化財保護法第93条届出が提出された。これに伴い高崎市教育委員会が平成26年11月21日に工事立会調査を実施した。瓦の出土はあったが、明確な遺構は確認できなかった。

第5次調査 第4次調査までの成果を踏まえ、岡地区が郡衙正倉院であることを特定すべく引き続き調査を実施した。本次調査では瓦葺の大型礎石建物であるSB03が検出された。瓦葺の古代倉庫遺構は群馬県内では初めての発見となった。また、南辺区画溝(SD23)が検出されたこともあわせて、ここが正倉院であることが明確になった。

第6次調査 遺跡の内容が判明したことを受け、本次調査では正倉院の範囲確定を目的とした。調査成果として北辺区画溝(SD17・18)とこれに伴う土橋(SX58)、区画溝の南西コーナーを検出した。岡地区東寄り宅地化が進んでおり、十分な調査区を設定することができず、東辺の確認には至らなかったが、遺跡の東は段丘崖となっているため、確認された北辺・西辺・南辺とあわせて正倉院の範囲をほぼ確定することができた。

遺跡の名称と保存 この事業における確認調査では、遺跡名称について、対象地域が複数の字にまたがることと一連の事業として取り扱っていることから、事業上の遺跡名を「多胡碑周辺遺跡」としてきた。しかし第5次調査において岡地区の遺跡の性格を確定することができたことから、遺跡の実態を遺跡名により反映させるため、平成28年度第2回多胡碑周辺遺跡調査検討委員会において、正倉院が発見された岡地区については「多胡郡正倉跡」と呼称することとした。

また、多胡郡正倉跡の範囲のうち、周知の埋蔵文化財包蔵地外の場所も含まれていたため、その空白地を平成28年10月3日に池岡遺跡および池新井遺跡という周知の埋蔵文化財包蔵地として登録することとした。

なお、岡地区については多胡郡正倉跡の発見を受け、道路建設より郡衙関連遺跡の保存を優先することとなった。

整理作業における遺構・遺物検討の経過 出土品および遺構図面、写真の基礎整理については、各年度適宜これを進めた。総括報告書刊行に向けての本格的な整理等作業は多胡碑周辺遺跡調査検討委員会の指導の下、第6次調査の現地での発掘作業終了後の平成29年2月より開始した。遺構・遺物の検討作業の主な経過は表5に記した。

表5 整理作業における遺構・遺物検討の経過

平成28年度	
平成29年 2月21日	整理作業開始
平成29年度	
平成29年 9月25日	第1回調査検討委員会
平成30年 1月17日	第2回調査検討委員会
平成30年度	
平成30年 8月 7日	第1回調査検討委員会

資料の管理 本事業における発掘調査の出土品、調査記録は高崎市教育委員会で管理している。報告書刊行後、出土品の一部は活用のために高崎市多胡碑記念館にて展示する予定である。

引用・参考文献

高崎市 2000『高崎市史』資料編2

高崎市 2013『第5次総合計画』

高崎市・吉井町合併協議会 2009『新市基本計画』

高崎市教育委員会 2011『多胡碑周辺重要遺跡範囲確認調査計画書』

東野治之・佐藤信編 2005『古代多胡碑と東アジア』山川出版社

文化庁文化財部記念物課 2013『発掘調査のてびき—各種遺跡調査編—』

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

(1) 吉井地域の概要および

多胡郡正倉跡の位置

吉井地域の概要 多胡郡正倉跡が所在する群馬県高崎市は群馬県中西部に位置する(図5)。平成の大合併により高崎市は面積 459.36 km² となり、西端は長野県境から南端は埼玉県境まで達する広大な自治体となった。これにより市域の自然も多岐に富むようになり、市の南東部は関東平野の末端を形成する平坦地形である一方、北西部は群馬県を代表する火山である榛名山の他、ゆるやかな丘陵地形や自然豊かな山々に囲まれた山間地形となっている。

高崎市のなかでも最後に合併したのが、本遺跡が所在する吉井地域である。昭和30年に4町村の合併により多野郡吉井町となったが、平成21年6月、高崎市との合併後は行政単位として高崎市吉井町となり、吉井地域と呼称している。

吉井地域は新高崎市の南部に位置し、旧高崎市域とは北側で接続しており、東側から南側へかけては藤岡市と接し、西側は富岡市および甘楽郡甘楽町と接している。地域の中央に鎭川が西から東へ流れ、地形・交通等の軸となっている。中央部には国道254号線が東西に走っている。これは中山道の脇往還である信州街道が元となっている。国道が貫く吉井地域中心部は、近世において吉井宿および吉井藩の中心として発展を遂げた。また、高崎・下仁田間を結ぶ鉄道である上信電鉄も東西に延び、3つの駅が設置されている。現在はこの軸に沿って地域の南寄りに上信越自動車道が通っており、吉井インターチェンジは高崎市の南玄関として活用されている。古代の多胡碑や近世吉井藩を中心とした文化財が多い地域であり、合併後の新市基本計画では、都市基盤の整備とともに、自然環境や文化遺産などの地域資源を活かしたまちづくりを目指す地域として「文化自然ゾーン」に位置づけられている。

多胡郡正倉跡の位置 遺跡が所在する吉井町池は鎭川の南に位置し、吉井地域中心市街地の北に位置す

る。高崎市吉井支所からは北東約1.0kmのところにある。平成の合併以前は大字池であり、近世には上池村、下池村と呼ばれていたが、1870年(明治3年)に合併して池村となった。多胡郡正倉跡は旧下池村にあり、吉井地域の平坦面を形成する河岸段丘の段丘面端部に位置する。

(2) 地形

吉井地域の地勢 群馬県西部の主要河川である鎭川は利根川水系に属している。その流路は、第三紀層を基盤とする南側の牛伏山地と、同じく第三紀層を基盤とする北側の岩野谷丘陵(観音山丘陵)に挟まれており、その両方に挟まれた場所に吉井地域は立地する。牛伏山地の最高峰は牛伏山で標高491mを測り、地域のランドマークとなっている。一方、岩野谷丘陵における吉井地域での最高所は旧町域北端の上奥平で、標高250mを超える。低地部分に目を向けると、鎭川流路付近の標高は、旧町域最上流である吉井大橋付近で標高112.1m、最下流の岩井付近で標高86.9mを測る。

平坦部は鎭川に沿って東西に広がっている。山地に挟まれているが、南北幅2kmの平坦面が東西16.6kmにわたって細長く廊状にのびる、いわゆる「甘楽の谷(鎭の谷)」を形成している。

河岸段丘と鎭川支流 鎭川は吉井地域を蛇行しながら東流し、南北に上下二段の河岸段丘を形成している(図6)。鎭川流域の河岸段丘については町田^{ただし}貞の研究が詳しい。以下はこれを基に『吉井町誌』の記述も踏まえて述べる(町田1963・横田1974)。

上位段丘は鎭川河床から比高50m前後である。上位段丘は鎭川右岸でのみ顕著であり、左岸では対応する段丘が認められない。これは鎭川の北側への移動による左岸上位段丘の浸食が原因と考えられる。下位段丘は、南北幅1~2kmのゆるやかな傾斜を持つ広い段丘面を有し、河床からの比高は10~15mである。

東西に長い鎭川の上下河岸段丘は北流する支流によっていくつかに分断されている。吉井地域内の上位段丘について西から列挙すると、市町村界の天引



図5 遺跡の位置および周辺の地勢

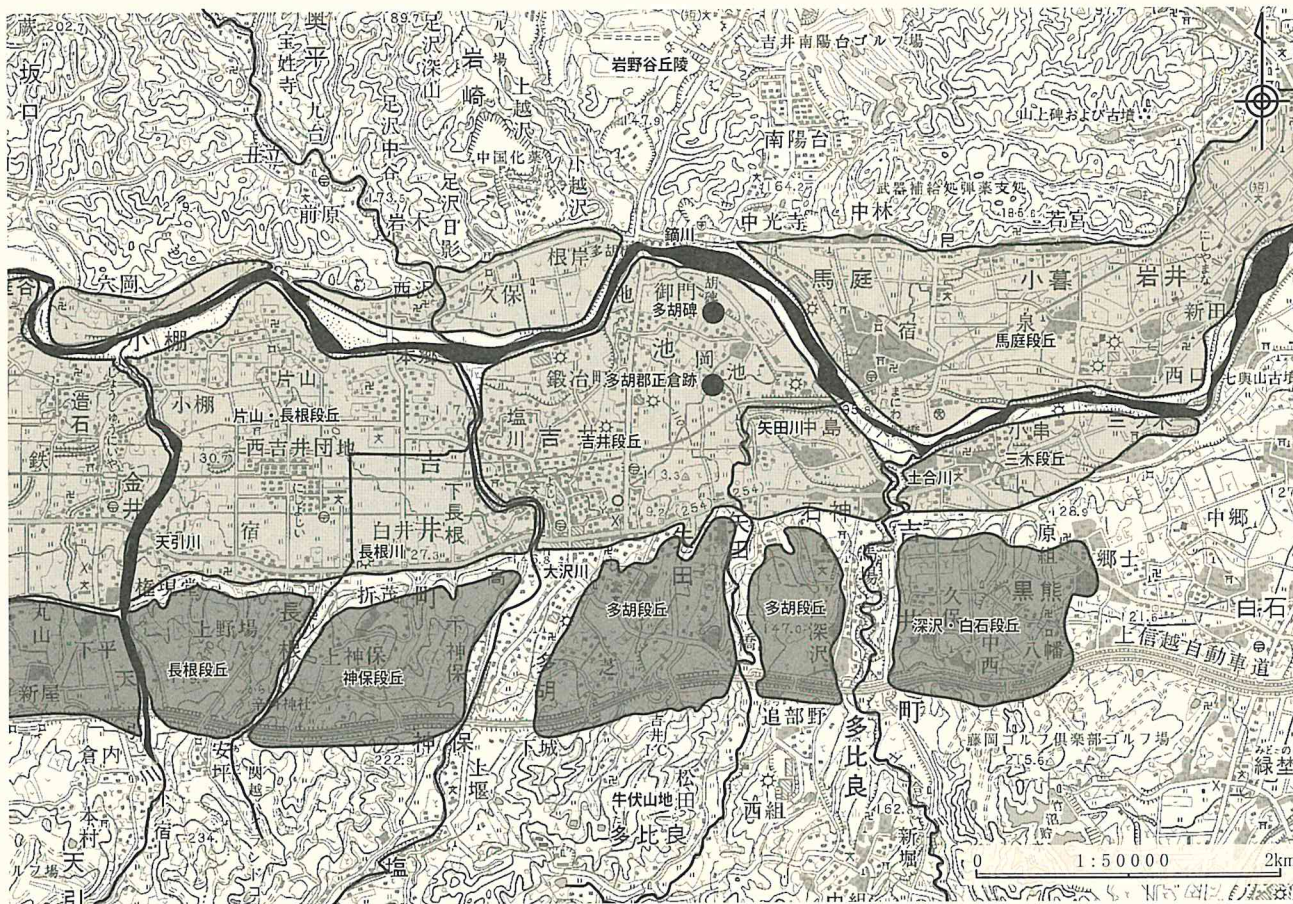


図6 吉井地域周辺の河岸段丘図

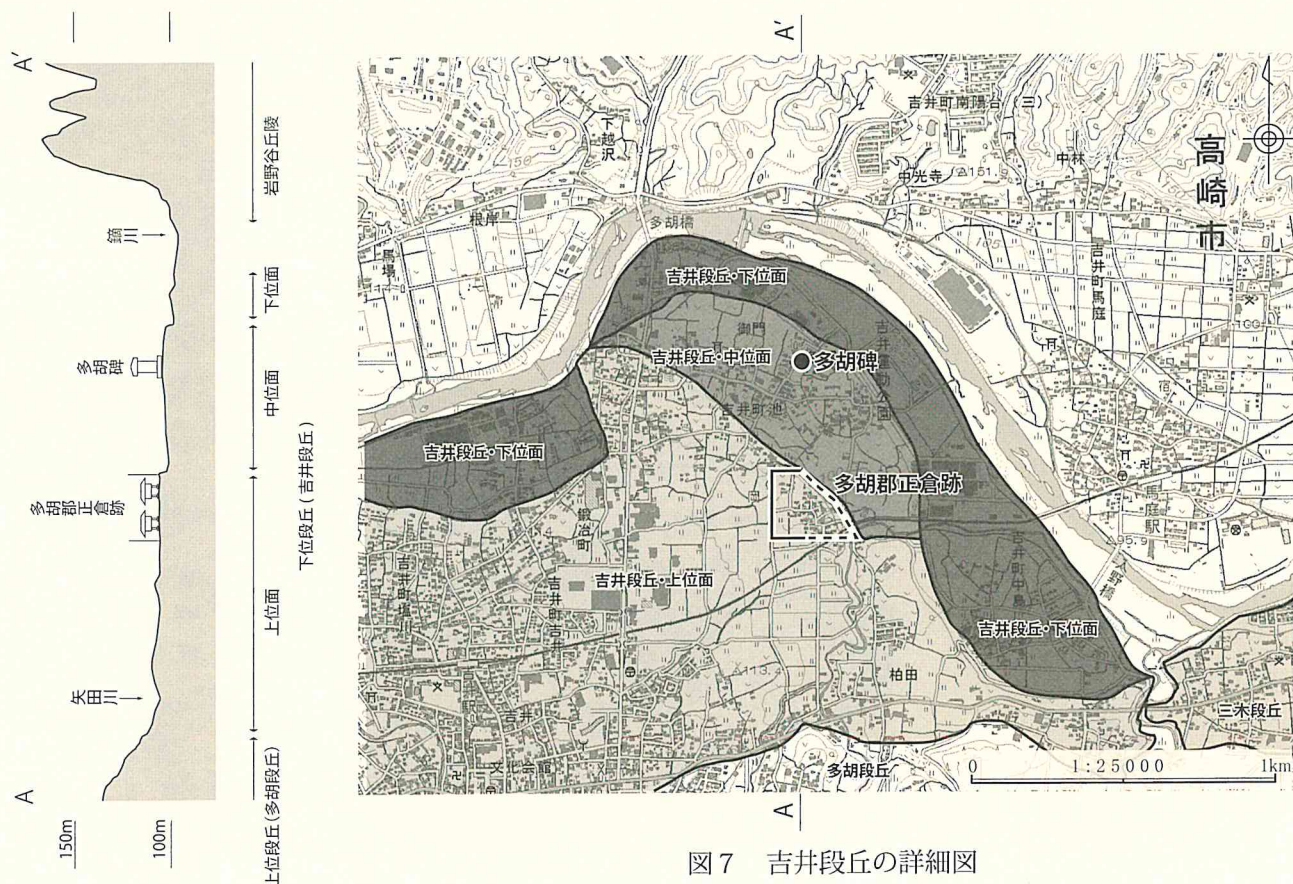


図7 吉井段丘の詳細図

川の東に長根段丘、長根川の東に神保段丘と続き、大沢川の東に多胡段丘、さらに東に土合川があり深沢・白石段丘が続く。下位段丘では西より片山・長根段丘が延び、大沢川を超えて吉井段丘へと続く。吉井段丘より東では、鎭川左岸には馬庭段丘があり、右岸には三木段丘が展開する。多胡碑および多胡郡正倉跡が立地するのは下位段丘の吉井段丘上である。その他、主要な河川としては多胡段丘中央を北流する矢田川がある。これは下位段丘に至ると多胡郡正倉跡の南東付近を通過し鎭川と合流する。

下位段丘の細分 吉井段丘の北辺は、蛇行する鎭川が大きく迂回することで段丘がより北へと張り出す形状を取る。吉井段丘の北側は、鎭川の現流路に向かって階段状に下がる小さな段丘をいくつか形成する地形となり、さらに細分される(図7)。本事業では、これらの段丘の面を便宜上、上位面・中位面・下位面と呼び分けている。現在、吉井町池の大部分が所在する段丘面が上位面となり、この段丘面北端部に多胡郡正倉跡が立地する。ここから一段下がって中位面が形成されている。中位面は北西・南東に長軸をとる細長い面である。多胡碑が立地するのはこの段丘面上であり、中位面中央鎭川寄りの段丘崖付近に所在している。中位面より鎭川へとさらに一段下がる段丘面が下位面であり、北西から南東にのびる細長い面を形成している。これは多胡橋付近より吉井町中島まで広がる。

(3) 地質・地史

多彩な地質 鎭川流域の基盤層を見ると、右岸の山間部は三波川変成帯から成り、兩岸の丘陵部は第三紀層(新第三紀)の地層である。群馬県内において特にバラエティに富む地質環境である。流域では鎭川最上流の秩父帯を元とするチャートや安山岩、三波川変成帯由来の結晶片岩、第三紀層から供給された頁岩・砂岩・礫岩・凝灰岩などが採集できる。以下に群馬県10万分の1地質図の解説(群馬県地質図作成委員会1999)に沿って、吉井地域周辺の地質を概観する(図10)。

三波川変成帯と第三紀層 鎭川水系と神流川水系の分水嶺である御荷鉾山系より北に三波川変成帯(Sn)が伸びている。三波川変成帯は、中生代ジュラ紀～

白亜紀に形成された広域変成岩類である。結晶片岩を主体として構成され、500m以上の厚みを持つ。下仁田町から藤岡市にかけて広範囲に見られる。

三波川変成帯の北は断層を境にして第三紀層中心の地質となり、北へ行くに従い新しい地質になる。牛伏山一帯の牛伏層(Us)は細長く東西に分布する。牛伏層は中粒砂岩・石質ワッケ・シルト岩および礫岩により構成されており、400m以上の厚みがある。西は富岡市南部から東は藤岡市まで展開する。多胡碑の石材は牛伏砂岩(石質ワッケ)であり、この石材は吉井地域の古墳の石室にも使用されている。離れたところでは綿貫観音山古墳石室天井石に用いられていることが知られている。

牛伏層の北側には粗粒砂岩と砂岩シルト岩互層から成る小幡層(Ob)が展開する。牛伏層と同様に東西に細長い分布であり、東は長野県境まで、西は埼玉県境までそれぞれ分布が認められる。層は900mほどの厚みを持つ。

鎭川北岸の上位段丘付近には井戸沢層(Id)が通っている。層厚は約450mで、大沢川や土合川で褶曲のために露出している。

井戸沢層の北には、富岡市の北側に凝灰質砂岩および凝灰岩で形成される庭谷層(Ni)が分布する⁽¹⁾。シルト岩を主体とする下部と、凝灰質砂岩を主体とする上部に分けることができる。層厚は400m～10mまでと様々である。

庭谷層の北東側には塊状シルト岩および凝灰岩を主体とする原市層(Hi)が展開する。安中市から富岡市、吉井町、鮎川まで分布し、約550mの厚みを持つ。

庭谷層と原市層との間には穴岡凝灰岩と呼ばれる層がある(高橋・齋藤・梅津・市川1992、高橋・林2004、群馬県立自然史博物館・かぶら理科学会2013)。これは吉井町長根に所在する中原Ⅱ遺跡1号墳の石室石材にも利用されている(入澤2004)。また、原市層中には带状に分布する複数の凝灰岩層があり、多胡郡域では最も厚い北村凝灰岩(Kt)のほか馬場凝灰岩・上越沢凝灰岩がある(高橋・齋藤・梅津・市川1992、高橋・林2004、群馬県立自然史博物館・かぶら理科学会2013)。

原市層の北側、烏川と鎭川に挟まれた岩野谷丘陵

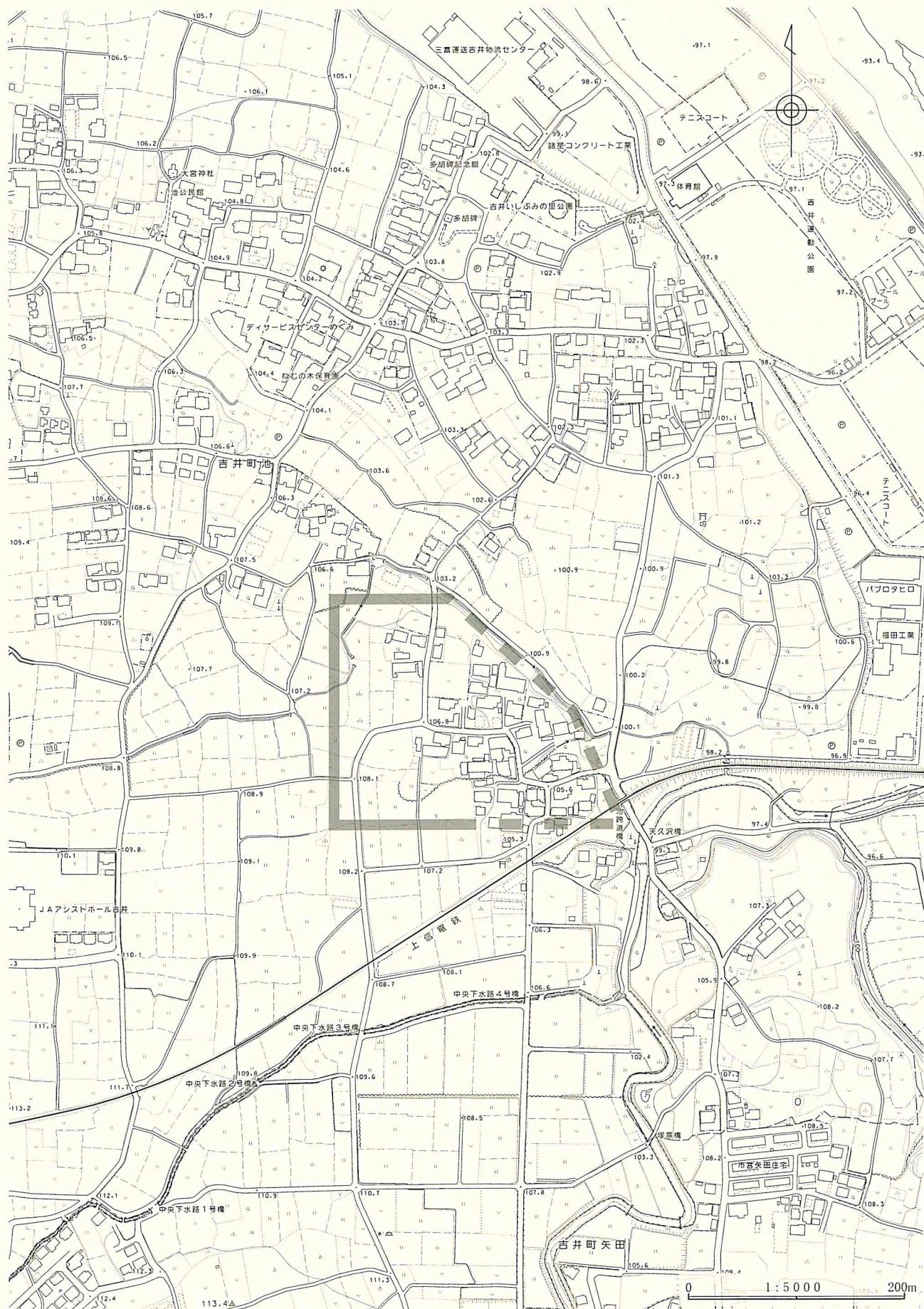


図8 遺跡周辺地形図（平成23年高崎市地形図を加工）



図9 遺跡周辺地形図（昭和40年吉井町地形図を加工）

では、礫岩・砂岩・シルト岩および凝灰岩により形成される板鼻層が展開する (It)。板鼻層は安中市の碓氷川付近より藤岡市鮎川まで連続的に分布している。板鼻層下部は海成であり、厚み約 400m の含礫砂岩砂質シルト岩互層よりなる。上部は陸成で約 800m の厚みを持つ。

板鼻層中にも帯状に凝灰岩が分布しており、古い順に板鼻層上部に含まれる上奥平凝灰岩、下部に含まれる館凝灰岩・根小屋凝灰岩がある (高橋・齋藤・梅津・市川 1992、高橋・林 2004、群馬県立自然史博物館・かぶら理科学研究会 2013)。山上古墳石室には館凝灰岩が用いられており、この岩脈の南東端の露頭には横穴墓である小暮の穴薬師が造られている。館凝灰岩層の下層には亜炭層が存在する。亜炭層には粘土層が含まれており、この地域に展開した乗附観音山丘陵古窯跡群の成立に寄与している (木津 1992)。

河岸段丘の堆積物 吉井地域が立地する上下河岸段丘は、前述した第三紀層を基盤層とし、第四紀に鍋川本流およびその支流の営力より形成した沖積層と、火山性堆積物 (いわゆる関東ローム層) で成っている (町田 1963)。

上位段丘では鍋川旧河床としての礫層が形成された後、隆起をともなつて鍋川支流により運搬された礫が堆積する。鍋川本流から供給される礫はチャート・安山岩を主とする鍋川上流由来であり、支流が供給する礫は三波川帯および牛伏層が源となるため結晶片岩や牛伏砂岩が混入する (群馬県農政部土地改良課 1994)。これにより吉井地域では様々な種類の礫が見られる。

礫層の上層には厚さ 1 ～ 2m の火山性堆積物が存在している。火山性堆積物は、下層より始良 Tn 火山灰 (AT)、浅間室田軽石層群 (As-MP)、浅間板鼻褐色軽石層群 (As-BP)、浅間板鼻黄色軽石層群 (As-YP) が確認されている。上位段丘が離水したのは AT 降下 (24,000 ～ 25,000 年前) 以前と考えられ、火山性堆積物形成中に下位段丘の位置に鍋川が流れていたと推測される (関口 1994)。

下位段丘においてはほとんど火山性堆積物が存在しておらず、吉井段丘でも被覆に欠けるため、下位段丘の形成は火山性堆積物形成後とされている (関

口 1994)。上下河岸段丘の形成要因が同じならば、下位段丘での礫層の堆積においても、上位段丘と同様のメカニズムが推定できる。すなわち、上位段丘面侵食時に下位段丘面に鍋川河床としての礫層が形成された。その後、下位段丘面からの鍋川離水以降にその支流によって運搬された南方山地からの礫が堆積したと推定できる。下位段丘面の発掘調査にて地山層を断ち割って観察すると、礫・砂・シルトによる互層を形成しているのが確認できる。上位段丘面を形成していた礫層とローム層が再堆積したものである。

下位段丘の湧水 多胡郡正倉跡の南西では湧水点が存在しており、周辺には他にも水が湧いている場所がある。地名の「池」についても地元での聞き取りによると、元々、池が複数存在していたという伝承がある。河岸段丘は乏水性という地質的な特徴があるため、近年まで溜池がいくつかあったことが知られている。一方、多胡郡正倉跡周辺では現在でも井戸が多く、調査時も地下からの湧水が多いことから、地下水脈が通っていることがわかる。発掘調査にて確認された上位段丘から供給された砂・礫を主体とする再堆積層は扇状地のような働きをして地下水脈と湧水を生み出していると考ええる。

下位段丘の離水 段丘を形成する礫層の上には礫を含む黒色土が形成されており、礫層が土壌化したものと考えられる。下位段丘上位面における塩川砂井戸遺跡の発掘調査では古くは縄文時代後期前半の遺構が見つかり (飯田他 2015)、これより以前に下位段丘上位面は離水したと考えられる。

注

- (1) かつて庭谷層・原市層を吉井層・吉井累層と呼称していたこともあったが、ここでは群馬県地質図作成委員会 1999『群馬県 10 万分の 1 地質図』に拠った。

引用・参考文献

- 入澤雪絵 2004『長根遺跡群Ⅷ 中原Ⅱ遺跡』吉井町教育委員会
- 木津博明 1992「上野国窯業考 (序)」『研究紀要』10 群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県地質図作成委員会 1999『群馬県 10 万分の 1 地質図』内外地図株式会社

群馬県農政部土地改良課 1994『土地分類基本調査図幅内 富岡』

飯田陽一 他 2015『塩川砂井戸遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県立自然史博物館・かぶら理科研究会 2013『先生のための授業で使えるかぶらの里の露頭ガイド』

関口博幸 1994「第 2 章第 3 節 基本層序」『白倉下原・天引向原遺跡 I』群馬県埋蔵文化財調査事業団

高橋雅紀・齋藤和男・梅津浩之・市川なつみ 1992「群馬県富岡地域、中新世・北村馬場凝灰岩の K-Ar および ^{40}Ar - ^{39}Ar 年代—特に浮遊性有孔虫化石帯の N.13/N.14 境界に関連して—」『地質学雑誌』第 98 巻 4 号

高橋雅紀・林広樹 2004「群馬県富岡地域に分布する中新統の地質と複合年代層序」『地質学雑誌』第 110 巻第 3 号

町田貞 1963『河岸段丘 - その地形学的研究 -』古今書院

横田公雄 1974「第一部自然篇」『吉井町誌』吉井町誌編纂委員会

第 2 節 歴史的環境

(1) 鎚川流域における

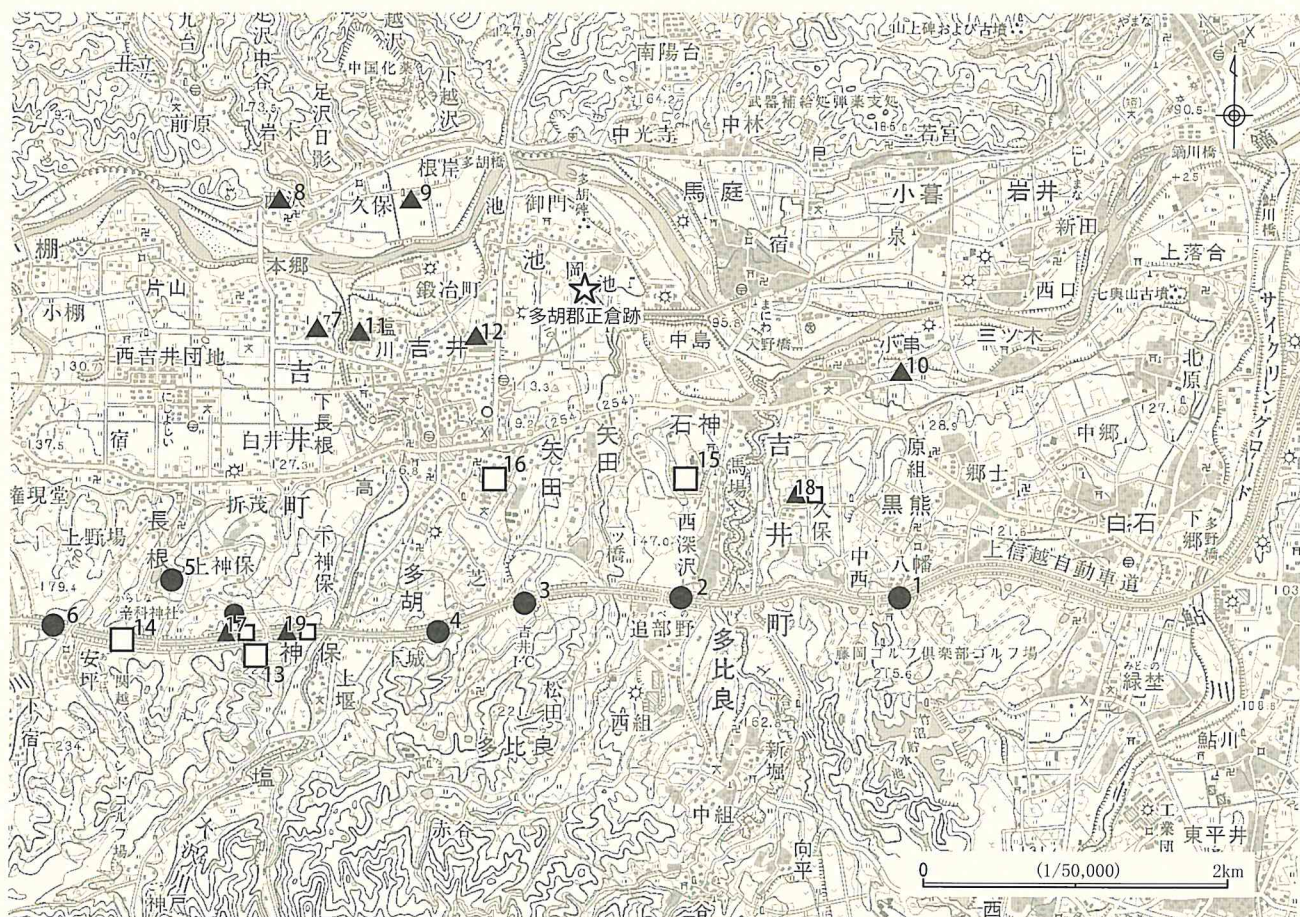
旧石器・縄文・弥生時代の様相

旧石器時代の様相 鎚川河岸段丘のうち上位段丘には、鎚川離水後にロームが堆積しており、ここから旧石器が出土している。特徴的なのは始良 Tn 火山灰 (AT: 2.4 ~ 2.5 万年前) 降下以前の遺跡が多いことである。吉井地域内では黒熊八幡遺跡・多比良追部野遺跡・矢田遺跡・多胡蛇黒遺跡・折茂Ⅲ遺跡がある。その他、多胡蛇黒遺跡においては AT 上層および浅間室田軽石層群 (As-MP: 2.4 万年前) 上層、神保富士塚遺跡および長根安坪遺跡からは浅間板鼻褐色軽石層群 (As-BP: 1.9 ~ 2.4 万年前) 付近で石器が出土している (関口博幸 1994)。

縄文時代の様相 集落として確認されるのは前期からで、吉井地域では黒熊遺跡群・神保富士塚遺跡・神保植松遺跡など上位段丘に広く分布する。中期ではさらに分布が広がり、上位段丘の他、下位段丘でも本郷畑内遺跡で加曽利 E 式土器が出土している (飯田 2015 a)。また、鎚川北岸の東吹上遺跡・富岡遺跡でも加曽利 E 式土器が出土している (茂木 1989)。後期になると遺跡の分布は縮小し、吉井地域内の小串塚原遺跡で称名寺期・堀之内期の遺物がややまとまって出土している (小根澤 2009)。塩川砂井戸遺跡からは堀之内Ⅱ式の敷石住居跡と配石遺構が出土している (飯田 2015 b)。晩期では、腰巻遺跡で深鉢に入った磨製石斧が発見されている (梅沢・飯島 1983)。

この時代の遺跡分布を見ると、中期後半には下位段丘中位面から鎚川は離れており、安定した状態にあったと考えられる。

弥生時代の様相 鎚川流域は群馬県内でも比較的早く弥生文化が流入した地域である。前期末～中期初頭では、藤岡市沖Ⅱ遺跡がある。縄文土器を系譜とする工字状文と東海地方西部系の条痕文を併せ持つ土器群が再葬墓として出土した。中期前半では当地域における土器型式の標識遺跡となっている神保富士塚遺跡がある。筒型土器や方形の区画文様、擦り消し縄文を施す土器が特徴である。吉井地域ではそ



● 旧石器時代 ▲ 縄文時代 □ 弥生時代

- | | | | | | | |
|------------|------------|-----------|------------|----------|-----------|----------|
| 1 黒熊八幡遺跡 | 2 多比良追部野遺跡 | 3 矢田遺跡 | 4 多胡蛇黒遺跡 | 5 折茂Ⅲ遺跡 | 6 根安坪遺跡 | 7 本郷畑内遺跡 |
| 8 東吹上遺跡 | 9 富岡遺跡 | 10 小串塚原遺跡 | 11 塩川砂井戸遺跡 | 12 腰巻遺跡 | 13 稲荷山遺跡 | |
| 14 長根羽田倉遺跡 | 15 入野遺跡 | 16 川内遺跡 | 17 神保富士塚遺跡 | 18 黒熊遺跡群 | 19 神保植松遺跡 | |

図 11 周辺遺跡地図 (旧石器・縄文・弥生時代)

の他、稲荷山遺跡・長根羽田倉遺跡・神保植松遺跡があるが、いずれも再葬墓や土坑のみの確認で、明確な集落の展開はみられない。

群馬県において本格的に弥生文化が定着するのは、中期後半に長野県からの中部高地型櫛描文の土器(栗林式)を持つ集団が移住してきてからである。長野県を中心とした栗林式は群馬県南西部では竜見町式と呼ばれ、両者は共通の文化圏を形成していた。栗林系の文化圏は埼玉県まで広がるが、鎭川流域ではあまり展開しない。当期の遺跡は鎭川流域では富岡市阿曾岡権現堂遺跡や同市小塚遺跡が挙げられ、いずれも下位段丘の自然堤防上に立地する。

続いて後期になると、長野県の箱清水式土器の影響により群馬県西部では樽式土器が成立する。鎭川

流域においては、中期後半から引き続き阿曾岡権現堂遺跡があり、上位段丘では大集落である南蛇井増光寺遺跡・中高瀬観音山遺跡がある。吉井地域では入野遺跡・川内遺跡・黒熊遺跡群などがある。当期の遺跡は鎭川流域において大きく展開するが、その分布は鮎川以西にとどまっており、群馬県全体でも広大な平野部への進出はなされなかった。これは水利技術に起因しており、生産域が谷地水田を中心としたものであったためとされる。そして後期後半になると、縄文を施文する吉ヶ谷式系土器が埼玉県北部から群馬県他の場所に先駆けて吉井地域周辺の鎭川下流域に流入し、群馬県の弥生文化終焉の端緒となる(若狭 2007)。

古墳時代前期・中期の様相

古墳時代前期（3世紀～4世紀）の様相 樽式の弥生文化が展開していた地域に、東海・北陸地域の人々が新しい文化を伴って到来するのは3世紀後半ごろである。外から来たこの勢力により上毛野地域の平野部での水田開発が盛んになり、その生産基盤を背景に、上毛野地域西部では3世紀末～4世紀初頭の

鎭川流域では富岡市に舶載三角縁神人竜虎画像鏡を持つ北山茶臼山古墳(円墳:41m)・北山茶臼山西古墳(前方後方墳:28m)が出現する。吉井地域では恩行寺裏古墳(円墳:40m)が前期古墳と言われている。

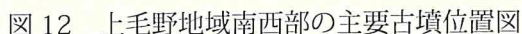




表6 図12・13掲載遺跡一覧表

No.	遺 跡 名
1	元島名將軍塚古墳
2	倉賀野浅間山古墳
3	大鶴巻古墳
4	北山茶臼山古墳
5	北山茶臼山西古墳
6	恩行寺裏古墳
7	天王塚古墳
8	片山1号墳
9	白石稲荷山古墳
10	岩鼻二子山古墳
11	不動山古墳
12	井出二子山古墳
13	保渡田八幡塚古墳
14	保渡田薬師塚古墳
15	上並榎稲荷山古墳
16	小鶴巻古墳
17	遠見山古墳
18	平塚古墳
19	宋永寺裏東塚古墳
20	姥山古墳
21	七興山古墳
22	一ノ宮4号古墳
23	桐淵11号古墳
24	御三社古墳
25	笹森稲荷古墳
26	八幡二子塚古墳
27	築瀬二子塚古墳
28	王山古墳
29	諏訪神社古墳
30	靈符殿古墳
31	本郷二子山古墳
32	戸塚神社古墳
33	白石二子山古墳
34	萩原古墳
35	高橋塚古墳
36	皇子塚古墳
37	平井地区1号墳
38	諏訪神社北古墳
39	伊勢塚古墳
40	粘土山古墳
41	双子塚古墳
42	行人塚古墳
43	太子堂塚古墳
44	堂山稲荷古墳
45	池二子塚古墳
46	八幡観音塚古墳
47	山名伊勢塚古墳
48	石原稲荷山古墳
49	漆山古墳
50	蔵王塚古墳
51	総社二子塚古墳
52	中原Ⅱ遺跡1号古墳
53	神保下條遺跡2号墳
54	綿貫観音山古墳
55	愛宕山古墳
56	宝塔山古墳
57	蛇穴山古墳
58	十二天塚古墳
59	西大山1号墳
60	山上古墳
61	山ノ上西古墳
62	喜蔵塚古墳
63	境塚古墳
64	多胡薬師塚古墳
65	多比良諏訪前古墳
66	天引黒瀬古墳群の塚

No.	遺 跡 名
67	小暮の穴薬師
68	穴大黒
69	本宿・郷土遺跡
70	長根安坪遺跡
71	折茂東遺跡
72	道六神遺跡
73	西場脇遺跡
74	長根羽田倉遺跡
75	神保富士塚遺跡
76	神保植松遺跡
77	神保下條遺跡
78	多胡蛇黒遺跡
79	柳田遺跡
80	矢田遺跡
81	椿谷戸遺跡
82	川内遺跡
83	御門遺跡
84	竹腰遺跡
85	塩川砂井戸遺跡
86	入野遺跡
87	東沢遺跡
88	多比良追部野遺跡
89	黒熊遺跡群
90	黒熊栗崎遺跡
91	黒熊中西遺跡
92	黒熊八幡遺跡
93	山名原口遺跡
94	山名戸矢遺跡
95	田端遺跡
96	東吹上遺跡
97	富岡遺跡
98	川福遺跡
99	白倉下原遺跡
100	天引向原遺跡
101	甘楽条里遺跡
102	田篠上平遺跡
103	岩井諏訪前遺跡
104	馬庭源四郎屋敷遺跡
105	天神下遺跡
106	中林遺跡
107	小串塚原遺跡
108	釜ヶ淵遺跡
109	南高原遺跡（長根遺跡群）
110	北高原遺跡（長根遺跡群）
111	神保境遺跡（長根遺跡群）
112	西高原遺跡（長根遺跡群）
113	南原遺跡（長根遺跡群）
114	上高原遺跡（長根遺跡群）
115	下高原遺跡（長根遺跡群）
116	安坪遺跡（長根遺跡群）
117	折茂遺跡（長根遺跡群）
118	上の場遺跡（長根遺跡群）
119	大谷遺跡（長根遺跡群）
120	宮西遺跡（長根遺跡群）
121	富士塚遺跡（長根遺跡群）
122	西原遺跡（長根遺跡群）
123	北原遺跡（長根遺跡群）
124	羽田倉遺跡（長根遺跡群）
125	西原Ⅱ遺跡（長根遺跡群）
126	中原遺跡（長根遺跡群）
127	中原Ⅱ遺跡（長根遺跡群）
128	折茂Ⅱ遺跡（長根遺跡群）
129	南高原Ⅳ遺跡（長根遺跡群）
130	東場脇遺跡（長根遺跡群）
131	羽田倉Ⅱ遺跡（長根遺跡群）
132	折茂Ⅲ遺跡（長根遺跡群）

No.	遺 跡 名
133	折茂Ⅳ遺跡（長根遺跡群）
134	安坪Ⅲ・Ⅳ遺跡（長根遺跡群）
135	安坪Ⅱ遺跡（長根遺跡群）
136	ヌカリ沢A窯跡
137	彦田谷窯跡
138	双子窯跡
139	でえせえじ遺跡
140	下五反田窯跡
141	未沢Ⅰ窯跡
142	未沢Ⅱ窯跡
143	滝ノ前窯跡
144	下日野・金井窯跡群a2地点
145	下日野・金井窯跡群a4地点
146	下日野・金井窯跡群c地点
147	下日野・金井窯跡群d地点
148	下日野・金井窯跡群f地点
149	下日野・金井窯跡群g地点
150	金山瓦窯跡
151	山上碑
152	多胡碑
153	金井沢碑
154	田端廃寺
155	馬庭東遺跡
156	水窪遺跡
157	山王窪遺跡
158	雄木味遺跡
159	黒熊中西遺跡
160	塔之峰遺跡
161	下高原廃寺
162	東場脇廃寺
163	多胡館
164	池城
ア	佐野古墳群
イ	大道南古墳群
ウ	山名古墳群
エ	岩井古墳群
オ	白石古墳群（七興支群）
カ	白石古墳群（猿田支群）
キ	白石古墳群（稲荷山支群）
ク	白石古墳群（下郷支群）
ケ	鮎川古墳群
コ	東平井古墳群
サ	金井古墳群
シ	南坂古墳群
ス	金山下古墳群
セ	中原古墳群
ソ	多比良古墳群
タ	山ノ神古墳群
チ	西浦古墳群
ツ	東吉井古墳群
テ	祝神古墳群
ト	塚原古墳群
ナ	高木古墳群
ニ	下池古墳群
ヌ	岩崎古墳群
ネ	本郷古墳群
ノ	塩川古墳群
ハ	多胡古墳群
ヒ	神保古墳群
フ	塩古墳群
ヘ	安坪古墳群
ホ	小棚古墳群
マ	田篠塚原古墳群
ミ	下田篠古墳群
ム	二日市古墳群

集落の展開は弥生時代後期を踏襲しており、上位段丘を中心に立地する傾向がある。吉井地域では西場脇遺跡・神保富士塚遺跡・神保植松遺跡・折茂東遺跡・川内遺跡・入野遺跡・黒熊遺跡群など数が多い。

古墳時代中期（5世紀前半）における主要古墳の様相

ここからは多胡郡設置までの政治的な動静を理解するために、まず鎭川流域での古墳の消長について記す。

5世紀初めには甘楽町域に天王塚古墳（前方後円墳：76m）が登場する。鎭川流域の最初の方後円墳であると言われる（右島 1992）。同時期の吉井地域では片山1号墳（円墳：33m）が調査されており、内行花文鏡や石製模造品等、豊富な副葬品が出土している。

藤岡市に位置する鎭川の東端、谷地形から平野へと広がる場所には白石稲荷山古墳（前方後円墳：約150m）が築かれる。鎭川流域で当期の有力な前方後円墳は本古墳のみである。渡来系の文物を副葬品として持つことから、早い段階に朝鮮半島と関わりを持ち渡来人を招致した勢力とされる（金井塚 2008・亀田 2012）。この古墳にも副葬された石製模造品の原料となる滑石は、吉井地域を中心とした三波川変成帯にて豊富に産出される（図 10）。白石稲荷山古墳の勢力の隆盛は、滑石の供給地を掌握していたことにも起因するであろう。

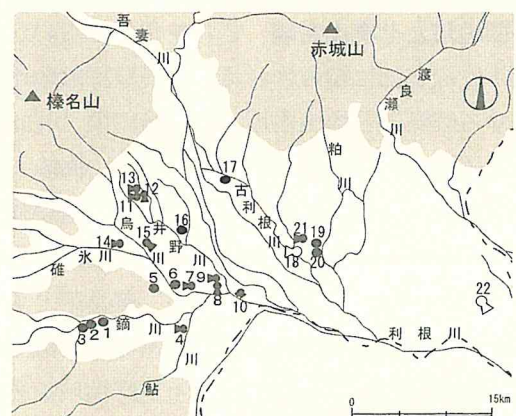
倉賀野浅間山古墳・白石稲荷山古墳から続く巨大古墳築造の流れは上毛野地域の東部に移り、5世紀中頃に築造された太田天神山古墳（前方後円墳：210m）で頂点を迎える。東日本最大のこの古墳は上毛野地域の豪族が結束した共立王の墓だと指摘されている（若狭 2007）。その共立王を『日本書紀』にみえる上毛野君の祖、荒田別・鹿我別・竹葉瀬・田道などに見立てる意見もある。共立の背景としては、大和王権からの朝鮮半島への出兵要請や、これに伴う大陸文化の獲得という目的があり、こうした朝鮮半島への対外政策に必要な各地の勢力の一時的な結集を意味しているのであろう（亀田 2012・若狭 2017）。

5世紀後半での共立の解消 この共立は一時的なものであり、5世紀後半になると上毛野地域全体の共立は解消され、各地の豪族は自立的な地域経営が可

能になっていたとみられ、上毛野地域の西部を中心に100m級の古墳が複数出現する。中でも有力だったのが、のちの律令制下に群馬郡となる地域（これを群馬郡地域と呼ぶ）に含まれる高崎市周辺の榛名山麓に位置する井野川流域である。この地には岩鼻二子山古墳（前方後円墳：115m）と不動山古墳（前方後円墳：94m）が築かれたのち、上流に拠点を移し井出二子山古墳（前方後円墳：108m）から始まる保渡田古墳群が築かれる。

群馬郡地域には他に、烏川東岸の上並榎稲荷山古墳（前方後円墳：120m）・小鶴巻古墳（前方後円墳：88m）、旧利根川西岸には総社古墳群の始まりとなる遠見山古墳（前方後円墳：70m）などが築造される。律令制下に片岡郡となる地域（片岡郡地域）の北西部にあたる高崎市八幡台地上には平塚古墳（前方後円墳：105m）が築かれた。

上毛野西部の連合 前述の上毛野地域西部に現れた有力豪族は、凝灰岩製舟形石棺を保有し、新たな連合関係を築いたとみられている。この中でも保渡田古墳群が上位の石棺を使用し、盟主的立場であったと考えられている（若狭 2007・図 14）。鎭川流域に



- | | |
|------------|----------------|
| 1：大山鬼塚古墳 | 12：保渡田八幡塚古墳 |
| 2：島田石棺 | 13：保渡田薬師塚古墳 |
| 3：貉塚古墳 | 14：平塚古墳 |
| 4：宋永寺裏東塚古墳 | 15：上並榎稲荷山古墳 |
| 5：姥山古墳 | 16：聖天山古墳 |
| 6：庚申塚古墳 | 17：唐櫃山古墳 |
| 7：小鶴巻古墳 | 18：お富士山古墳 |
| 8：岩鼻二子山古墳 | 19：総覧赤堀村 16 号墳 |
| 9：不動山古墳 | 20：台所山古墳 |
| 10：若宮八幡北古墳 | 21：今井神社古墳 |
| 11：井出二子山古墳 | 22：太田天神山古墳 |

●●：舟形石棺 ◡：長持形石棺

図 14 舟形石棺・長持形石棺分布図
（石橋 2011 を転載・加筆）

においては藤岡市宋永寺裏東塚古墳（前方後円墳：約 50m）が舟形石棺を持ち、この連合に加わっている。岩野谷丘陵東寄りの地域は片岡郡地域に含まれるが、ここには規模が小さいながらも舟形石棺を持つ姥山古墳（円墳？：約 38m）があり、丘陵資源を利用した初期の豪族の墓と考えられる（大江 1988・若狭 2008）⁽¹⁾。

（3）上毛野地域西部における

6 世紀前半の様相

榛名山の噴火 6 世紀初頭および中葉に榛名山は噴火を 2 度繰り返す。その大規模な火砕流や軽石の降下により、榛名山北東から南東にかけて甚大な被害を受けた。被害の状況は渋川市金井東裏遺跡や黒井峯遺跡などからその激しさが現在にも伝わってくる。噴火災害により、榛名山東～東南麓地域を基盤としていた保渡田古墳群などの勢力は壊滅的ダメージを受けてしまう。災害を受けなかった、または影響が少なかった地域の有力豪族の系列は存続した。鐺川流域もその影響を受けなかった地域の一つである。榛名山噴火後、上毛野の中心的勢力は鐺川流域に移ったとされている（関口功一 2015）。

緑野郡地域と七興山古墳 これを象徴するのが、律令制下に緑野郡に編成される地域（緑野郡地域）に所在する藤岡市七興山古墳（前方後円墳：146m）である。後期古墳では東日本最大であり、継体大王陵と推定される大阪府今城塚古墳の墳丘規格が使用されている。また、七興山古墳は愛知県断夫山古墳とも同規格で全長もほぼ 1：1 であり、継体朝と東日本の地域勢力との関係を示す事象である。七興山古墳の被葬者は継体朝の力を背景に上毛野地域を統べた勢力の有力者と考えられている（若狭 2017）⁽²⁾。近年の調査において、6 世紀前半の築造である可能性が高く、横穴式石室を持つことが確認された⁽³⁾。当期での横穴式石室は上毛野地域において原初的なものであり、梅沢重昭は「その主体部が横穴式石室であるとすれば、それまでの西毛の烏川・碓氷川・井野川・鐺川水系の地域に盛行した舟形石棺の使用を否定する」と指摘している（梅沢 1981）。七興山古墳は烏川・鐺川の合流地点、平野への開口部に立地し、上毛野の平野部を見据える位置にあることから、そ

の勢力は鐺川流域に基盤をもち、当期の上毛野地域に大きな影響力を与えたと考えられる。

甘良郡地域の古墳 律令制下に甘良郡となる地域（甘良郡地域）も榛名山の火山被害を受けなかった地域である。6 世紀前半から横穴式石室が導入され、富岡市一ノ宮 4 号古墳（前方後円墳：48m）・富岡市桐淵 11 号古墳（円墳：約 18m）が初期横穴式石室を伴う。富岡市御三社古墳（前方後円墳：約 30m）は、上毛野地域で最も早く凝灰岩の切石を用いた横穴式石室を有する古墳である。鐺川中流域にある甘楽町笹森稲荷古墳（前方後円墳：100m）は甘良郡地域で最大の古墳である。前述の七興山古墳とあわせて鐺川流域の勢力が強まったことがうかがえる。

片岡郡地域の古墳 この地域も榛名山による大きな被害を受けなかった地域である。中心地と推定される高崎市八幡台地には八幡二子塚古墳（前方後円墳：66m）があり、前代から続く有力豪族の古墳と思われる。この地域を流れる碓氷川の上流も当時は片岡郡地域の勢力の影響下にあったと考えられるが（関口功一 2015）、ここには初期横穴式石室を持つ安中市築瀬二子塚古墳（前方後円墳：80m）が築かれ、この勢力により碓氷川北岸および秋間丘陵の開発が開始された（若狭 2007）。

片岡郡地域南東部の岩野谷丘陵東側では、当期には目立った古墳が存在しない。ここから烏川を渡った東岸の、かつて倉賀野浅間山古墳が君臨していた地域も同様に有力な古墳が現れていない。烏川東岸は榛名山の火山災害により水利系統が破綻し、勢力が後退するとともに、烏川西岸と併せて広く七興山古墳を築造した勢力下に置かれたものと考えられる（若狭 2017）。

（4）緑野屯倉・佐野屯倉の成立と

6 世紀後半の様相

緑野郡地域の古墳 この地域では七興山古墳以降、藤岡市街地東部の諏訪神社古墳（57m）・霊符殿古墳（30m 以上）・本郷二子山古墳（33m）・戸塚神社古墳（53m）、西部の白石古墳群に属する白石二子山古墳（57m）・萩原塚古墳（40m）・南部の高橋塚古墳（24m）など、中小規模の前方後円墳が造られる。しかし、七興山古墳に続くような 100m 級の大型前

方後円墳は築造されない。

前段階で導入された横穴式石室は、この時期、墳丘の大小に関わらず主体部として広く採用された。皇子塚古墳(31m)・平井地区1号墳(24m)・諏訪神社北古墳(25m)・伊勢塚古墳(28m)など円墳ではあるが規模が大きい横穴式石室を持つものも複数現れた。

甘良郡地域の古墳 緑野郡地域と同様、6世紀後半の当地域には中規模前方後円墳のみが造られる。富岡市街地の南、鐙川南岸に立地する桐淵古墳群には粘土山古墳(62m)・双子塚古墳(約50m)・行人塚古墳(約48m)があり、上野国一宮である貫前神社周辺には一ノ宮古墳群に属する太子堂塚古墳(60m以上)・堂山稲荷古墳(約50m)がある。堂山稲荷古墳の西側隣接地には、約100m四方の堀で囲まれた豪族居館である本宿・郷土遺跡がある。律令制下に多胡郡となる地域(多胡郡地域)でも小規模ながら前方後円墳があり、池二子塚古墳(約35m)などが知られる。

片岡郡地域の古墳 一方、八幡台地には八幡観音塚古墳(前方後円墳:100m)が築造される。この古墳は巨石を用いた自然石乱積の畿内式横穴式石室を持ち、承台付蓋銅甕をはじめとする荘厳な副葬品を有する。

岩野谷丘陵東寄り(後の山部里地域)には山名古墳群の一角に、山名伊勢塚古墳(前方後円墳:75m)が出現する。少し北に進むと銅甕や金糸が副葬された石原稲荷山古墳(円墳:30m)がある。

当期には対岸である烏川東岸にも漆山古墳(前方後円墳:62m)、蔵王塚古墳(円墳:44m)といった有力豪族級の古墳が再び築かれる。

凝灰岩削石積石室と装飾付大刀の分布 前述の緑野郡地域・片岡郡地域南部(のちの山部里地域)およびその対岸の烏川東岸を含めた一帯には、岩野谷丘陵から産出された凝灰岩を加工し用いた横穴式石室を持つ古墳が分布している⁽⁴⁾(図15)。凝灰岩を用いた石室は、前述の諏訪神社古墳・皇子塚古墳・平井地区1号墳・諏訪神社北古墳・山名伊勢塚古墳・漆山古墳・蔵王塚古墳など、前方後円墳だけでなく、円墳にも導入されている。

このほか上毛野地域西部では装飾付大刀が分布

することでも知られる(図16)。装飾付大刀は王権から分配された威信財と考えられており(徳江秀夫2011)、当地域と王権との緊密さを示唆する遺物である。

埴輪樹立と群集墳の隆盛 上毛野地域全般において特筆すべきことは、古墳の大小を問わず多彩な埴輪で装飾されることである。甘良郡地域では中原Ⅱ遺跡1号墳(円墳:31m)と神保下條2号墳(円墳:約11m)がその好例である。埴輪の生産地としては緑野郡地域の本郷埴輪窯があり、上毛野地域に広く供給している。

上毛野地域ではこの頃から群集墳が急速に増加する。6世紀後半から造墓活動が増加し、7世紀初頭には前方後円墳および埴輪の消滅と連動して収束する。その後7世紀中葉から再度造墓が活発となり、8世紀前半までには終了する(右島1994)。鐙川流域は群集墳の密集地であり、吉井地域だけでも安坪古墳群・神保古墳群・多胡古墳群・塚原古墳群・多比良古墳群・岩井古墳群などが知られ、7世紀後半には造墓が終了している(小根澤2007)。

緑野屯倉・佐野屯倉の設置 『日本書紀』安閑天皇二年(536年)五月九日条に上毛野国に緑野屯倉を置くとする記事がある。一方、正史には表れないが、



1:石原稲荷山古墳 2:蔵王塚古墳 3:漆山古墳 4:山名伊勢塚古墳
5:平井地区1号墳 6:皇子塚古墳 7:諏訪神社北古墳 8:諏訪神社古墳

図15 凝灰岩削石積石室の分布
(若狭2008を元に作図)

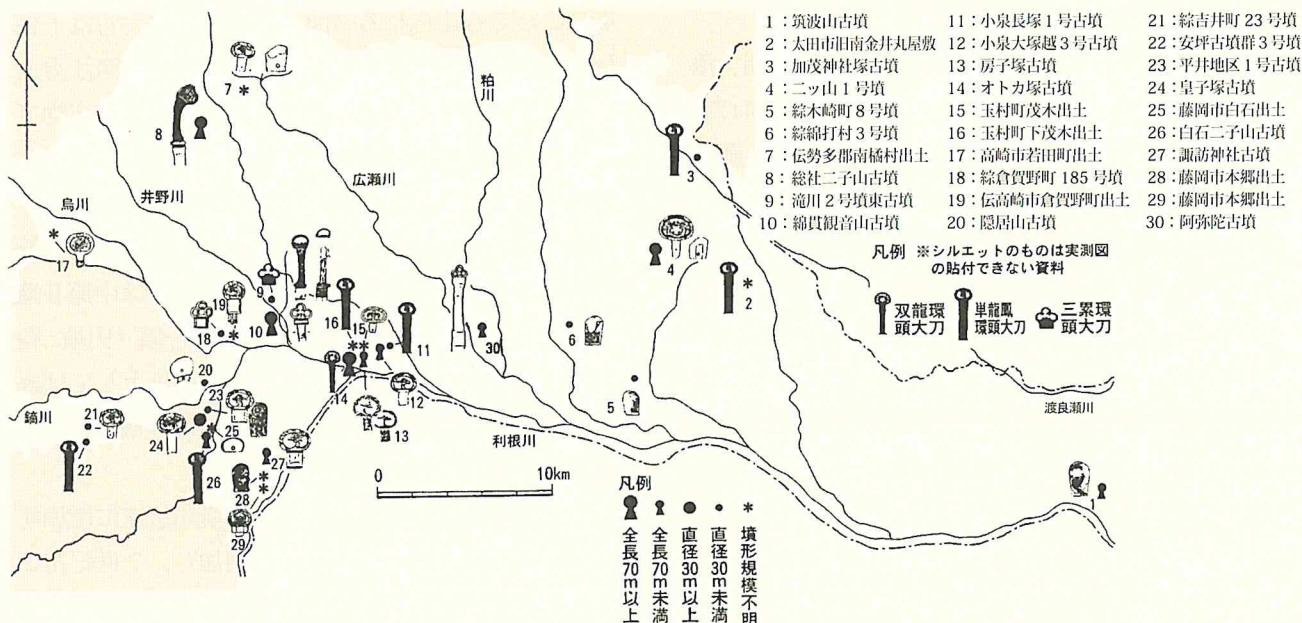


図16 上毛野地域6世紀後半における装飾付大刀分布図（徳江 2011 を転載）

山上碑（681年）には佐野屯倉の設置を示す記述がある。

若狭徹は2つの屯倉について、緑野郡地域、片岡郡地域南部を中心に、群馬郡地域南部・多胡郡地域周辺を加えた古墳の分布から、以下のように考古学的に考察した。すなわち、6世紀前半までは七興山古墳以外の有力古墳は存在しない。6世紀後半になると、70～80m級の中型前方後円墳や、畿内的な威信財である装飾付大刀を保有する古墳を上位とした、小地域の経営に移る。そして、「当地には七興山古墳のような突出した前方後円墳は二度と築造されず、王権による在地勢力の抑制が機能した」と指摘している（若狭 2017）。緑野屯倉と佐野屯倉の明確な区分はされていないが、当地域が王権と深い関わりを持ったことは明白であろう。

当地域と大和王権（中央氏族）との関わりは多くの研究で指摘されている。考古資料・文献史料の両面からは、6世紀以降、大和王権内で勢力を拡大した物部氏が上毛野地域に色濃く分布していたことが分かっている（関口博幸・関口功一 1991、神保 1991、川原 1999）⁽⁵⁾。この物部本宗家が滅亡した後、上毛野地域西部には壬生氏・秦人氏・宋宜（蘇我）部氏・額田部氏などの中央系の氏族が置かれている（松田 2003）。

（5）鐙川流域周辺の渡来文化

5世紀後半のインパクト 上毛野地域でみられる渡来文化は5世紀後半に色濃くみられる。主に馬匹生産に従事するために、朝鮮半島からの移民が展開していた。高崎市の剣崎長瀬西遺跡では渡来人の第一世代が居住していたことが判明している。

鐙川流域に絞ってみると、藤岡市温井遺跡・十二天塚古墳・甘楽町西大山1号墳から渡来系遺物が出土している（亀田 2012）。渋川市吹矢糺屋遺跡で出土した渡来系とみられる縄蓆文甕は、鐙川流域の胎土を使用しているとの指摘がある（若狭 2011）。以上のように5世紀後半の渡来人は豊富な痕跡を考古資料として残している。彼らは王権や在地豪族の関与のもと上毛野地域に移動したが、在来倭人との同化は進んでいなかった状況がうかがえる⁽⁶⁾。

6世紀以降の渡来人 当期以降の渡来人の痕跡を示す考古資料は乏しい。これは5世紀後半まで分化していた在来倭人との同化が進み、渡来人としての特色が薄くなってきたからと考えられている。一方、在地豪族と朝鮮半島との交流は、綿貫観音山古墳（前方後円墳：97m）や八幡観音塚古墳の副葬品にみられるように威信財の中にもみることができ、それらの威信財は王権を介して上毛野にもたらされたと考えられる（関口功一 2015、若狭 2017）。

文献史学からみると、のちの甘良郡（さらにのち

の多胡郡)を構成する韓級郷の地名は朝鮮半島出自の渡来系氏族の集住地であったことにちなむ名とされる。その他、東大寺正倉院宝物揩布屏風袋第3号銘文には「上野国多胡郡山部郷戸主秦人(部)高麿庸布一段」とあり、渡来系の秦氏の一族が居たことを表している。『続日本紀』天平神護二年(766年)五月壬戌条には「上野国に在る新羅人子午足ら一百九十三人に姓を吉井連と賜ふ」とあることから、上毛野地域西部に渡来系氏族の居住地があったことが分かる⁽⁷⁾。

考古資料として現れる6世紀以降の渡来系文物は、畿内ですでに倭人と同化した渡来系氏族が上毛野地域へ入植してもたらしたものであると思われる。

(6) 7世紀における多胡郡地域の様相

上毛野国における評の設置 645年(大化元年)、孝徳朝における最初の政策として「東国国司」が派遣され、各地に評が設置されるようになる。この歴史的意義は、従来の国造制・屯倉等で秩序立てられていた地方豪族の支配権を中央集権的に再編する端緒と考えられており、評の成立は東国豪族にとって大きな衝撃であった(佐藤1999)。上毛野地域においても新たな評の設置によって地域に大きな変化が生じた。例えば碓日(碓氷)評設置による甘良地域の最初の解体(関口功一2015)、片岡評設置による佐野屯倉を含めた周辺屯倉の再編(松田2009)が指摘されている。

鎚川流域の終末期古墳 7世紀になると前方後円墳は築造されなくなり、古墳への埴輪の樹立も無くなる。有力豪族は方墳や八角形墳などを築造するようになる。その他、精緻に加工した截石を用いた截石切組積の横穴式石室を有する古墳は在地豪族層が被葬者であった可能性が高い(右島1994)。鎚川流域では片岡郡地域南部の山上古墳(円墳:15m)、山ノ上西古墳(円墳:10m)、緑野郡地域の喜蔵塚古墳(円墳:25m)・境塚古墳(円墳:23m)がこれにあたり、岩野谷丘陵から産出した凝灰岩を用いた石室を伴う。甘良郡地域には多胡葉師塚古墳(円墳:25m)があり、牛伏砂岩を用いている。その他、多比良諏訪前古墳(円墳:規模不明)・天引黒淵古墳群の塚(円墳?:規模不明)がこれに含まれる可能性がある。

当地域には上毛野国では稀な横穴墓も存在し、岩野谷丘陵の凝灰岩層中に、小暮の穴葉師・穴大黒が造られている。当地域では特異な墓制なので、手工業生産を担った特殊な集団との関連を指摘する意見もある(若狭2008)。

寺院の建立 7世紀後半になると上毛野国でも寺院の建立が始まる。片岡郡地域では山部里の東端、烏川と鎚川の合流点付近にある微高地に田端廃寺が造営される。発掘調査では、主要伽藍は見つかっていないが、区画溝と思われる施設と共に乗附観音山丘陵古窯跡群産とみられる複弁七弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が確認されている。軒丸瓦は山王廃寺の複弁七弁蓮華文軒丸瓦の系譜を引くもので、年代観は7世紀末～8世紀初頭と考えられている。これに伴う集落は6世紀後半から出現し、8世紀第3四半期までに寺院と集落は一時廃絶してしまう。山部里(のちの山部郷)が多胡郡への編入後、738年(天平10年)に後述する法隆寺食封として施入されたことによって集落が再編された可能性が指摘されている。(大江1988)。

多胡郡正倉跡の東方、約1.3kmには馬庭東遺跡が所在する。発掘調査は行われていないが、多量の瓦が表採できることから寺院跡と推定されている。田端廃寺と同範の乗附観音山丘陵古窯跡群産である複弁七弁蓮華文軒丸瓦が確認されている。田端廃寺と同じ7世紀末から8世紀初頭の年代観であり、これが創建年代と考えられている(松田1999)。他の表採された軒丸瓦から9世紀代後半までは存続していたようである。

緑野郡地域では水窪遺跡で山王廃寺系の複弁七弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦、山王窪遺跡で太田市寺井廃寺系の複弁八弁蓮華文軒丸瓦がそれぞれ表採されている。いずれも発掘調査は未実施なため、遺跡の性格は不明である。

甘良郡地域では明確な古代寺院遺跡は見られないが、岩野谷丘陵西寄りの山間部に所在する桑原峰遺跡が瓦散布地として知られる(木津1997)。甘良郡地域に仏教の痕跡が見られないのは物部氏を中心とした在地祭祀が根強く存在したためという意見もある(川原1999)。

山上碑と佐野三家 山上碑は681年(天武天皇10

年)に建てられた石碑であり、完形の石碑としては国内最古である。前述の山上古墳の西隣に位置する。この古墳の被葬者は碑文中にある黒壳刀自とみられ、山上碑はその顕彰碑だと考えられる(東野 1991a)。

「佐野三家」という語句は山上碑に初めて登場する。碑文にある健守命は三家の設置者またはその管掌にあった人物とされる。碑の建立者は、その子孫である放光寺(山王廃寺)の僧長利であるとされている。碑には黒壳刀自が佐野三家を管掌した一族の子孫であることを記している(東野 1991 a)。

山上碑が建立された681年段階では、評制の施行によって佐野三家は解体の過程にあったとされる。山上碑はその再編に抗って建てられたとも考えられる(篠川 1999・関口功一 2015)。

鐮川流域の条里地割 上毛野国においては平野部に条里地割が残存すると指摘されており、鐮川流域でも近現代の地割にその痕跡が顕著にみられる(岡田 1991・関口功一 1986)。群馬県内では浅間Bテフラ直下に水田が数多く発見されており条里地割の研究の一助となっているが、鐮川流域において浅間Bテフラ直下の水田はまとまって検出されておらず、考古資料から条里地割を復元するには至っていない。

(7) 多胡郡地域の集落の動態

6世紀後半の人口増加 今まで古墳の消長を中心に概観したが、ここでは多胡郡地域の集落に一部甘良郡地域東端の集落を含め、その動態に目を向ける。

当地域において古墳時代の集落の分布は、発掘調査事例の濃淡も影響しているが、上位段丘に集中している。かつて中沢悟が多胡郡地域周辺の時期別竪穴建物数を集成したが(中沢 1997)、これに近年調査された塩川砂井戸遺跡のデータ(小島 2018)を追加して当地域の集落の動態をみると(表7・図17)、中沢が指摘するように5世紀までは目立った集落数では無いが、6世紀前半から増加し、後半には爆発的に増えている。6世紀後半は緑野屯倉や佐野屯倉の設置時期と重なり、鐮川流域全体に多くの入植者が移住させられた結果とみられる。

7世紀以降の動態 表7・図17でみる7世紀以降の竪穴建物数は250棟前後である。7世紀後半と8世紀後半～9世紀前半に一時減少するが、おおむね

一定とみて良いだろう。10世紀後半から減少する傾向は、上野国内の他の集落例とも一致する。

(8) 古代多胡郡と周辺の様相

多胡郡設置と多胡碑 多胡碑には、711年(和銅4年)、中央政府からの命令で、上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡の三郡内から三百戸を割き、新たに多胡郡を設置したことが記載されており、我が国唯一の古代の建郡碑として知られる(1頁参照)。

碑文の解釈では「弁官符」と「給羊」についての解釈が特に議論されている(高島 1999・長谷山 1999・小池 1999)。「弁官符」については、律令の中の文書様式にない名称であり、太政官符の別称、天武朝における大弁官符の異称、大宝律令での勅符の一つ、弁官符という公式には規定されない文書様式、「弁官おおす」という和文への当て字等とする見解がある。また、「羊」については建郡の主体者の名であるとする人名説が主流である。そして、多胡碑はこの人物である「羊」を顕彰するのを目的に造られたとしている(尾崎 1963・長谷山 1999・前澤 2005・平川 2012)。その他、羊を未と同義とする方角説、動物の羊とする動物説、羊を略字とする略字説、羊を半の誤りとする誤字説がある。

碑文の最後には当時の中央政権にいた穂積親王・石上麻呂・藤原不比等の名が連ねてある。

多胡郡設置の意義についての各説 尾崎喜左雄は、多胡郡設置の背景として、新旧の諸勢力に圧迫を受けた渡来系氏族からの要請があったとし、羊を新たに郡司に任命された渡来系氏族であるとしている(尾崎 1963)。一方、関口功一は、渡来系氏族が確実に存在した史料は無いとし、屯倉経営に中心的であった物部氏等の勢力を律令による地方行政組織に取り込むための郡の新置だとした(関口功一 1991)。これに対し、傍証的な史料から渡来系氏族の存在を認め、彼らの再編を目的として新置したという考え(高島 1999)や、未だ強大だった佐野三家勢力の解体および、広大な地域を有していた甘良郡の勢力の分割のためという考え(松田 2003)、712年(和銅5年)の出羽国設置に伴う上野国からの柵戸移配という対蝦夷政策と関係するという考え(前澤 2008・小池 2017)なども示されている。

表 7 多胡郡地域周辺の竪穴建物数（中沢 1997 より）

遺 跡 名	4 世 紀 前 半	4 世 紀 後 半	5 世 紀 前 半	5 世 紀 後 半	6 世 紀 前 半	6 世 紀 後 半	7 世 紀 前 半	7 世 紀 後 半	8 世 紀 前 半	8 世 紀 後 半	9 世 紀 前 半	9 世 紀 後 半	10 世 紀 前 半	10 世 紀 後 半	11 世 紀 前 半	合 計
長根安坪	0	1	0	0	3	15	2	1	6	3	8	6	1	0	0	46
折茂東	0	4	0	2	1	5	1	0	0	0	0	2	1	2	3	21
長根遺跡群	0	0	0	0	18	19	10	1	2	4	1	5	5	2	0	67
道六神・西場脇	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	6
長根羽田倉	2	0	0	0	14	23	25	10	4	10	3	5	12	14	11	133
神保富士塚	0	3	0	0	1	11	10	9	15	18	19	23	18	15	3	145
神保植松	16	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	13	7	2	0	41
神保下條	0	3	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	5
多胡蛇黒	0	0	0	0	0	35	22	12	36	13	13	13	10	2	4	160
柳田	0	0	0	0	0	0	0	2	3	1	3	3	0	5	0	17
矢田	2	3	6	3	10	125	78	50	85	45	33	65	88	51	17	661
椿谷戸	0	0	0	0	0	0	2	4	14	0	5	4	4	0	0	33
川内	0	0	0	0	2	8	1	0	4	1	1	4	7	0	0	28
御門	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	7
竹腰	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	7	6	18
塩川砂井戸	0	0	0	0	0	36	12	12	10	10	3	3	2	2	0	89
入野	0	1	2	1	27	6	0	2	0	0	0	0	0	0	0	39
東沢	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	0	1	0	0	0	5
多比良追部野	0	2	0	0	14	64	31	10	12	1	2	10	8	0	0	154
黒熊遺跡群	2	0	0	0	4	7	4	4	14	5	5	4	0	4	0	53
黒熊栗崎	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	8	3	12	0	0	27
黒熊中西	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2	10	31	10	2	61
黒熊八幡	0	0	0	0	0	0	0	1	14	18	18	23	20	0	0	94
山名原口・山名戸谷	0	0	0	0	0	2	2	0	3	0	4	8	4	3	0	26
田端	0	0	0	0	0	29	14	7	14	0	0	14	23	28	22	151
東吹上	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
富岡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4
川福	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	6
白倉下原・天引向原	15	3	12	8	47	55	19	12	27	16	17	27	22	12	18	310
甘楽条里	1	2	5	27	23	5	3	3	0	0	0	0	0	0	0	69
田篠上平	0	0	0	0	0	0	0	0	18	7	6	14	1	1	0	47
下位段丘	1	3	5	27	24	72	31	22	30	10	15	28	32	45	28	372
上位段丘	38	20	20	14	144	376	207	119	256	150	146	238	247	120	58	2,153
合 計	39	23	25	41	168	412	226	129	276	150	158	263	277	163	86	2,436

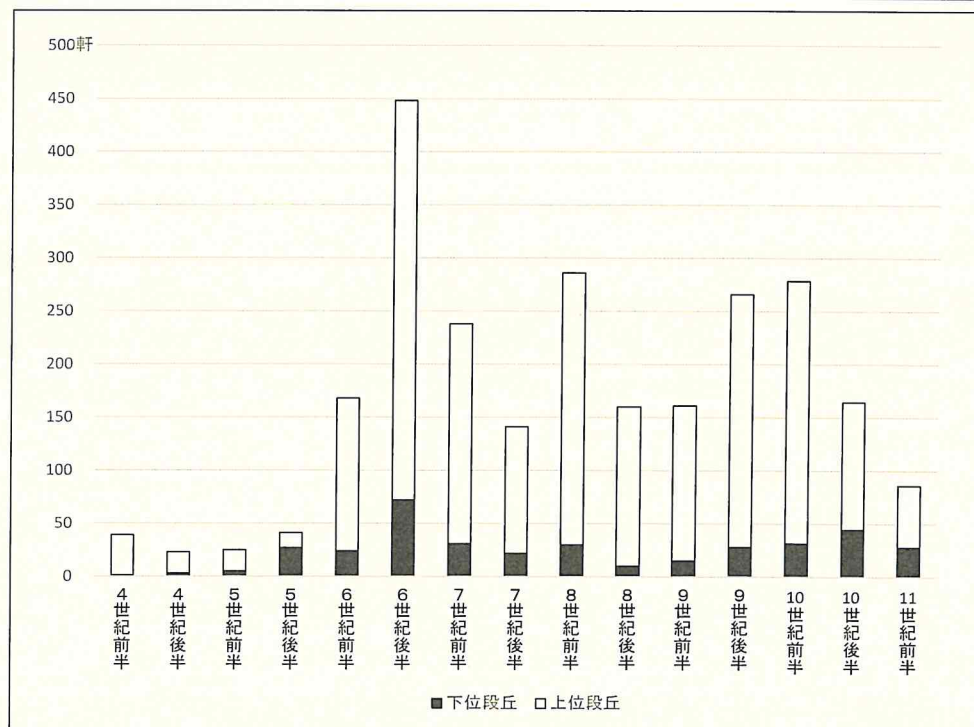


図 17 多胡郡地域周辺の竪穴建物数

古代多胡郡の郷名比定 古代上野国は東山道に所属し(図 18)、当初は上国であったが、811 年(弘仁 2 年) 大国に昇格した。上野国内は多胡郡設置後、14 の郡に分かれていた(図 19)。古代多胡郡は建郡当初 6 里で構成され、『戸令』による下郡にあたる。平安中期、承平年間(931～938 年)の『倭名類聚抄』では俘囚郷が加わり 7 郷に増置されている(表 8)。

多胡郡の郡域については郷名に対応すると思われる現存地名などから、鎭川と烏川との合流点に近い、きわめて限られた地域が想定される。「大家」「武美」の遺称地は知られていないため、この 2 郷の所在地や範囲については諸説ある状態である。以下、郷名比定について大家郷を多胡碑周辺に比定する尾崎喜左雄説(尾崎喜左雄 1963)と、『群馬県史』通史編 1 に掲載された関口功一説(関口功一 1991)とを紹介したい(図 20)。

「織裳」「韓級」「矢田」「山」の諸郷の位置比定は両説とも一致している。

織裳郷(もと甘良郡)は吉井町長根に「折茂」という地名が残されていることから、その周辺が織裳郷地域と推定される。

韓級郷(もと甘良郡)はカラシナという社名を残していることから、辛科神社が鎮座する吉井町神保周辺が韓級郷と推定されている。

矢田郷(もと甘良郡)は古くは「八田」と書かれたようである。吉井町矢田に地名が残されていることから、その辺りが矢田郷と推定される。

山郷(もと片岡郡)は元々、「山部郷」であったが、桓武天皇の諱である「山部」と同じ表記を避けるため「山」と改められた。後に「山字(山宗)」になったが、その遺称とされる高崎市山名町付近が山郷と推定されている⁽⁸⁾。

尾崎説では多胡碑のある吉井町池字御門を郡衙の所在地とし、豪族の居住地をさすという大家郷(もと甘良郡)をこの地域に比定している。武美郷(もと緑野郡)については、緑野郡域に含まれる藤岡市に隣接している高崎市吉井地域の南東部にあたると推定している。

一方、関口説では「大家」「武美」は『続日本紀』に記載されている順に西から郷を配したと解し、「大家」は吉井町多比良付近、「武美」は吉井町黒熊から

表 8 古代多胡郡の郷(里)名

続日本紀
織裳、韓級、矢田、大家、武美、山
倭名類聚抄
山宗(也末奈：古活字本)・山字(也末奈：高山寺本)、織裳(於利毛)、辛科(加良之奈)、大家、武美、俘囚(古活字本)、八田

藤岡市白石付近としている。

『倭名類聚抄』のうち古活字本などには「俘囚郷」の記載がある。「俘囚郷」は 9 世紀の律令国家による東北への軍事侵攻により捕虜となった人々が配置された郷である。上野国には多胡郡の他、緑野郡・碓氷郡にその記載がある。多胡郡における俘囚郷の位置を明確に比定できる材料は現在のところ見当たらない。

多胡郡内の窯業 多胡郡内では手工業生産が盛んであったことが知られている。最初に窯業についてみると、その生産地は 2 つの地域に大別できる。

多胡郡の北端にあるのは乗附観音山丘陵古窯跡群と呼ばれる。多胡郡と群馬郡を隔てる岩野谷(観音山)丘陵一帯に分布している古窯跡である。岩野谷丘陵を形成する新第三紀由来の板鼻層に粘土層が含まれており、これを利用している。調査例が少なくヌカリ沢 A 窯跡・彦田谷窯跡が調査されているのみであり(茂木 1995)、このほか表採調査で双子窯跡・小塚窯跡・でえせえじ遺跡・護国神社遺跡が知られている(木津 1997)。5 世紀後半から須恵器窯が操業した可能性があるが、量産は 6 世紀後半からで、8・9 世紀に最盛期を迎え、10 世紀初頭には衰退した(手島 2012)。

多胡郡の南寄り、尾崎説で武美郷に比定される地域には吉井古窯跡群が所在する。牛伏山から連なる丘陵の東端、吉井町多比良周辺に分布する。

さらに東の藤岡市金井にかけても窯跡は連続して分布しており、ここは藤岡古窯跡群と呼ばれ、上野国最大の窯跡群と考えられている。岩野谷丘陵を形成する板鼻層はこの辺りまで連続しており、乗附観音山丘陵古窯跡群と類似する粘土が産出されるが、両者を区別する胎土の特徴として、南の三波川変成帯に由来する結晶片岩が夾雑物となることが挙げられる(図 10)。これらの窯跡群も調査例は少なく、下

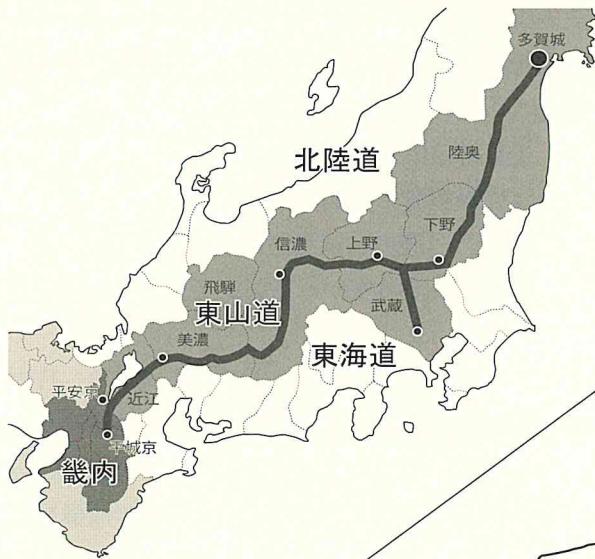


図 18 東山道位置図
(8世紀)

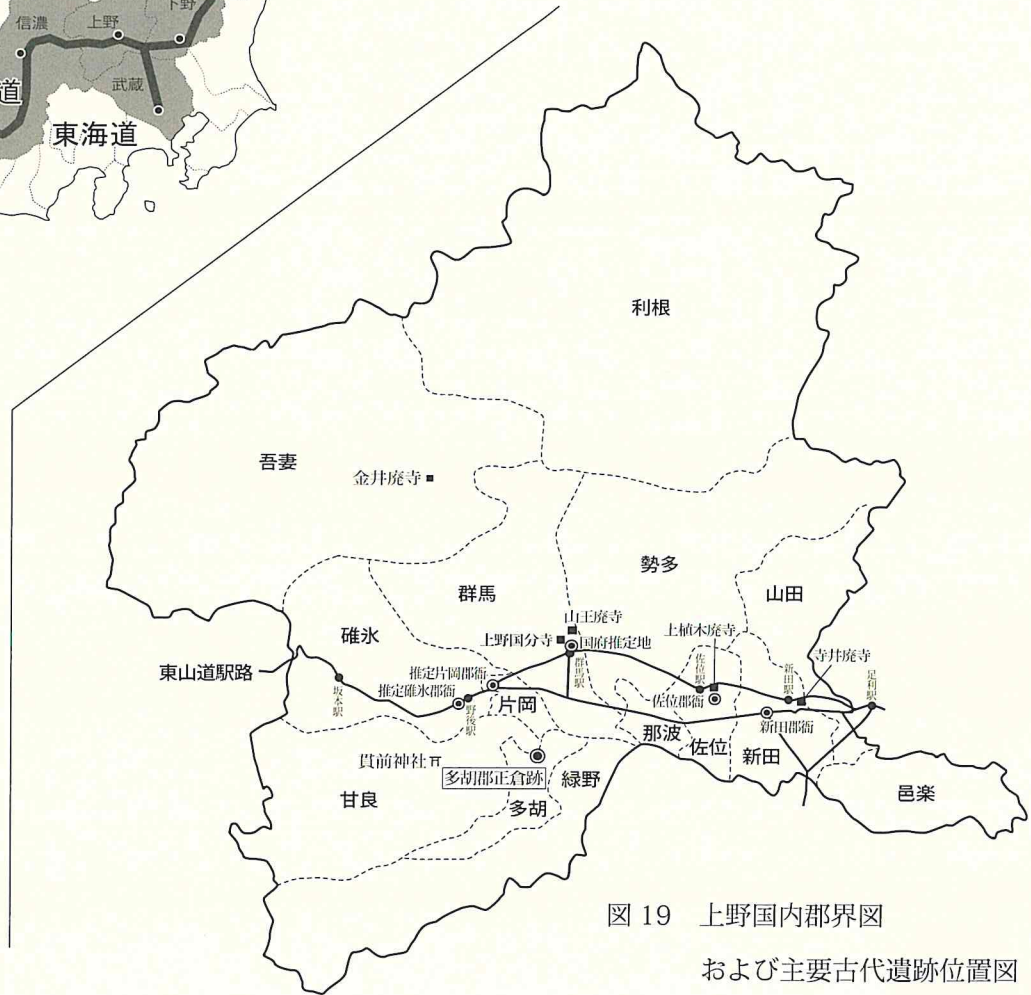
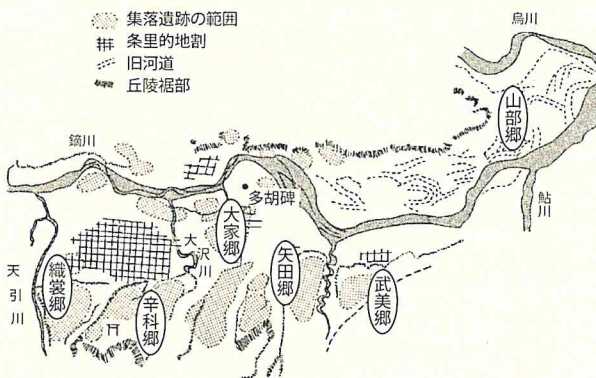
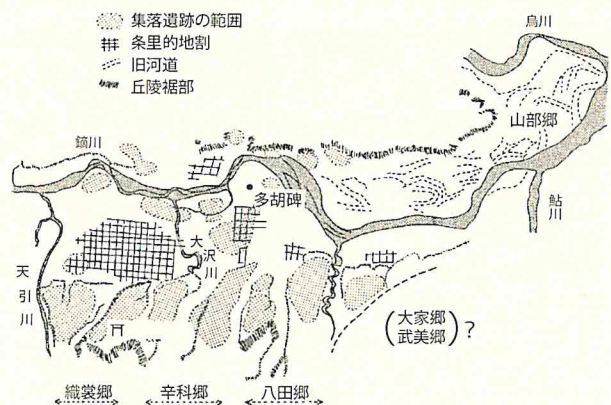


図 19 上野国内郡界図
および主要古代遺跡位置図



尾崎喜左雄説



関口功一説

図 20 多胡郡内の郷分布 (関口功一 1991 に加筆)

五反田窯跡・末沢窯跡が調査されている（国士舘大学考古学研究室 1984）。そのほかにも滝ノ前窯跡が知られる。

この2つの窯跡群を合わせて吉井・藤岡古窯跡群と呼ぶが、ここでは7世紀前半から小規模な須恵器生産が始まり、8世紀前半には須恵器・瓦の量産が始まった（手島 2012）。ここは上野国分寺創建期の瓦を主体的に生産していた場所の一つであり、9世紀代には国分寺補修期瓦をほぼ独占的に供給した（高井 1988）。上野国西部の平安期寺院の瓦も、この窯跡からの製品が主流である。この窯跡群での創業は10世紀以降まで続いた（手島 2012）。

多胡郡内の布生産・鉄生産 矢田遺跡は矢田郷に比定されることで著名であるが、122点の紡錘車が出土していることでも知られている。紡錘車の未成品を集計した小根澤雪絵の研究によると、多胡郡成立前から多胡郡地域では郡城南寄りの三波川変成帯より産出される滑石・蛇紋岩を背景に、紡錘車の生産が盛んであった。さらに建郡以降、元は甘良郡に属していた織裳郷・韓級郷・矢田郷は紡錘車の生産が突出する場所となった（小根澤 2008）。紡錘車だけではなく布生産も行われており、矢田遺跡 121号住居跡からは絹の平織と思われる炭化繊維が出土している（中田 1990）。正倉院宝物の中にも「上野國多古郡八□（田力）郷」（白布第 11号銘文）、「上野國多胡郡山部郷」（揩布屏風袋第 3号銘文）と墨書された布が知られている。

多胡郡近辺では製鉄遺跡も確認されている。吉井・藤岡古窯跡群の一部である藤岡市下日野・金井窯跡群の a 2 地点および d 地点（図 13-144 および 147）から 4 基の製鉄炉が検出されており、d 地点の 3 基は竪型炉である（古郡 1993）。周辺の窯業地帯と同じような場所に製鉄遺跡が存在したようである。日野地域は古代多胡郡域に含まれる可能性がある。また、金井沢碑に登場する「鍛師礪部君身麻呂」は製鉄産業に関わっていた人物とされる（若狭 2008）。

金井沢碑と三家氏 金井沢碑は 726 年（神亀 3 年）に建てられた碑である。三家氏を名乗る氏族が親族や近親者と共に知識を結び願う内容が記されており、当地への仏教の広がりを示している。ここに登場する三家氏は山上碑に記される「佐野三家」管掌者の

子孫であり、碑文中に記されている人物名から古代の家族関係を知る史料として重要である。

冒頭の「上野国群馬郡下賛郷高田里」とあるのは、715 年（霊龜元年）から 740 年（天平 12 年）まで続いた国郡郷里制の施行や、『続日本紀』和銅 6 年（713 年）条の「畿内七道諸国郡郷名は好き字を著けよ」とある政策の実施が行き届いていることも示している。

また、「三家」という氏族名が登場しており、佐野屯倉に関係した氏族が多胡郡成立以後の時期にも未だ一定の存在感を示していたことを示す史料でもある。**山部郷の法隆寺食封への施入** 『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』によると、738 年（天平 10 年）、播磨国揖保郡林田郷五十戸、但馬国朝来郡枚田郷五十戸、相模国足下郡倭戸郷五十戸、上野国多胡郡山部郷五十戸の 4 郷を聖武天皇が法隆寺に納めたとある。山部郷は法隆寺とかかわりの深い山部氏が居住していた地域であり、その背景として当地が佐野屯倉段階から上宮王家や蘇我氏と関わりがあったことが指摘されている（松田 2009）。

『万葉集』に見る多胡郡 『万葉集』巻第 14 には東国の人々が詠んだとされる東歌という歌が収録されている。その中に「多胡」や「佐野」といった地名を詠んだ歌も見られ、「多胡」は 2 首、「佐野」が 4 首ある。

「我が恋は まさかもかなし 草枕 多胡の入野の奥もかなしも」（巻 14/3403）

（わたしの恋は 今もかなわない 多胡の野が奥へずっと入り組むように 私の恋もずっと永遠にかなわないよ）

「多胡の嶺に 寄せ綱延へて 寄すれども あにくやしづし その顔良きに」（巻 14/3411）

（多胡の山の嶺を 女性の顔に見立てて私の方へ引き寄せる にくいことにあの娘は寄って来ない その顔がいいことを鼻に掛けてさ）

「上野 佐野の荃立 折り生やし 我は待たむゑ 今年来ずとも」（巻 14/3406）

（上野の 佐野の荃立を 折っては生やし折っては生やして わたしは待とう 今年来てくれなくても）

「上野 佐野田の苗の 群苗に 事は定めつ今はいかにせも」（巻 14/3418）

(上野の佐野田の苗の 群苗で占って 結婚相手を決められた さてなんとしたものだろう)

「上野 佐野の船橋 取り放し 親は放くれど 我は離るがへ」(巻 14/3420)

(上野の 佐野の舟橋を 取り放して 母親は邪魔するが わたしたちは離れるものか)

「佐野山に 打つや斧音の 遠かども 寝もとか児ろが 面に見えつる」(巻 14/3473)

(佐野山で 打つ斧の音のように 遠くなのに寝たいと思ってかあの娘が 面影に見えたことよ)

これらの歌では「多胡の入野」と「多胡の嶺」といった山に関連する言葉が歌われている。『吉井町誌』では「多胡の入野」は吉井町南部の神保から現在の大字である塩・大沢へと南へ奥深く入り込んだ地を指すのではないかと指摘している(橋爪 1979 a)。「多胡の嶺」は吉井地域内で牛伏砂岩を産出する牛伏山・八東山・朝日岳のいずれかを指すと考えられ、山から切り出した牛伏砂岩を縄で引き下ろし引き寄せる風景と女性を引き寄せることを重ねている。

「佐野」を詠んだ歌を見ると、「佐野の莖立」からは蕪のような植物が食されていた(根岸 1993) こと、「佐野田の苗」からはこの地域に田があったことがわかる。「佐野山に打つや斧音の」の「佐野山」は岩野谷丘陵だと考えられ、「斧音の」から山林資源の活用が推察できる。「山部郷」「山部」の存在からも、この地が山林資源の要地であったことが推察できる(松田 2017)。

多胡郡およびその周辺では、窯業・製鉄・布生産等、手工業生産が盛んな地であり山林資源の利用も活発であった。

「佐野」は現在の高崎市上佐野町から下佐野町にかけての烏川左岸地域を指すと考えられている。「佐野の舟橋」は佐野から烏川の対岸へ架けられていたとされる。佐野は、東の平地から西の岩野谷丘陵への渡河点である。中世でも鎌倉街道の渡しとしても知られた要地であり謡曲「舟橋」の舞台でもある。

舟橋は川に舟を並べて浮かべ、その上に板や筵を敷いて人などを渡れるようにした橋で、『枕草子』に「橋は、あさむつの橋、長柄の橋、あまびこの橋、浜名の橋、うたたねの橋、佐野の舟橋」と登場する。

この「佐野の舟橋」の歌では、母親に対して反発

する娘の姿が歌われている。上野三碑の山上碑・金井沢碑は母系血縁の優位性を示す資料とされており(松田 2017)、この歌からも当時の女性の様子がうかがえる。

また、群馬県内では 33 回忌にヤナギの枝を折り墓地に挿木をし、それが根づくと仏に生まれかわるという伝承(楊卒塔婆)があり、そういったことから「折り生やし」を呪術的な意味があるとする解釈もあり、「群苗」は苗を利用した占いであることから、古代の人々の生活に呪術が根付いていたことがうかがえる(根岸 1993)。

東歌では上野国をはじめ 12 の国の名前が判明しているが、その中で登場する国名は上野国が最多となっている。東歌は農民が歌った謡曲が元といわれるが、それは東国から派遣された防人の歌に記された名前が部姓を称しており、カバネを持っていなかったことからわかる(松田 2017)。農民という身分であっても歌を詠む高い教養を持っていたらしく、これらの高い文化的素地をつくったものとして、渡来系の人々の影響が考えられよう。

天台宗の進出と多胡郡 緑野郡に所在する緑野寺(現在の浄法寺)は、鑑真の弟子である道忠が開いた寺であり、一切経を所蔵する寺院として著名である。最澄が訪れて伝導をしたことでも知られ、天台宗の拠点ともなっていた。多胡郡にも天台宗の広がりを見ることができ、6 棟以上の礎石建瓦葺建物が見つかった山岳寺院跡である黒熊中西遺跡では、相輪櫓^{そうりんとう}⁽⁹⁾と思われる天台寺院系の遺構が検出されている。

『交替実録帳』に見る多胡郡家 古代後期の多胡郡の様子を伝える情報は少ないが、1030 年(長元 3 年)

表 9 『上野国交替実録帳』諸郡官舎項 多胡郡部分

正倉	西一土倉壹宇、西二土倉壹宇、南二土倉□□ 南三土倉壹宇、南四土倉壹宇、中一□□板倉□宇 北一板□□
郡廳館	宿屋壹宇、厨家壹宇、西納屋壹宇 向屋壹宇、副屋壹宇、厩壹宇
二館	宿屋壹宇 向屋壹宇 厩壹宇
三館	納屋壹宇 向屋壹宇 副屋壹宇
四館	宿屋壹宇 納屋壹宇 副屋壹宇
厨家	酒屋壹宇 納屋壹宇 竈屋壹宇

の『上野国交替実録帳』に当時の多胡郡家の様子がうかがえる。これに拠ると表9に示す建物が「無実」と記載され、郡庁や一部の正倉など主要な建物が無くなってしまっていることが分かる（前澤 1976）。公権力による積極的な管理がすでにされていない状況が読み取れる。

（9）中世以降の多胡郡および周辺の様相

多胡郡における荘園の成立と多胡館 上野国では平安時代末、荘園の成立が目立つようになり、吉井地域には多胡荘が成立したと考えられ（橋爪 1979 b）、周辺には高山御厨や山名郷などが所在した。

多胡荘は、平安時代末期に源義賢が上野国の拠点としていたところといわれている。義賢は、1140 年（保延 6 年）、皇太子の護衛長官（帯刀先生）を務めていたが、解官され、1153 年（仁平 3 年）夏頃より、上野国多胡荘に居住したとされている（多胡碑記念館 2012）。多胡荘の開発は義賢が行ったとも考えられるが、居住したとされる期間が短く資料も残されていないため、詳しいことはわかっていない。

義賢は、秩父郡を支配している秩父氏の秩父重隆の娘婿となって武蔵国大蔵館へ入り、上野から武蔵に勢力を拡大しようとしていたが、兄、源義朝の勢力によって滅ぼされた。その後、義賢の子である源義仲が信濃から多胡荘に入った。

多胡荘の拠点とされる多胡館は、吉井地域の南寄り、上位段丘上の平坦面に立地する。東西 110m・南北 110m の単郭の城郭で、吉井地域内最古の館跡とされている（井上 1979）。遺構の詳細は不明だが、1999 年（平成 11 年）、吉井町教育委員会の調査の結果、1108 年（天仁元年）の浅間山噴火による浅間 B テフラが堀埋土から確認され、1108 年以前の築造であることがわかった。

多胡荘を本拠とする武士に多胡氏がいる。恐らく多胡荘を実質的に管理していたのは彼らだったと思われる。武蔵七党児玉党の有道氏系図に「多子」の名が見えることから、多胡氏は武蔵七党児玉党の系譜を引き継ぐ一族だとも考えられる（山本 1989）。

古代多胡郡の山字（山宗）郷は、中世になると『吾妻鏡』では「山名」と表記されている。山名郷は律令期以来公領であるが、武蔵七党児玉党の有道氏系

図に山名氏が見られることから、新田義範から始まる山名氏の前に有道系山名氏がいたと考えられる（山本 1989）。

現在の藤岡市辺りには高山御厨があった。1131 年（天承元年）に成立し、秩父平氏の一族の高山・小林氏が進出していた地である。秩父平氏は桓武平氏良文流の武蔵国最大の武士団であり、当主の平武綱は、1083 年（永保 3 年）の後三年合戦で源義家に従軍し、1181 年（治承 5 年）の横田河原合戦では高山党は義仲軍に加わっている。この義仲に従った者の名に多胡次郎家包の名が見えることから（須藤 2003）、多胡郡辺りに義賢父子を支持する一族がいたことがうかがえる。

義賢が殺害された後、養子の源頼賢が信濃国に逃げ、後年その息子の義仲が信濃で挙兵するなど、義賢は信濃に何らかの基盤をもっていた可能性がある。

『宴曲抄』の中に鎌倉から善光寺への道行を歌った作品がある。そこには、「今宵はさても山な越えぞ、いざ倉賀野にとどまらん」とある（山本 2000）。吉井地域内には、鎌倉街道と伝わる道が数本あったようで、そのうちの一つに藤岡市平井方面から吉井町多比良へ通じる道があり、多胡館の近くを抜けていたといわれている（井上・吉江 1979）。

多胡郡は信濃・上野・武蔵を結ぶ地点に位置し、鐙川を押える要衝であることから、戦略上の拠点となりうる土地であったといえる。

中世の有力氏族 多胡郡の中世の様相については史料が乏しいため詳細は不明であるが、『吾妻鏡』の中に多胡・小串・片山・神保・多比良といった当地域を基盤としていたと思われる武士の名が見られる（井上・吉江 1979）。

多胡氏は源義仲に従っていた武将の中に名が見られるが、義仲の没落後は、源頼朝に従った武士のなかに多胡宗太の名が見え、一族が存続したことがわかる（井上・吉江 1979）。

小串氏は多胡荘内小串の領主であったとされ、『吾妻鏡』の 1195 年（建久 6 年）の条に小串右馬允の名が見え御家人であったことがわかる。承久の乱の恩賞として近江国菅浦の惣追捕使職や播磨守護代、摂津の守護代を務めたものもいる。乱を契機に小串氏一族の多くが西国に移動し、北条被官となって活

路を見出した。小串氏はその後、室町、近世へと続く（久保田 1996）。

豊後中津藩の歴史をまとめた『中津藩史』には、鎌倉時代には奥平村（現高崎市吉井町下奥平）に居住したとされる奥平氏が甘楽郡司を 7 代に渡り務めたとの記載があり（井上・吉江 1979）、このことから当期の鐺川流域で力をもった氏族がいたということがわかる。

富岡市下高尾には仁治 4 年（1243 年）の銘がある板碑が現存している。この碑は在地の武士団によって建てられたとされる。碑には「壬生・小野・物部・藤原・春日・大宅・六人部・日奉・安部・平」など 20 数名の名が刻まれており、古代の史料に見える氏族がこの時期まで続いたことがわかる（徳江康 1987）。

1258 年（正嘉 2 年）、鎌倉幕府 6 代将軍宗尊親王が二所詣を行った際の随兵の中には多比良小次郎の名が見える（井上・吉江 1979）。

在地武士と上杉氏の動向 1336 年（延元元年）、足利尊氏によって室町幕府が確立され、上野国守護に上杉憲房を任じた。憲房の死後、子の憲顕が跡を継ぐが、憲顕は尊氏に敗れ越後に逃れた。その後、尊氏方の宇都宮氏綱が上野守護を務めた（峰岸 1974）。

1353 年（文和 2 年）、多胡荘の在地の代官であったと思われる上杉方の神保・瀬下・小串氏らが、宇都宮配下の地頭に対し反乱を起こした記載が『佐々木文書』に見える（峰岸 1984）。

1363 年（貞治 2 年）に鎌倉公方足利基氏が上杉憲顕を関東管領に復帰させ、その後、足利基氏が宇都宮氏綱を倒したことにより、上杉氏の関東支配体制が確立した（峰岸 1974）。1440 年（永享 12 年）の結城合戦の模様を記した『結城戦場記』（1440 年代後半成立）には、上野の武士も参戦しており、上杉被官に小幡・白倉・小串・瀬下氏が見える（久保田 1996）。1531 年（享禄 4 年）上杉憲政が関東管領となるが、北条氏康に攻められ長尾景虎（上杉謙信）を頼り越後へ逃れ上杉氏の上野国支配は崩壊した（峰岸 1974）。

1566 年（永禄 9 年）武田信玄が箕輪城を攻略し上野西部を支配下に入れた。これにより、北条、上杉、武田の三つ巴戦が本格的となり、この動乱は豊臣政

権下となるまで続いた。

池城 吉井町池字岡に所在し、多胡郡正倉跡の地に作られた城館で、今回の調査時まで土塁跡が現存していた。吉井段丘上位面に位置し、北東面は 4 m 程の比高で吉井段丘中位面に下る。南面は自然流路を堀として利用する。西面にも堀を構えており、西北端部では高さ 4 m の土塁が造られ、西堀の外側にも高さ 2 m の土塁が残っていたことから、西面は二重堀であったと思われる。全体として一辺 200 m 程の湾曲した正三角形の単郭城のように見えるが、東部は別郭であったかも知れない（井上 1979）。

この池城には、『平家物語』一ノ谷の合戦で名が見える河原太郎高直、河原次郎盛直兄弟の子孫である河原丹後守が室町時代に居城したと伝わっている（井上・吉江 1979）。築城時期、廃城時期について詳細は不明である。

池城は鐺川右岸にあたり、江戸時代には鐺川を利用した水運の記録が見られる（角倉 1979 a）。また、現在の入野橋の近くに馬庭へと渡る「馬庭の渡し」が昭和 8 年ごろまであったことが『吉井町誌』に記録されている（角倉 1979 b）。このことから中世においても水運を行うための河岸や、馬庭を抜け山名にいたる街道があった可能性が考えられ、池城は交通の要衝をおさえ、高崎市山名方面や藤岡市の平井城方面への連絡を意識してつくられた城かと思われる。

近世の様相 1590 年（天正 18 年）、江戸城に入った徳川家康は、吉井 2 万石を菅沼定利にあてがい、定利は吉井城を居所とした。定利は小幡領主、奥平信昌の三男忠政を養子とし、1602 年（慶長 7 年）に忠政に吉井の地を譲った。忠政は徳川秀忠から松平姓を授けられ、その後、美濃国加納城に移る（渡辺 1990）。

忠政移封後は、天領となって代官支配が行われたり、旗本領となり安藤重信・鷹司松平信平らが治めたりした。1682 年（天和 2 年）に堀田正休が多胡・緑野・甘楽郡や武蔵国埼玉郡のうち 1 万石を与えられ吉井藩主となり、吉井に居所した（渡辺 1990）。

その後、再び天領となり、1709 年（宝永 6 年）、鷹司松平信平の孫、信清が再立藩した。鷹司松平氏による統治は明治まで続く。陣屋は 1674 年（延宝 2 年）から 5 年間は木部村、1679 年（延宝 7 年）から

7年間は矢田村、1686年（貞享3年）から3年間は木部村、1689年（元禄2年）から63年間は矢田村、と移転している。2代藩主信友の在任中の1729年（享保14年）には、吉井町と藤岡市との間に商荷継ぎ立て紛争がおこり、1752年（宝暦2年）に矢田陣屋を吉井に移した。10代藩主信謹の在任中の1867年（慶応3年）には徳川慶喜が大政奉還を行い、それをうけ「松平」を返上し「吉井」に改姓した（渡辺1990）。

吉井には鐮川沿いに姫街道が通っていた。この街道は嚴重な関所や碓氷峠のような険しい地形も無く、大名・武士の往来による煩雑さも無いことから、商人や善光寺詣りの女性に利用され賑わった。鐮川を利用した舟運の記録もあり、1785年（天明5年）には、通船できなかった鐮川の川ざらいを行い通船できるようにした、という史料が残っている（角倉1979c）。

近現代の様相 1868年（明治元年）、明治新政府は上野国内および武蔵西北部の旧幕府領・旗本領を岩鼻県とした。1869年（明治2年）、藩主に土地と人民を朝廷に返還させる版籍奉還が行われ、吉井藩は県内の諸藩に先駆けて奉還の意思を表明し廃藩を行い、岩鼻県に編入された。1871年（明治4年）、岩鼻県は廃止され、第一次群馬県が成立した。1876年（明治9年）に新たに新田・山田・邑楽の3郡を群馬県に加えた第二次群馬県が成立し、現在の群馬県となった（山田1974）。

1878年（明治11年）、郡区町村編成法の公布により、従来の郡を行政区とするための整理が行われた。これにより、近代の行政区画としての多胡郡が成立し、郡役所が現藤岡市に置かれ、緑野・多胡・南甘楽三郡を管轄した（山田1974）。

明治後期になると、国家体制の整備と町村行政の複雑化にともない、市町村制を改正することとなり（明治の大合併）、1889年（明治22年）、町村が再編され、吉井町・多胡村・入野村・岩平村が成立した（堀越1979a）。

1896年（明治29年）、郡制実施のため郡は郡役所ごとに統合され、緑野・多胡・南甘楽三郡を合わせて多野郡が発足した（山田1974）。

1955年（昭和30年）、行政効率の向上と福祉の増進のため町村合併が行われ（昭和の大合併）、多胡

村・入野村・岩平村が合併し新たな吉井町が誕生した（堀越1979b）。その後、この吉井町は、2009年（平成21年）6月1日に、平成の大合併として高崎市に編入合併した。

注

- (1) 岩野谷丘陵東麓に位置する姥山古墳の被葬者について、若狭徹は中期前半の三島塚古墳から続く丘陵の開発主と考えている。その根拠に丘陵から得られる資源として、舟形石棺の材料となる凝灰岩の産出やTK23～47型式（5世紀後半）という県内では早い時期での須恵器生産を挙げている（若狭2008）。
- (2) 若狭徹は「武蔵国造の乱」の分析の中で、「6世紀に武蔵の首長権に關与するほどの圧倒的力量をもつ上毛野の首長を、考古学の面から絞り込むとすれば、墳長145mの七興山古墳の被葬者以外に考えがたい。」とし、乱の当事者である上毛野君小熊をこの人物に比定している（若狭2017）。
- (3) 最近、七興山古墳においてデジタル技術を使った3次元測量のほか、レーダー探査が行われ、墳丘長が150mを超える三段築成の古墳であることが明らかになった。同時に全長20m程度の横穴式石室を持つことも判明した。上毛新聞2018年4月19日版、藤岡市教育委員会発表記事より。
- (4) 若狭徹は凝灰岩削石積石室と呼称している（若狭2008）。
- (5) 神保侑史は貫前神社の主神が経津主命であることから、「大和朝廷の東国経営・平定の軍団を進める物部氏が「フツノミタマ」の神剣を捧持して、上毛野国平定の大和朝廷の前進基地として奉斎・鎮座した神社とも考えられる。」としている（神保1991）。
- (6) 土生田純之は西毛・西遠江・北信・南信で渡来人と在来倭人との関係を3つの形態に分類している（土生田2012）。
- (7) 加藤謙吉は渡来系の吉士集団が屯倉の設置に関わり入植していたとしている（加藤1999）。しかし、関口功一は、東大寺正倉院宝物揩布屏風

袋第3号銘文が「秦人」か「秦人部」かで渡来人か否かが変わるとしている。同様に『続日本紀』天平神護二年(766年)五月壬戌条も新羅人が多胡郡のみに居住していたとは限らないとし、必ずしもこの地域に渡来人が居住していたとする根拠とはならないとしている(関口功一1991)。

- (8) 747年(天平19年)の史料である『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』と正倉院宝物の中の天平末年頃の庸布に「多胡郡山部郷」の記載が認められる。『続日本紀』延暦五年(785年)丁酉条によると、光仁天皇の諱である「白髪部」と桓武天皇の諱である「山部」を避けて、それぞれ「真髪部」「山」にせよとの詔が出ている。これにより「山部郷」は「山郷」に変えられたとされる。『続日本紀』では「山等」と記されているが、「等」は複数を示す特別な意味を持たない文字であると考えられる。この山郷の名称変更については、戦前、歌人である土屋文明が『萬葉集上野國歌私注』で述べ、後に東野治之・関口功一が指摘している(東野1991b、関口功一1984)。
- (9) 天台系の寺院に見られる相輪だけの塔。現在は比叡山延暦寺や日光山輪王寺にある。

引用・参考文献

- 飯田陽一 2015a『本郷畑内遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 飯田陽一 2015b『塩川砂井戸遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石橋 宏 2011「石棺—舟形石棺秩序を中心に—」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学 17 雄山閣
- 井上 清 1979「第三部第一節四 古城・陣屋跡」『吉井町誌』吉井町
- 井上 清・吉江正憲 1979「第二部第二章 中世」『吉井町誌』吉井町
- 梅沢重昭・飯島義雄 1983「7つの磨製石斧—群馬県多野郡吉井町大字吉井字腰巻出土の一括資料—」『群馬県歴史博物館紀要』第4号 群馬県立歴史博物館
- 梅沢重昭 1981「七興山古墳」『群馬県史』資料編3 群馬県
- 大江正行 1988「田端廃寺の推定—瓦類—」『田端遺跡』第5分冊 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 岡田隆夫 1991「特論 上野国の条里制」『群馬県史』通史編2 群馬県
- 尾崎喜左雄 1963「多胡碑の研究」『群馬大学紀要人文科学篇』第12巻9号(のちに『上野三碑の研究』1980に所収)
- 小根澤雪絵 2007「吉井町の古墳文化概観」第30回企画展図録『古墳からみた多胡碑』多胡碑記念館
- 小根澤雪絵 2008「多胡郡の紡錘車生産」『紡ぐ』多胡碑記念館
- 小根澤雪絵 2009『小串塚原遺跡 黒熊卯木原遺跡』吉井町教育委員会
- 加藤謙吉 1999「上野三碑と渡来人」『東国石文の古代史』吉川弘文館
- 角倉敏夫 1979a「第二部第三章第四節三 鎭川運航」『吉井町誌』吉井町
- 角倉敏夫 1979b「第二部第四章第五節二(七) 渡船について」『吉井町誌』吉井町
- 角倉敏夫 1979c「第二部第三章第四節 交通・宿駅・助郷」『吉井町誌』吉井町
- 金井塚良一 2008『馬冑が来た道』吉川弘文館
- 亀田修一 2012「渡来人の東国移住と多胡郡建郡の背景」『多胡碑が語る古代日本と渡来人』吉川弘文館
- 川原秀夫 1999「貫前神社と甘楽・多胡郡域の氏族—上野三碑をめぐる周辺地域の様相—」『東国石文の古代史』吉川弘文館。
- 木津博明 1997「上野国の初期寺院」『シンポジウム 関東の初期寺院—資料編—』関東古瓦研究会
- 久保田順一 1989「第五章第二節一 南北朝・室町時代の荘園と公領」『群馬県史』通史編3 群馬県
- 久保田順一 1996『上野武士団の中世史』みやま文庫
- 小池浩平 1999「多胡碑研究のあゆみ」『東国石文の古代史』吉川弘文館
- 小池浩平 2017『古代東国のフロンティア・上毛野』みやま文庫
- 国士舘大学考古学研究室 1984「下五反田窯跡」「末沢窯跡」考古学研究室報告甲種第3冊『考古学研究室発掘調査報告書』

- 小島敦子 2018「第Ⅴ章 総括 1. 塩川砂井戸遺跡の集落変遷について」『塩川砂井戸遺跡（2） 池石田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤 信 1999「古代東国の石文とその背景」『東国石文の古代史』吉川弘文館
- 篠川 賢 1999「山上碑を詠む―「佐野三家」を中心として―」『東国石文の古代史』吉川弘文館
- 神保侑史 1991「上野国の神々」『群馬県史』通史編 2 群馬県
- 須藤 聡 2003「第Ⅴ章 七 3 武士団の形成、治承・寿永の内乱へ」『新編高崎市史』通史編 1 高崎市
- 関口功一 1984「上野国多胡郡山部郷に関する覚書」『信濃』p36-11
- 関口功一 1986「鑑川流域の条里的地割」『条里制研究』2 条里制研究会
- 関口功一 1991「第二章第二節三 多胡郡の設置」『群馬県史』通史編 2 群馬県
- 関口功一 2015『日本古代地域編成史序説』岩田書院
- 関口博幸・関口功一 1991年「物部と石上」『矢田遺跡』Ⅱ 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 関口博幸 1994『白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ』旧石器時代編 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高井佳弘 1988「第Ⅷ章まとめ 第8節瓦から見た上野国分寺」『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』群馬県教育委員会
- 高島英之 1999「多胡碑を読む」『東国石文の古代史』吉川弘文館
- 多胡碑記念館 2012『新視点「源氏と多胡郡」』配布資料
- 手島実子 2012「古代多胡郡を歩く 2 探訪ガイド 多胡郡の手工業と寺院」『多胡碑が語る古代日本と渡来人』吉川弘文館
- 東野治之 1991 a「第一章第三節二 山ノ上碑銘文の解釈」『群馬県史』通史編 2 群馬県
- 東野治之 1991 b「第二章第二節二 多胡碑銘文の解釈」『群馬県史』通史編 2 群馬県
- 徳江秀夫 2011「装飾付大刀―上毛野地域を中心として―」『古墳時代 毛野の実像』季刊考古学別冊 17 雄山閣
- 徳江 康 1987「第五章第三節二（一）鎌倉時代の石造物」『富岡市史』富岡市
- 中沢 悟 1997「第7章 調査成果のまとめ 第1節 古墳～平安時代の住居について」『矢田遺跡』Ⅶ 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中田節子 1990「矢田遺跡 121 号住居出土繊維」『矢田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 根岸謙之助 1993『上州万葉の世界』煥乎堂
- 橋爪 聡 1979 a「第二部第一章第二節 奈良時代」『吉井町誌』吉井町
- 橋爪 聡 1979 b「第二部第一章第三節 平安時代」『吉井町誌』吉井町
- 長谷山彰 1999「多胡碑の弁官符と「羊」について」『東国石文の古代史』吉川弘文館
- 土生田純之 2012「東国における渡来人の位相と多胡郡建郡」『多胡碑が語る古代日本と渡来人』吉川弘文館
- 平川 南 2012「多胡碑の輝き」『多胡碑が語る古代日本と渡来人』吉川弘文館
- 古郡正志 1993「藤岡市下日野・金井窯跡群」『藤岡市史』資料編原始・古代・中世
- 堀越一二三 1979 a「第二部第四章六 町村制の推移」『吉井町誌』吉井町
- 堀越一二三 1979 b「第二部第五章 町村合併と新吉井町の誕生」『吉井町誌』吉井町
- 前澤和之 1976「「上野国交替実録帳」についての基礎的研究」『群馬県史研究』4 群馬県史編さん委員会
- 前澤和之 2005「多胡碑と古代の地方政治」『古代多胡碑と東アジア』山川出版社
- 前澤和之 2008『古代東国の石碑』山川出版社
- 松田 猛 1999「佐野三家と山部郷―考古資料から見た上野三碑―」『高崎市史研究』11 高崎市
- 松田 猛 2003「第Ⅴ章 三 3 多胡碑と山部郷」『新編高崎市史』通史編 1 高崎市
- 松田 猛 2009『上野三碑』同成社
- 松田 猛 2017『上野三碑』みやま文庫
- 右島和夫 1992『神保下條遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 右島和夫 1994『東国古墳時代の研究』学生社
- 峰岸純夫 1974「中世 1」『群馬県の歴史』山川出版社
- 峰岸純夫 1984「南北朝時代 文和2年（癸巳・1353）961」『群馬県史』資料編 6

茂木由行 1989『富岡遺跡』吉井町教育委員会
 茂木由行 1995『ヌカリ沢 A 窯址発掘調査報告書』
 吉井町教育委員会
 山田武麿 1974「近代・現代 1 群馬県の誕生」『群馬
 県の歴史』山川出版社
 山本隆志 1989「第一章第一節四 西毛の荘園・公領
 と武士」『群馬県史』通史編 3 群馬県
 山本隆志 2000「第 2 編 I 2 善光寺道」『新編高
 崎市史』通史編 2 高崎市
 若狭 徹 2007『古墳時代の水利社会研究』学生社
 若狭 徹 2008「5. 岩野谷丘陵の開発と山名伊勢塚
 古墳—佐野三家をめぐる雑考」『山名伊勢塚古墳』
 高崎市教育委員会
 若狭 徹 2011「上毛野における五世紀の渡来人集団」
 『古墳時代毛野の実像』季刊考古学別冊 17 雄山閣
 若狭 徹 2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
 渡辺三郎 1990「第一章第八節 吉井藩政の展開」『群
 馬県史』通史編 4 群馬県

第 3 節 多胡郡衙についての研究史

(1) 尾崎喜左雄の研究

多胡郡衙の所在地については、それを特定する考古学的、文献史学的な資料はこれまで存在せず、長らく不明なままであった。その中で、群馬県内の遺跡について精力的に研究・調査をしていた尾崎喜左雄は、下記の①～④までの 4 つの根拠を挙げて、多胡郡衙の推定地を高崎市吉井町池地内とした。しかし、今回改めて検証しなおすと、それぞれの根拠が互いを前提にして掲げられている感があり疑問点も生じる。ここでは各根拠とともに疑問点も併記した。

①「御門（みかど）」という小字の存在 尾崎は、当該地を含め群馬県内の総数 8 ケ所の「みかど」の地名を挙げて郡衙推定地としている（表 10）。この中で吉井地域の御門が後述する条件と併せて多胡郡衙の最も適地であるとした。「御門」には「朝廷・皇室」の意味があるが、ひいては郡衙を示すものとした（尾崎 1958）⁽¹⁾。

②大宮神社の存在 多胡碑から西へ約 250 m の場所に大宮神社が鎮座する⁽²⁾。尾崎は、この祭神は大宮売神（オオミヤノメノカミ）であり、官衙の守護神であると指摘し（尾崎 1963）⁽³⁾、また『上野国神名帳』に記載のある『郡御玉明神』を大宮神社に推定した（尾崎 1974）。「郡御玉（くにみたま）」はその土地そのものを神格化した地域の守護神であるとするが、両者の性格が似ることから同一の神社と推定した。この神社の存在を郡衙推定地の根拠の一つとしている。

③大家郷の位置 尾崎は、『続日本紀』にみえる多胡郡建郡時の 6 郷のうち、甘良郡から割かれた大家郷が「池」周辺にあたると推定した。その根拠として上記の①・②を挙げている（尾崎 1963）⁽⁴⁾。「大家」は「おおやけ」と読み、その地域の支配者がいた場所であると論じた。郡司は律令制以前の国造クラスの豪族が任命されるケースが多く、大家郷にも同様の支配者階級がいたものと推定したが、上毛野国の国造は上毛野君のみであったので、この大家郷は多胡郡建郡前に所属していた甘良郡もしくは鍋川流域を支配していた豪族の居住地であっただろうと推定

した。その豪族がいた政治的中心地である大家郷が、多胡郡建郡後も郡衙として機能したと論じた。

④**多胡碑の存在** 尾崎は、「多胡碑は多胡郡建郡の記念碑であり、恐らく郡の中心すなわち郡家の所在地に建てられたものであろう。」と述べている（尾崎 1958）。

尾崎説に対する疑問点 ①について、尾崎が挙げた例の中には、県内では新田郡衙の比定地とする「帝」の地名がある。しかし、発掘調査により天良七堂遺跡が新田郡衙跡であったことが判明した。この地は「御門」の地とは別のところに所在しており、他郡においても現在のところ「御門」の地が確実に郡衙と判明している事例は無い。

尾崎は大家郷の比定根拠を①・②・④の理由に拠っているため、③は、郡衙推定地の根拠としては傍証的なものとなる。したがって、郷名から多胡郡衙の位置を特定するのは現在のところ限界がある。

なお、③について、『群馬県史』では大家郷が矢田郷の東に所在する可能性を指摘しており（関口 1991 a）、大家郷に郡衙が所在するという尾崎の見解にも消極的である（関口 1991 b）（図 20）。

（２） 尾崎研究を継承した

多胡郡衙比定地の研究

大江正行の論考 大江は 1988 年、『田端遺跡』報告書の中で尾崎の説を紹介すると共に、多胡碑の存在が郡衙推定地の根拠だとした（大江 1988）。多胡碑は四方からの美観を意識して造立されたものであり、人々から見やすい郡衙正殿前庭か、郡衙正面広場内に建てられたものと推定した。また、下池・雑木味等の周辺の古代瓦散布地を郡衙関連施設の所在地とした。「池」を郡衙所在地とした場合、鎭川の対岸にあり複弁七弁軒丸瓦が出土した馬庭東遺跡は、「池」から至近であることから郡に伴う古代寺院（いわゆる郡寺）であると位置づけた。

川原嘉久治の論文 川原は 1992 年、論文「西上野における古瓦散布地の様相」を著した。ここで土器・古代瓦の散布状況について、下池古墳群周辺、岡廃寺、馬庭東遺跡、雑木味遺跡において、現地踏査を踏まえた分布図を紹介した（川原 1992）。これに基づき尾崎・大江の説を支持すると共に、郡衙推定

地について多胡碑の「現在の所在地は段丘の変換部に片寄ること、雑木味の近く、吉井町大字本郷に小字名称三角と多胡碑旧地論など流動的な要素もあるなど広い展望からみれば、大江正行氏の（略）説に妥当性が認められ、雑木味散布地を含めて多胡郡衙とすることにも無理は生じない。」とした。

（３） 碑文内容から推察した

多胡郡衙位置への言及

高島英之の論文 多胡碑は建郡記念碑という性格と機能をもち、巡行してくる国司に対するアピールを第一義的目的にしていたとした。多胡碑は「見せる」ことを積極的に意図したもので、郡家の正門付近に建てられていたと論じた（高島 1999）。

前澤和之の論文 前澤は高島の説を受け、多胡碑の役割について、石川県津幡町の加茂遺跡から出土した郡符木簡（勝示札）との共通性を指摘した。そしてその建立の場所として「郡家の近辺かあるいは『令集解』賦役令の孝子条の古記が該当する家や里の路の門にその旨を注記した柱を立てるとしているように、郡領となった「羊」の居宅であった可能性が高いと考える。」と述べ、郡衙の位置にあたる可能性にも言及している（前澤 2005）。

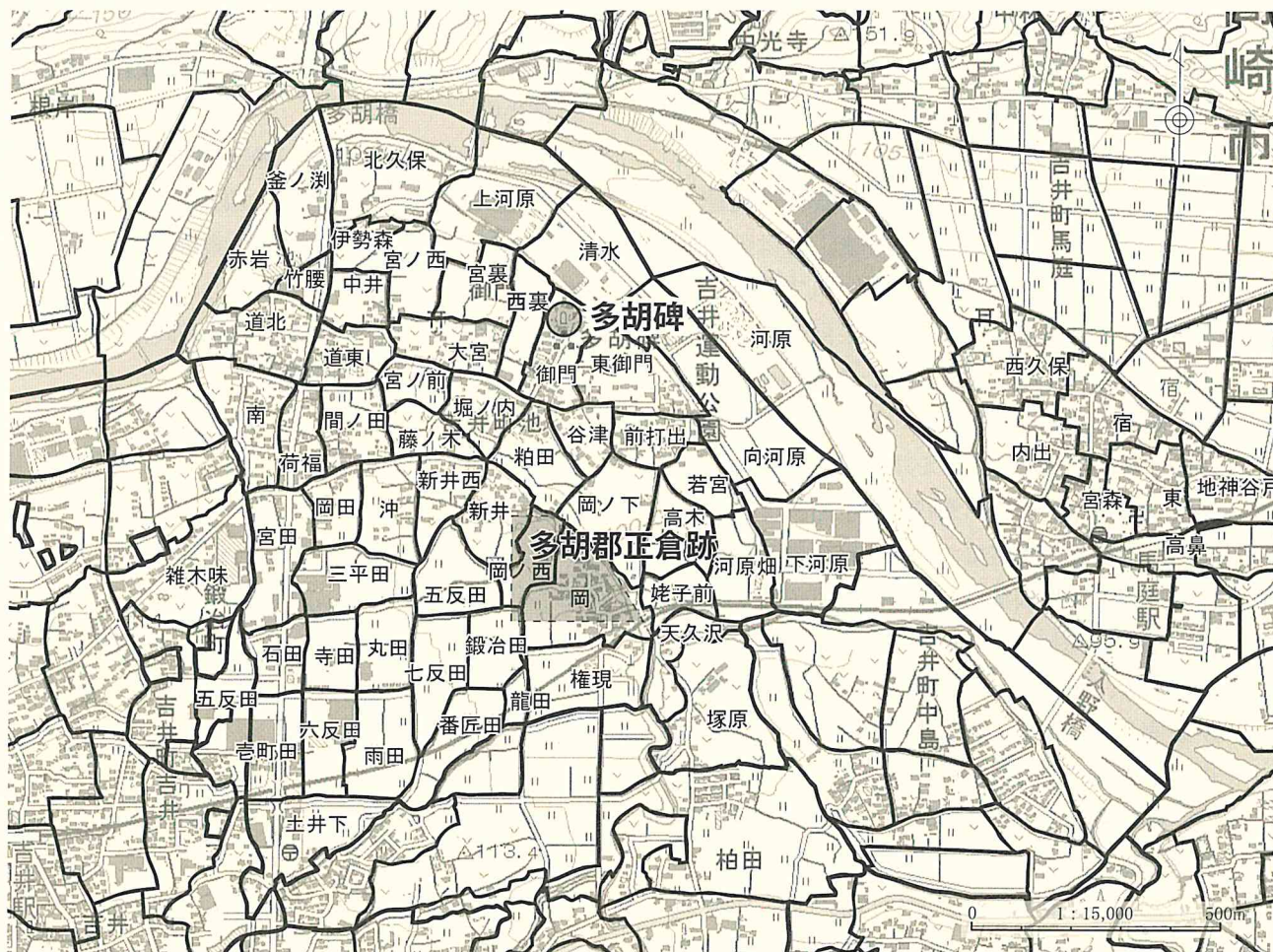
佐藤 信の論文 佐藤は在地豪族である建郡者が、中央政府、国司との関係を取り結んだ証として建碑したと論じた。また、尾崎の説を支持しつつ、交通路に沿った場所に多胡碑を建立した可能性を指摘している（佐藤 2005）。烏川から鎭川沿いのルートは、上野国一宮である貫前神社へ通じる交通路であり、古代東山道駅路の枝道として機能したことも推測される。佐藤は、この条件からも多胡碑が現位置に立地した妥当性を述べている。他郡の郡衙も交通路沿いにある例が多く、人や物の流れの拠点となっていたことが想定できるので、この指摘は重要である。

高島・前澤・佐藤の各氏は、直接には多胡郡衙の位置には言及していないが、多胡碑の内容的性格から碑と郡衙は近い位置にあった可能性を指摘している。

注

- （１）「万葉集に大宰府をさして『遠^{とほ}の朝廷^{みかど}』と称し、また、『みかど』は帝、朝廷、国家等をさしており、

国名	郡名	尾崎 1958 発行時の所在地	現地名	備 考
上野	勢多	勢多郡粕川村大字月田字御門	群馬県前橋市粕川町月田字御門	
上野	群馬	群馬郡桃井村大字長岡字中御門	群馬県北群馬郡榛東村大字長岡字中御門	大宮神社所在
上野	群馬	群馬郡榛名町大字本郷字御門	群馬県高崎市本郷町字御門	
上野	利根	利根郡久呂保村大字森下字御門	群馬県利根郡昭和村大字森下字御門	
上野	碓氷	碓氷郡安中町大字東秋間字御門	群馬県安中市東上秋間字御門	
上野	多胡	多野郡吉井町大字池字御門	群馬県高崎市吉井町池字御門	大宮神社・多胡碑所在
上野	那波	那波郡玉村町大字角淵字御門	群馬県佐波郡玉村町大字角淵字御門	
上野	新田	新田郡綿田村大字中江田字帝	群馬県太田市新田中江田町字帝	新田郡衙跡に比定された天良七堂遺跡とは別位置
上総	山武	山武郡豊成村大字御門	千葉県東金市御門	
下総	海上	海上郡舟木村大字御門	千葉県銚子市三門町	
安房	朝夷	豊田村大字加茂字御門	千葉県南房総市加茂字神門	
伊豆	田方	田方郡田中村大字御門	静岡県伊豆の国市御門	
備前	御野	御津郡石井村（旧巖井村）三門	岡山県岡山市北区岩井一丁目字三門	
日向	臼杵	東臼杵郡南郷村大字神門	宮崎県東臼杵郡美郷町南郷字神門	



39

その語源は南門より起つたものであろう。すなわち南門を開いて衆庶に臨む権力者、施政者、及び引いてその施政の場所を併せて意味している。国司の政庁も『みかど』であつたであろうが、これは国府（こふ）の地名が一般的である。即ち、『みかど』は郡司の政庁と考えるのである。」としている。

- (2) 『吉井町誌』によると、大宮神社は旧池村にあった絹笠神社・熊野神社・諏訪神社・八坂神社・石神社を合祀したという指摘があり、1919年（大正8年）指定村社としている（神保1974）。しかし、明治9～10年に作成された『社寺境内外区別取調地図』（群馬県立文書館蔵）には大宮神社の記載があり、少なくとも明治初頭には大宮神社は存在していたと思われる。
- (3) 大宮売神は『延喜式』にある八神殿第六殿の祭神であり、八神は天皇・国家の守護神とされ、現在でも宮中三殿の神殿として祭られている。『古語拾遺』では天照大神が天岩戸から出てきた後に御前に仕えた神とされ、内侍として君臣を取り次ぐ役目であるとされている。このことから中央官庁と民衆の間にある地方官衙の守護神としたのであろうか。また、『古事記』には天孫降臨の際、瓊瓊杵尊に従った神の一人である天宇売命（アメノウズメノミコト）と同一視される場合もある。なお、他に付随した神のうち天石戸別神（アメノイハトワケノカミ）（別名：櫛石窓神（クシイハマトノカミ））と、豊石窓神（トヨイハマトノカミ）は「御門の神」とされている。
- (4) 尾崎による郷名比定について、織裳郷や山部郷は現存地名、韓級郷は辛科神社の所在という直接の根拠が指摘されている。しかし、大家郷については、「御門」の地名があること、大宮神社が鎮座していることの2点を根拠に、上記3郷以外の場所で消去法的に比定している。武美郷は、緑野郡よりである多比良・石神・黒熊を推定地としている。また、大家郷は甘良郡所属時以前からの名称であり、旧甘良郡（評）衙が所在したと論じている。第2章第2節（8）古代多胡郡と周辺の様相 古代多胡郡の郷名比定の項を参照。

参考・引用文献

- 大江正行 1988「第IV章 考察 第2節 田端廃寺の推定—瓦類—」『田端廃寺』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎喜左雄 1958「上代・中世」『勢多郡誌』勢多郡誌編纂委員会
- 尾崎喜左雄 1963「多胡碑の研究」『群馬大学紀要人文科学篇』第12巻9号（のちに『上野三碑の研究』1980に所収）
- 尾崎喜左雄 1974『上野国神名帳の研究』尾崎先生著書刊行会
- 川原嘉久治 1992「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要10』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤 信 2005「多胡碑と古代東国の歴史」『古代多胡碑と東アジア』山川出版社
- 神保茂一郎 1974「第二部第四章第十一節神社」『吉井町誌』吉井町
- 関口功一 1991 a「第二章第二節一 多胡碑・金井沢碑の研究と問題点」『群馬県史』通史編2 原始古代2 群馬県
- 関口功一 1991 b「第二章第二節三 多胡郡の設置」『群馬県史』通史編2 原始古代2 群馬県
- 高島英之 1999「多胡碑を読む」『東国石文の古代史』吉川弘文館
- 前澤和之 2005「多胡碑と古代の地方政治」『古代多胡碑と東アジア』山川出版社

第3章 多胡郡正倉跡の調査

第1節 調査の方法・経過および基本層序

(1) 調査の方法および経過

グリッドの設定 発掘調査を行うにあたって、調査対象地にグリッドを設定した(図22・図23)。設定方法は、近接する雑木味遺跡・馬庭東遺跡等、他の古代の重要遺跡にも適用できるようにした。まず、平面直角座標第Ⅸ系国家座標(世界測地系)に基づき、多胡碑覆屋より南へ約12mの点、X=29,700、Y=75,200を原点とし、東西・南北100m×100m単位の大グリッドを設定した。原点を通る東西ラインをN0、南北ラインをE0とし、原点から北側の東西ラインには順にN1・N2……、南側のラインはS1・S2……と名称を与えた。南北ラインも同様に原点より東側では順にE1・E2……、西側ではW1・W2……と呼ぶことにした。各大グリッドの名称はその南西角のライン交点で表示し、N1-E3、S5-W7のように呼ぶこととした。

大グリッドを細分したグリッドを中グリッドとした。中グリッドは大グリッドを5m間隔に区切り、大グリッド南西角を起点として東西ラインには南端から順にアルファベット、南北ラインは西端から順に

数字を付した。方5mの各中グリッドはそのグリッドの南西角の南北ライン・東西ラインの名称で表示することとした。

平成26年度の第4次調査までは、この5m間隔の中グリッドを最小単位として使用していた。翌年、平成27年度の第5次調査において、59Tで瓦を伴う大型倉庫遺構(SB03)が検出された。この遺構からの出土瓦を取り上げるにあたり、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会から、古代の大型の官衙建物では、柱間寸法が広い例では10尺程度が一つの目安となり、瓦の葺き方などを詳細に検討する情報を得るためには、3m以下のグリッド単位で記録をとるのが望ましいとの指導があった。これを受け、これまで使用していた中グリッドを東西と南北にそれぞれ2分割して方2.5mの小グリッドを設定した。小グリッドの名称は、中グリッドごとに、北東から時計回りに小文字のアルファベットa・b・c・dを付して呼ぶことにした。

上記のグリッド呼称に則ると、例えば図23における☆印を付したグリッドはN1-E1/A19bと表記される。

なお、遺物の注記にあたっては、注記可能なすべての遺物に対して、調査回数に対応する高崎市遺跡調査番号とトレンチ名を記している。平成26年度の

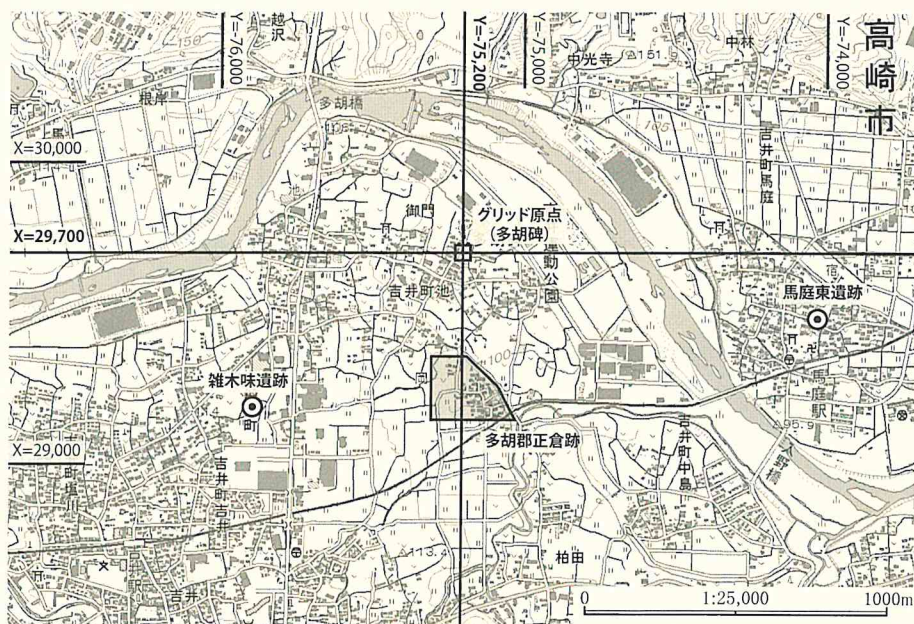


図22 グリッド原点と多胡郡正倉跡および多胡碑の位置

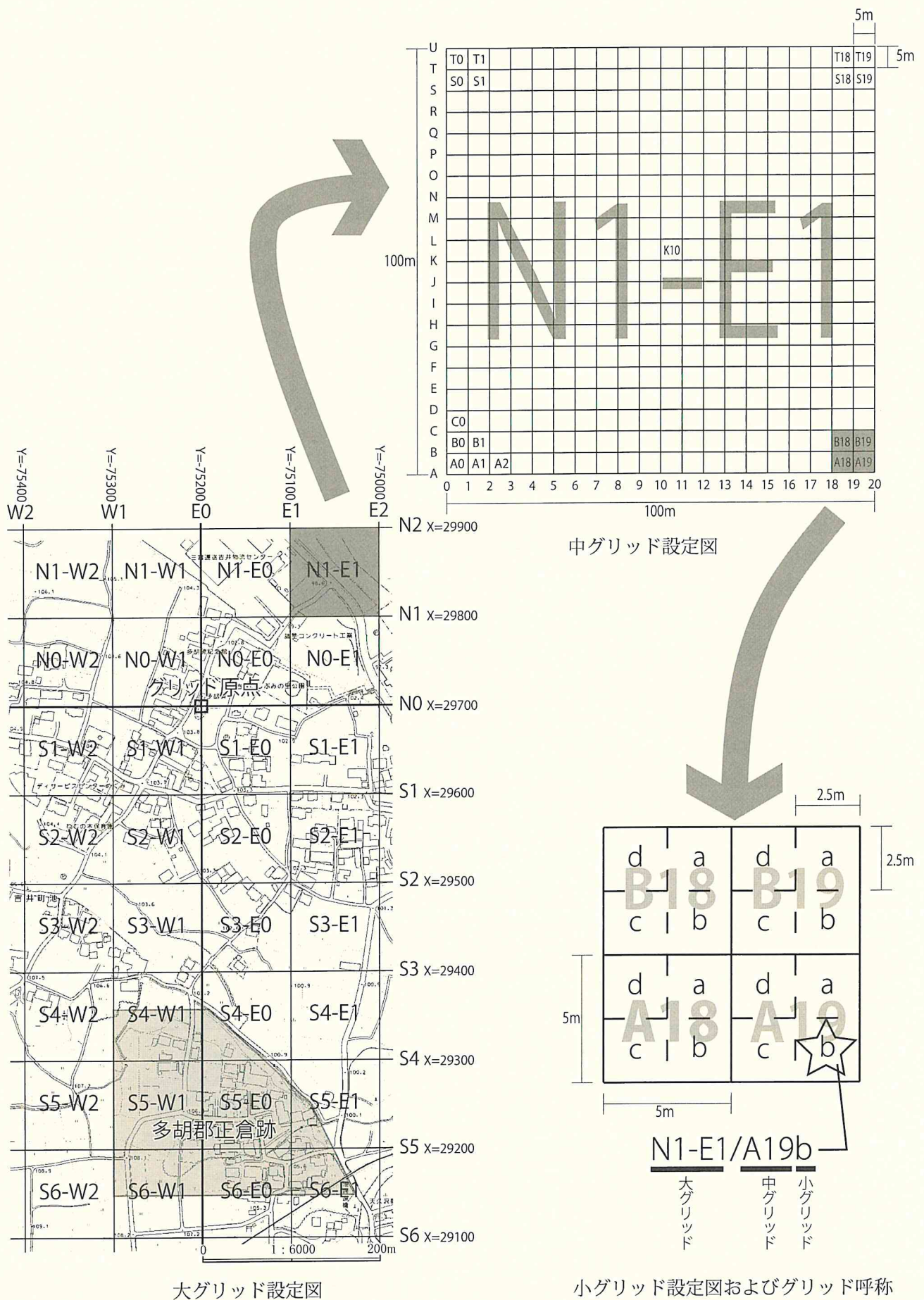


図 23 グリッド設定図

表 11 新旧グリッド対応表（岡地区のみ）（1）

調査区	旧	新	調査区	旧	新	調査区	旧	新
12T	1G	S6-E0/J1 a-d	27-1T	6G	S5-W1/D3 c,d	33T		S6-W1/M10 a
	2G	S6-E0/I1 a-d		拡張部	S5-W2/D18 b,c			S6-W1/M11 a,d
	3G	S6-E0/H1 a-d			S5-W2/D19 b,c			S6-W1/N10 a,b
	4G	S6-E0/G1 a-d			S5-W2/C19 a			S6-W1/N11 a-d
	5G	S6-E0/F1 a-d	27-2T	1G	S5-W2/E14 a			S6-W1/N12 c,d
	6G	S6-E0/E1 a-d			S5-W2/E15 a,d			S6-W1/O10 a,b
13-1T	1G	S6-W1/R10 c			S5-W2/F15 b,c			S6-W1/O11 a-d
	2G	S6-W1/Q10 b-d		2G	S5-W2/E16 d			S6-W1/P10 b
	3G	S6-W1/P9 b,c			S5-W2/F16 b,c			S6-W1/P11 c
	4G	S6-W1/P10 a-d		3G	S5-W2/F17 b,c	34T		S6-W1/C5 d
	5G	S6-W1/O9 a,b,d		4G	S5-W2/F18 a-d			S6-W1/D5 c,d
	6G	S6-W1/O10 a-d		5G	S5-W2/F19 a,b,d			S6-W1/E5 c,d
	7G	S6-W1/N10 a-d		6G	S5-W1/F0 a,d			S6-W1/F5 c,d
	8G	S6-W1/M10 a-d			S5-W1/G0 c			S6-W1/G5 c,d
	9G	S6-W1/L10 a-d		拡張部	S5-W2/F19 c,d			S6-W1/H5 c,d
13-2T		S6-W1/Q10 a,d	27-3T		S5-W1/F0 c,d	35T		S6-W1/I5 c,d
13-3T		S6-W1/R9 b		1G	S5-W2/G18 a,d			S6-W1/D8 a,b
		S6-W1/R10 b,c			S5-W2/H18 b,c			S6-W1/E8 a-d
13-4T		S6-W1/S10 b,c		2G	S5-W2/G19 a,d			S6-W1/F8 b,c,d
		S6-W1/S11 c			S5-W2/H19 b,c			S6-W1/G8 c,d
		S6-W1/R10 a,d	27-4T	3G	S5-W1/H0 b,c			S6-W1/H8 c,d
		S6-W1/R11 d		1G	S5-W1/G2 a,d	36T		S6-W1/I8 c,d
14T	1G	S5-W1/A15 a-d		2G	S5-W1/G3 a,d			S7-W1/R6 c,d
	2G	S6-W1/T15 a-d		3G	S5-W1/G4 d			S7-W1/S6 c,d
	3G	S6-W1/S15 a-d	27-5T		S5-W1/E1 c,d	37T		S7-W1/T5 a,b
15T	1G	S5-W1/G12 a,b			S5-W1/A4 a			S7-W1/T6 c,d
		S5-W1/G13 c,d			S5-W1/A5 a,b,d			S6-W1/A5 b
	2G	S5-W1/F12 a,b			S5W1/B3 b			S6-W1/A6 c
		S5-W1/F13 c,d			S5-W1/B4 a-d			S7-W1/R9 c,d
	3G	S5-W1/E12 a,b			S5-W1/B5 a-d			S7-W1/S9 c,d
		S5-W1/E13 c,d			S5-W1/C4 a,b			S7-W1/T9 c,d
	4G	S5-W1/D12 a,b			S5-W1/C5 a-d	38T		S6-W1/A9 c
		S5-W1/D13 c,d			S5-W1/D4 a,b			S7-W1/R13 a,d
	5G	S5-W1/C12 a,b			S5-W1/D5 a-d			S7-W1/S13 a-d
		S5-W1/C13 c,d	29-1T		S5-W1/E5 c			S7-W1/T13 c,d
16T	6G	S5-W1/B12 a,b			S6-W1/S4 a,b	39T		S6-W1/A13 c,d
		S5-W1/B13 c,d			S6-W1/S5 a-d			S7-W1/H7 d
	0G	S5-W1/Q10 a-d			S6-W1/T4 a,b			S7-W1/I7 c,d
	1G	S5-W1/P10 a-d			S6-W1/T5 a-d			S7-W1/J6 a
	2G	S5-W1/O10 a-d			S5-W1/A4 b			S7-W1/J7 c,d
	3G	S5-W1/N10 a-d			S5-W1/A5 b,c			S7-W1/K6 a,b
	4G	S5-W1/M10 a-d		29-2T	S5-W1/A4 c,d			S7-W1/K7 c,d
	5G	S5-W1/L10 a-d		29-3T	S6-W1/R4 d			S7-W1/L6 a,b
	6G	S5-W1/K10 a-d			S6-W1/S4 c,d			S7-W1/L7 c,d
	7G	S5-W1/J10 a-d	30T		S6-W1/P8 a-d			S7-W1/M6 a,b
17-1T		S5-W1/T18 b			S6-W1/P9 a-d	40T		S7-W1/M7 c,d
		S5-W1/T19 c	31-1T		S6-W1/P0 c,d			S7-W1/N6 a,b
17-2T		S5-W1/S18 a			S6-W1/R0 c			S7-W1/N7 c,d
		S5-W1/S19 d			S6-W2/O17 a-d			S7-W1/O6 a,b
17-3T	1G	S5-W1/R19 a-d			S6-W2/O18 a-d			S7-W1/P6 a,b
	2G	S5-E0/R0 a-d			S6-W2/P16 a			S7-W1/J9 a
	3G	S5-E0/R1 a-d			S6-W2/P17 a-d			S7-W1/K9 a,b
	4G	S5-E0/R2 a-d			S6-W2/P18 a,c,d			S7-W1/L9 a,b
18T	1G	S5-W1/Q4 a-d			S6-W2/P19 a-d			S7-W1/M9 a,b
	2G	S5-W1/Q5 a-d			S6-W2/Q17 a-d			S7-W1/N9 a,b,d
	3G	S5-W1/Q6 a-d			S6-W2/Q18 a-d			S7-W1/O9 a-d
	4G	S5-W1/Q7 a-d			S6-W2/R15 b,c			S7-W1/P9 a-d
	5G	S5-W1/Q8 a-d			S6-W2/R16 b,c	41T		S7-W1/L13 a
	6G	S5-W1/Q9 c,d			S6-W2/R17 a- c			S7-W1/M13 a-d
拡張部		S5-W1/P8 c,d			S6-W2/R18 a-d			S7-W1/N13 a-d
	拡張部	S4-W1/I3 b,c			S6-W2/R19 b,c			S7-W1/O13 a-d
19T	1G	S4-W1/I4 a-d	31-2T		S6-W2/O17 a-d			S7-W1/P13 a-d
	2G	S4-W1/I5 a-d			S6-W2/O18 a-d	42T		S7-W1/Q13 b,c
	3G	S4-W1/I6 a-d			S6-W1/Mo a,d			S6-W1/R9 a
	4G	S4-W1/I7 a-d	31-3T		S6-W1/M1 d			S6-W1/R10 a,b,d
24T	5G	S4-W1/I8 a-d			S6-W2/M17 a,d			S6-W1/R11 d
	1G	S5-W1/F6 a-d			S6-W2/M18 a,d			S6-W1/S9 a,b
	2G	S5-W1/E6 a-d			S6-W2/M19 a,d			S6-W1/S10 a-d
	3G	S5-W1/D6 a-d	31-4T		S6-W1/K0 a,d			S6-W1/S11 a-d
	4G	S5-W1/C6 a-d			S6-W1/K1 d	43T		S6-W1/T9 a,b
	5G	S5-W1/B6 a-d			S6-W1/L0 b,c			S6-W1/T10 a-d
	6G	S5-W1/A6 a-d			S6-W1/L1 c			S6-W1/T11 a-d
	1G	S6-W1/T6 a-d			S6-W2/K19 a,d			S6-W1/T12 c,d
25T	2G	S6-W1/S6 a-d	31-5T		S6-W2/L16 b,c			S6-W1/O12 a-d
	3G	S6-W1/R6 a-d			S6-W2/L17 b,c	44T	1G	S6-W1/T13 a,b
	4G	S6-W1/Q6 a-d			S6-W2/L18 b,c		2G	S6-W1/S13 a,b
	5G	S6-W1/P6 a-d			S6-W2/L19 b,c		3G	S6-W1/R13 a,b
	6G	S6-W1/O6 a-d			S6-W2/J16 a,d			S6-W1/R14 c
	1G	S6-W1/P6 b			S6-W2/J17 a,d		4G	S6-W1/Q13 a,b
拡張部		S6-W1/O6 a			S6-W2/K17 c		5G	S6-W1/P13 a,b
	2G	S6-W1/P7 b,c	31-6T		S6-W2/K0 a-d			S6-W1/P14 c,d
		S6-W1/O7 a,d			S6-W1/J8 a	45T	6G	S6-W1/O13 a,b
	3G	S6-W1/P8 b,c			S6-W1/J9 d			S6-W1/O14 c,d
		S6-W1/O8 a,d	32T		S6-W1/K8 a,b		7G	S6-W1/N13 a,b
	4G	S6-W1/P9 b,c			S6-W1/K9 c,d		8G	S6-W1/N12 a,b
		S6-W1/O9 a,d			S6-W1/L8 a,b			S6-W1/N13 a-d
	5G	S6-W1/P10 c			S6-W1/L9 a,c,d			
		S6-W1/O10 d			S6-W1/L10 a			
27-1T	1G	S5-W2/D18 a-d			S6-W1/L11 a,d			
	2G	S5-W2/D19 a-d			S6-W1/L12 d			
	3G	S5-W1/D0 a-d			S6-W1/M8 a,b			
	4G	S5-W1/D1 a-d			S6-W1/M9 c,d			
5G		S5-W1/D2 a-d						

表 11 新旧グリッド対応表（岡地区のみ）（2）

調査区	旧	新	調査区	旧	新	調査区	旧	新
45T		S6-W1/K13 d	58T		S5W1/M10 a,d	65-1T		S4W1/E3 a-d
		S6-W1/L12 a,b			S5W1/M11 a,d			S4W1/E4 a-d
		S6-W1/L13 c,d			S5W1/M12 a,d	65-2T		S4W1/G2 a
		S6-W1/M12 a,b			S5W1/N10 a-d			S4W1/G3 a-d
		S6-W1/M13 c,d			S5W1/N11 a-d			S4W1/G4 b,c,d
		S6-W1/N12 b			S5W1/N12 a-d	65-3T		S4W1/F2 a,b
		S6-W1/N13 c			S5W1/O10 b,c			S4W1/F3 a-d
					S5W1/O11 b,c	65-4T		S4W1/D1 a
46T	1G	S6-W1/O14 a,b			S5W1/O12 b,c			S4W1/D2 a,d
	2G	S6-W1/O15 a,d	59T		S4E0/D1 a,b			S4W1/D3 a,d
	3G	S6-W1/P14 a,b			S4E0/D2 a-d			S4W1/E2 b,c
	4G	S6-W1/P15 a-d			S4E0/D3 a-d			S4W1/E3 b,c
	5G	S6-W1/P16 a,c,d			S4E0/D4 c,d	65-5T		S4W1/C1 a,b
	6G	S6-W1/Q14 a,b			S4E0/E0 a-d			S4W1/C2 a-d
	7G	S6-W1/Q15 a-d			S4E0/E1 a-d			S4W1/C3 b,c,d
	8G	S6-W1/Q16 a-d			S4E0/E2 a-d	65-6T		S4W1/B2 b,c
	9G	S6-W1/Q17 a-d			S4E0/E3 a-d			S4W1/B3 b,c
	10G	S6-W1/R14 b			S4E0/E4 a,c,d			S4W1/B4 c
	11G	S6-W1/R15 b,c			S4E0/F0 a-d	66T		S4E0/N0 a,d
	12G	S6-W1/R16 b,c			S4E0/F1 a-d			S4E0/N1 a,d
47T		S6-W1/L18 a			S4E0/F2 a-d			S4E0/O0 b,c
		S6-W1/M18 a-d			S4E0/F3 a-d			S4E0/O1 a-d
		S6-W1/N18 a-d			S4E0/F4 a-d			S4E0/O2 d
		S6-W1/O18 a-d			S4E0/G0 a-d			S4E0/P1 b
		S6-W1/P18 a-d			S4E0/G1 a-d			S4E0/P2 a-d
		S6-W1/Q18 a-d	60T		S4E0/G2 a-d	67-1T		S4W1/N19 a
48T		S6-E0/O0 a,d			S4E0/G3 a-d			S4W1/O19 a-d
		S6-E0/O1 a,d			S4E0/G4 b,c			S5E0/D19 a
		S6-E0/O2 a,d			S4E0/H0 a-d			S5E0/E19 b
		S6-E0/O3 a,d			S4E0/H1 a,b,c			S5E1/D0 a,d
		S6-E0/O4 a,d			S4E0/H2 a,b	67-2T		S5E1/E0 b,c
		S6-W1/E18 a-d			S4W1/E19 a-d			S5E1/E1 b,c
49T		S6-W1/F18 a-d			S4W1/F19 a-d			S5E1/E2 b,c
		S6-W1/G18 a-d			S4W1/G19 a-d	68T		S5E0/C17 a
		S6-W1/H18 a-d			S4W1/H19 a-d			S5E0/C18 d
		S6-W1/I18 a-d			S6E0/E1 a-d			S5E0/D18 b,c
					S6E0/F1 a-d			S6W1/I18 a,d
					S6E0/G1 a-d	69T		S6W1/I19 a,d
50T		S7-W1/R3 c,d			S6E0/H1 a-d			S6W1/J18 a-d
		S7-W1/T2 a			S6E0/I1 a-d			S6W1/J19 a-d
		S7-W1/T3 c,d			S6E0/J0 a-d			S6W1/K18 a-d
		S6-W1/A2 a,b			S6E0/J1 a-d			S6W1/K19 a-d
		S6-W1/A3 c,d			S6E0/J2 d			S6W1/L18 a-d
		S6-W1/B2 b			S6E0/K0 a-d	70T		S6W1/L19 a-d
		S6-W1/B3 c			S6E0/K1 a-d			S4W1/I9 a,b
51T	1G	S5-W1/G11 a-d			S6W1/J19 a,b			S4W1/I10 d
	2G	S5-W1/F11 a-d	62T		S6W1/K19 a,b			S4W1/J9 a,b
	3G	S5-W1/E11 a-d			S4E0/H1 a,b	71T		S4W1/J10 c,d
	4G	S5-W1/D11 a-d			S4E0/H2 c,d			S4W1/K10 c,d
	5G	S5-W1/C11 a-d			S4E0/I1 a,b			S4W1/I11 a,d
	6G	S5-W1/B11 a-d			S4E0/I2 c,d			S4W1/J11 a,b
		S5-W1/A11 a,d	63T		S4E0/J1 a,b			S4W1/K11 a,b
		S5-W1/D12 c,d			S4E0/J2 c,d	72T		S4W1/K12 c,d
		S5-W1/C12 c,d			S4W1/F16 a,c,d			S5W1/B0 b,c
		S5-W1/B12 c,d			S4W1/G16 a-d			S5W2/B19 b,c
		S5-W1/A12 d			S4W1/H16 a-d	73T		S6W1/T0 d
		S5-W1/D10 a,b,c			S4W1/I15 a,b			S6W2/T18 a,b
		S5-W1/C10 a-d			S4W1/I16 a-d			S6W2/T19 b,c,d
52T		S5-W1/B10 a-d			S4W1/J15 b			S4W1/A0 b,c
		S5-W1/A10 a,d	64-1T		S4W1/J16 a-d			S4W1/A1 c
		S6-W1/O4 a,d			S4W1/K16 a-d			S4W2/A18 b
		S6-W1/O5 a,d			S4W1/L16 a-d			S4W2/A19 b,c
		S6-W1/P4 b,c			S4W1/M16 a-d	74T		S5W1/S0 a,d
		S6-W1/P5 b,c			S4W1/N16 a-d			S5W1/S1 a,d
53T		S6-W1/J5 a			S4W1/O16 b			S5W1/T0 a,b,d
		S6-W1/K5 a,b,d			S4W1/G6 a,d			S5W1/T1 c,d
		S6-W1/L5 a-d			S4W1/H6 a-d	75T		S5W2/T18 a
		S6-W1/M5 a-d			S4W1/I6 a,d			S5W2/T19 a,d
		S6-W1/N5 a-d			S4W1/J6 a-d			S5W1/R0 a,d
		S6-W1/O5 a-d			S4W1/K6 a-d			S5W1/R1 d
54T		S5-W1/M12 a,d	64-2T		S4W1/L5 a,d			S5W2/R19 a
		S5-W1/N12 a-d			S4W1/L6 a-d	76T		S6W1/J0 a,d
		S5-W1/C8 a,b,d			S4W1/L7 a,d			S6W1/K0 a-d
55-1T		S5-W1/D8 b,c			S4W1/L8 a,d			S6W1/K1 a-d
					S4W1/L9 a,d			S6W1/L0 a-d
					S4W1/M5 a,b			S6W1/M0 a-d
55-2T		S5-W1/C7 a			S4W1/M6 a-d			S6W1/N0 a-d
		S5-W1/D7 b,c			S4W1/M7 a-d			S6W1/O0 a-d
					S4W1/M8 a-d			S6W2/J19 a,d
					S4W1/M9 a-d			S6W2/K19 a-d
					S4W1/N5 a,b			S6W2/L19 a-d
					S4W1/N6 a-d			S6W2/M19 a-d
55-3T		S5-W1/C6 a			S4W1/N7 b,c			S6W2/N19 a-d
		S5-W1/O7 a,b			S4W1/O5 b			S6W2/O19 b,c
		S6-W1/K10 a,b			S4W1/O6 b,c			S6W1/Q0 a,d
		S6-W1/K11 a-d	64-3T		S4W1/K4 a			S6W1/Q1 c,d
		S6-W1/K12 a-d			S4W1/K5 a,d			S6W1/R0 c
		S6-W1/L10 a,b			S4W1/J3 b			S6W2/Q19 a
56T		S6-W1/L11 a-d	65-1T		S4W1/J4 b,d			S6W2/R19 a,c
		S6-W1/L12 c,d			S4W1/J5 b,d			
					S4W1/E0 a,b			
					S4W1/E1 a-d			
					S4W1/E2 a-d			
57T		S6E0/E4 a-d						
		S6E0/F3 a,d						
		S6E0/F4 a-d						
		S6E0/F5 d						
		S6E0/G3 a-d						
		S6E0/G4 a-d						
		S6E0/G5 c,d						
		S6E0/H4 a-d						
		S6E0/I4 a-d						
		S6E0/J4 a-d						
		S6E0/K4 a-d						

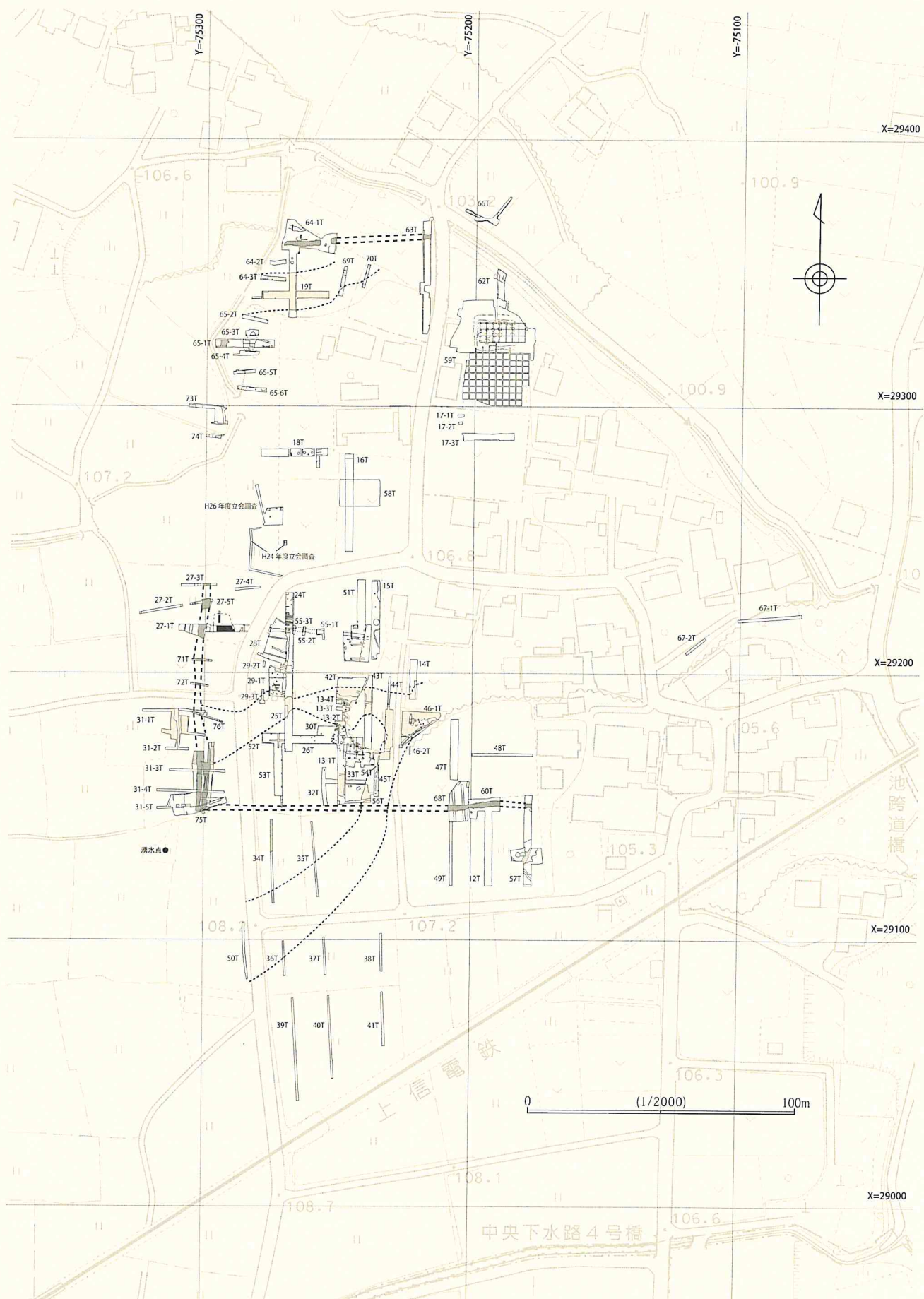


图 24 遺跡全体平面図

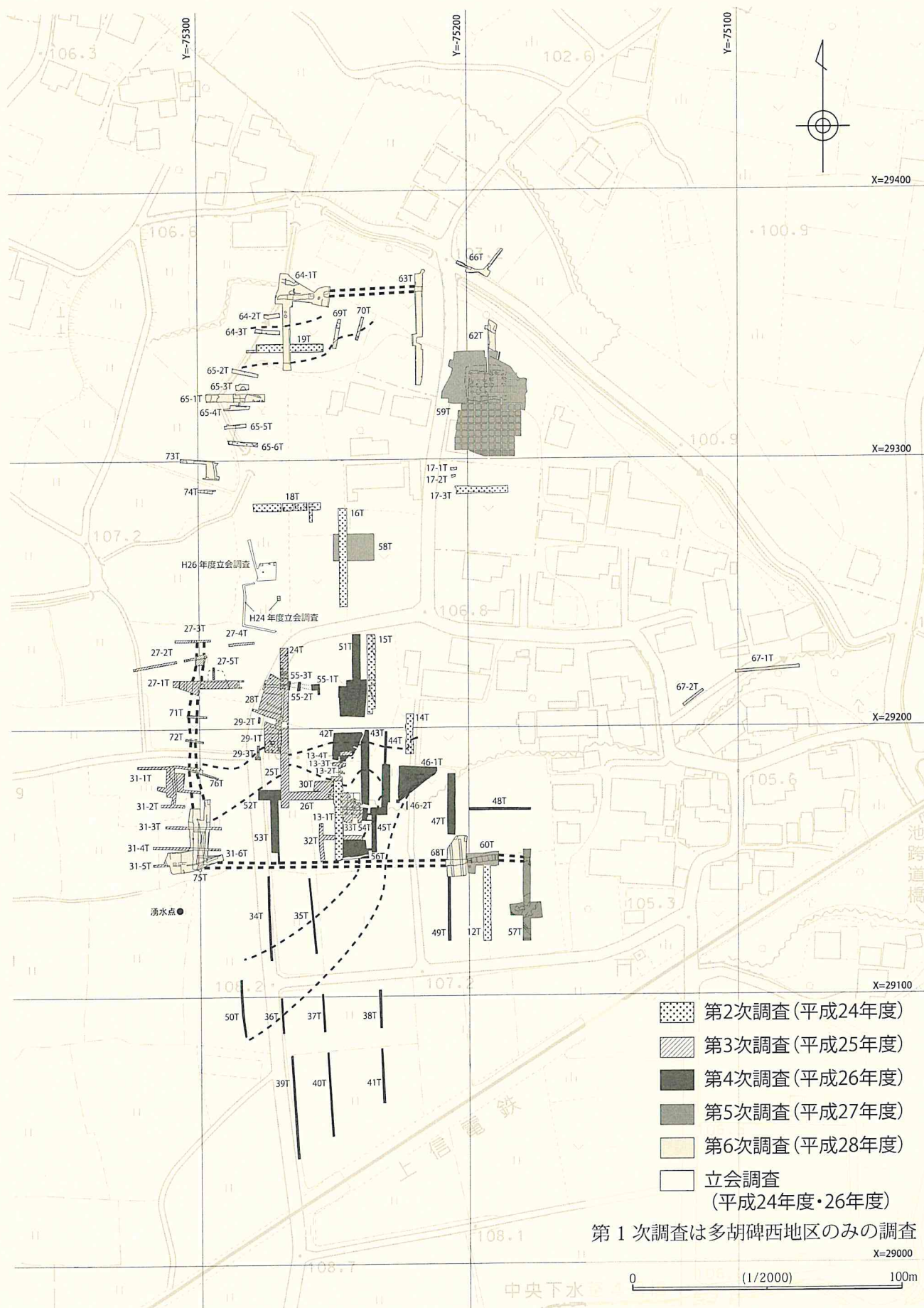


図 25 年度別調査区配置図

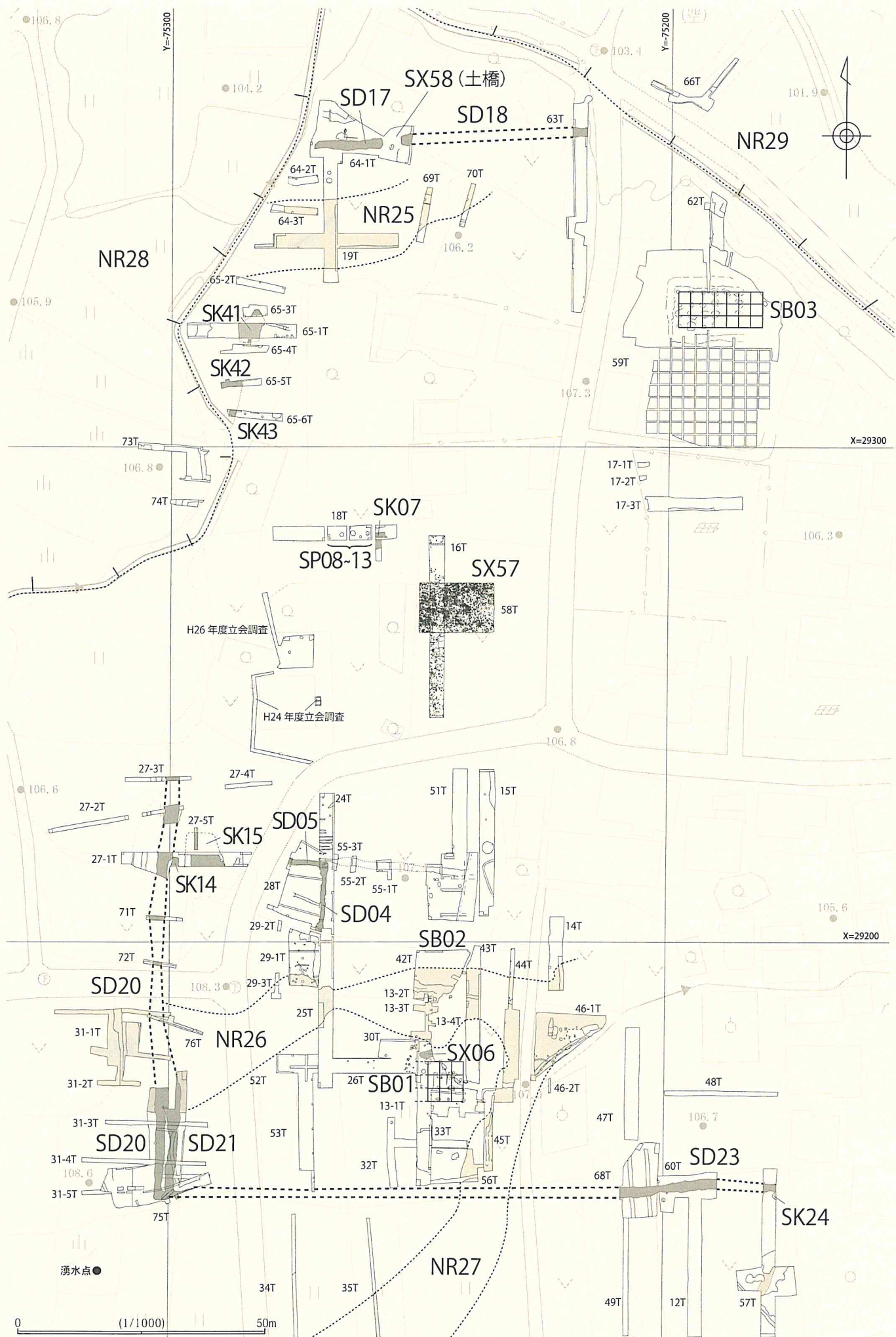


図 26 遺構配置図 (1/1000)

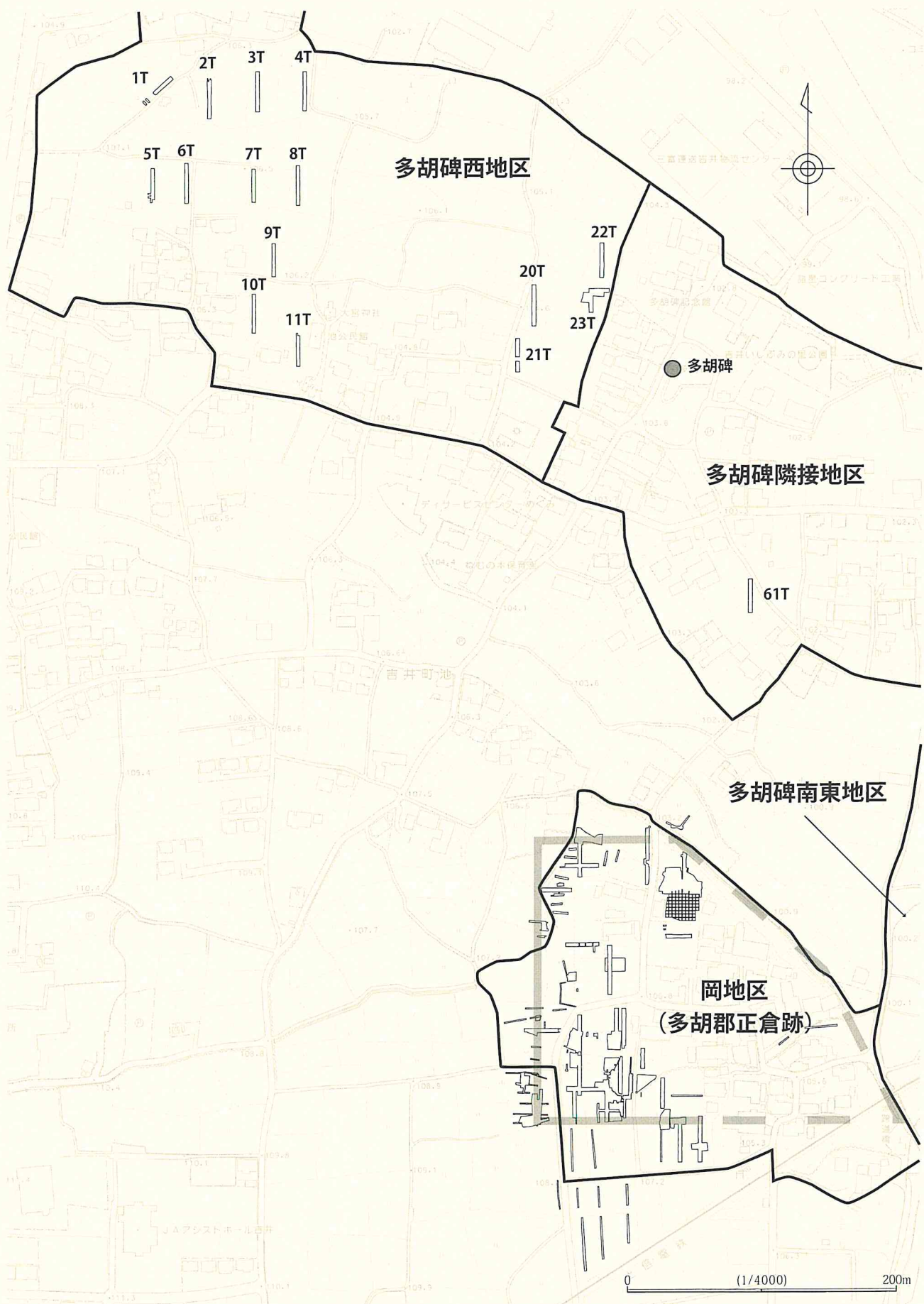


図 27 多胡碑西地区・隣接地区 調査区位置図

表 12 各トレンチの概要（１）

地区	調査次	年度	高崎市 遺跡番号	トレンチ No	旧トレンチ No	面積 (㎡)	設 定 理 由	調 査 成 果
多胡碑西	1 次	H23	526	1	H23-1	75.0	確認調査	遺構無、現代炭窯
多胡碑西	1 次	H23	526	2	H23-2	90.0	確認調査	7c 古墳、埋没谷
多胡碑西	1 次	H23	526	3	H23-3	90.0	確認調査	埋没谷
多胡碑西	1 次	H23	526	4	H23-4	90.0	確認調査	埋没谷
多胡碑西	1 次	H23	526	5	H23-5	90.0	確認調査	埋没谷
多胡碑西	1 次	H23	526	6	H23-6	90.0	確認調査	埋没谷、10 c 竪穴
多胡碑西	1 次	H23	526	7	H23-7	75.0	確認調査	埋没谷、10 c 竪穴
多胡碑西	1 次	H23	526	8	H23-8	90.0	確認調査	埋没谷、10 c 竪穴
多胡碑西	1 次	H23	526	9	H23-9	75.0	確認調査	埋没谷、10 c 竪穴
多胡碑西	1 次	H23	526	10	H23-10	90.0	確認調査	埋没谷、10 c 竪穴
多胡碑西	1 次	H23	526	11	H23-11	75.0	確認調査	埋没谷、10 c 竪穴
岡	2 次	H24	556	12	H24-1	83.4	確認調査	遺構無、SD23 まで調査区達せず
岡	2 次	H24	556	13-1	H24-2	111.0	確認調査	SB01-A1 根石 1 基、As-B 一次堆積層
岡	3 次	H25	570	13-2	—	2.0	礎石とみられる礫の周囲確認	遺構無
岡	3 次	H25	570	13-3	—	8.5	礎石とみられる礫の周囲確認	遺構無、礎石 1 個
岡	3 次	H25	570	13-4	—	7.2	礎石とみられる礫の周囲確認	遺構無、暗渠転用礎石
岡	2 次	H24	556	14	H24-3	42.0	確認調査	NR27 北肩
岡	2 次	H24	556	15	H24-4	86.8	確認調査	中世遺構（SE16・SD50・51）
岡	2 次	H24	556	16	H24-5	110.4	確認調査	瓦集中部（SX57）
岡	2 次	H24	556	17-1	H24-6-1	2.1	確認調査	池城土塁より瓦大量出土
岡	2 次	H24	556	17-2	H24-6-2	1.3	確認調査	池城土塁より瓦大量出土
岡	2 次	H24	556	17-3	H24-6	47.5	確認調査	攪乱より瓦大量出土
岡	2 次	H24	556	18	H24-7	77.5	確認調査	SK07・SP08～13
岡	2 次	H24	556	19	H24-8	79.0	確認調査	NR25 は認識できず
多胡碑西	2 次	H24	556	20	H24-9	95.0	確認調査	竪穴建物
多胡碑西	2 次	H24	556	21	H24-10	64.3	確認調査	竪穴建物、埋没谷
多胡碑西	2 次	H24	556	22	H24-11	77.7	確認調査	埋没谷
多胡碑西	2 次	H24	556	23	H24-12	146.9	確認調査	土坑列
岡	3 次	H25	570	24	A	82.9	確認調査	SD04・05
岡	3 次	H25	570	25	B	90.0	確認調査	NR26
岡	3 次	H25	570	26	C	52.2	確認調査	遺構無
岡	3 次	H25	570	27-1	D	80.0	確認調査	SK14・15・SD20
岡	3 次	H25	570	27-2	D-2	34.7	SD20 の延長確認	SD20
岡	3 次	H25	570	27-3	D-3	10.9	SD20 の延長確認	SD20
岡	3 次	H25	570	27-4	D-4	8.7	確認調査	遺構無
岡	3 次	H25	570	27-5	D-5	3.4	SK15 の範囲確認	SK15 北端確認
岡	3 次	H25	570	28	-	122.8	SD04・05 に伴う建物確認	建物確認できず、SD05
岡	3 次	H25	570	29-1	29	66.0	SD04・05 に伴う建物確認	遺構無
岡	3 次	H25	570	29-2	-	1.8	SD04・05 に伴う溝の延伸確認	遺構無
岡	3 次	H25	570	29-3	-	6.2	SD04・05 に伴う溝の延伸確認	遺構無
岡	3 次	H25	570	30	-	26.9	SB01-A1 根石に伴う建物確認	遺構無
岡	3 次	H25	570	31-1	31	97.8	SD21 の延長確認	近世遺構（SD54）、低湿地と誤認
岡	3 次	H25	570	31-2	-	9.0	SD21 の延長確認	近世遺構（SD54）、低湿地と誤認
岡	3 次	H25	570	31-3	-	0.9	SD21 の延長確認	低湿地と誤認
岡	3 次	H25	570	31-4	-	1.0	SD21 の延長確認	低湿地と誤認
岡	3 次	H25	570	31-5	-	0.5	SD21 の延長確認	低湿地と誤認
岡	3 次	H25	570	31-6	-	0.4	SD21 の延長確認	低湿地と誤認
岡	3 次	H25	570	32	-	63.0	SB01-A1 根石に伴う建物確認	遺構無、As-B 一次堆積層
岡	3 次	H25	570	33	-	57.0	SB01-A1 根石に伴う建物確認	SB01
岡	4 次	H26	599	34	-	35.2	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	NR27

表 12 各トレンチの概要 (2)

地区	調査次	年度	高崎市 遺跡番号	トレンチ No.	旧トレンチ No.	面積 (㎡)	設 定 理 由	調 査 成 果
岡	4 次	H26	599	35	-	29.0	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	NR27
岡	4 次	H26	599	36	-	14.5	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	NR27
岡	4 次	H26	599	37	-	13.9	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	38	-	23.4	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	39	-	58.8	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	40	-	38.4	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	41	-	28.2	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	埋没谷
岡	4 次	H26	599	42	-	88.0	正倉の確認	SB02
岡	4 次	H26	599	43	-	82.4	正倉の確認	NR26
岡	4 次	H26	599	44	-	74.3	正倉の確認	NR26・27
岡	4 次	H26	599	45	-	36.8	正倉の確認	NR27
岡	4 次	H26	599	46	-	99.6	正倉の確認	NR27、出土米
岡	4 次	H26	599	47	-	69.0	正倉の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	48	-	23.0	正倉の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	49	-	34.3	南辺区画施設の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	50	-	19.4	岡地区南側の確認、南辺区画施設の確認	NR27
岡	4 次	H26	599	51	-	184.6	正倉の確認	礎石建物の想定、中世遺構 (SD39・ST48・49)
岡	4 次	H26	599	52	-	32.3	正倉の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	53	-	62.6	正倉の確認	遺構無
岡	4 次	H26	599	54	-	9.8	SB01 と NR27 との接続	SB01 と NR27 との接続
岡	4 次	H26	599	55-1	-	9.1	SD04 と SD39 との関係確認	中世遺構 (SD39)
岡	4 次	H26	599	55-2	-	3.6	SD04 と SD39 との関係確認	中世遺構 (SD39)
岡	4 次	H26	599	55-3	-	3.7	SD04 と SD39 との関係確認	SD04 と SD39 は別遺構
岡	4 次	H26	599	56	-	66.0	SB01 南側での建物遺構の有無	建物遺構無、NR27
岡	5 次	H27	636	57	-	139.4	南辺区画溝の確認	SD23
岡	5 次	H27	636	58	-	150.0	瓦集中部での建物確認	As-B 混土中の瓦集中部のみ (SX57)
岡	5 次	H27	636	59	-	922.9	正倉の確認	SB03、池城堀 (SD56)・土塁
岡	5 次	H27	636	60	-	69.6	南辺出入口の確認	SD23
多胡碑隣接	5 次	H27	636	61	-	72.5	確認調査	遺構無
岡	6 次	H28	673	62	-	55.4	北辺区画施設の確認、SB03 基壇の層位確認	中世堀 (SD55)、礎石転用の石積
岡	6 次	H28	673	63	-	118.5	北辺区画施設の確認、正倉の確認	SD18、軒丸瓦出土
岡	6 次	H28	673	64-1	64	227.5	北辺区画溝の確認	SD17・18、土橋 (SX58)、NR25
岡	6 次	H28	673	64-2	-	10.7	SK41 の土坑か溝かの判断	遺構無
岡	6 次	H28	673	64-3	-	16.3	SK41 の土坑か溝かの判断	遺構無
岡	6 次	H28	673	65-1	-	66.0	西辺区画施設の検出、段丘東端の確認	SK41、段丘東端の地形確認
岡	6 次	H28	673	65-2	-	17.3	SK41 の土坑か溝かの判断	遺構無
岡	6 次	H28	673	65-3	-	13.5	SK41 の土坑か溝かの判断	SK41 北端
岡	6 次	H28	673	65-4	-	17.0	SK41 の土坑か溝かの判断	遺構無
岡	6 次	H28	673	65-5	-	12.5	SK41 の土坑か溝かの判断	SK42
岡	6 次	H28	673	65-6	-	17.6	SK41 の土坑か溝かの判断	SK43
岡	6 次	H28	673	66	-	40.0	段丘下の状況確認	NR29、遺構無
岡	6 次	H28	673	67-1	67	24.0	東辺区画施設の確認	現代埋土、NR27
岡	6 次	H28	673	67-2	67	8.4	東辺区画施設の確認	現代埋土、NR27
岡	6 次	H28	673	68	-	107.1	南辺出入口の確認	SD23、曲物蓋板
岡	6 次	H28	673	69	-	18.2	NR25 の延長確認	NR25 南肩
岡	6 次	H28	673	70	-	11.0	NR25 の延長確認	NR25 南肩
岡	6 次	H28	673	71	-	7.7	SD20 の延長確認	SD20
岡	6 次	H28	673	72	-	6.3	SD20 の延長確認	SD20
岡	6 次	H28	673	73	-	49.8	西辺区画施設の確認、段丘外側の確認	NR28、中世遺構 (SD38)、古代遺構無
岡	6 次	H28	673	74	-	9.3	西辺区画溝の確認、段丘外側の確認	NR28、中世遺構 (SD38)、古代遺構無
岡	6 次	H28	673	75	-	183.4	区画溝南西コーナーの確認、湧水点との関連	区画溝南西コーナー、小型弓
岡	6 次	H28	673	76	-	16.3	西辺区画溝の確認	SD20、NR26

第4次調査までのグリッド名は、中グリッドの区画を基準としてトレンチ毎に名称を付した。58T・59Tについては、瓦が大量に出土し建物遺構が想定されたため、前述の小グリッド単位で取り上げた。ただし、トレンチ No. でどの大グリッドに属するか判別できることから、発掘作業の効率化を図るため大グリッド名は付記しないで取り上げている。調査時のグリッドと本グリッド体系との照合および各トレンチの所属グリッドは表 11 に示した。

トレンチの設定・経過 本事業のうち、多胡郡正倉跡がある岡地区においては、平成 24 年度の第 2 次調査が最初の発掘調査であった。

第 1 次調査に引き続き、第 2 次調査でのトレンチの設定は、第 1 章 第 3 節 (2) での調査方針のとおり、方向を座標北に合わせ幅 3m を基準とした。平成 25 年度の第 3 次調査以降は、基準通り設定した後、必要に応じて適宜拡張した。溝等の走行方向を確認したい場合は、その方向を予想し、該当場所にトレンチを設定した。各トレンチの位置については図 24 に示し、図 25 には年度別のトレンチ位置を示した。トレンチ設定の目的、調査の概要は第 1 次から 6 次までのトレンチすべてについて表 12 にまとめた。

発掘作業の方法 発掘作業は以下の方法・手順で実施した。

- ①表土掘削：トレンチ設定後、人力によりスコップを用いて基本層序を確認した後、重機にて表土層を除去した。
- ②遺構検出：遺構確認面を精査するため、観察に適した状態になるようジョレン等を用いて人力で遺構確認面直上まで削った。
- ③遺構掘り下げ：古代の遺構確認とその現状保存を目的としているため、遺構は平面観察にとどめ、掘り下げは原則として行なっていない。しかし、古代の遺構の一部については、内容確認のために必要に応じて半截や断ち割り調査を行なった。古代以外の遺構については、古代の遺構の検出やその内容確認のために欠かせない場合のみ、完掘あるいは一部を掘り下げて調査した。これらの一連の作業には主に移植ゴテを用いた。
- ④掘削した土の処理：掘削した土は原則、トレンチ隣地に置いた。必要に応じて表土とそれ以外とに

分け保管した。

⑤記録の取り方：本調査は保存目的調査のため、調査現場で遺構を十分に検討し、その性格を明らかにするよう努めた。そのために遺構検出作業と並行しながらトータルステーション等を用いて $S=1/100$ 、 $1/200$ 程度の略測を行った。遺構・遺物の検出状況は、遣り方で $S=1/20$ の平面図を作成し記録することを基本とした。遺構を掘り下げた部分は手実測による $S=1/20$ の平面図・断面図の作成を基本とした。平成 27・28 年度の 5 次・6 次調査では、トレンチおよび遺構を $S=1/20$ 精度の 3 次元データとしても記録した。これに伴い 58T・59T においては、3 次元データよりオルソ画像を作成し平面図を作成した部分もある。作成図面情報は調査基本図に組み込んだ。写真記録は 35mm 一眼レフ（モノクロ・カラーリバーサル両フィルム）およびデジタル一眼レフカメラ（RAW データ）による撮影を基本とし、随時撮影した。また、作業の進捗状況や所見を記した日誌を作成した。

⑥埋め戻し：人力またはバックホーを用いた。古代と推定される遺構・遺構面に対しては、山砂で被覆するなどして、その保護・養生に配慮した。埋め戻しは、原状回復を基本とし、地権者の意見を尊重しながら行った。

整理等作業の方法 整理等作業は以下の方法・手順で実施した。

遺構実測図および写真等の発掘記録類は、発掘調査と並行して作成した。遺構実測図はトレンチごと、遺構写真は撮影順に調査年次ごとにまとめている。

遺構略号は文化庁記念物課編『発掘調査の手引き』に準拠した（例言参照）。遺構番号は、発掘調査時点ではトレンチごとに番号を付してきたが、本報告にて再整理し新たに遺跡内での通し番号を付け直した。旧番号と新番号との対照表は表 13 のとおりである。

遺物の洗浄・注記も発掘調査と並行して行った。遺物注記は、旧グリッド使用時にはその名称のまま記入しているが、注記の冒頭に高崎市遺跡番号を付しており、調査年度を判別することができる。新旧のグリッドは表 11 で対応関係を確認していただきたい。また、遺物注記してある遺構番号は旧番号を記入している。遺物写真はデジタル一眼レフカメラに

表 13 新旧遺構名対応表

新名称	旧名称	備考
SB01	SB01	変更無
SB02	SB02	変更無
SB03	SB03	変更無
SD04	24T-SD01・329-1T-SD01	
SD05	24T-SD02	
SX06	33T-SX01	
SK07	18T-SX01	
SP08	18T-Pit01	
SP09	18T-Pit02	
SP10	18T-Pit03	
SP11	18T-Pit04	
SP12	18T-Pit05	
SP13	18T-Pit06	
SK14	27-1T-SK01	
SK15	27-1T-SK02	
SE16	15T-SE01	中世井戸
SD17	64-1T-SD02	北辺区画溝
SD18	64-1T-SD03・63T-SD01	北辺区画溝
SK19	64-1T-SK01（南側）	古代以降土坑
SD20	27T-SD02・71T-SD01・ 72T-SD01・76T-SD01・ 75T-SD01	西辺区画溝
SD21	75T-SD02	西辺区画溝
SK22	64-1T-SK01（北側）	古墳土坑
SD23	57T-SD01・60T-SD01・ 68T-SD01	南辺区画溝
SK24	57T-SK01	
NR25	NR01	谷地形
NR26	NR02	谷地形
NR27	NR03	谷地形
NR28	NR04	谷地形
NR29	正倉院段丘下の低地	谷地形
SP30	19T-Pit1	NR25 内
SP31	19T-Pit2	NR25 内
SP32	19T-Pit3	NR25 内
SP33	19T-Pit4	NR25 内
SP34	19T-Pit5	NR25 内
SP35	19T-Pit6	NR25 内

新名称	旧名称	備考
SP36	19T-Pit7	NR25 内
SP37	19T-Pit8	NR25 内
SD38	73T-SD01・74T-SD01	古代～中世溝
SD39	24T-SD02・50T-SD01・ 51T-SD01	中世溝
SK40	29-1T-SK01	時期不明土坑
SK41	65-1T-SK01（SD01）	
SK42	65-5T-SK01	
SK43	65-6T-SK01	
ST44	64-1T-ST01	中世土坑墓
ST45	64-1T-ST02	中世土坑墓
SK46	51T-SK01	中世土坑
SK47	51T-SK02	中世土坑
ST48	51T-SK03	中世土坑墓
ST49	51T-SK04	中世土坑墓
SD50	15T-SD01	中世溝
SD51	15T-SD02	中世溝
SL52	60T 縄文炉跡	
ST53	19T-ST01	中世土坑墓、 壁面のみで検出
SD54	31T-SD01	近世溝
SD55	62T-SD01	SB03 北側 中世堀
SD56	59T 中世堀	SB03 西側 中世堀
SX57	16T・58T 瓦集中	
SX58	北辺土橋	

て撮影し、アドビ社フォトショップ CS2 にて色調補正をした。

遺物は接合後、全個体の観察を行った。実測では古代の遺構内から出土したもののおよび残存率の高いものを対象とした。実測した遺物については観察表を作成した。

遺構・遺物の製図は、実測図をデジタルデータ化した後、アドビ社イラストレーター CS2 を用いて行った。

報告書章立ておよび原稿執筆は、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会の指導の下に進めた。

報告書のレイアウトおよび編集にはアドビ社製イラストレーター CS2 およびインデザイン CS2 を使用した。

(2) 基本層序および遺跡の現況地形

基本層序 遺跡全体を縦横断する基本層序を図 28 に示した。南北断面は、図 24 の北から 64-1T・65-2T・65-3T・65-1T・65-5T・65-6T・18T・16T・24T・25T・53T・34T・36T・39T の断面を Y=75267 のラインに投影させて作図した。東西断面は、西から 27-2T・27-1T・28T・24T・55-2T・55-1T・51T・15T・14T・67T の断面を X=29217 のラインに投影させて作図した。断面位置は図 29 に記した。

第Ⅰ層 表土・耕作土である。土地利用において様相が異なるが、第Ⅴ層の礫混入の度合いに影響され、礫の混入度合いに多少がある。16T・58T・17T・18T・59T 付近では古代瓦が多く表採できる。

第Ⅱ層 As-A (1783 年：天明 3 年) を含む層である。As-A 降下以降に形成された土壌である。礫の混入度合いは第Ⅰ層と同様に第Ⅴ層の様相に起因する。

第Ⅲ層 黒褐色土主体の層で、As-B (1108 年：嘉承 3 年・天仁元年) が混入する。第Ⅰ層・第Ⅱ層の形成によって失われている場所もあるが、第Ⅱ層中にブロックとして混入する所もあり、元々遺跡全体に広く分布していたと思われる。多くは少量の As-B が混入する層 (Ⅲ - 1 層) である。そのほか埋没谷周辺には As-B 一次堆積層が残存する場所がある。また、59T の中世土塁下層には、As-B

が多量に混入する層 (Ⅲ - 2 層) が良好に残存している。礫の混入度合いは第Ⅰ層と同様に第Ⅴ層の様相に起因する。

第Ⅳ層 黒褐色土主体の層である。この上面が古代遺構の検出面である。遺跡内ではあまり分布しておらず、上層形成時の攪乱が及ばなかったごく一部の微高地と、谷地形内に残存している。谷地形内では細分が可能であり、6 世紀初頭に降下した Hr-FA を含む層、3 世紀後半に降下した As-C を含む層が確認できる。

第Ⅴ層 褐色または暗褐色土の層である。第Ⅳ層が残存しない部分では、この上面が古代の遺構検出面である。遺跡内でも様相は様々であり、シルト質が主体の層 (Ⅴ - 1 層) と、円礫や砂質土が主体の層 (Ⅴ - 2 層) が混在している。遺跡南部ではⅤ - 1 層の下にⅤ - 2 層が存在するが、段丘上位面縁辺の微高地ではⅤ - 1 層が存在せずⅤ - 2 層のみである。Ⅴ層より下層では凝灰岩の岩盤⁽¹⁾が確認できる地点 (62T・64-1T・67T) がある。

遺跡内の現況微地形 遺跡周辺の現況地形は、吉井段丘上位面として平坦に見えるが、細かく眺めると水流に開析された起伏が観察できる (図 29)。

第 2 章 第 1 節 (2) で述べたが、多胡郡正倉跡は吉井段丘上位面の北東端部に位置する。遺跡の北西から南東へ続く崖線は、上位面から中位面に降りる段丘崖である。遺跡付近で標高差が最も大きいところで約 7 m を測る。崖線の直下は中位面でも低い土地であり (本報告では NR29 と呼称)、崖線下端を流れる水路は中位面の排水を担っている。

再び上位面に目を向けると、いくつかの谷が開析されているのがわかる。昭和 40 年作成の地形図 (図 9) は、平成 9 年の土地改良以前の地形が表現されており、より分かりやすい。遺跡近辺で大きい谷は遺跡西側にある谷地 (本報告では NR28 と呼称) で、南西から北東にかけて段丘崖と直交するようになっている。この谷地の東端に沿って流れる水流は、現

(1) 本遺跡の直下を走る凝灰岩岩脈は、地質分布図から北村凝灰岩と思われる。第 2 章第 1 節 (3) 参照。

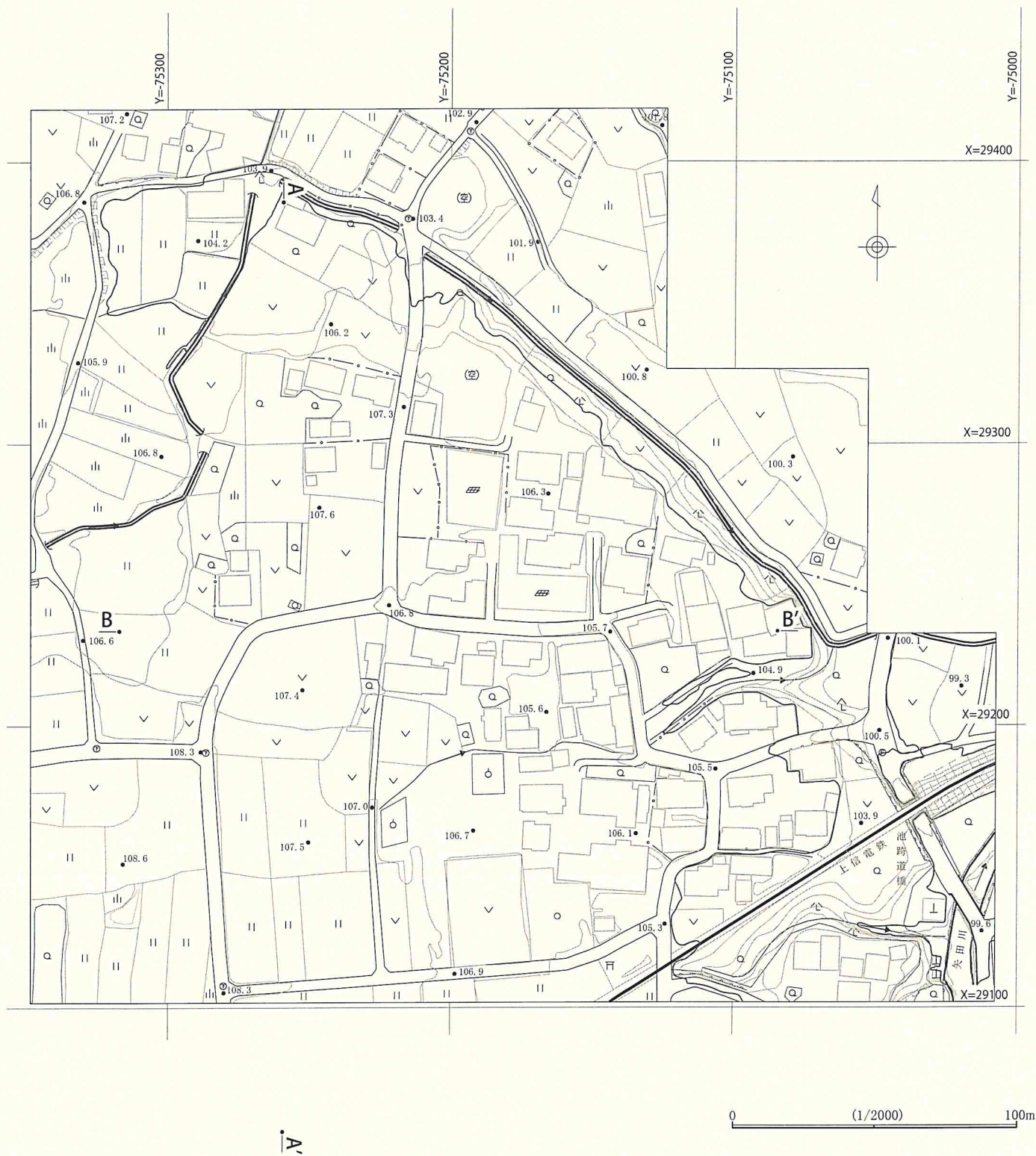


図 29 多胡郡正倉跡 現況詳細測量図

在は農業用水路になっており、前述の中位面水路に注ぐ。

遺跡の南側にも南西から北東に向かう谷地があり、上信電鉄の鉄路に沿って、上位面からすぐに矢田川に注ぐ水流がある。水流に架かる橋付近の踏切名称が「滑沢」とあり、水流の名称と思われる。滑沢は土地改良時に流路を変えられているが、土地改良以前は上信電鉄の北側をほぼ並走していた。矢田川に注ぐ手前の断崖には基本層序で確認した凝灰岩の露頭（図 30）が見える。

遺跡の中央にも水田の排水路として現在利用されている水流がある。西から遺跡の中央を横断して段丘中位面へ流れる。現在の岡集落の中央を通り、周辺の排水がここに集まっている。後述する NR27 の痕跡である。

遺跡内での標高のピークは、遺跡の南西端が 108.6m を測り、遺跡の北、中位面との境の段丘崖から 50m ほど南の辺りでは標高 107.3 ～ 107.6m を測る。この辺りは瓦が最も多く表採できる場所と重複する。

現地形の起伏は基本層序のうち V 層とも相関がある。標高の高い北側は礫の多い V - 2 層が主体であり、水流がある比較的低い土地ではシルト中心の V - 1 層が分布する。第 2 章第 1 節（3）で述べた通り、段丘面は扇状地の形成作用で上位段丘から供給されたローム二次堆積層で覆われているが、V - 2 層はこれに由来していると思われる。

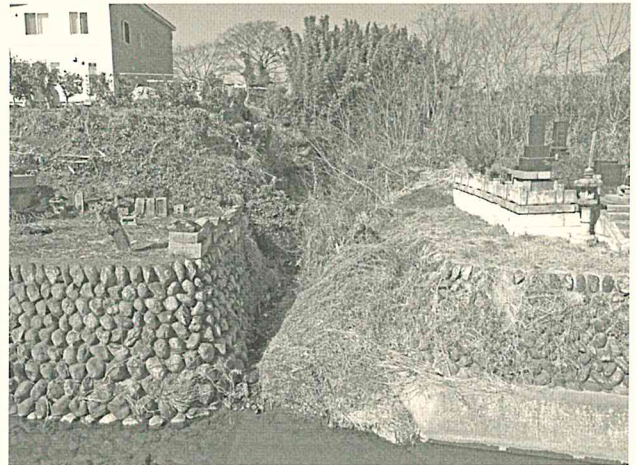


図 30 遺跡東端の凝灰岩露頭（上：全景 下：近景）

第2節 古代の遺構と旧地形

(1) 礎石建物

i SB01 (図 31～33)

位置・立地 吉井段丘中位面の段丘上に立地し、13-1T・33T・54Tに渡り、X=29167.21～X=29175.30、Y=75247.70～Y=75240.46に位置する。真南には南辺外周区画溝推定ラインが所在し、SB01南端から南辺外周区画溝推定中心ラインまでは17.97mを測る。SB01の北へ3mの地点には谷地形NR26へ続く黒色土堆積範囲が、SB01の南東端から東へ6mの地点には谷地形NR27がそれぞれ所在し、SB01は谷地形によって挟まれた微高地上に立地している。

検出状況 礎石据付穴や根石の圧痕、礎石抜取穴を合計10か所で確認している。SB01において各柱筋および柱位置を示すに場合、東西柱筋を北からA列～D列、南北柱筋を西から1列～4列と呼称し、その交点の柱位置をA1・A2～D4のように呼称する。

建物北東部は、近世のAs-A降下以降に耕地造成のため削平されている。1列目の1Bより南の礎石の痕跡については、第2次調査の13-1Tにおいて検出面を認定することができず掘り下げてしまったため、確認できていない。

規模・方位 礎石の痕跡の配列を見ると、この建物は総柱建物であることがわかり、残存している遺構だけを見ると、南北3間、東西3間の規模であり、東西方向はさらに延びる可能性がある。礎石据付穴で残りの良いものはA1とC3のみであるため、柱間寸法と方位を確定することは困難であるが、方位については後述のSB03および正倉院外周区画溝SD20・SD23が正方位を向いていることから、SB01も正方位として検討した。この方位で、残りの良いA1およびC3の中心に柱が乗るよう柱筋を復元すると、南北柱間寸法2.7m(9尺)、東西柱間寸法2.4m(8尺)となる。これに拠ると、東西総長7.2m(3間)、南北総長8.1m(3間)、床面積58.32㎡となるが、さらに西側方向に延びる可能性もある。詳細は第4章総括で検討したい。なお、過去の所見・発表資料では主軸が正方位でないもの、建物規模が南北柱間寸法2.7m(9尺)、東西柱間2.7m(9尺)としたものがある

たが、本報告にて訂正する⁽¹⁾。

建物構築面の状況 建物に伴う掘込地業は確認できず、礎石の痕跡はすべて地山土である基本層序V-1層上面にて検出されており、これを建物の構築面としている。構築面を一部断ち割り(図33 B-B'断面)、残存状況の良いC3周辺で色調の異なる層を確認したが(第3層)、混入する礫の状況からすべて基本層序V-1層に相当する地山土であると判断した。

4列付近以東の地山土直上にはAs-B混土層が堆積しており、構築面である地山土は東側のNR27に向かって傾斜している。構築面が水平でないので、SB01東端はこのAs-B混土層形成以前に削平されたと考えられる。

礎石据付穴 いずれも断面形状は皿状を呈するのが基本であり、残存状況のよいA1の平面形は円形、C3は東西に長い楕円形状を呈する。各礎石据付穴は平面形状が異なるため、礎石の形状に合わせて掘られたとみられる。残存状況の悪い礎石据付穴は、その掘り込みの深い部分だけが遺存している状態であるため、平面的にはその中心は柱筋交点から外れたところもある。

礎石据付穴のうち、残存する深さで最も深いものはC3で0.21mを測る。底部標高の最も低いところはB3の106.88mであり、最も高いところがB2およびD3の106.98mで、その差は0.10mである。

礎石据付穴には、長軸長が15～40cm程度の扁平な枕状の礫が播鉢底状に配されており、これが根石と思われる。礎石据付穴底部にある根石は、黒褐色シルト質土によって固定されている。根石が残っている礎石据付穴はA1・B2・B3・C2・C3・D4である。C3とD4では根石の圧痕とみられる窪みを確認した。

(1) 過去の多胡碑周辺遺跡および多胡郡正倉跡の現地説明会資料の他、滝沢匡 2016「上野国多胡郡正倉跡の調査成果」『発掘された古代の役所～最新の発掘調査からみた上野・北武蔵の律令社会～』伊勢崎市教育委員会、滝沢匡 2017「特別史跡多胡碑に記された郡衙の姿―群馬県高崎市上野国多胡郡正倉跡」『季刊考古学』139 雄山閣、滝沢匡 2017「上野国多胡郡正倉跡と寺院」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社、滝沢匡 2018「多胡郡正倉掘調査成果」『条里制・古代都市研究』第33号 条里制・古代都市研究会で報告している。

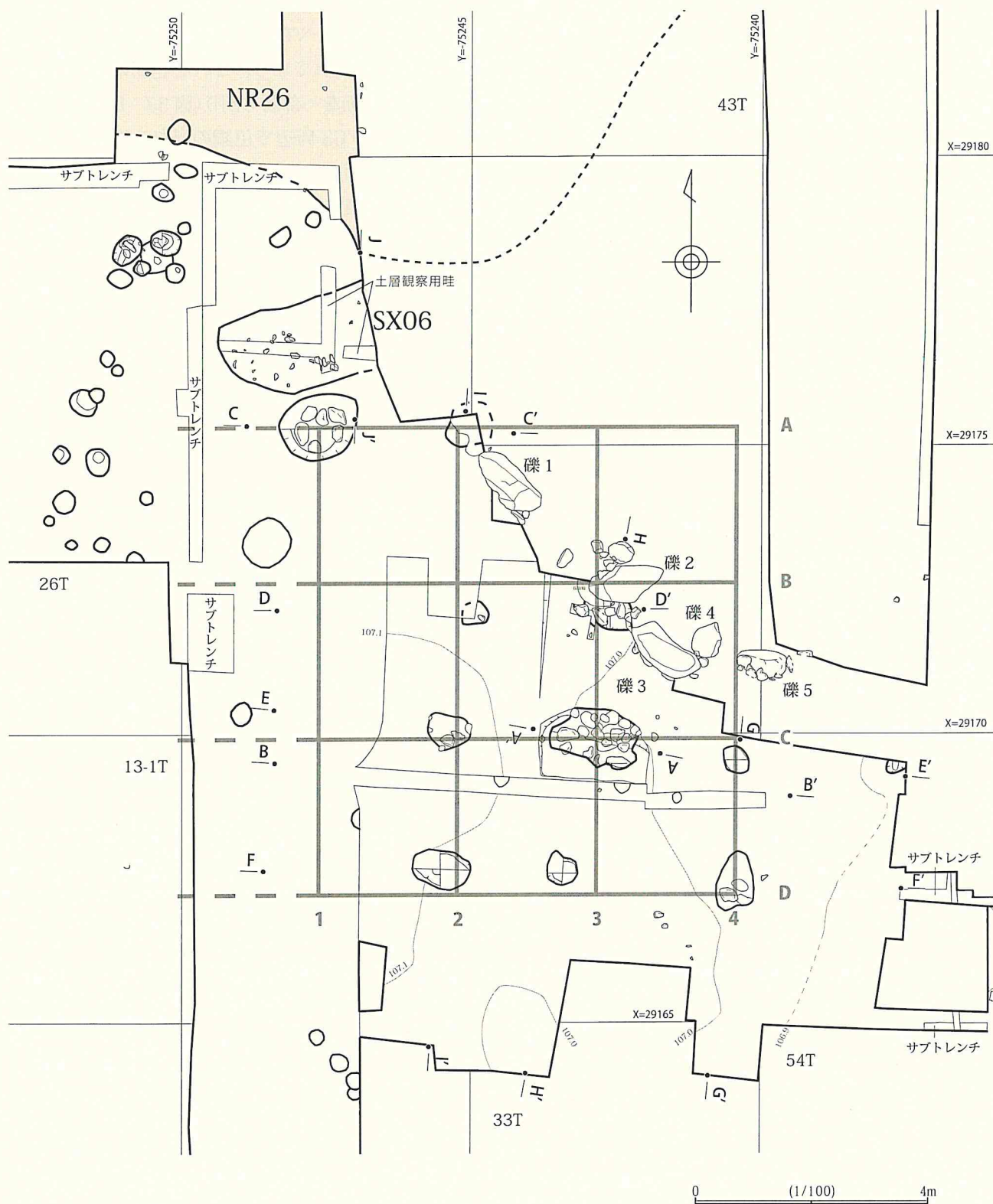


図 31 SB01 (13-1T・33T・54T) 平面図

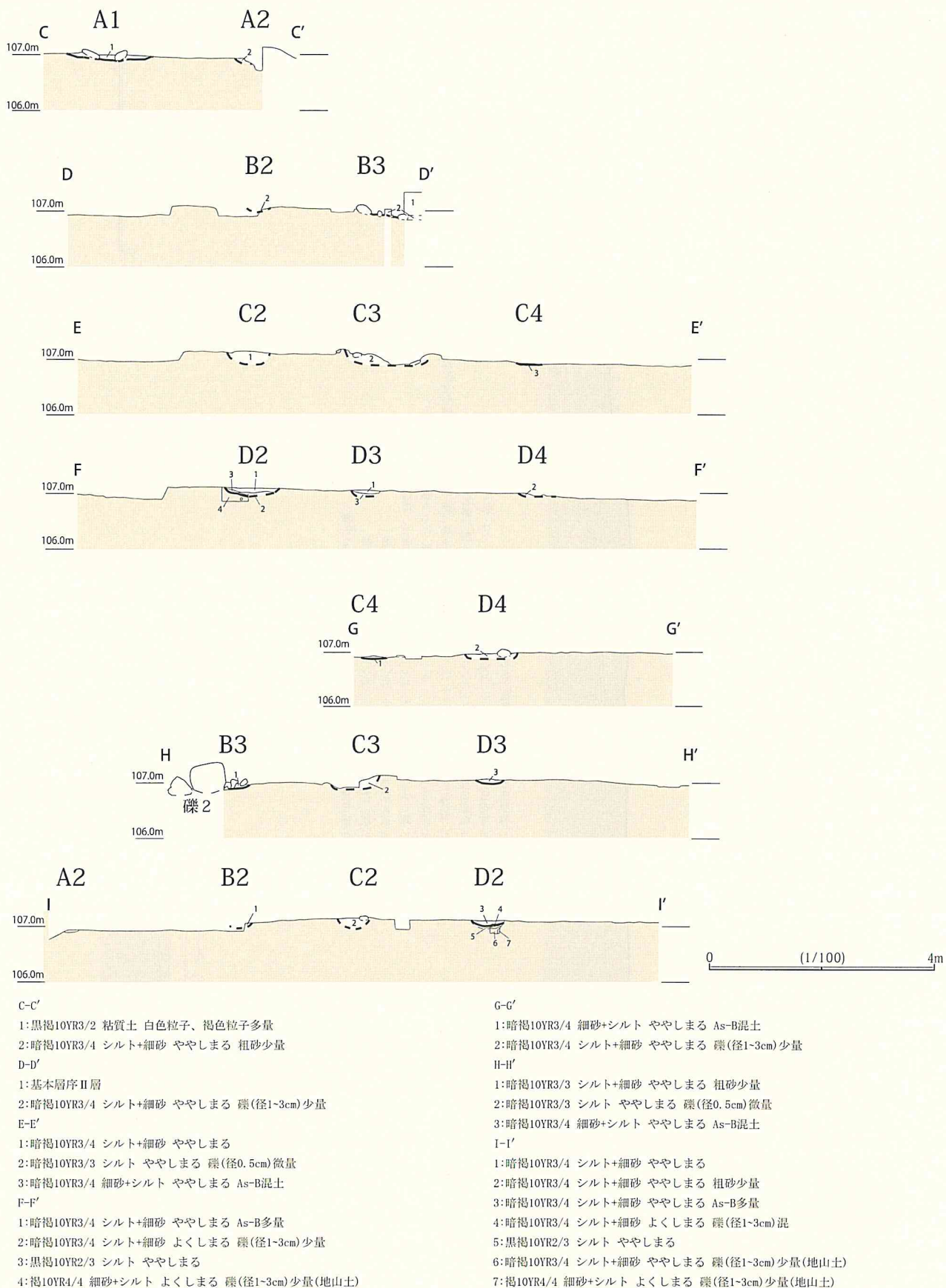
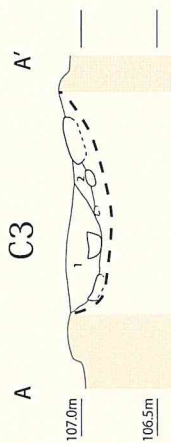
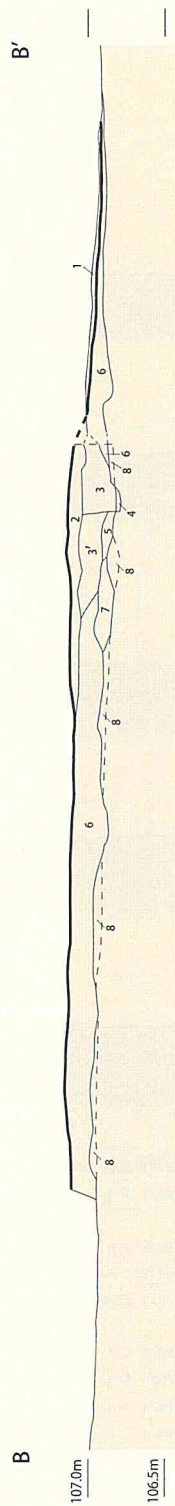


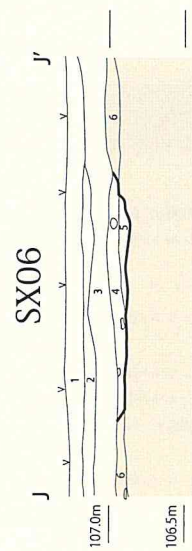
図 32 SB01 土層断面図 (1)



- 1: 褐10VR4/4 細砂 ややゆるい As-A混土ブロック (径2cm) 微量
2: 暗褐10VR3/3 シルト ややしまる 礫 (径0.5cm) 微量



- 1: 暗褐10VR3/3 シルト+細砂 ややしまる As-B多量
2: 暗褐10VR3/4 細砂+シルト よくしまる 礫 (径1-3cm)、マンガン斑 (径1cm) 少量
3: 黒褐10VR2/3 細砂+シルト よくしまる 礫 (径1-3cm) 少量 5層に似る
3': 暗褐10VR3/3 細砂+シルト よくしまる 礫 (径1-3cm) 少量 3層と色調の差がある他は同じ土
4: 黒褐10VR2/3 細砂+シルト よくしまる 礫 (径3cm) 微量 ピット覆土 3層と同一か?
5: 褐7.5VR4/4 細砂+シルト よくしまる 礫 (径1-5cm) 多量
6: 褐7.5VR4/3 細砂+シルト よくしまる 礫 (径1-3cm) 少量
8: 褐10VR4/4 細砂~粗砂 よくしまる マンガン粒 (径1cm) 少量



- 1: 基本層序 I 層 現代耕作土
2: 基本層序 I 層 耕作土盛土
3: 基本層序 II 層
4: 黒褐10VR2/2 粘質土 炭化物大量
5: 黒褐10VR3/2 粗砂+シルト
6: 基本層序 V-1 層 (地山土)

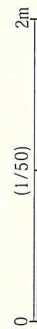


図 33 SB01 土層断面図 (2)・SX06 土層断面図

根石が失われた窪地部分には、後世のテフラ混土が堆積している。C4・D2・D3にはAs-B混土、C3にはAs-A混土がそれぞれ確認できたことから、礎石が失われた時期には差があったことがわかる。

礎石抜取穴 礎石抜取穴が確認できるのはB3である。B3では、As-A混土が埋土となる礎石抜取穴が礎石据付穴を切って掘削されている。

隣接した大型礫 SB01とその北東にある一段低く造成された畑との間には、土手状の高まりがある。土手の構築土にはAs-Aが多く含まれ、北東の畑とともに近世に造られたことがわかるが、その中には大型の礫が数個埋められており調査前から確認することができた。発掘調査で土手を一部除去したところ、大型の礫が5個出土した（礫1～5）。礫は長軸が1mを越し楕円形を呈するものが多い。チャートもしくは安山岩系の石である。このうち礫3は礎石据付穴C3の大きさとほぼ合致する。このことは、大型礫は元々SB01の礎石として使用されており、そのうちの幾つかはAs-A降下後に北東に移動されて、土手の芯材として転用されたと推定することができる。

SX06とその他の遺構 A1の北側約2mの位置でSX06を検出した。検出長は南北で1.55m、東西は2.80mを測るが、東側はトレンチ外へ延びている。残存部分の深さは0.16mである。SB01の周囲で検出されたピット・土坑とは異なり、下層は砂粒を含み、上層は古代の遺物、炭化物および被熱粘土塊を含む。SX06はSB01の雨落溝のような施設になるかも知れない。

建物の北西側から南西側にかけていくつかのピットを確認したが、SB01と積極的に関連付けられるものは無かった。

ii SB02 (図34)

位置 13-3Tから42TにかけてのX=29195、Y=75245付近に位置する。

検出状況 ここでは明確な遺構は検出できていない。13-3Tにおいて、礎石として使用された可能性のある大型礫が出土したことで、SB01の柱列西端を北へ延長したライン付近に根石圧痕と推定される窪み（図34A-A'断面付近）を検出したこと、さらに42T南端に近現代の暗渠に転用された大型礫3個が出土した

ことから、発掘作業段階において礎石建物の存在を推定した。

iii SB03 (図35～44・218～221・223・224)

位置・立地 59Tの北端、吉井段丘上位面の北端部に立地し、北西側に段丘崖がある。崖の下は吉井段丘中位面となる。X=29320.80～X=29334.60、Y=75201.00～Y=75177.60に位置する。

検出状況 調査前は竹林であったため、竹根が表土全面に広がっていたが、これが後世の土地利用を制限したと思われ、多くの礎石がほぼ原位置に残っている状況を確認できた。また、西寄りから北寄りにかけては、中世城館に伴う土塁によって古代面が覆われたため残存状況が比較的良好。一方、遺構の北東寄り、土塁に伴う堀（SD55）で破壊されている。東から南寄りは中世以降の削平が顕著であり、残存状況が悪い。

表土中には柱位置より動かされた礎石と思われる礫が4石あり、段丘崖の表土中でも1石確認した。調査前から同じ地番内にあった3石とあわせて合計8石の位置を記録した後、トレンチ外へ移動させ同地番内に保管している。

西寄り中央部分から南東寄りにかけて、現況の地境に沿って竹根除けの波板が敷設されていたため、長大な攪乱が横断している。南寄りには現代の井戸跡があり、根石などの構築材として利用されたとと思われる円礫が井戸枠に転用されている。また、この井戸の南端からは、現代の配管による攪乱が西へ延びている。攪乱は適宜埋土を除去し土層断面の観察に利用した。

各柱筋と柱位置については、SB01と同様に記号で呼称する。すなわち、東西（桁行）柱筋を北からA列～D列、南北（梁行）柱筋を西から1列～8列と呼称し、その交点の柱位置をA1、B2、D8のように呼称する。

規模・方位 礎石を10か所、礎石据付穴（後述する礎石下部の掘り込み）を13か所確認している。総柱の礎石建ち東西棟であり、低基壇を有する瓦葺の建物である。梁行は3間、桁行は7間である。

柱間は、検出した礎石および礎石据付穴（礎石下部の掘り込み）の心々間で計測すると、東西、南北

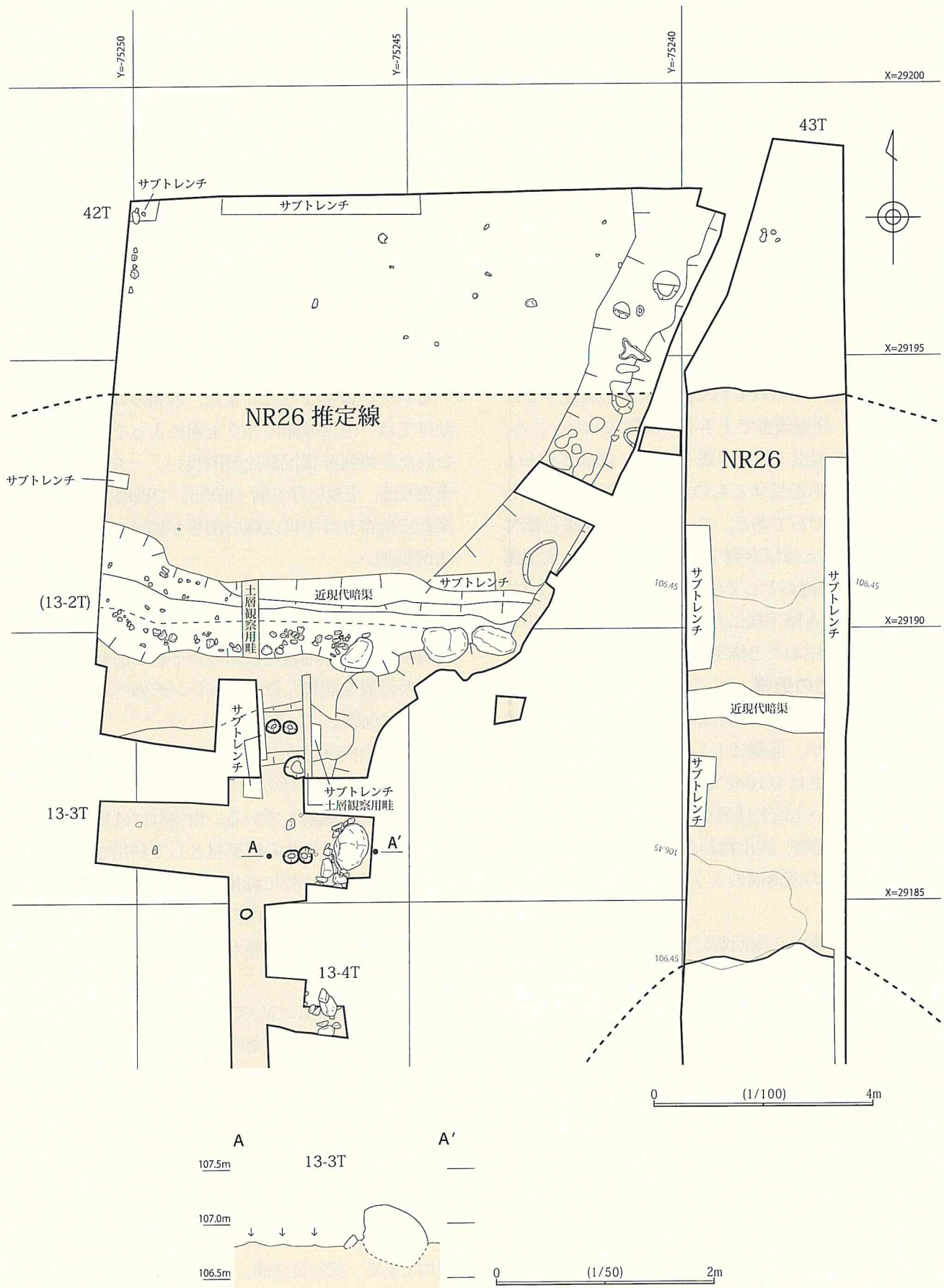


図 34 SB02 (42T・13-3T) 平面図・13-3T 土層断面図

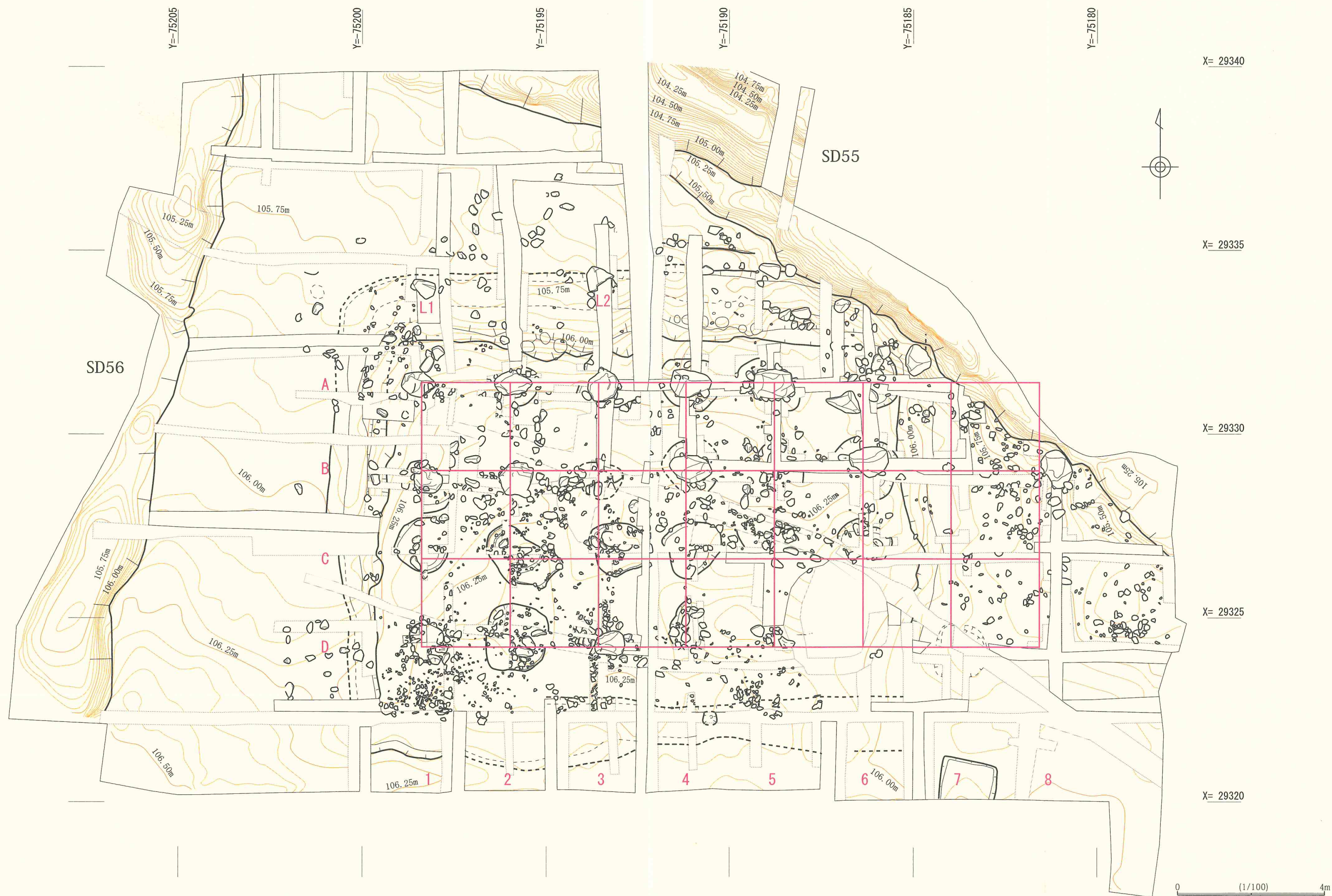


图 35 SB03 平面图

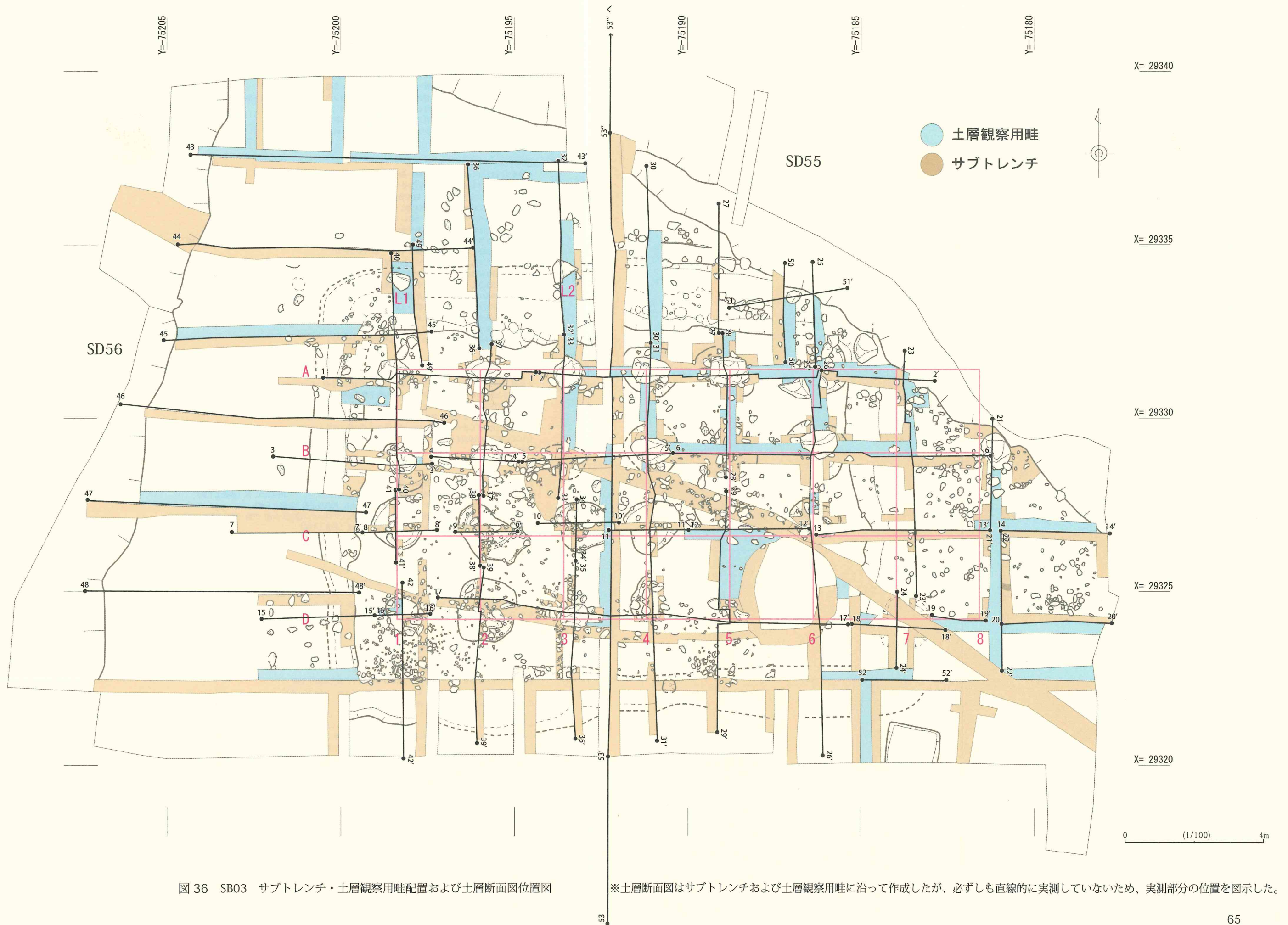


図 36 SB03 サブトレンチ・土層観察用畦配置および土層断面図位置図

※土層断面図はサブトレンチおよび土層観察用畦に沿って作成したが、必ずしも直線的に実測していないため、実測部分の位置を図示した。

1-1'

- 1: 暗褐 7.5YR3/4 しまり弱い粘性弱い As-A、As-B 混 礫 (径 0.5~2cm) 少量
- 2: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり 礫 (径 5~20cm) 大量 (土壘)
- 3: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い As-B 礫 (径 4~10cm) 少量 (Ⅲ -1 層)
- 4: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり 粘性あり 白色粒子、褐色粒子多量 (Ⅲ -2 層)
- 5: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性ややあり 礫 (径 1~2cm) 少量 (基壇土上層)
- 6: 黒褐 10YR2/3 しまりあり 粘性あり 白色粒子、褐色ブロック (径 5cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 7: 黒褐 10YR3/1 しまり強い 粘性あり 礫 (径 1~2cm) 少量 (礎石下部の掘り込み)
- 8: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性ややあり 白色粒子、褐色粒子混 (基壇土中層)
- 9: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性ややあり 礫 (径 1cm) 微量 (基壇土下層)
- 10: 地山土

2-2'

- 1: 暗褐 10YR3/3 しまり弱い粘性弱い 礫 (径 1~2cm)、As-A 混 (近世)
- 2: 暗褐 10YR3/3 しまりやや強い 粘性ややあり As-B、礫 (径 1~2cm) 混
- 3: 褐 10YR4/4 シルト しまり強い 粘性弱い 褐色粒子、白色粒子少量
- 4: 黄褐 2.5Y5/3 シルト しまり非常に強い 粘性あり 褐色土ブロック (径 1~2cm) 多量 (基壇土上層)
- 5: 暗褐 10YR3/4 シルト しまりやや強い 粘性弱い (基壇土上層)
- 6: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまり強い 粘性弱い 褐色粒子、白色粒子混 (礎石下部の掘り込み)
- 7: 暗褐 10YR3/4 しまりやや強い 粘性ややあり 褐色粒子、褐色土ブロック (径 1~2cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 8: 黒褐 10YR3/1 しまり弱い 粘性弱い (礎石下部の掘り込み)
- 9: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性ややあり 褐色土ブロック (径 0.5~1cm) 少量 (礎石下部の掘り込み)
- 10: 暗褐 10YR3/4 シルト しまりやや強い 粘性弱い (基壇土中層)
- 11: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性ややあり 褐色土ブロック少量 (基壇土中層)
- 12: 黒褐 10YR3/1 シルト しまりあり 粘性弱い 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 13: 黒褐 10YR3/1 しまり弱い 粘性弱い (基壇土中層)
- 14: 褐 10YR4/4 シルト しまりあり 粘性ややあり (基壇土下層)
- 15: 暗褐 10YR3/4 シルト よくしまる (地山土)
- 16: 明黄褐 10YR6/6 シルト しまりあり 粘性ややあり (地山土)

3-3'

- 1: 暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い As-A 多量
- 2: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、白色粒子混 礫 (径 1~2cm) 少量 (基壇土上層)
- 3: 灰黄褐 10YR4/2 しまり弱い 粘性弱い 褐色粒子混 (基壇土上層)
- 4: 黒褐 7.5YR2/2 シルト しまりややあり 粘性弱い (礎石下部の掘り込み)
- 5: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1cm) 微量 (基壇土中層)
- 6: 黒褐 10YR2/2 しまりやや強い 粘性弱い 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 7: にぶい黄褐 10YR5/4 シルト しまりあり 粘性弱い (基壇土下層)
- 8: 地山土

4-4'

- 1: 暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い As-B 混
- 2: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり 粘性あり 褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5cm) 混 (基壇土上層)
- 3: 灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 5~10cm)、褐色粒子混 (基壇土上層)
- 4: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、黒褐色土ブロック (径 0.5~1cm) 少量 (礎石下部の掘り込み)
- 5: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 6: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い (基壇土下層)

5-5'

- 1: 暗褐 10YR3/4 シルト しまりあり 粘性弱い 褐色土ブロック (径 0.5~1cm) 微量 (基壇土上層)
- 2: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり 粘性あり 褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5cm) 混 (基壇土上層)
- 3: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 黒色土ブロック (径 0.5~1cm) 混 (基壇土上層)
- 4: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 5: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い (基壇土下層)

6-6'

- 1: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 5~30cm) 多量 (土壘)
- 2: 暗褐 7.5YR3/3 しまりややあり 粘性弱い 礫 (径 1~5cm) 多量 被熱粘土痕混 (土壘)
- 3: 暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い As-B 多量
- 4: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-B 混 焼土粒子、炭化物粒子少量
- 5: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性あり As-B 少量 礫 (径 1cm)、焼土粒子微量
- 6: 灰黄褐 10YR4/2 しまり弱い 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5cm)、細砂 (As-B か?) 混
- 7: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性ややあり 白色粒子、褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5cm) 少量
- 8: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり 粘性ややあり 礫 (径 2~5cm) 微量 (基壇土上層)
- 9: 褐 10YR4/4 しまりあり 粘性ややあり 褐色土ブロック (径 1~2cm) 混 (基壇土上層)
- 10: 暗褐 10YR3/4 シルト しまりやや強い 粘性あり 白色粒子、礫 (径 1~2cm) 少量 (基壇土上層)
- 11: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり強い 粘性あり 褐色土ブロック (径 0.5~1cm) 少量 (基壇土上層)
- 12: 褐 10YR4/4 シルト しまりあり 粘性弱い (基壇土上層)
- 13: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 白色粒子少量 褐色粒子微量 (基壇土上層)
- 14: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 褐色土ブロック (径 0.5cm) 少量 (基壇土上層)
- 15: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性あり (礎石下部の掘り込み)
- 16: 黒褐 10YR3/1 シルト しまりあり 粘性ややあり 褐色土ブロック (径 0.5~1cm) 少量 (礎石下部の掘り込み)
- 17: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性あり 褐色土ブロック (径 10cm) 少量 (基壇土中層)
- 18: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子混 (基壇土中層)
- 19: 黒褐 10YR3/2 シルト しまりややあり 粘性ややあり (基壇土中層)
- 20: にぶい黄褐 10YR5/4 シルト しまりやや強い 粘性弱い 下層に礫層が堆積 (基壇土下層)
- 21: 地山土

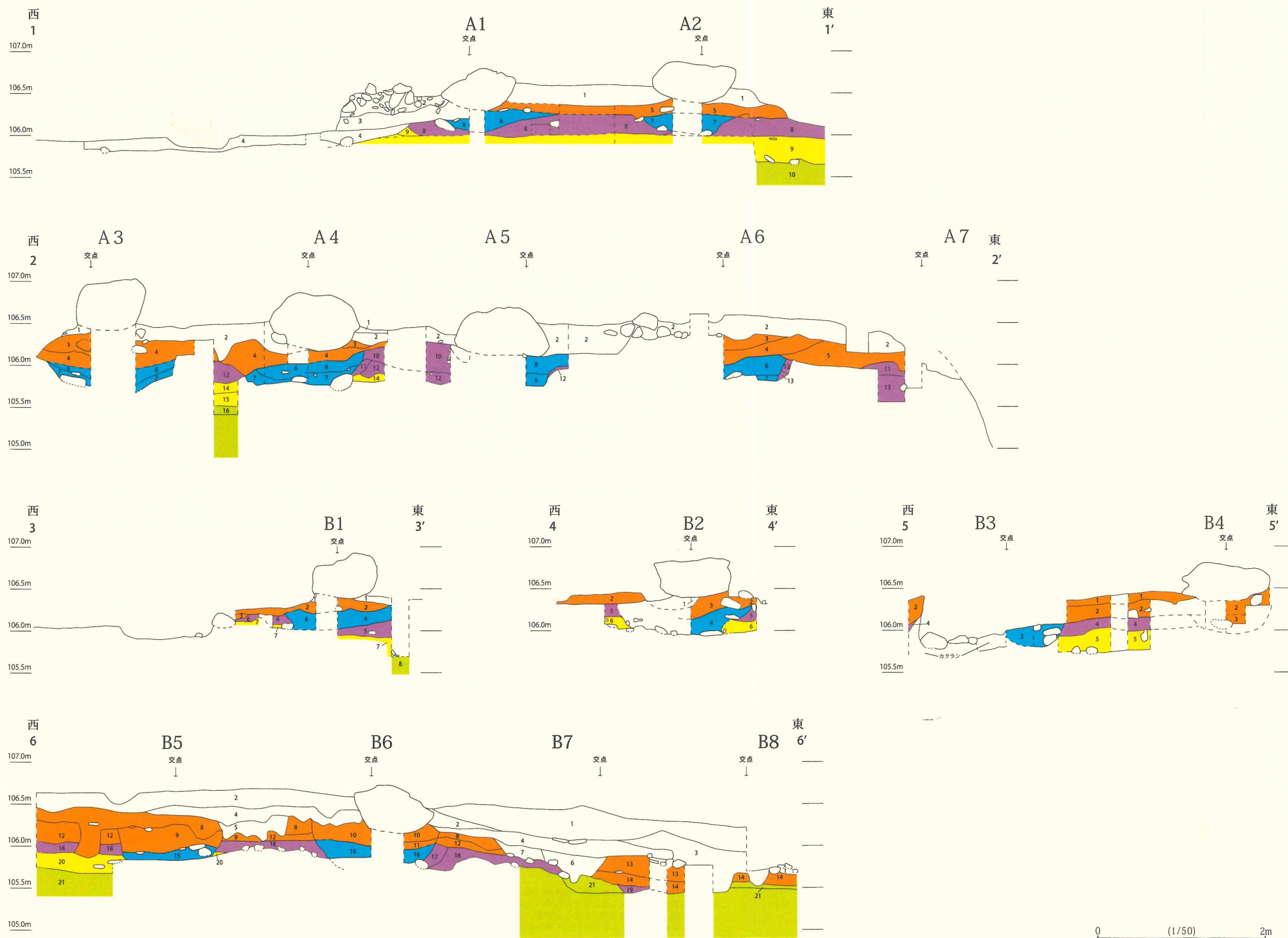


図 37 SB03 土層断面図 (1)

8-8'

- 1: 礎石下部の掘り込み
- 2: 礎石下部の掘り込み
- 3: 礎石下部の掘り込み
- 4: 基壇土中層
- 5: 地山土

9-9' 旧 No.10-3

- 1: 基壇土上層
- 2: 基壇土上層
- 3: 礎石下部の掘り込み
- 4: 礎石下部の掘り込み
- 5: 基壇土中層

10-10'

- 1: 黒褐 10YR2/3 しまり弱い 粘性弱い 褐色粒子混 (礎石下部の掘り込み)
- 2: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1cm) 少量 (基壇土中層)

11-11'

- 1: 黒褐 10YR2/3 しまりややあり 粘性弱い 礫 (径 5~10cm)、褐色粒子混 (基壇土上層)
- 2: 暗褐 10YR3/4 しまりやや強い 粘性ややあり 褐色粒子、褐色土ブロック (径 1~2cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 3: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子混 (基壇土中層)

12-12'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い 焼土粒子、炭化物粒子少量
- 2: 灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1cm) 少量 (基壇土上層)
- 3: 暗褐 10YR3/3 しまりやや強い 粘性ややあり 礫 (径 1cm)、褐色土ブロック (径 0.5~1cm) 少量 (礎石下部の掘り込み)
- 4: 黒褐 10YR2/3 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 5: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5cm) 少量 (基壇土中層)
- 6: 黒褐 10YR3/1 シルト しまりあり 粘性弱い (基壇土中層)

13-13'

- 1: 暗褐 7.5YR3/3 しまりややあり 粘性弱い 礫 (径 1~5cm) 多量 被熱粘土塊混 (土塁)
- 2: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性ややあり As-B 混 焼土粒子少量 (2層に類似する)
- 3: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性弱い As-B 多量
- 4: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、礫 (径 1~2cm) 少量 (基壇土上層)
- 5: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり 白色粒子、褐色粒子少量 (基壇土上層)
- 6: 灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性弱い 白色粒子混 褐色粒子、礫 (径 1cm) 少量 (基壇土上層)
- 7: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり 粘性ややあり 礫 (径 2~5cm) 微量 (基壇土上層)
- 8: 灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性あり 白色粒子少量 褐色粒子微量 (基壇土上層)
- 9: 褐 10YR4/4 シルト しまりあり 粘性弱い (基壇土上層)
- 10: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 白色粒子少量 褐色粒子微量 (基壇土上層)
- 11: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 褐色土ブロック (径 0.5cm) 少量 (基壇土上層)
- 12: 黒褐 10YR2/3 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 13: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子混 (基壇土中層)

14-14'

- 1: 暗褐 10YR3/3 細砂+シルト ややゆるい As-A 多量 礫 (径 1~10cm) 多量 (土塁)
- 2: 1 と同様 (土塁) または崩落土
- 3: 黒褐 10YR2/2 細砂+シルト ややしめる As-B 混
- 4: 黒褐 10YR2/2 シルト+細砂 よくしめる
- 5: 黒褐 10YR2/2 シルト+細砂 よくしめる 炭化物 (径 1cm) 微量
- 6: 黒褐 10YR2/3 シルト+細砂 よくしめる 炭化物混
- 7: 黒褐 10YR2/2 シルト+細砂 よくしめる (基壇土上層)
- 8: 黒褐 10YR3/2 シルト よくしめる (基壇土上層)
- 9: 暗褐 10YR3/4 シルト よくしめる 円礫 (径 10~20cm) 大量 (地山土)

16-16'

- 1: 暗褐 10YR3/4 礫 (径 1~2cm) 少量 白色粒子、褐色粒子混 (礎石下部の掘り込み)
- 2: 地山土

17-17'

- 1: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子混 (基壇土上層)
- 2: 暗褐 10YR3/4 しまりややあり 粘性ややあり 白色粒子多量 褐色粒子、礫 (径 1cm) 少量 (基壇土上層)
- 3: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い 白色粒子混 礫 (径 1cm) 少量 (礎石下部の掘り込み)
- 4: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子少量 (礎石下部の掘り込み)
- 5: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1cm)、白色粒子混 (礎石下部の掘り込み)
- 6: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子混 (礎石下部の掘り込み)
- 7: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 砂粒多量 (基壇土中層)
- 8: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1~10cm) 多量 白色粒子少量 (基壇土中層)
- 9: 黒褐 10YR3/1 しまりやや強い 粘性弱い 褐色粒子少量 礫 (径 1cm) 微量 (基壇土中層)
- 10: 暗褐 10YR3/4 シルト しまりやや強い 粘性弱い 白色粒子少量 (基壇土中層)
- 11: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 砂粒、礫 (径 1cm) 混 (地山土)

18-18'

- 1: 灰黄褐 10YR4/2 シルト しまりややあり 粘性弱い 鉄分多量 礫 (径 5~20cm) 混

19-19'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い 礫 (径 3~5cm) 多量 焼土粒子、被熱粘土塊混 (土塁)
- 2: 黒褐 10YR2/2 しまりあり 粘性弱い As-B 多量 礫 (径 1~2cm) 少量
- 3: 黒 7.5YR2/1 しまりやや強い 粘性弱い シルトブロック (径 0.5cm) 混 (基壇土上層)
- 4: 黒褐 10YR3/1 しまりやや強い 粘性あり 礫 (径 1~2cm) 微量 (基壇土上層)

20-20'

- 1: 黒褐 10YR2/2 しまりあり 粘性弱い As-A 多量 礫 (径 1~2cm) 少量
- 2: 黒 10YR2/1 しまりやや強い 粘性あり As-B、礫 (径 1~2cm) 少量 (土塁)
- 3: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性あり As-B 少量 焼土粒子微量
- 4: 黒褐 10YR3/1 しまりやや強い 粘性あり 礫 (径 1~2cm) 微量 (基壇土上層)
- 5: 礫 (径 3~10cm) 大量 (地山土)

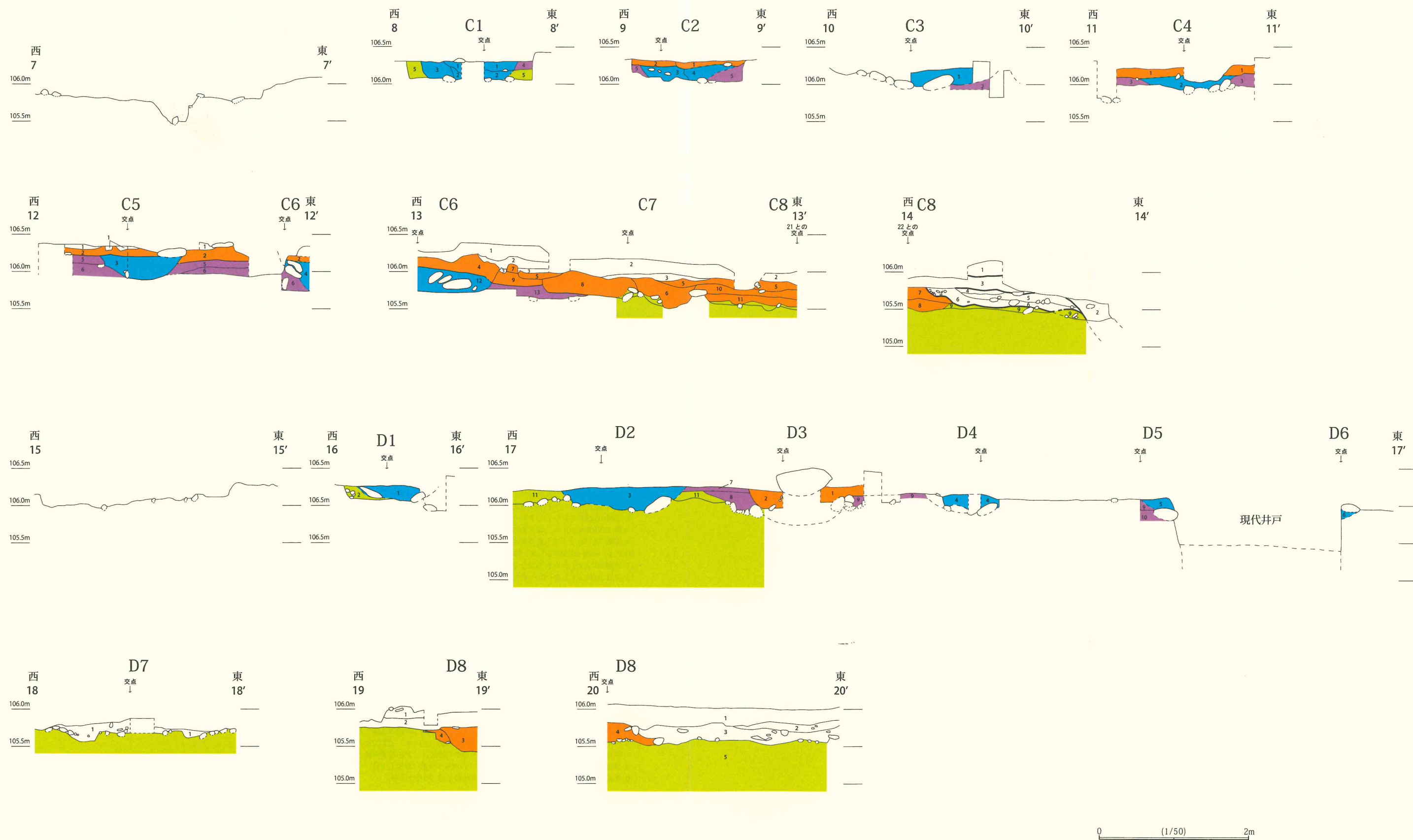


図 38 SB03 土層断面図 (2)

21-21'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い粘性弱い As-B 多量
- 2: 暗褐 7.5YR3/4 しまりあり粘性弱い 焼土粒子、被熱粘土塊混（土塁）
- 3: 黒褐 10YR3/1 しまりあり粘性弱い As-B 多量
- 4: 暗褐 10YR3/3 しまりあり粘性ややあり 白色粒子少量 褐色粒子微量（基壇土上層）
- 5: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い粘性弱い 褐色粒子少量（基壇土上層）
- 6: 褐 10YR4/4 シルト しまりあり粘性弱い（地山土）

22-22'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い粘性弱い 焼土粒子、被熱粘土塊、礫（径 5cm）混（土塁）
- 2: 黒褐 10YR2/2 しまりあり粘性弱い As-B 多量 礫（径 1~2cm）少量
- 3: 暗褐 10YR3/4 しまりややあり粘性弱い As-B 混
- 4: 黒褐 10YR3/2 しまり強い粘性弱い As-B 多量 硬化している
- 5: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い粘性弱い As-B 多量
- 6: 黒 7.5YR2/1 しまりややあり粘性弱い 白色粒子、炭化物粒子、炭化物混（基壇土上層）

23-23'

- 1: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり粘性弱い 礫（径 5~20cm）多量（土塁）
- 2: 暗褐 10YR3/4 しまりあり粘性弱い 礫（径 5cm）、被熱粘土塊（径 2~3cm 粘土）混（土塁）
- 3: 黒褐 10YR3/2 しまりあり粘性ややあり As-B 混
- 4: 暗褐 10YR3/4 しまりあり粘性ややあり 白色粒子、礫径 2~3cm）少量
- 5: 灰黄褐 10YR4/2 シルト しまりあり粘性弱い（基壇土上層）

24-24'

- 1: 灰黄褐 10YR4/2 シルト しまりややあり粘性弱い 鉄分多量 礫（径 5~20cm）混

25-25'

- 1: 暗褐 10YR3/3 しまりあり粘性あり 礫（径 1~20cm）、褐色土ブロック（径 1~2cm）混（土塁崩落土）
- 2: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い粘性ややあり 礫（1~3cm）多量 褐色粒子混（土塁崩落土）
- 3: 暗褐 10YR3/4 しまりあり粘性あり 礫（径 5~10cm）少量（土塁）
- 4: 黒褐 10YR3/2 しまり弱い粘性ややあり As-B 少量（土塁）
- 5: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり弱い粘性あり As-B 褐色土混
- 6: 黒褐 10YR2/3 しまりあり粘性弱い As-B 混
- 7: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり粘性ややあり 褐色土ブロック（径 0.5~1.5cm）少量（基壇土上層）
- 8: 黒褐 7.5YR2/2 しまりあり粘性あり 褐色土ブロック（径 1cm）少量 褐色粒子微量（礎石下部の掘り込み）

26-26'

- 1: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり粘性弱い 礫（径 3~20cm）多量（土塁）
- 2: 暗褐 10YR3/3 しまりあり粘性あり 褐色土ブロック（径 3~5cm）少量（土塁）
- 3: 暗褐 7.5YR3/3 しまりややあり粘性弱い 礫（径 1~5cm）多量 被熱粘土塊多量（土塁）
- 4: 暗褐 10YR3/4 しまりあり粘性あり As-B 混 焼土粒子、炭化物粒子少量
- 5: 灰黄褐 10YR4/2 シルト ややしめる粘性弱い 班鉄多量 礫（径 5~20cm）
- 6: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり粘性ややあり 褐色土ブロック（径 0.5~1.5cm）少量（基壇土上層）
- 7: 暗褐 10YR3/4 シルト しまりやや強い粘性あり 白色粒子、礫（径 1~2cm）少量（基壇土上層）
- 8: 褐 10YR4/4 シルト しまりあり粘性弱い（基壇土上層）
- 9: 黒褐 7.5YR2/2 しまりあり粘性あり 褐色土ブロック（径 1cm）少量 褐色粒子微量（礎石下部の掘り込み）
- 10: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり強い粘性あり 褐色土ブロック（径 0.5~1cm）少量（礎石下部の掘り込み）
- 11: 黒褐 10YR3/1 シルト しまりあり粘性ややあり 褐色土ブロック（径 0.5~1cm）少量（礎石下部の掘り込み）
- 12: 黒褐 10YR3/1 しまりあり粘性ややあり 褐色粒子混（基壇土中層）

27-27'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまりあり粘性あり 礫（径 2~30cm）多量 下層では褐色土が層状に堆積（土塁）
- 2: 暗褐 7.5YR3/4 しまり弱い粘性弱い As-B 混（土塁）
- 3: 褐 10YR4/4 しまりあり粘性ややあり 白色粒子、礫（径 1cm）少量（土塁）
- 4: 黒褐 10YR3/2 しまり弱い粘性ややあり As-B 多量
- 5: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり粘性弱い 褐色粒子微量
- 6: 灰黄褐 10YR4/2 シルト ややしめる粘性弱い 班鉄多量 礫（径 5~20cm）
- 7: 褐 10YR4/4 シルト しまりあり粘性ややあり（基壇土上層）

28-28'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い粘性弱い 礫（径 5~10cm）、被熱粘土塊混（土塁）
- 2: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり粘性弱い 白色粒子少量（基壇土上層）
- 3: 暗褐 10YR3/4 しまりあり粘性弱い 白色粒子、褐色土ブロック（径 0.5cm）少量（礎石下部の掘り込み）
- 4: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり粘性ややあり 白色粒子、褐色粒子少量（基壇土中層）
- 5: 黒褐 10YR3/1 シルト しまりあり粘性弱い 白色粒子少量（基壇土中層）
- 6: 黒褐 10YR3/1 しまりあり粘性ややあり 褐色粒子混（基壇土下層）

29-29'

- 1: 攪乱
- 2: 褐 10YR4/4 しまりあり粘性弱い 褐色粒子、白色粒子、炭化物粒子少量（基壇土上層）
- 3: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり粘性あり 白色粒子混 礫（径 1~2cm）少量（基壇土上層）
- 4: 暗褐 10YR3/4 シルト しまりやや強い粘性弱い 褐色土ブロック少量（礎石下部の掘り込み）
- 5: 黒褐 10YR3/1 シルト しまりあり粘性弱い（基壇土中層）
- 6: 黒褐 10YR3/1 しまりあり粘性ややあり 褐色粒子混（基壇土下層）
- 7: 地山土

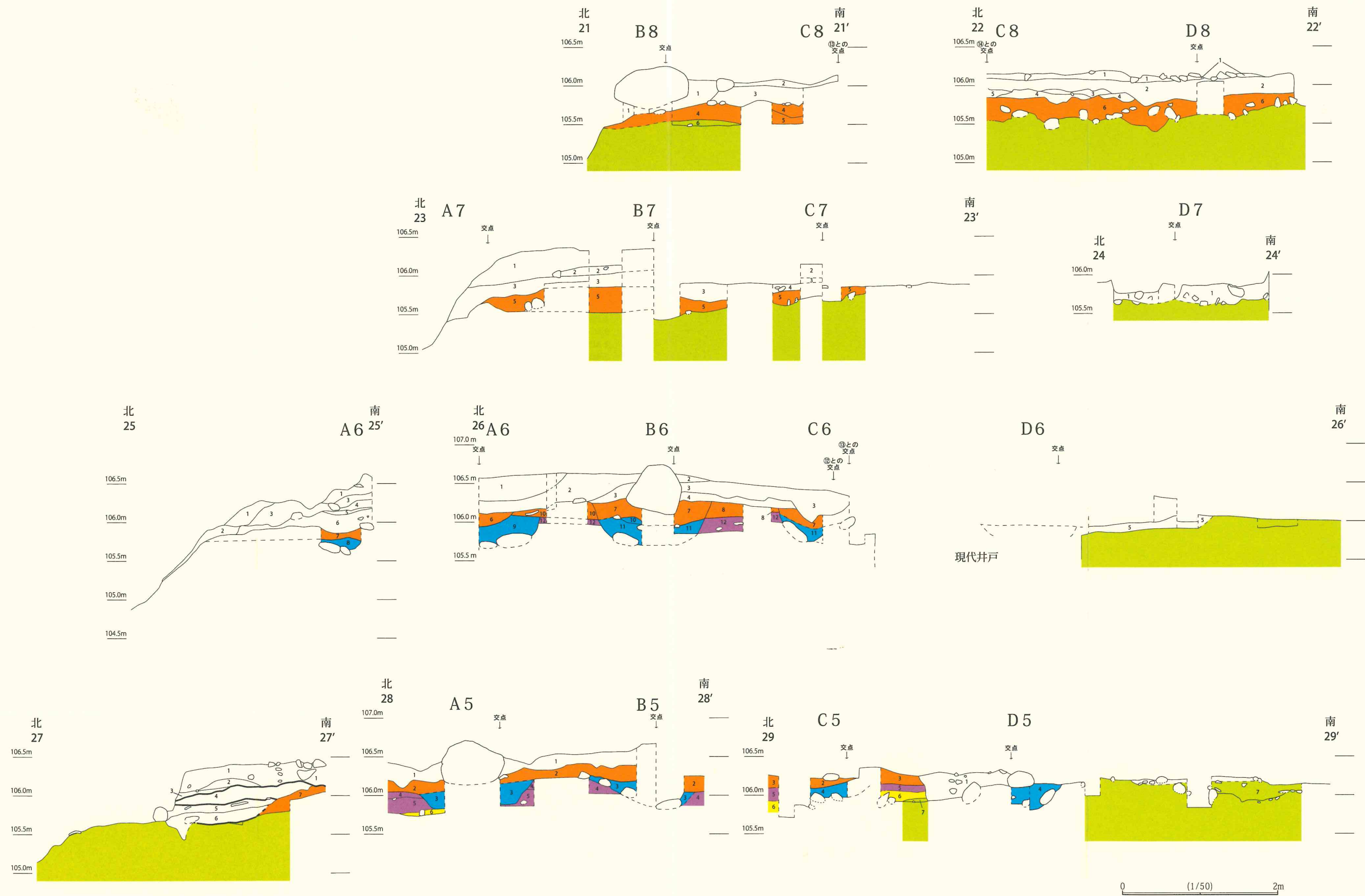


図 39 SB03 土層断面図 (3)

30-30'

- 1:暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり 礫 (径 2-30cm) 多量 下層では褐色土が層状に堆積 (土塁)
- 2:黒褐 10YR3/2 しまり弱い 粘性ややあり As-B 多量
- 3:にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性あり 白色粒子混 (雨落溝)
- 4:褐 10YR4/4 シルト しまりあり 粘性ややあり (基壇土上層)
- 5:にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまり強い 粘性弱い 褐色粒子、白色粒子混 (基壇土上層)
- 6:暗褐 10YR3/4 しまりやや強い 粘性ややあり 褐色粒子、褐色土ブロック (径 1-2cm) 混 (礎石下部の掘り込み)

31-31'

- 1:暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い 礫 (径 1-2cm)、白色粒子混 (土塁)
- 2:褐 10YR4/4 しまり弱い 粘性弱い 礫 (3-10cm) 多量 (土塁)
- 3:暗褐 10YR3/3 しまりやや強い 粘性ややあり As-B、礫 (径 1-2cm) 混
- 4:暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性あり 白色粒子少量 焼土ブロック (径 1cm) 微量
- 5:褐 10YR4/4 シルト しまり強い 粘性弱い 褐色粒子、白色粒子少量 (基壇土上層)
- 6:黄褐 2.5Y5/3 シルト しまり非常に強い 粘性あり 褐色土ブロック (径 1-2cm) 多量 (基壇土上層)
- 7:にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い (基壇土上層)
- 8:黒褐色 10YR2/3 しまりあり 粘性弱い 礫 (5-10cm)、褐色粒子混 (基壇土上層)
- 9:にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまり強い 粘性弱い 褐色粒子、白色粒子混 (礎石下部の掘り込み)
- 10:暗褐 10YR3/4 しまりやや強い 粘性ややあり 褐色粒子、褐色土ブロック (径 1-2cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 11:にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子少量 (礎石下部の掘り込み)
- 12:黒褐 10YR3/1 シルト しまりあり 粘性弱い 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 13:黒褐 10YR3/1 しまりやや強い 粘性弱い 褐色粒子少量 礫 (径 1cm) 微量 (基壇土中層)
- 14:地山土

32-32'

- 1:暗褐 10YR3/4 しまりややあり 粘性弱い 礫 (径 1-5cm) 少量
- 2:黒褐 10YR3/2 しまり弱い 粘性弱い As-B 混
- 3:にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子混
- 4:暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い 砂粒 (As-B?) 少量
- 5:暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い 褐色粒子少量

33-33'

- 1:暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い As-A 多量 礫 (径 5-20cm) 混
- 2:暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い As-B 少量
- 3:黒褐 10YR3/2 しまり弱い 粘性弱い As-B 混
- 4:にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子、褐色土ブロック (径 1cm) 少量 (基壇土上層)
- 5:暗褐 10YR3/4 シルト しまりあり 粘性あり 細砂混 (基壇土上層)
- 6:にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、炭化物粒子微量 (基壇土上層)
- 7:暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、褐色土ブロック (径 1-3cm) 混 (基壇土上層)
- 8:灰黄褐 10YR4/2 しまりややあり 粘性やや弱い 褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5-1cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 9:暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり 粘性ややあり (礎石下部の掘り込み)
- 10:にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い 黒色土ブロック (径 0.5-1cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 11:暗褐 10YR3/3 しまりややあり 粘性ややあり 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 12:黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性あり 褐色土ブロック (径 1cm)、礫 (径 1-2cm) 少量 (基壇土中層)
- 13:黒 10YR2/1 しまりあり 粘性あり 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 14:にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまり弱い 粘性あり (基壇土下層)

34-34'

- 1:暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い 礫 (径 1cm) 混 (礎石下部の掘り込み)
- 2:黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い 白色粒子混 (礎石下部の掘り込み)

35-35'

- 1:As-A 混土層 礫混 (礎石抜取穴)
- 2:暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、砂粒 (径 0.2cm) 混 瓦出土 (雨落溝?)
- 3:灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、礫 (径 1cm) 混 (基壇土上層)
- 4:黒褐 10YR2/3 しまりあり 粘性あり 褐色粒子、白色粒子混 (礎石下部の掘り込み)
- 5:黒 10YR2/1 しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子混 (基壇土中層)
- 6:礫層 礫 (径 5-10cm) 大量 (地山土)

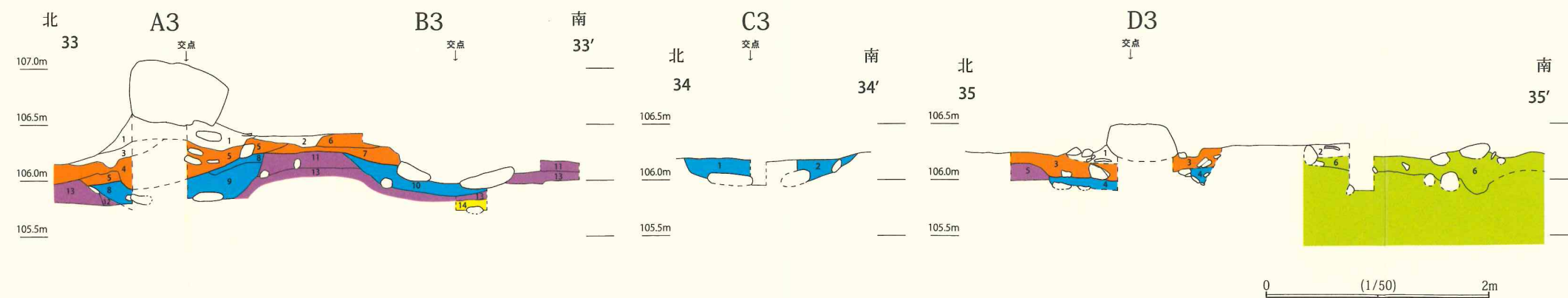
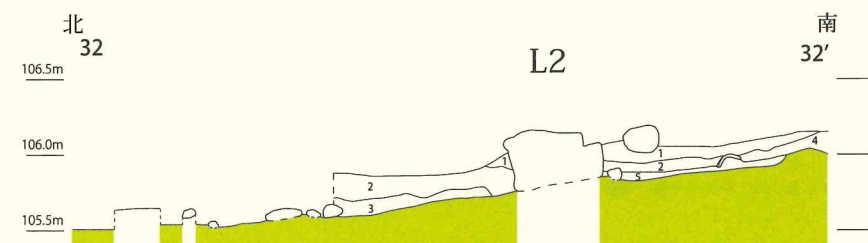
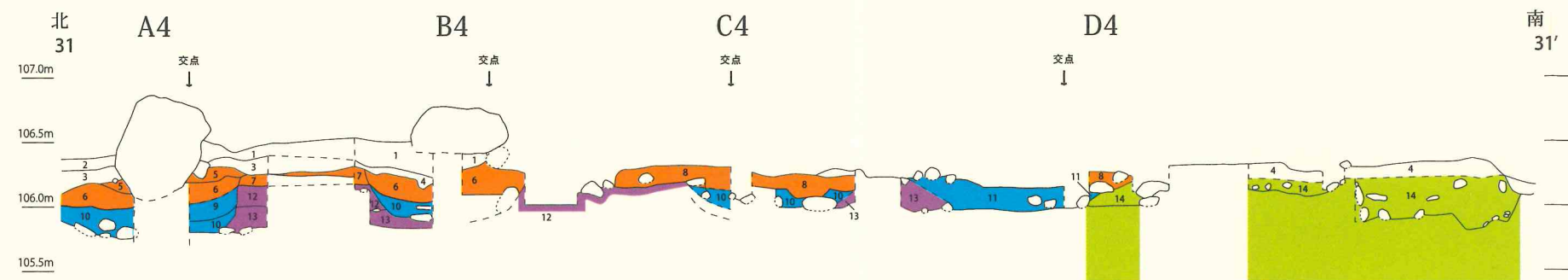
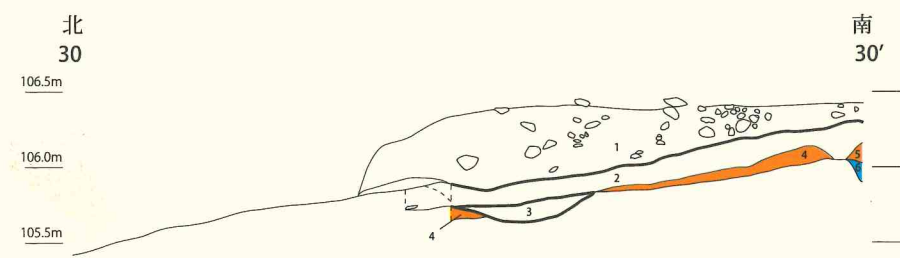


图 40 SB03 土层断面图 (4)

36-36'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり 礫（径 2~10cm）多量 As-B 混 As-A 直下層
- 2: 褐 10YR4/4 シルト しまりあり 粘性弱い As-B 多量
- 3: 暗褐 10YR3/4 シルト しまり強い 粘性あり As-B 少量 礫（径 1cm）微量（雨落溝?）
- 4: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり 白色粒子少量
- 5: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色土（地山土）ブロック（径 0.5cm）少量（基壇外装採取痕?）
- 6: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまり弱い 粘性弱い 褐色粒子、褐色土ブロック（径 0.5cm）少量
- 7: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりやや強い 粘性あり（基壇土上層）
- 8: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子少量（基壇土上層）
- 9: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまり強い 粘性弱い 白色粒子少量（基壇土上層）
- 10: 褐 10YR4/4 シルト しまり強い 粘性あり（基壇土上層）
- 11: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性ややあり（地山土）

37-37'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い As-A 礫（径 2~3cm）混（土塁）
- 2: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性ややあり As-B 多量 礫（径 1~2cm）少量
- 3: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性ややあり（基壇土上層）
- 4: 灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性弱い 礫（径 5~10cm）、褐色粒子混（基壇土上層）
- 5: 黒褐 10YR3/1 しまり強い 粘性あり 礫（径 1~2cm）少量（礎石下部の掘り込み）
- 6: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、黒褐色土ブロック（径 0.5~1cm）少量（礎石下部の掘り込み）
- 7: 黒褐 10YR2/3 しまり強い 粘性ややあり 白色粒子、褐色粒子微量（基壇土中層）
- 8: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子少量（基壇土中層）
- 9: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性あり（基壇土下層）
- 10: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い（基壇土下層）

38-38'

- 1: 基壇土上層
- 2: 礎石下部の掘り込み
- 3: 基壇土中層

39-39'

- 1: 灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、礫（径 1cm）混（基壇土上層）
- 2: 灰黄褐 10YR4/2 しまりやや強い 粘性弱い 白色粒子、礫（径 1~2cm）混（礎石下部の掘り込み）
- 3: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い 礫（径 1~2cm）多量 白色粒子、褐色粒子混（礎石下部の掘り込み）
- 4: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 砂粒多量（基壇土中層）
- 5: 地山土

40-40'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまりややあり 粘性弱い 礫（径 1~5cm）混（土塁）
- 2: 暗褐 7.5YR3/4 しまりあり 粘性あり 白色粒子、礫（径 1cm）少量（土塁）
- 3: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 白色粒子混 褐色粒子、礫（径 0.5~1cm）少量
- 4: 暗褐 10YR3/3 シルト しまりあり 粘性弱い（基壇土上層）
- 5: 暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い（基壇土上層）
- 6: 灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性弱い 礫（径 5~10cm）褐色粒子混（基壇土上層）
- 7: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性あり 褐色土ブロック（径 0.5~1cm）混（礎石下部の掘り込み）
- 8: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い 褐色粒子、黒褐色土ブロック（径 0.5~1cm）少量（礎石下部の掘り込み）
- 9: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性ややあり 白色粒子、褐色粒子混 褐色土ブロック（径 0.5~1cm）少量（基壇土中層）
- 10: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性やや強い 褐色粒子、白色粒子混（基壇土中層）

41-41'

- 1: 基壇土上層
- 2: 礎石下部の掘り込み
- 3: 礎石下部の掘り込み
- 4: 基壇土中層
- 5: 地山土

42-42'

- 1: 暗褐 10YR3/4 礫（径 1~2cm）少量 白色粒子、褐色粒子混（礎石下部の掘り込み）
- 2: 地山土

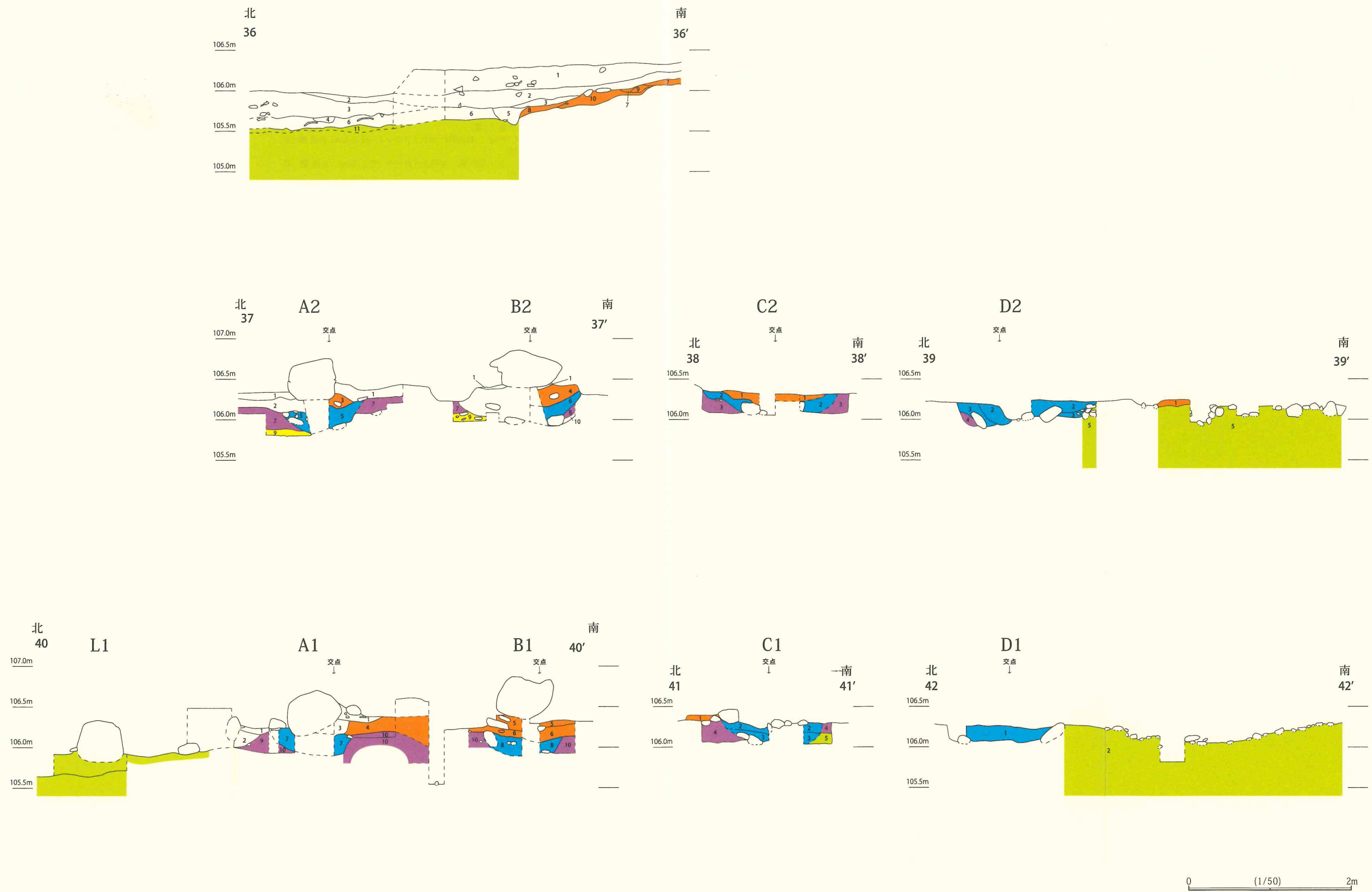


图 41 SB03 土層断面图 (5)

43-43'

- 1: 今回調査による排土
- 2: 暗褐 7.5YR3/3 しまり弱い 粘性弱い 礫 (径 1~3cm) As-A 混 (堀)
- 3: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり 褐色土ブロック (径 2cm) 混 礫 (径 10cm) 少量 (土塁)
- 4: 暗褐 10YR3/3 しまりややあり 粘性弱い 礫 (径 2~10cm) 多量 褐色土少量 (土塁)
- 5: 暗褐 10YR3/3 しまりややあり 粘性あり As-B 混 褐色土ブロック (径 0.5~1cm)、褐色粒子、礫 (径 5cm) 少量 (土塁)
- 6: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-B 混 褐色粒子少量 (土塁)
- 7: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり弱い 粘性弱い As-B 多量 褐色粒子、褐色土ブロック (径 0.5cm) 微量 (土塁)
- 8: 褐 10YR4/4 しまりあり 粘性あり As-B 混
- 9: 礫層 礫 (径 2~3cm) 大量 (土塁)
- 10: 暗褐 10YR3/4 しまりややあり 粘性弱い 褐色土ブロック (径 2~3cm) 多量 礫 (径 2cm)、粗砂少量 (土塁)
- 11: 暗褐 7.5YR3/3 しまりあり 粘性弱い 褐色土ブロック (径 5~20cm) 多量 礫 (径 10~20cm) 少量 (土塁)
- 12: 暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い As-B 多量 褐色土ブロック (径 1~3cm)、礫 (径 0.5~2cm) 少量 (土塁)
- 13: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり弱い 粘性弱い As-B 多量 褐色粒子少量 (土塁)
- 14: 暗褐 10YR3/3 しまりややあり 粘性あり As-B 混 (土塁)
- 15: 暗褐 10YR3/4 しまり非常に強い 粘性なし As-B 多量 硬化している (土塁)
- 16: 黒褐 10YR3/2 しまり弱い 粘性あり As-B 多量 礫 (径 2cm) 微量 (土塁)
- 17: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり弱い 粘性あり As-B 混 褐色土ブロック (径 0.5~1cm) 少量 (土塁)
- 18: 黒褐 10YR3/2 しまりややあり 粘性弱い As-B 多量
- 19: にぶい黄褐 10YR5/4 シルト しまり強い 粘性弱い

44-44'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり 礫 (径 2~10cm) 多量 As-B 混 上面に As-A が堆積 (土塁)
- 2: 暗褐 10YR3/4 しまり強い 粘性あり 礫 (径 2~5cm)、白色粒子、褐色粒子多量 (土塁)
- 3: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり強い 粘性やや強い 礫 (径 5~20cm) 多量 (土塁)
- 4: 暗褐 10YR3/3 しまりやや強い 粘性弱い As-B 多量 礫 (径 1cm) 少量
- 5: 褐 10YR4/4 しまりややあり 粘性あり 褐色土ブロック (径 1~3cm) 多量 (土塁)
- 6: 黒褐 10YR3/1 しまり強い 粘性弱い As-B 多量
- 7: 暗褐 10YR3/3 しまり強い 粘性弱い As-B 白色粒子、褐色粒子混
- 8: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまり強い 粘性弱い 白色粒子混
- 9: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い As-B 混 褐色粒子少量
- 10: 黒褐 10YR3/2 しまり強い 粘性弱い As-B 多量
- 11: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-B 少量
- 12: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性あり 白色粒子、褐色粒子少量
- 13: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子少量 (地山土)
- 14: 褐 10YR4/4 シルト しまりあり 粘性ややあり (地山土)

45-45'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い As-B 多量 (土塁)
- 2: にぶい黄褐 10YR5/4 しまりあり 粘性あり 礫 (径 5~30cm) 大量 (土塁)
- 3: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子混 (土塁)
- 4: 灰黄褐 10YR4/2 しまりあり 粘性あり As-B、黒褐色土ブロック (径 1~2cm) 混 (土塁)
- 5: 暗褐 10YR3/4 しまり非常に強い 粘性なし As-B、白色粒子多量 (土塁)
- 6: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性あり As-B 混 炭化物粒微量
- 7: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり非常に強い 粘性なし As-B、白色粒子多量
- 8: 暗褐 10YR3/3 しまり強い 粘性なし As-B、色粒子混
- 9: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い As-B 多量 白色粒子、褐色粒子少量
- 10: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性あり As-B 白色粒子混
- 11: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い 褐色粒子少量
- 12: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性あり 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 13: (基壇土下層)

46-46'

- 1: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1~20cm) 大量 (土塁)
- 2: 暗褐 7.5YR3/4 しまりあり 粘性弱い As-B 多量 (土塁)
- 3: 暗褐 10YR3/3 しまり非常に強い 粘性弱い As-B 大量 (土塁)
- 4: 暗褐 7.5YR3/3 しまり弱い 粘性あり As-B、礫 (径 1cm) 混
- 5: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性弱い As-B 多量
- 6: 暗褐 7.5YR3/3 しまりあり 粘性あり As-B、礫 (径 1cm) 少量
- 7: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性あり 白色粒子、As-B 少量
- 8: 黒褐 10YR3/2 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子混 As-B 微量
- 9: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性ややあり
- 10: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い 褐色粒子少量
- 11: 暗褐 10YR3/4 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子少量 (基壇土上層)
- 12: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性ややあり 白色粒子混 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 13: 基壇土下層
- 14: 基壇土下層
- 15: 地山土

47-47'

- 1: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1~30cm) 大量 (土塁)
- 2: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性あり 礫 (径 1~5cm)、As-B 混 (土塁)
- 3: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-B 多量 礫 (径 1cm)、褐色粒子少量 (土塁)
- 4: 暗褐 7.5YR3/4 しまり非常に強い 粘性なし 白色粒子、As-B 混 (土塁)
- 5: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性弱い As-B 多量 白色粒子少量
- 6: 黒褐 10YR3/1 しまりややあり 粘性弱い As-B 多量
- 7: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性ややあり 礫 (径 1~3cm) 多量 As-B 混
- 8: 暗褐 10YR3/4 シルト しまり弱い 粘性弱い 白色粒子混 (外装抜取痕)
- 9: 暗褐 10YR3/4 しまりややあり 粘性あり As-B 白色粒子少量 (雨落溝)
- 10: 褐 10YR4/6 しまり弱い 粘性あり 礫 (径 3~10cm) 微量 (基壇土上層)
- 11: にぶい黄褐 10YR5/4 シルト しまり強い 粘性弱い 白色粒子、礫 (径 1cm) 微量 (基壇土上層)
- 12: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりあり 粘性あり 粗砂 (径 0.2cm) 少量 (基壇土上層)
- 13: 黒褐 10YR3/2 しまり弱い 粘性弱い 白色粒子、礫 (径 1~2cm) 混
- 14: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1cm) 混 (地山土)

48-48'

- 1: 褐 10YR4/4 しまり弱い 粘性弱い 礫 (径 1~20cm) 多量 (土塁)
- 2: 暗褐 10YR3/3 しまりあり 粘性弱い As-B、褐色粒子、白色粒子混 (土塁)
- 3: 暗褐 7.5YR3/4 しまり弱い 粘性弱い As-B 多量 礫 (径 1~2cm) 少量 (土塁)
- 4: 黒褐 10YR2/2 しまりあり 粘性弱い As-B 多量 礫 (径 1~2cm) 混
- 5: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 礫 (径 1~3cm) 多量 As-B 褐色粒子混
- 6: 暗褐 10YR3/3 しまり弱い 粘性弱い As-B、白色粒子少量
- 7: にぶい黄褐 10YR4/3 しまりやや強い 粘性弱い 白色粒子混 As-B 少量
- 8: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-B 微量
- 9: 基壇土上層
- 10: 暗褐 7.5YR3/4 しまりあり 粘性やや強い 礫 (径 1~5cm) 多量 (地山土)
- 11: 暗褐 10YR3/4 シルト しまり強い 粘性あり 礫混 (地山土)
- 12: 黒褐 10YR3/2 しまりややあり 粘性弱い 礫 (径 2~20cm) 大量 (地山土)

49-49'

- 1: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-B 混
- 2: 暗褐 10YR3/4 しまりややあり 粘性弱い As-B 多量 礫 (径 2cm) 少量
- 3: 黒褐 10YR3/2 しまり弱い 粘性あり 褐色粒子少量
- 4: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性あり 褐色粒子少量
- 5: 褐 10YR4/4 しまりやや強い 粘性あり 褐色土ブロック (径 1~2cm) 混 礫 (径 1~2cm) 白色粒子少量
- 6: 黒褐 10YR3/1 シルト しまりあり 粘性弱い 褐色粒子少量 (基壇土中層)
- 7: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト しまりあり 粘性ややあり 白色粒子少量 (基壇土上層)
- 8: にぶい黄褐 10YR6/4 シルト しまりあり 粘性ややあり (地山土)

50-50'

- 1: 暗褐 7.5YR3/3 しまり弱い 粘性弱い As-B、白色粒子混
- 2: にぶい黄褐 10YR4/3 しまり強い 粘性ややあり 白色粒子混 褐色粒子少量 (基壇土上層)
- 3: 褐 10YR4/6 しまりあり 粘性弱い 白色粒子少量 (基壇土上層)
- 4: 暗褐 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い 褐色粒子少量 (基壇土上層)
- 5: 黒褐 10YR2/2 しまりあり 粘性あり 白色粒子少量 (基壇土中層)
- 6: 暗褐 10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 白色粒子混 褐色粒子、炭化物粒子微量 (基壇土中層)
- 7: 灰黄褐 10YR4/2 しまり弱い 粘性弱い 白色粒子少量 (基壇土中層)
- 8: 黒褐 10YR3/1 しまりあり 粘性ややあり 白色粒子少量 褐色粒子、礫 (径 1cm) 微量 (基壇土下層)
- 9: にぶい黄褐 10YR7/4 シルト しまりやや強い 粘性あり (地山土)
- 10: 黒褐 10YR3/2 しまりあり 粘性あり 褐色粒子、礫 (径 1~2cm) 少量 (地山土)

52-52'

- 1: 暗褐 7.5YR3/4 しまりやや強い 粘性弱い 焼土粒子、鉄分多量 As-B、炭化物粒子混
- 2: 褐灰 10YR4/1 しまり強い 粘性弱い 鉄分多量 白色粒子、焼土粒子、As-B 少量
- 3: 灰黄褐 10YR4/2 しまり強い 粘性ややあり 白色粒子混 鉄分少量 (基壇土上層)
- 4: 褐灰 10YR4/1 しまり強い 粘性弱い 礫 (径 0.5~10cm) 大量 白色粒子少量 (地山土)

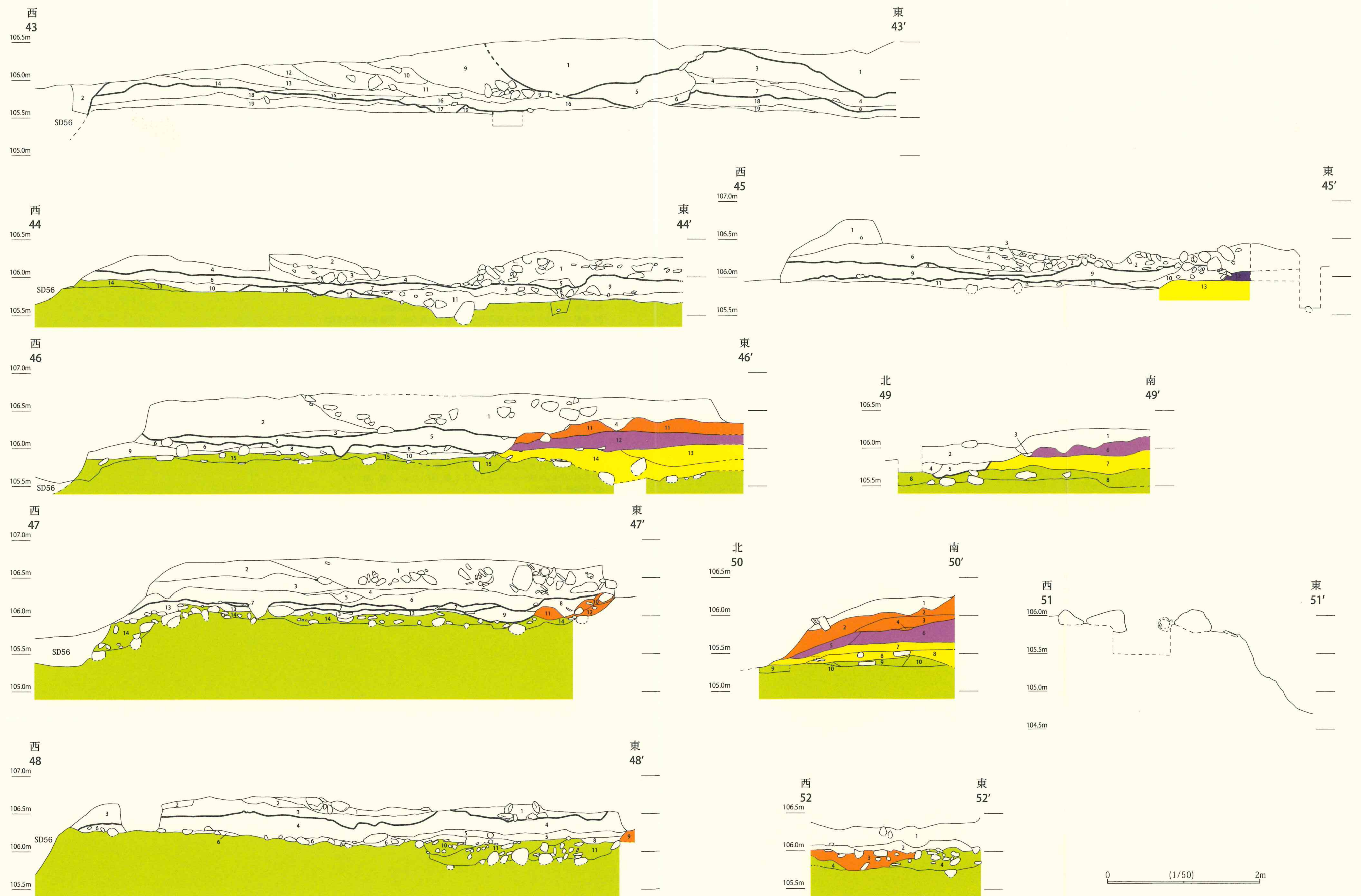


图 42 SB03 土层断面图 (6)

53-53'

- 1: 今回調査による排土
- 2: 黒褐 10YR2/2 粗砂～シルト ややゆるい As-A 混 竹根により攪乱
- 3: 黒褐 10YR2/3 粗砂～シルト ややしまる As-A 混
- 4: 暗褐 10YR3/3 粗砂～シルト ゆるい As-A 大量 竹根により攪乱
- 5: As-A 層 (池城堀埋土)
- 6: 暗褐 10YR3/3 シルト～粗砂 ややゆるい 礫 (径 1~10cm: 土塁の崩落か) 多量 (池城堀埋土)
- 7: 暗褐 10YR3/3 シルト～細砂 ややしまる 礫 (径 10cm: 土塁の崩落か) 少量 (池城堀埋土)
- 8: 黒褐 10YR2/3 シルト～細砂 ややゆるい 礫 (径 5~10cm: 土塁の崩落か) 少量 (池城堀埋土)
- 9: 暗褐 10YR3/3 礫～シルト ややゆるい 礫 (径 1~20cm) 大量 地山土層崩落土 (池城堀埋土)
- 10: 黒褐 10YR2/3 シルト～細砂 ややしまる As-B ? 微量
- 11: 黒褐 10YR2/3 シルト～細砂 よくしまる As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 12: 黒褐 10YR2/3 粗砂～シルト よくしまる 礫 (径 1~10cm) 大量 As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 13: 黒褐 10YR2/3 粗砂～シルト よくしまる 礫 (径 1~20cm) 大量 As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 14: 黒褐 10YR2/3 粗砂～シルト よくしまる 礫 (径 20cm) 大量 As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 15: 暗褐 10YR3/4 礫～シルト よくしまる 礫 (径 1~5cm) 大量 As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 16: 暗褐 10YR3/3 細砂～シルト よくしまる 礫 (径 5cm) 微量 As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 17: 暗褐 10YR3/4 細砂～シルト よくしまる 礫 (径 5cm) 微量 As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 18: 黒褐 10YR2/3 細砂～シルト よくしまる 礫 (径 1~5cm) 少量 As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 19: 暗褐 10YR3/3 粗砂～シルト よくしまる 礫 (径 1~5cm) 大量 As-B 混 (62T 北端石積み裏込め)
- 20: 暗褐 10YR3/4 礫～シルト ややゆるい 礫大量 (土塁)
- 21: 暗褐 10YR3/4 粗砂～シルト ややゆるい 20 層より礫少ない (土塁)
- 22: 暗褐 10YR3/3 シルト～細砂 ややしまる 礫 (径 1~2cm) 少量 (土塁)
- 23: 黒褐 10YR2/3 粗砂～シルト ややしまる As-B 混土 (土塁)
- 24: 黒褐 10YR3/2 シルト+細砂 ややしまる 礫 (径 1~10cm) 少量 (雨落ち溝?)
- 25: 黒褐 10YR2/3 粗砂～シルト ややしまる As-B 混土 (雨落ち溝?)
- 26: 黒褐 10YR2/3 細砂～シルト ややしまる (基壇外装剥取痕?)
- 27: 暗褐 10YR3/3 シルト+細砂 ややしまる 礫 (径 5cm) 少量 As-B を含まない
- 28: 暗褐 10YR3/3 シルト+細砂 ややしまる
- 29: 黒褐 10YR2/3 シルト～細砂 ややしまる 褐 10YR4/4 シルトブロック (径 1cm) 微量 As-B を含まない
- 30: 黒褐 10YR3/4 シルト+細砂 よくしまる 礫 (径 1~5cm) 微量 (基壇土上層)
- 31: 黒褐 10YR2/3 シルト+細砂 よくしまる 礫 (径 10cm) 多量 (基壇土中層)
- 32: 黒褐 10YR2/3 シルト+細砂 よくしまる 礫少ない (基壇土中層)
- 33: 暗褐 10YR3/3 シルト+細砂 よくしまる (基壇土下層)
- 34: 黒褐 10YR2/3 シルト～細砂 ややしまる 褐 10YR4/4 シルトブロック (径 2cm) 微量
- 35: 黒褐 10YR2/3 シルト+細砂 よくしまる 礫 (径 1~20cm) 大量
- 36: 黒褐 10YR2/3 細砂+シルト ややしまる (地山土)
- 37: 暗褐 10YR3/4 シルト よくしまる (地山土)
- 38: にぶい黄褐 10YR4/3 シルト よくしまる (地山土)
- 39: にぶい黄褐 10YR5/4 シルト よくしまる (地山土)
- 40: 黒褐 10YR2/3 シルト+細砂 よくしまる 礫 (径 1~20cm) 大量 (地山土)
- 41: 暗褐 10YR3/4 礫～シルト よくしまる 礫 (径 1~5cm) 大量 (地山土)
- 42: 岩盤層 (凝灰岩)



図 43 SB03 土層断面図 (7)

ともに 2.4m (8 尺) 等間となる。梁行総長は 7.2m、桁行総長は 16.8m である。床面積は 120.96㎡となる。

方位は柱筋の復元から正方位をとると考えられる。

旧地形の状況 (図 218) 基壇を断ち割ったサブトレンチ内の一部では、基本層序 V 層地山面まで確認している。SB03 の基壇直下は V - 2 層になるが、X=29331 以北では V - 1 層も見られる。基壇構築前の旧地表面は、基本層序 IV 層にあたる黒ボク土化した土壌が堆積していたと考えるのが自然である。しかし、基壇構築土直下にはこの黒ボク土が存在しないので、何らかの原因で失われたと思われる。すなわち、基壇構築前には IV 層上面が旧地表面を形成していた状況であったが、基壇構築の際に、まず表層を切土して、より強固な地盤を露出させた可能性もある。

旧地表面の標高を、Y=-75192.5 ラインで見ると、基壇南端の X=29316 では旧地表面の標高 106.28m、基壇北端の X=29333.3 では標高 105.81m を測る。標高差は 0.47m、勾配は 27.17% で南から北へ下っている。東西方向で見ると、柱筋 C 列において、基壇西端の X=29330、Y=-75200.64 では標高 106.00m、59T 東端である柱筋 C 列断面東端の Y=-75179.50 では 105.36m を測る。標高差は 0.64m、勾配は 30.27% で西から東へ下っている。基壇下の旧地表面で最も高いと思われる南西端 (X=29322.5、Y=-75202.5) では標高 106.28m、最も低いと思われる柱筋 1 G 付近 (X=29331.14、Y=-75183.72) では標高 105.64m を測る。標高差は 0.64cm、勾配は 30.96% である。このように SB03 基壇下の旧地表面は南西から北東の段丘崖に向かって傾斜している。

基壇の状況 SB03 は盛り土による低基壇を有し、川原石を一段だけ並べた基壇縁石を伴っている。掘込地業は行われていない。基壇は版築ではなく、大きく 3 層の盛り土によって築成される。それぞれ基壇土上層、基壇土中層、基壇土下層と呼称する。この基壇土下層および中層は、東西方向では柱筋 1 列～6 列までの範囲に認められる。これに対し、基壇土上層は柱筋 1 列～8 列までの範囲に認められ、下層・中層より広い範囲に盛り土されている。

基壇土下層 (図 219) X=29325.10～X=29334.15、Y=-75200.00～Y=-75186.20 の範囲にある。厚さは、

確認できた部分では、建物北寄りが厚い傾向にあり、X=29331、Y=-75192 付近では 25cm を測る。建物中央の X=29328、Y=-75192 付近は部分的に厚く 50cm を測る。この厚さの違いは旧地表面の傾斜と凹凸に起因しており、基壇土下層の構築によって旧地形の傾斜は解消され、その上面はほぼ平坦となっている。

基壇土下層は暗褐色土および褐色土が主体であり、シルト質である。分布全域を通じてほぼ均一の層である。

基壇土中層 (図 220) X=29332.65～X=29333.80、Y=-75200.00～Y=-75184.00 の範囲にある。厚さは概ね 20～30cm であるが、柱筋 A5・A6 付近は 48～50cm と厚くなる。

基壇土中層は黒褐色シルト質土が主体であり、基壇土上層と基壇土下層に挟まれていると色調で明確に判別できる。礫を少量含む。

基壇土上層 (図 221) X=29322.40～X=29333.80、Y=-75200.30～Y=-75180.40 の範囲に分布する。基壇土下層、基壇土中層とは異なり、東側は東西 7 間分にあたる範囲まで広がる。厚さは基壇土下層と基壇土中層が存在しない柱筋 7 列以東では厚く 28cm～36cm を測るが、他は概ね 20cm 前後である。

基壇土上層は暗褐色土および褐色土が主体であり、基壇土下層に似る。基壇土下層や基壇土中層と同様に礫も混入する。南東寄りには削平を受けており、残りが悪い。

礎石下部の掘り込み 柱筋 1～6 列までの礎石の下部および礎石据付穴の位置には、壺地業風の掘り込みが存在する。この礎石下部の掘り込みは残存状況の差異はあるが、柱筋 1～6 列までの柱筋交点のすべてに存在しており、SB03 が総柱建物であることを示している。

礎石下部の掘り込みの基本構造は以下のとおりである。まず、基壇土中層上面から礎石位置の下部に深さ約 20～40cm の掘り込みを設ける。掘り込みの底面は、建物北寄りの基壇盛り土が厚い場所では基壇土下層内に収まるが、南寄りの基壇盛り土の薄い場所では地山面まで達している。底面には長径 4～50cm の礫が播鉢底状に配置されている。この礫は SB01 で検出した根石とよく似ているが、礎石とは接しておらず、根石としては機能していない。掘り込

表 14 礎石下部の掘り込み一覧表 (単位：m)

	長径	短径	深さ	底面標高	底面礫上面標高
A1	1.52	[0.90]	0.28	105.900	106.160
A2	1.25	1.07	[0.34]	[105.860]	106.030
A3	1.70	[1.60]	0.43	105.800	105.900
A4	[1.40]	[1.38]	0.38	105.760	105.850
A5	1.80	1.50	[0.46]	[105.740]	106.240
A6	[1.46]	[0.90]	[0.33]	[105.650]	105.863
B1	[1.28]	[0.98]	0.30	105.900	106.199
B2	1.52	[0.70]	0.38	105.960	106.200
B3	[1.32]	[0.75]	0.28	105.800	106.136
B4	(1.19)	[0.73]	0.25	105.900	106.143
B5	(1.40)	1.13	[0.25]	[105.830]	106.310
B6	[1.41]	1.41	[0.38]	[105.700]	105.860
C1	1.29	[0.85]	[0.26]	[106.040]	106.460
C2	(1.35)	(1.10)	[0.21]	[106.000]	106.190
C3	(1.55)	1.44	[0.20]	[106.000]	106.143
C4	1.43	[1.23]	0.24	105.920	106.070
C5	1.10	(10.5)	0.41	105.890	106.030
C6	(1.31)	[0.57]	0.51	105.740	106.060
D1	[1.12]	[1.02]	0.22	106.030	106.260
D2	(1.68)	1.55	0.32	105.900	106.030
D3	(1.30)	[1.10]	[0.30]	[105.950]	106.120
D4	[1.40]	0.90	[0.26]	[105.950]	106.360
D5	[1.05]	[0.40]	[0.25]	[105.900]	106.070
D6	[1.07]	[0.10]	[0.10]	[105.830]	106.200

()：復元した値

[]：残存部のみの計測値

み内は黒褐色土および褐色土が1～2層の単位で充填されており、前述の礫を覆っている。この埋土は版築とは異なりあまり堅固に突き固められてはおらず、通常の壺地業の地業土の状況とは異なる。

礎石下部の掘り込みは基壇土上層で覆われている。調査時には、この掘り込みが基壇土上層上面から掘り込まれている可能性も考え土層断面を精査したが、基壇土上層上面から掘り込まれた明確な痕跡は確認できなかった。よって、この掘り込みが埋められたのちに、上層の基壇土が積まれ被覆されたと判断した。礎石下部の掘り込みについては表 14 にまとめた。

礎石の状況 礎石は柱筋交点の A1・A2・A3・A4・A5・B1・B2・B4・B6・B8・D3 にて検出した。これらの平面位置は原位置から大きくは移動していないと考えられ、A5 の礎石は原位置に最も近い状態にあると思われる。

SB03 の範囲内では、原位置から大きく動かされているが、礎石と見られる礫も6石検出した。このうち基壇上面より上方に大きく離れた位置にある4石については発掘調査時にトレンチ外へ除去している。このほか、北側の段丘崖で1石発見し、同じ地番内で調査前から露出していたものが3石、62T 北端の段丘下で確認されたものが6石ある。

礎石はいずれも自然礫を用いている。岩石種は様々であり、柱位置に残るものではチャート7石、結晶片岩3石、安山岩1石を数える。このほか 59T 内で動いているものについてはチャート4石、結晶片岩3石、安山岩3石、牛伏砂岩1石を数える。

礎石は基壇土上層上面に据えられており、顕著な礎石据付穴は伴わない。10cm程度の拳大の根石を伴っているものがあるが、根石がまばらであるものや根石を伴わないものもある。

表 15 礎石等一覧表

	長軸 (m)	短軸 (m)	上端標高 (m)	石 材	備 考
A 1	0.80	0.74	106.70	チャート	
A 2	1.10	0.65	106.78	安山岩	
A 3	1.00	0.83	107.08	結晶片岩	高さは変わっている
A 4	1.13	0.79	106.86	チャート	
A 5	1.14	0.84	106.69	チャート	
A 6	0.92	0.50	106.71	結晶片岩	原位置ではない
A 7	0.76	0.59	未計測	牛伏砂岩	原位置ではない
A 8	—	—	—	—	礎石無
B 1	0.83	0.69	106.87	チャート	
B 2	1.10	0.95	106.86	結晶片岩	
B 3	—	—	—	—	礎石無
B 4	1.28	0.76	106.80	チャート	
B 5	—	—	—	—	礎石無
B 6	1.04	0.87	106.72	結晶片岩	
B 7	—	—	—	—	礎石無
B 8	1.00	0.80	106.25	チャート	高さは変わっている
C 1	—	—	—	—	礎石無
C 2	—	—	—	—	礎石無
C 3	—	—	—	—	礎石無
C 4	—	—	—	—	礎石無
C 5	—	—	—	—	礎石無
C 6	—	—	—	—	礎石無
C 7	—	—	—	—	礎石無
C 8	—	—	—	—	礎石無
D 1	—	—	—	—	礎石無
D 2	—	—	—	—	礎石無
D 3	0.83	0.66	106.49	チャート	高さは変わっている
D 4	—	—	—	—	礎石無
D 5	—	—	—	—	礎石無
D 6	—	—	—	—	礎石無
D 7	—	—	—	—	礎石無
D 8	—	—	—	—	礎石無
L 1	0.72	0.50	106.34	結晶片岩	基壇外装の崩落？
L 2	0.74	0.68	106.16	結晶片岩	基壇外装の崩落？

礎石の形状は、A1・A2・A4・A5・B4・B6は楕円形を呈する。原位置を保っているA5の礎石も含めて、いずれも長軸を東西方向（桁行）に向けており、意図的にこのように据えられたと考えられる。

礎石の上端高は標高 106.25m～106.87m とばらつきがある。柱の当たりが確認できた礎石は無いが、平坦な自然面を持つ礎石がほとんどである。しかし、平坦面が真上を向いているものは少ない。これは不同沈下により礎石が傾いたためと思われる。平坦面が無い礎石については、柱基部に光付けが施されたと考え

えられる。

A1 礎石は、中世土塁の構築により礎石下西側の基壇土が抉られているため、落ち込んでいる。一方、A3 礎石はその直下に As-A を含む土があり、近世以降に幾らか持ち上げられている。D3 の北寄りには As-A を含む掘り込みがある。これは礎石落込穴で、礎石が落とし込まれて、位置が他より低くなっていると考えられる。B8 礎石も低い位置にあるが、SB03 の北東部を切る中世堀（SD55）の掘削により下に移動したと考えられる。また、C5 の位置からは被熱に

より破碎したと思われる牛伏砂岩片が多数出土した。これは、礎石が破碎されたものと思われる。

なお、明確な礎石抜取穴は見つかっていない。礎石については表 15 にまとめた。

基壇縁石 基壇の北辺と西辺には円礫（川原石）を並べ基壇縁石としている。北辺では柱筋 5～6 列間にあたる位置で石列を確認したが、これ以西でも抜き取りの痕跡があるので、北辺全体に設置されていたとみられる。1 列および 3 列にあたる位置の基壇北縁には、礎石より小ぶりの約 70cm の礫（L1・L2）がある。これらは遺構面に接していない状態で検出されたが、基壇縁石が崩落したものと考えられる。柱筋 2～3 列間の基壇北辺の検出ラインは南側にへこむ形になっているが、これは基壇縁石を抜き取る際に基壇端部が削られたことによると思われる。柱筋 5～6 列間にあたる基壇北辺の縁石列上では、丸瓦を合わせて筒状にして設置した遺構を検出した（図 42 50-50' および 51-51' 断面）。筒状にした丸瓦は建物の外、斜め上方向に向けて据えられていた。これは基部が基壇土内に据えられているため、SB03 機能時に設置されていたと思われる。

基壇西辺では基壇縁石は A～C 列付近で確認したが、まばらに存在する。南辺および東辺では明確な基壇縁石は確認できなかった。

雨落溝 基壇北辺と西辺に部分的に残っている。北辺では基壇縁石が残る柱筋 4～6 列付近、西辺では A 列～C 列にかけて残存する。

雨落溝の平面形は、北辺の基壇縁石が抜き取られている柱筋 2～3 列間以外は概ね両肩が直線的に延びる。断面形状は浅い皿状を呈する。

素掘り状の溝として検出される部分がほとんどであるが、基壇縁石が雨落溝内側の肩部を形成している箇所があり、北辺では柱筋 4～6 列付近の北辺雨落溝では外側の肩を化粧するように円礫を 2 石並べている。このことから少なくとも建物北辺においては雨落溝がしっかりと構築されていたことがわかる。

北辺雨落溝は幅 0.74m～1.32m、深さ 0.13m～0.44m を測る。西辺雨落溝は幅 0.54m～1.36m、深さ 0.08m～0.30m を測る。

溝の埋土は As-B 混土が主体である。雨落溝の底面に堆積するとされる微細な砂の堆積⁽²⁾は確認できな

かった。As-B 混土形成時に攪乱された可能性もある。

東～南東部の削平 柱筋 6 列以東の基壇は残存状況が悪い。特に D7～C8 付近より南東部では、基壇土は後世の掘り込みによって完全に削平されている。この掘り込みの埋土には瓦のほか、羽釜（図 145-202）と炭化物が含まれている。羽釜の年代は 10 世紀第 2 四半期頃であり、炭化物の放射線炭素年代測定の結果は 8 世紀後半～10 世紀後半頃であった（第 3 章第 4 節分析 4 参照）。

基壇土上層上面は柱筋 6 列と 7 列との中間あたりから東に向けて下っている。この傾斜面は基本層序Ⅲ-2 層に相当する As-B 混土層に覆われていた。この堆積状況から柱筋 6～7 列以東は As-B 降下後に削平を受けていると考えられる。

中世以降の掘削等の影響 SB03 には、後の中世城館（池城）築造に伴う削平が見られる。SB03 の西寄りおよび北東寄りには土塁が築かれ、その外側には堀が設けられた。西の土塁は建物南西から N-12.5°-E 方向に伸び、SB03 北西部で雨落溝および A1 礎石に一部重なっている。この土塁の構築に伴い A1 西側の基壇土が抉られたため、A1 礎石の上端レベルが下がっている。しかし、それ以外の箇所では土塁でバックされていたため、基本層序Ⅲ-1 層・Ⅲ-2 層が残存しており、基壇端部および雨落溝が残り、瓦の残存状況も良好であった。北の土塁に覆われていた A5・A6 付近も同様で、基壇外装の石列が残る要因となった。しかし、土塁外側部分では城館堀（SD55）によって大きく削平され、A7・A8 付近では建物の痕跡は全く残っていない。

SB03 南東部は前述の古代による削平のほか、中世以降の削平も大きく受けている。その削平部分には後述する被熱粘土塊および炭化物を含む層に堆積しており、この層からは 14 世紀の常滑甕が出土した。共伴する炭化物（穀類）の放射線炭素年代測定の結果は 16 世紀後半以降であった。また D5・D6 付近は現代の井戸により大きく攪乱されている。

屋根瓦の出土状況（図 223） SB03 周辺では多量の瓦が出土しており、総破片数で 3,119 点、総重量で

(2) 山中敏史 2003 「IV-5 雨落ち溝」『古代の官衙遺跡』

I 遺構編 奈良文化財研究所

795.8kg になる。出土位置は個体ごとに記録したもののもあるが、発掘作業の効率化のため、小グリッドごとに取り上げた個体がほとんどである。

瓦は SB03 の基壇西辺部から多く出土している。これより量は少ないが基壇北辺部付近からも出土している。これは基壇の西辺部および北辺部付近に築かれた中世池城の土塁に起因するものである。この土塁はその外側の堀を掘削した残土によって構築されている。その際に瓦を多く包含した土を使用している。さらに西の土塁直下には、基壇廃絶後に堆積した層である基本層序Ⅲ - 1 層・Ⅲ - 2 層 (As-B 混土) が良好にパックされており、瓦出土量が多い要因の

一つとなっている。しかし、土塁下の瓦出土状況を観察すると、屋根から滑り落ちた状況等では無く、屋根から崩落した後に動かされたものと考えられる。

土塁下以外から出土した瓦は、中世の攪乱層や近世に形成された基本層序Ⅱ層に含まれるものが大多数であり、原位置から動かされていると思われる。

基壇土中から確実に出土した瓦は無い。基壇土を断ち割ったサブトレンチ内からの出土と記録されている瓦が 20 点ほど存在するが、基壇土より上層の遺物が混入した可能性を否定できない。総破片数からみるとごく少数であることや、発掘作業時の観察からみても、基壇土に瓦が含まれる可能性は極めて低い。

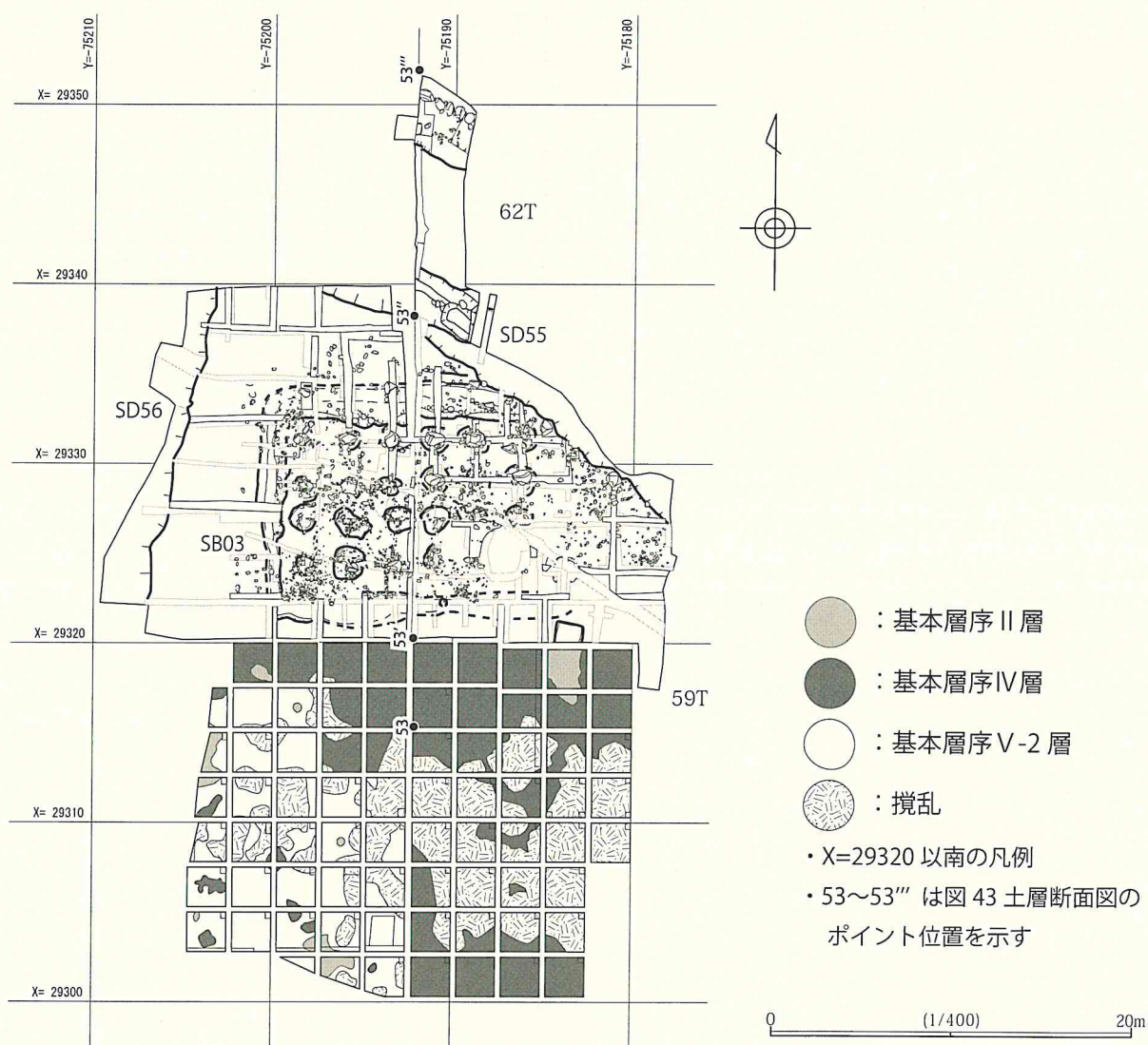


図 44 59T・62T 平面図

被熱粘土塊の出土状況 (図 224) SB03 をはじめ多胡郡正倉跡から出土する特殊な遺物として、粘土の塊が熱を受け赤変～黒変したものがある。この内部には 1～5mm 程のスサ状の植物質が混入している痕跡が見られる。壁土の可能性が高いが断定はできないため、被熱粘土塊と呼称する。

SB03 周辺からは大小の被熱粘土塊が多量に出土しており、総重量 138.1kg を量る。建物東寄りからの出土が顕著で、特に南東部で出土量が多い。一方、建物西部の土塁下、基本層序Ⅲ - 2 層からの出土は微量であり 0.3kg を量る。SB03 周辺における被熱粘土塊の出土層位は前述のとおり中世以降に形成された層が中心であるが、ここから出土した被熱粘土塊の熱ルミネッセンス分析の結果は 8 世紀中頃～ 10 世紀末であった (第 3 章第 4 節分析 14 参照)。また、65T-SK43 では As-B 混土層下層から同様の被熱粘土塊が出土している。これらの点から、これらの被熱粘土塊は古代の所産であると推定できる。しかし、SB03 においては東寄りに存在する中世以降の層中心に包含されており、古代以前の層にはほとんど含まれない。このことから、被熱粘土塊は SB03 には伴わず、SB03 の東方の建物に由来するものと考えられる。

その他の遺物の出土状況 前述の屋根瓦・被熱粘土塊のほか、石器・土師器・須恵器・中世陶器も出土している。基壇土中からも須恵器・土師器が出土しているが、すべて古墳時代後期の遺物である。

59T 南寄りの状況 SB03 の南側についても調査を行った (図 44)。ここは現代の攪乱、削平が多く、中世以前の遺構は残っていない。瓦の出土量も SB03 周辺に比べるとかなり少ない。基壇土のようなシルト質土も存在せず、礫を大量に含む基本層序Ⅳ層が広がる。SB03 の南側には顕著な古代の遺構は存在しなかったと思われる。

北側 (62T) の状況 59T の北側に 62T を設定した。SB03 の雨落溝より北には中世城館の堀 (SD56) があり、その先は段丘上位面から中位面へ下る段丘崖となっている。62T 北端の段丘崖下には礎石を転用した土留めの石列を検出した。転用された礎石は 5 石であり、裏込めに 1 石ある。この石列は、裏込め部分に As-B 混土があることから中世以降に設置されたと思われる。

iv 瓦集中部 SX57 (16T および 58T) (図 45～47)
位置 X=29262.50 ～ X=29272.50、Y=75250.00 ～ Y=75235.00 に位置する。

トレンチの状況 基本層序Ⅰ・Ⅱ層は、現代の耕作により礫が除去されており、礫の混入が少ないが、基本層序Ⅲ - 1 層以下には大量の礫が混入している。これらの礫は地山である基本層序Ⅴ - 2 層に由来する。この基本層序Ⅲ - 1 層には、礫とともに瓦を主体とする古代の遺物が大量に含まれており、包含層化している。1108 年 (天仁元年) 以降に形成された古代遺物包含層である基本層序Ⅲ - 1 層を除去したのち、基本層序Ⅳ層上面から掘り込んでいる土坑を 5 基検出したが、いずれも不定形であり出土遺物も無く、正倉院に関連する遺構とは確認できなかった。

遺物出土状況 58T およびこれに隣接する 16T より大量の瓦が出土している。58T からは上野国分寺系の軒丸瓦 (図 112-85) も 1 点出土している。瓦類の出土量は、破片数 791 点、総重量 224.6kg である。残存率が高い個体もあり、総じて摩耗度は低い。しかし、瓦の葺かれた状況を想定できるような出土状態ではなく遺構も確認できなかった。

この瓦を用いた建物遺構は上層で完全に失われてしまったか、もしくは近辺に存在した建物で使用された瓦がここまで動かされたものと考えられる。

v 51T に散見される根石と思われる礫

(図 48)

トレンチ設定 第 3 次調査にて確認した SB01 と並ぶ建物の有無を確認するために 51T を設定した。その範囲は X=29204 ～ X=29218、Y=75250 ～ Y=75238 である。

遺構検出状況 このトレンチでは、現代の造成による重機掘削痕が多数あり、古代遺構面が破壊されていたため、明確な建物遺構は確認できなかった。しかし、地山である基本土層Ⅴ - 1 層には礫が少ないにも関わらず、このトレンチでは根石と思われる礫が散見された。また、トレンチの東側には根石と思われる礫による現代の石積みがある。これらの点から、古代の礎石建物が存在していた可能性は残る。

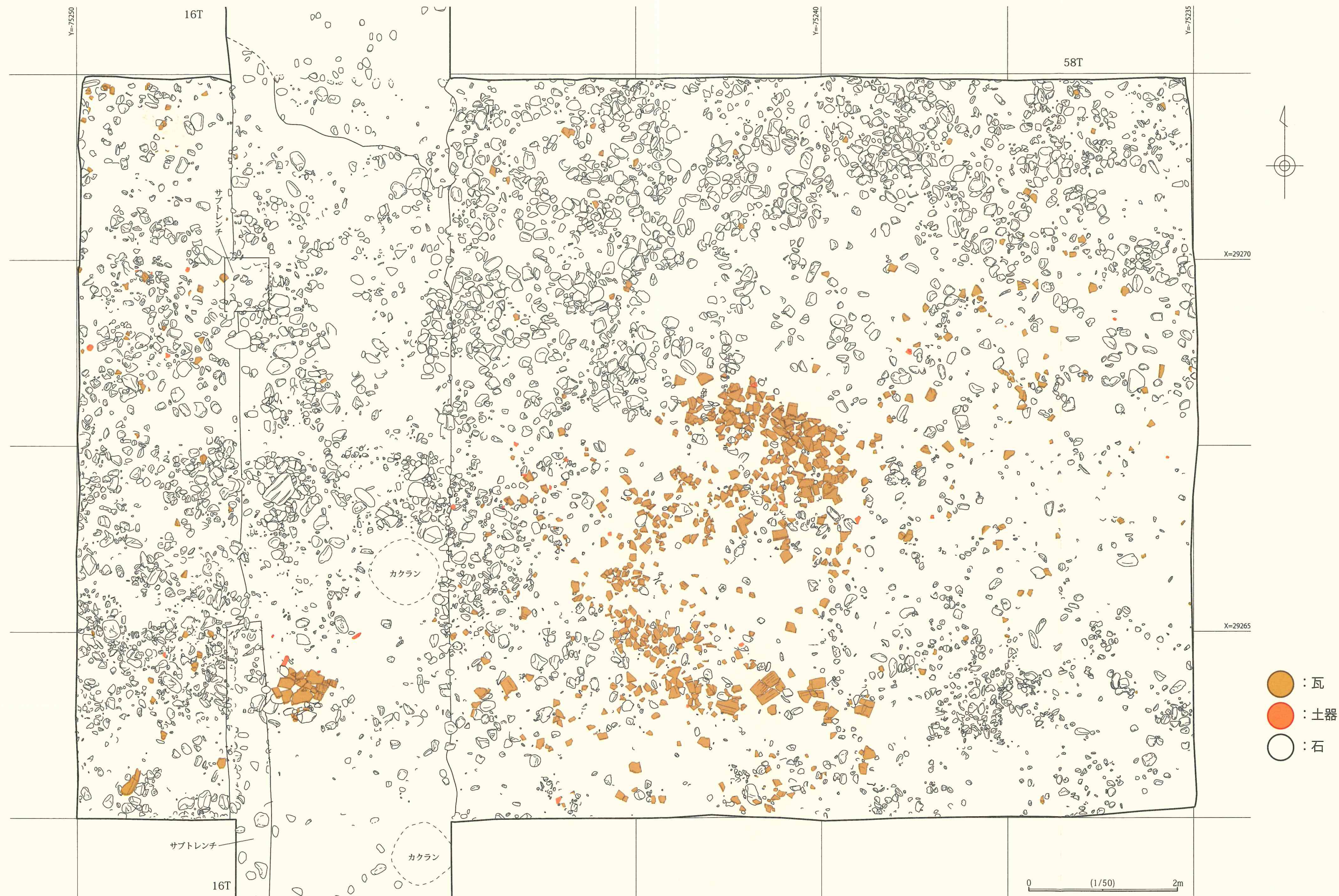


図 45 16T・58T 平面図 (1) (58T は基本層序Ⅲ層上面を図示)

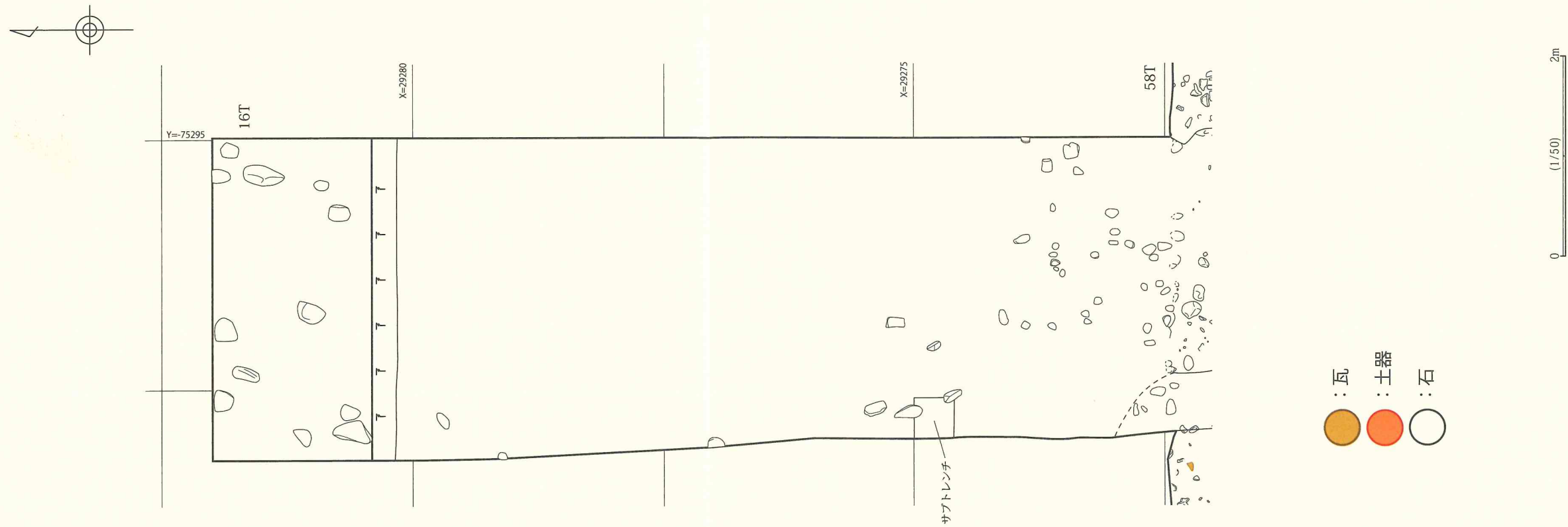
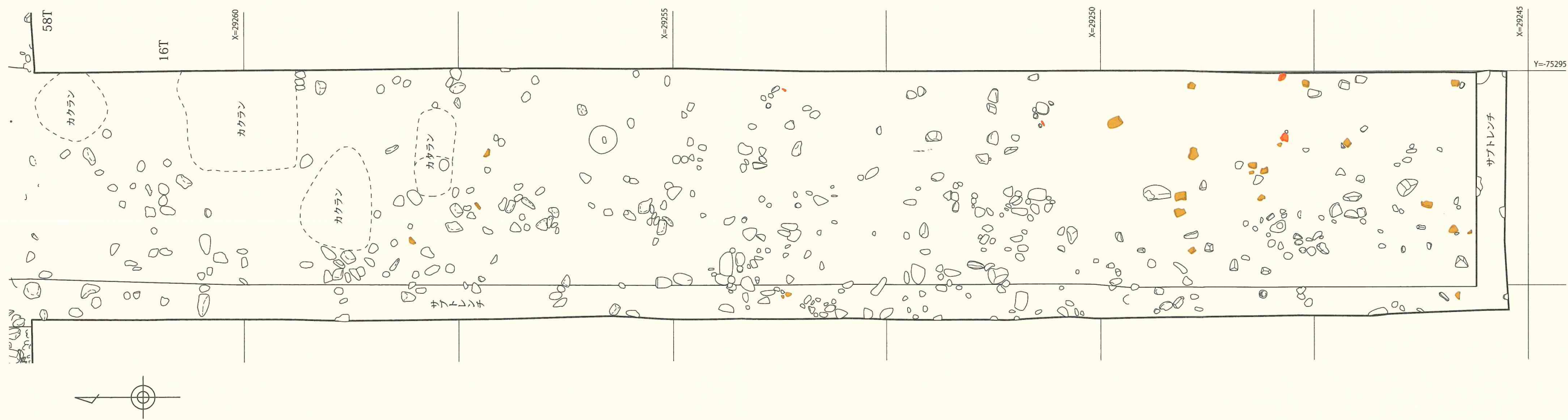
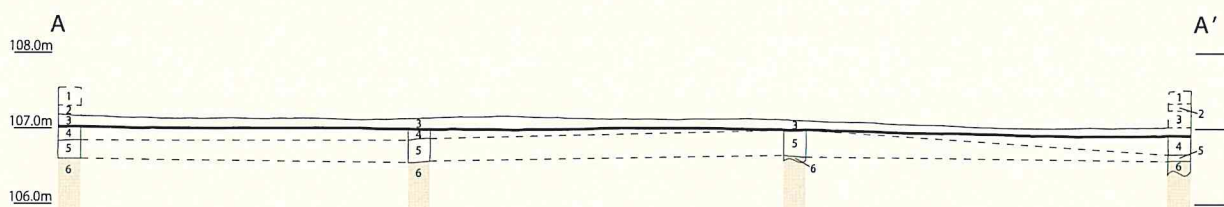
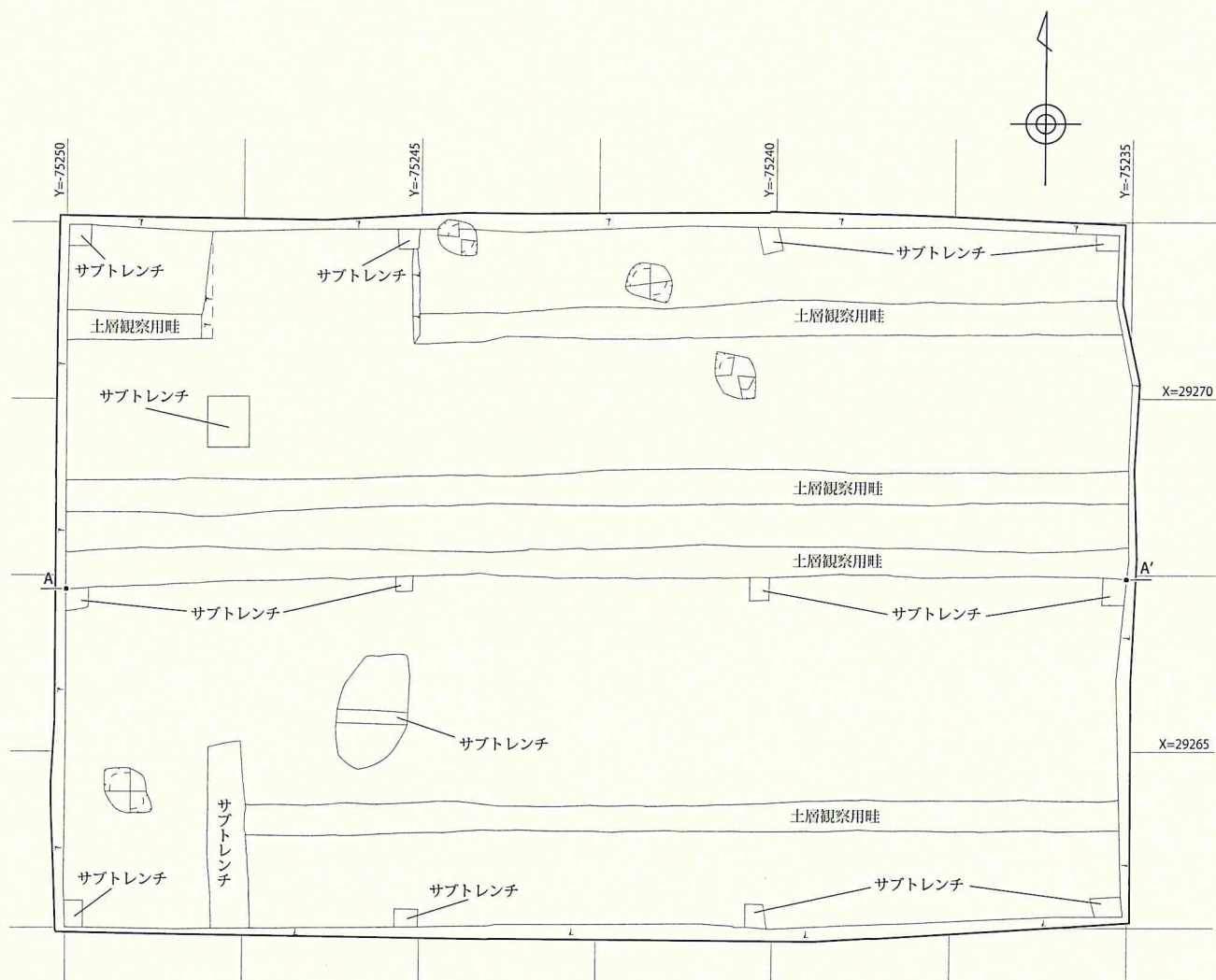


図 46 16T・58T 平面図 (2)



- 1: 表土 基本層序Ⅰ層
- 2: As-A混土 基本層序Ⅱ層
- 3: As-B混土 基本層序Ⅲ-1層
- 4: 基本層序Ⅳ層 礫多量
- 5: 基本層序Ⅳ層 礫多量 粗砂含む
- 6: 基本層序Ⅴ-2層 (地山土)

0 (1/100) 4m

図 47 58T 平面図 (基本層序Ⅳ層上面)・土層断面図

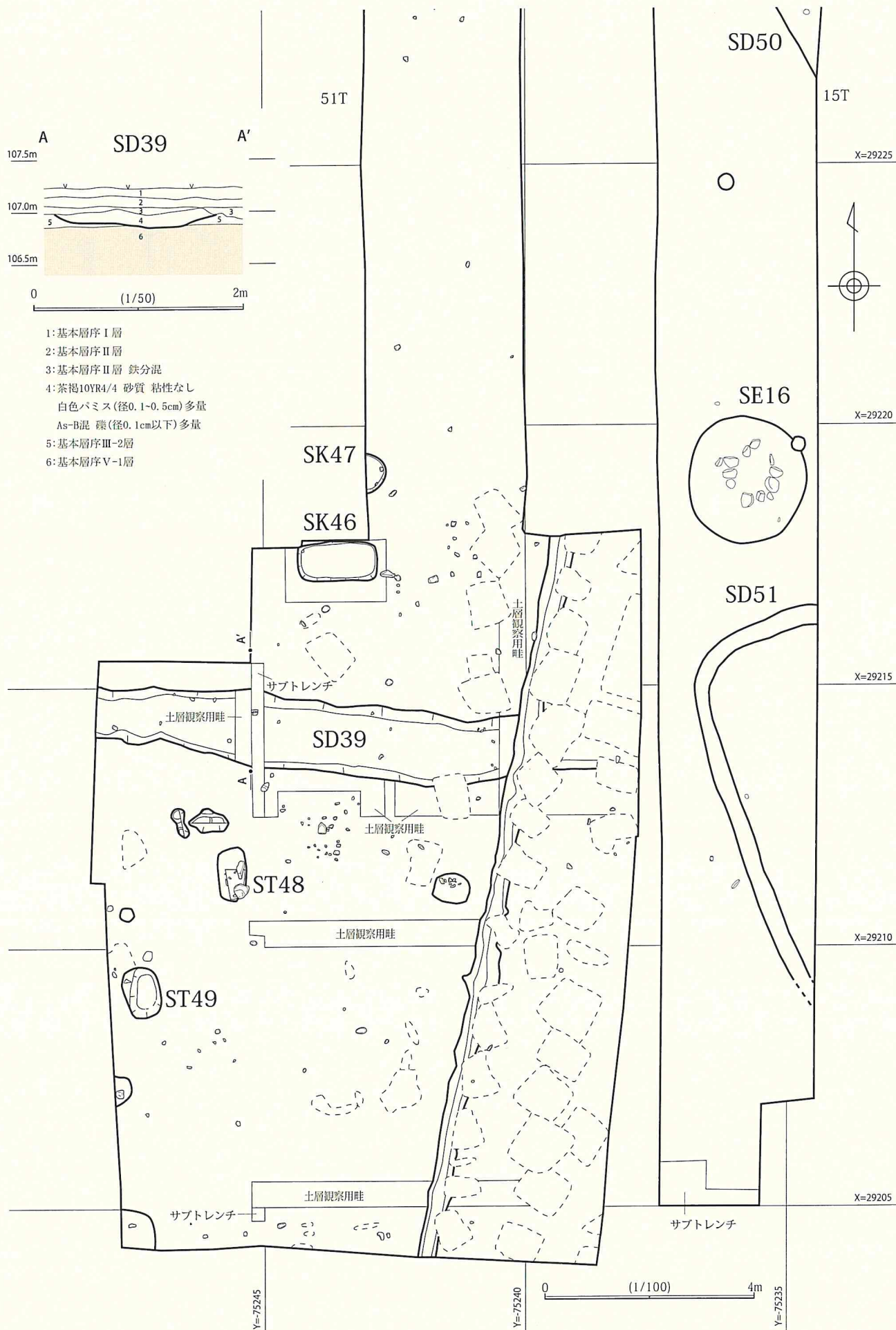


図 48 51T 平面図・SD39 (51T 部分) 土層断面図

(2) 土坑

i SK07 (図 49)

位置 18T 内の X=29279 ~ X=29283、Y=-75259 ~ Y=-75254 に位置する。後述の SP08 (119 頁) に隣接する。

立地 正倉院西寄りに立地し、西に 34.45m 行くと現況の谷地形である NR28 崖端部に至る。

規模 検出長は東西 2.38m、南北 3.35m を測る。東端部は現代の井戸に切られているがトレンチ壁面の観察より東端が確認できた。西端は土層観察用畦のため検出できていないが、この畦より西側までは広がっていない。検出した北辺と南辺のラインは、ほぼ真東西方向を向いており、平行している。深さは最も掘り込まれている部分で 0.27m である。

土層および断面形状 底面は、最も高いところと低いところとの比高が 0.12m あるが、ほぼ水平である。埋土の残存状況は悪く黒褐色土層のみが残る。基本層序 V - 2 層の地山には礫が大量に含まれているが、それを掘り込む遺構の埋土内の礫はあまり含まれていない。締まりのある土質であるが突き固めたような状況ではない。

出土遺物 遺構を掘り下げたサブトレンチ内からは遺物は出土しなかった。しかし、18T からは古代の遺物が多数出土しており、破片数では瓦 249 点、土師器坏類 9 点、甕 44 点、須恵器甕 31 点、羽釜 1 点が出土している。すべて包含層化した基本層序 III - 1 層以上からの出土ではあるが、瓦の出土量は特筆される。

ii SK14 (図 61)

27-1T、X=29217、Y=-75299 で検出した土坑である。南北に長い隅丸方形を呈し、深さ 0.14m である。西辺区画溝の平面形状が変化する部分に隣接するが、区画溝と土坑との関連性は不明である。

iii SK24 (図 68)

57T の SD23 南側、X=29148 ~ X=29150、Y=-75178 ~ Y=-75177 に位置する。検出長は南北 1.4m、東西 0.78m を測る。遺物の出土は無く、性格は不明である。

iv SK15 (図 50)

位置 27-1T から 27-5T にかけて、X=29220、Y=-75290 で検出した。西辺区画溝のすぐ東側に位置する。土坑西辺から区画溝東肩までの距離は広いところで 3.50m、狭いところで 2.54m を測る。

平面形状・規模 平面形は楕円または隅丸方形を呈すると推定される。北半分を検出しただけであるが、おそらく長軸が南北方向になるとみられる。東西長は 8.26m、南北の検出長は 7.06m を測る。

断面形状および土層 最深部は西端付近にあり、検出面からの深さは 0.24m を測る。底面は、これより東に向かってなだらかに立ち上がる。北端もややなだらかに立ち上がる。

土坑の中心部には灰層が面的に広がっている。その範囲は東西長 6.93m、南北長は検出した範囲で 6.40m を測る。灰層の厚さはごく薄く 1 ~ 2 cm が主体であり、厚い部分でも 4 cm である。灰層直上には長さ 1 cm 以下の炭化物小片が微量含まれている。

灰層より下層の埋土は粘性のあるシルト質黒褐色土であり、肉眼では As-B の混入は確認できなかった。灰層より上層の埋土は As-B を含む層である。

遺物出土状況 灰層より下層の埋土の調査は、27-1T および 27-5T のサブトレンチのみでおこない、27-1T のサブトレンチ内より瓦が出土している。

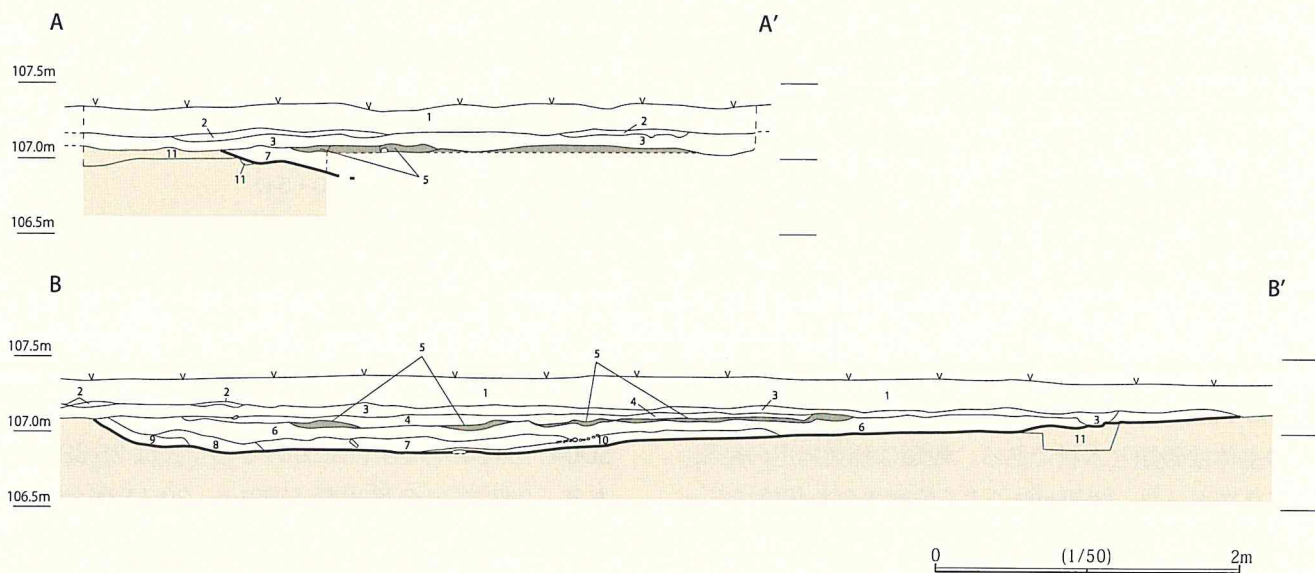
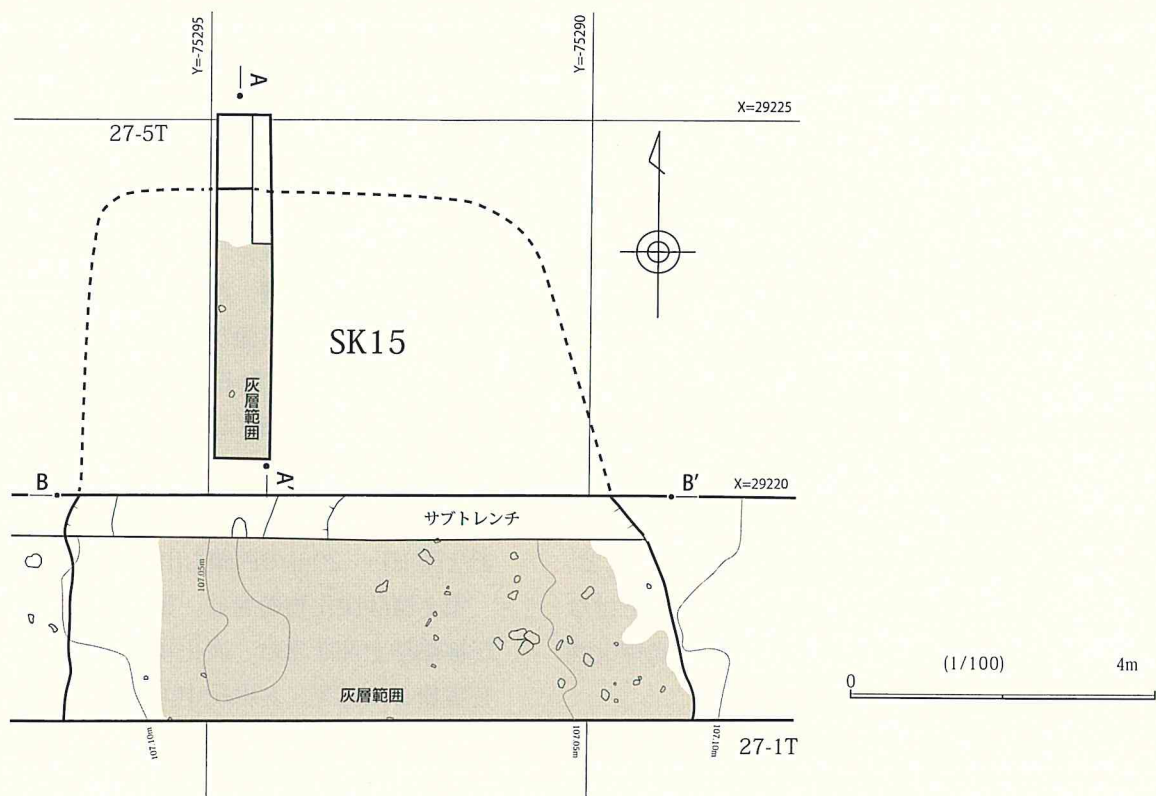
灰層より上層の埋土からは多くの遺物が出土している。瓦・須恵器・土師器・被熱粘土塊等の古代の遺物の他、中世に該当する遺物もあり、ほとんどが灰層直上から出土している。被熱粘土塊以外には被熱したものは認められず、被熱粘土塊もこの場所で被熱したことを示す状況は確認できていない。

v SK41 (図 51)

位置 65-1T、65-3T、65-4T にかけて、X=29325、Y=-75285 周辺で検出した。正倉院北西の NR28 近くに位置する。遺構西端から谷地形である NR28 の段丘崖上端までの距離は 5.24m を測る。

平面形状・規模 やや南北に長い不整形の平面をもつ土坑である。検出した規模は長軸 6.67m、短軸 4.63m を測る。

断面形状および土層 皿状の断面形である。最深部



A-A'・B-B' 共通

- 1:基本層序Ⅰ層
- 2:基本層序Ⅱ層
- 3:基本層序Ⅱ層 鉄分混
- 4:暗褐色10YR3/3 細砂+シルト ややしまる As-B混 焼土粒子(径1-5cm)微量
- 5:黒褐色10YR2/3 シルト ややしまる 灰層 炭化物(径1cm以下)微量
- 6:黒褐色10YR3/2 シルト ややしまる 11層ブロック(径1cm)微量
- 7:黒褐色10YR3/2 シルト ややしまる 11層ブロック(径1cm)多量
- 8:暗褐色10YR3/3 シルト ややしまる 粘性あり
- 9:黒褐色10YR3/2 シルト ややしまる 6層より11層ブロック多い
- 10:黒褐色10YR3/2 シルト ややしまる 粘性あり
- 11:基本層序V-1層(地山土)

図 50 SK15 平面図・土層断面図

は中央付近で、深さは検出面より 0.56m を測る。埋土上層は基本土層Ⅲ - 2 層に相当する As-B を大量に含む層であり、これにより遺構は完全に埋まっている。下層である第 4 および第 5 層には As-B は含まれていない。

遺物出土状況 瓦の他、須恵器が出土している。遺構の中央部で各層から遺物が集中して出土しており、径 20cm 前後の円礫もともに出土している。

vi SK42 (図 52)

位置 65-5T、X=29313、Y=-75288 周辺で検出した。5m 南に SK43 が位置する。この遺構と連続する可能性があるが、65-4T 以北には伸びないことと、SK43 は 65-6T の南端で立ち上がるため、溝ではなく土坑であると判断した。SK41 と同様、正倉院北西の谷地形 NR28 近くに立地する。

平面形状・規模 部分的な検出のため平面形は不明であるが、SK43 と同一遺構ならば不整形であろう。東西の検出長は 2.92m を測る。SK43 を含めた大きさは、7.50m を測る。

断面形状および土層 浅い皿状を呈する。最深部で検出面から 0.43m の深さを測る。第 6・7 層が基本層序Ⅲ - 2 層に該当する As-B を大量に含む層である。As-B を含む層の最下層である第 9 層には炭化物が多量に混入している。

遺物出土状況 As-B を大量に含む第 6 層から底面にかけて、瓦と炭化物を中心とした多量の遺物が出土している。最下層ではほぼ完形の平瓦（1 類：図 135-164）が出土している。第 9 層に含まれる炭化物の主体は穀類と木材である。穀類は種実同定の結果、イネであった。籾殻が無くよく乾燥された状態であったようである。放射性炭素年代測定の結果、7 世紀中頃～9 世紀後半の数値が得られている。木材の炭化物の樹種はケヤキと同定された（第 3 章第 4 節分析 11 参照）。

第 6 層以下では被熱粘土塊も少量出土している。土器・瓦類に被熱しているものは無い。各層に径 10～20cm の円礫を含む。土層や遺物出土状況は SK43 と類似する。

vii SK43 (図 52)

位置 65-6T、X=29307、Y=-75288 周辺で検出した。5m 北に SK42 が位置し、一連の遺構の可能性はある。SK41・SK42 と同様、正倉院北西の谷地形 NR28 近くに立地する。

平面形状・規模 平面形は不明であるが、東西の検出長は 1.32m を測る。

断面形状および土層 浅い皿状を呈する。深さは北端が最深部で、検出面から 0.25m を測り、そこから南端に向かって浅くなる。第 2 層は As-B を大量に含み、基本層序Ⅲ - 2 層に該当する。第 5～8 層はシルト質土である。

遺物出土状況 各層から瓦が多量に出土している。また径 10～20cm の円礫も出土している。

第 2 層は炭化物を含む。第 5 層以下は炭化物および被熱粘土塊を含む。炭化物の放射線炭素年代測定を実施した結果、8 世紀中頃～9 世紀末頃が最も高い確率となる数値が得られた。被熱粘土塊には熱ルミネッセンス年代測定を実施し、11 世紀中頃～16 世紀中頃の数値が得られている。しかし、第 3 層は As-B を含まないため、遺物の年代の下限は 1108 年（天仁元年）までに収まると考えられる。

(3) 溝および土橋

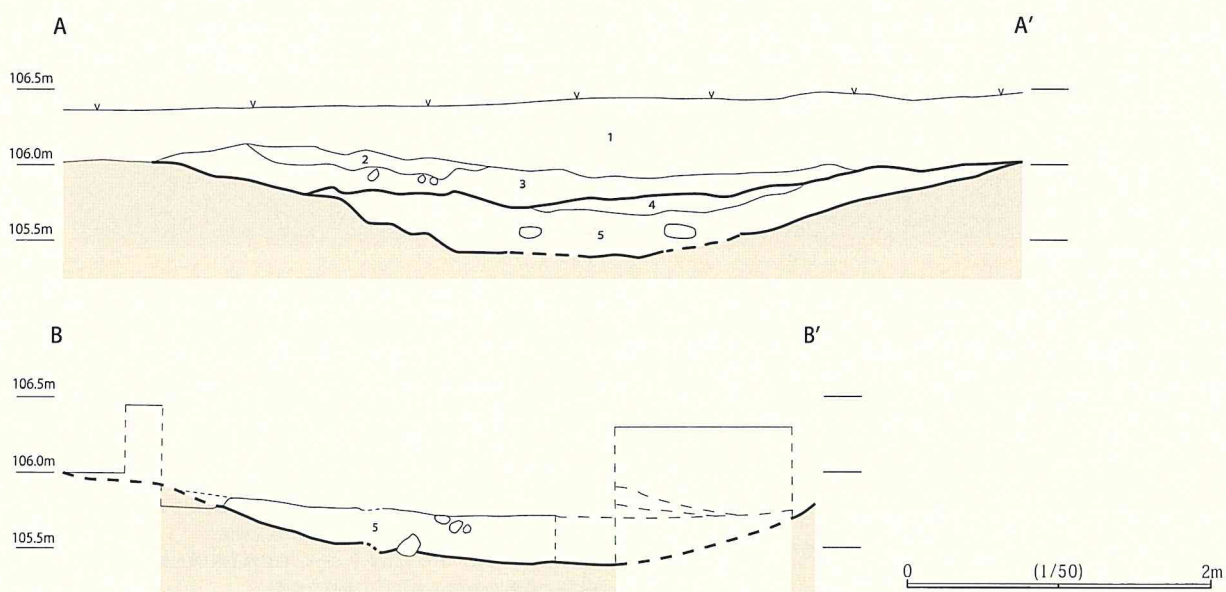
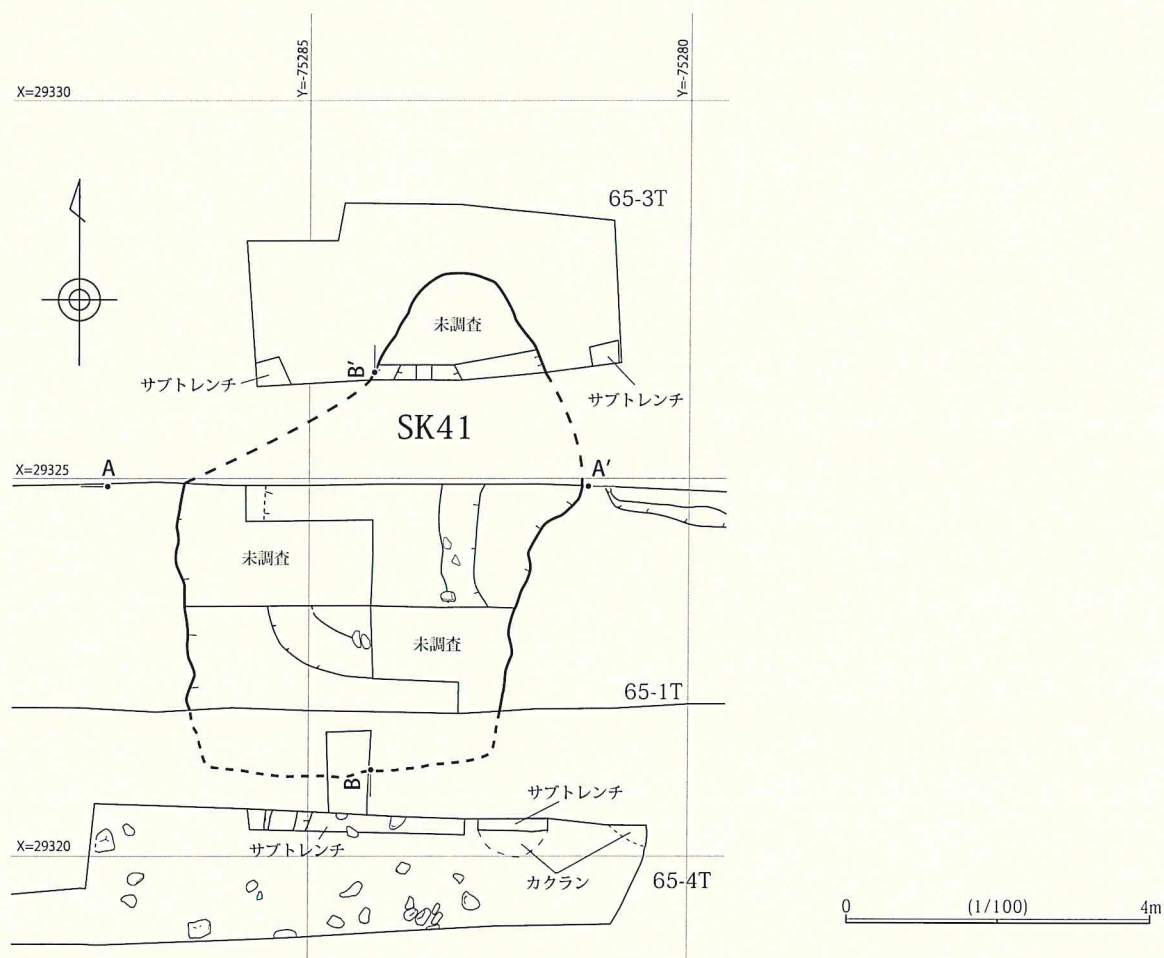
i SD04・SD05 (図 53・54)

位置 24T・25T・28T・29-1T 内の X=29216.63～X=29202.40、Y=-75276.36～Y=-75268.20 に位置する。

立地 正倉院の西寄りに位置する。南には谷地形である NR26 がある。

SD04 24T から 29-1T にかけての全長は 25.32m である。24T 部分の検出長 13.58m、29-1T 部分の検出長は 11.74m である。ただし、29-1T 部分の検出状況は明瞭では無く、遺構にならない可能性もある。

SD04 の検出幅は 0.7m～1.4m である。X=29204.32 の位置で、深さ 0.22m、底面の標高は 106.98m を測り、X=29212.30 の位置で深さ 0.14m、底面の標高は 107.2m を測る。勾配は 27.57‰であり、北から南へ下っている。断面形は U 字形状をなすが、西側の立ち上がりは急であり東側は緩やかである。埋土は暗褐色粘質土が主体であり、肉眼では As-B の混入は確認できない。



A-A'・B-B' 共通

1:表土

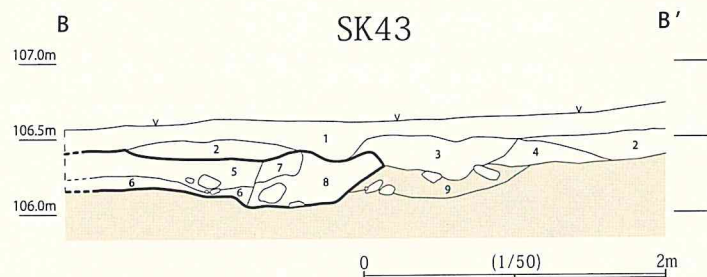
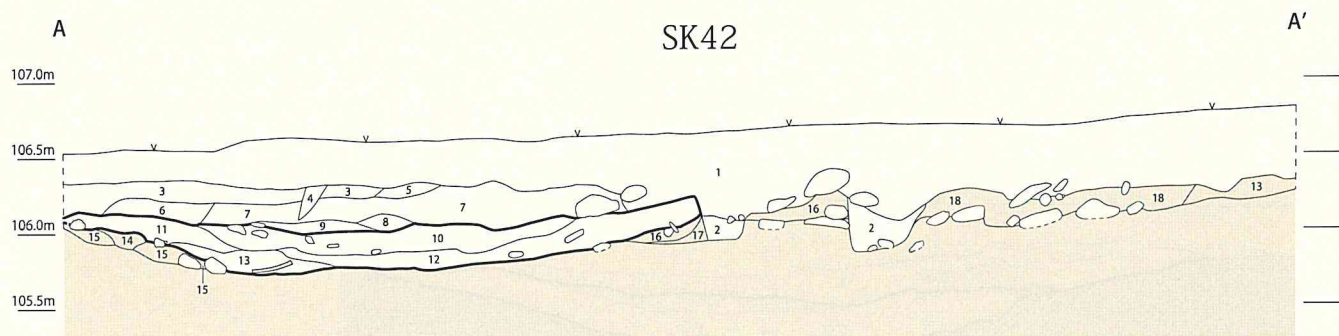
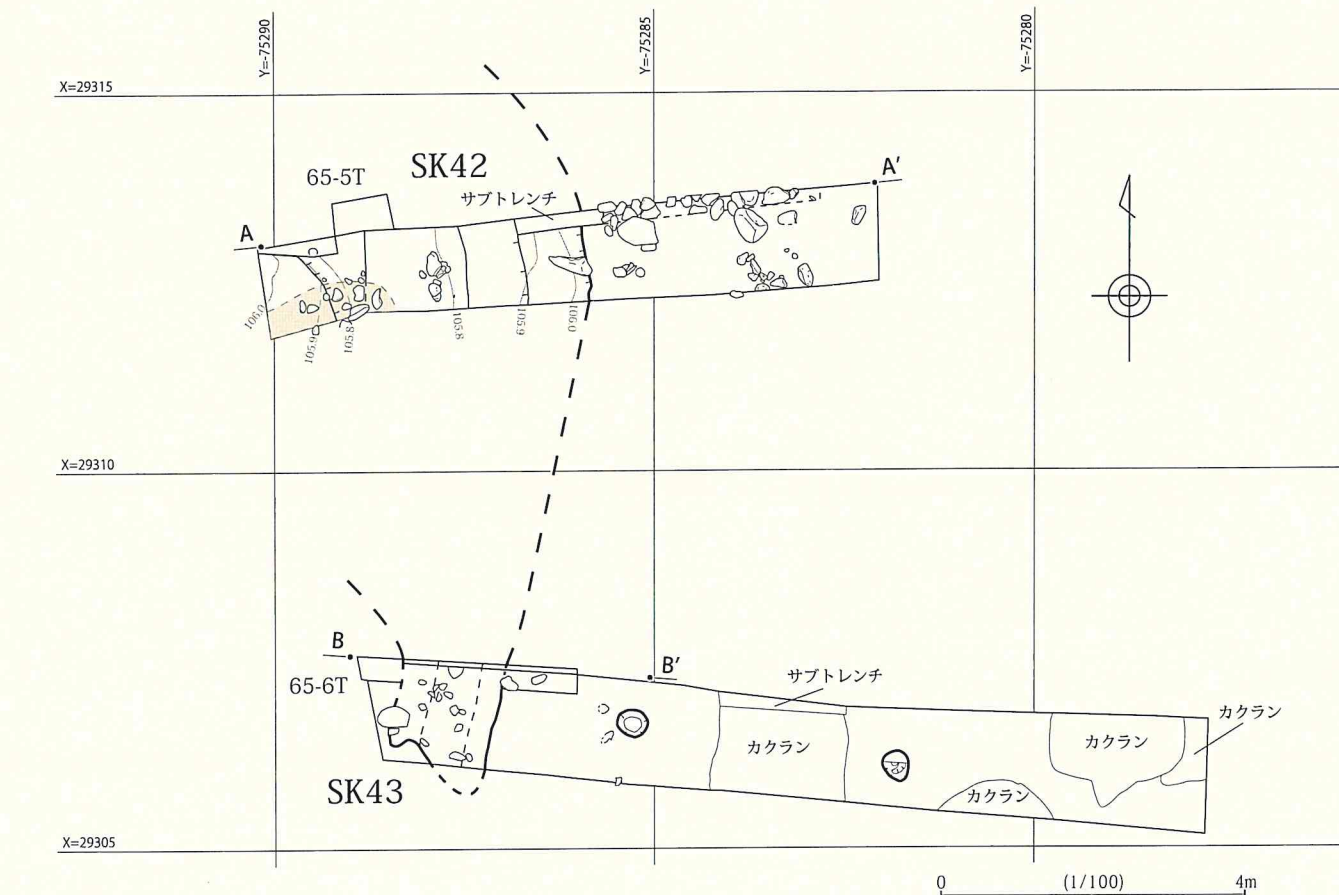
2:黒褐10YR2/2 細砂+シルト ややしまる As-B混

3:黒褐10YR2/2 細砂+シルト ややしまる As-B多量 古代遺物混

4:黒褐10YR2/3 細砂+シルト ややしまる 古代遺物混

5:黒褐10YR2/3 細砂+シルト ややしまる 礫(径0.5-5cm)多量 炭化物(径1cm)微量

図 51 SK41 (65-1T) 平面図・土層断面図



SK43

- 1: 暗褐色10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い As-A多量 耕作土
- 2: 暗褐色10YR3/3 しまりあり 粘性あり As-A、As-B、礫混 炭化物粒子少量
- 3: 暗褐色10YR3/4 しまりあり 粘性やや弱い 礫(径2-10cm)多量 白色粒子、褐色粒子少量
- 4: 暗褐色10YR3/3 しまり 粘性あり As-A、As-B混
- 5: 暗褐色7.5YR3/4 しまり強い 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子多量 炭化物粒子少量
- 6: にぶい黄褐色10YR5/4 シルト しまりあり 粘性ややあり 褐色粒子、礫(径0.5cm)少量
- 7: 暗褐色10YR3/3 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子、褐色粒子、礫(径1-2cm)少量
- 8: にぶい黄褐色10YR5/4 シルト しまり 粘性あり 礫(径2-15cm)少量
- 9: 褐色10YR4/4 しまり強い 粘性ややあり 礫(径0.5-1cm)大量 礫(径5-10cm)少量 (地山土)

SK42

- 1: 暗褐色10YR3/4 しまり弱い 粘性あり As-A、As-Bを含む
- 2: 灰黄褐色10YR4/2 しまり弱い 粘性あり As-A、小礫混 近世～現代
- 3: 暗褐色7.5YR3/3 しまりあり 粘性弱い As-B多量 礫(径0.5-1cm)、炭化物少量
- 4: 灰黄褐色10YR4/2 しまり 粘性弱い As-B混 植物痕
- 5: 黒褐色10YR3/1 しまりあり 粘性弱い As-B少量
- 6: 暗褐色10YR3/3 しまりあり 粘性弱い As-B多量
褐色粒子、白色粒子混 礫(径0.5-1cm)微量
- 7: 黒褐色10YR3/2 しまりやや強い 粘性弱い As-B大量 褐色粒子少量
- 8: 黒褐色7.5YR3/1 しまりあり 粘性あり As-B、炭化物混
- 9: 暗褐色10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-B、白色粒子混 炭化物(径0.5cm)微量
- 10: にぶい黄褐色10YR4/3 しまりあり 粘性やや強い
炭化物(径0.5-2cm)、褐色粒子、礫(径0.5-3.0cm)少量
- 11: 褐色10YR4/4 しまりやや強い 粘性あり 褐色粒子、炭化物、礫(径10cm)混
- 12: にぶい黄褐色10YR5/4 しまりあり 粘性あり 褐色粒子混 白色粒子、小礫少量
- 13: 褐色10YR4/6 しまりあり 粘性あり 白色粒子、褐色粒子混 炭化物粒子少量
- 14: にぶい黄褐色10YR4/3 しまり 粘性あり 白色粒子少量
- 15: 褐色10YR4/6 しまり強い 粘性あり 礫(径5-10cm)多量
- 16: 暗褐色10YR3/4 しまりあり 粘性あり 小礫多量 (地山土)
- 17: にぶい黄褐色10YR6/4 しまりあり 粘性弱い 粗砂大量 (地山土)
- 18: 褐色10YR4/4 しまりあり 粘性あり 礫少量 (地山土)

図 52 SK42・SK43 (65-5T・65-6T) 土層断面図

出土遺物には、古代の土師器片・須恵器羽釜・被熱粘土塊がある。

SD05 検出長 8.17m である。検出幅は 0.9m～1.6m である。Y=-75276.16 では深さ 0.30m、底面の標高は 106.87m である。Y=-75270.00 では深さ 0.28m、底面の標高は 106.92m を測る。勾配は 8.12% であり、東から西へ緩やかに下っている。出土遺物には須恵器片がある。

2つの溝の関係 SD04 と SD05 は 24T 内の X=29215.64、Y=-75268.90 付近で直角に連なっている。2つの溝が連続する場所において、両溝の土層の差異を確認することができなかったため、両溝は一連のものであり同一の埋没過程を経たものと思われる。このため建物の雨落溝となる可能性も想定して精査したが、溝で囲まれた内部には建物の痕跡となる遺構は確認できず、近現代のものと思われる礫が詰まった暗渠があるのみであった。また、雨落溝と仮定して、29-2T、29-3T、28T 南西拡張部にて南辺・東辺にあたる溝の検出を試みたが、これに相当する遺構は確認できなかった。

ii 正倉院北辺外周区画溝 (SD17・SD18)

および土橋 (SX58) (図 55～59)

位置・立地 63T および 64-1T で検出している。吉井段丘上位面の北端に立地する。

方向 東西方向に伸びる。64-1T の西端から Y=-75264 付近までは正方位気味に伸びているが、これ以東は N-86.8°-E に向きを変え、63T に伸びている。64-1T と 63T の間は未調査であるが、69T および 70T から連なる谷地形 NR25 と交差すると予想される。

区画溝西端は、攪乱土の下に溝埋土と思われる黒褐色土が残存しているため、Y=-75273 付近まで伸びているとみられる。64-1T 西端から正倉院西側谷地 (NR28) 東肩までの間は 2.2m を測る。この間には現在コンクリート製の農業用水が敷設されているが、古代の地形と大きく変わっていないと思われる。排水のことも考えるとこの区画溝は谷地形 NR28 にまで続いていた可能性もある。

63T 以東は段丘崖にあたる。SD18 は東進し、段丘崖まで続いていたと推測される。

形状・規模 64-1T で検出した平面形状は直線的で

はないが、これは地山である基本層序 V - 2 層が礫を多く含む土質のため、溝の法面が礫ごと大きく崩れ抉られたことによると思われる。一部底面まで掘り下げたところでは断面形は逆台形であり、一部中位に段が付くところもある。底面両端のラインは直線状に伸びており、連続土坑状の平面を示す溝にはなっていない。

北辺区画溝検出長は 64-1T で 19.99m (土橋含む)、SD17 部分で 13.77m、SD18 部分で 2.50m、63T で 3.00m を測る。確認した北辺区画溝の全長は 55.03m となる。検出幅は 64-1T で最大 2m だが、トレンチ東壁では区画溝内側の掘り込み面が高い位置にあるため、外側の掘り込み面もこの高さまで復元すると 3m 以上の幅となる。63T でも最大幅 2m を測る。検出面からの深さは 64-1T の Y=-75267 地点で 0.65m、63T では 0.47m を測るが、64-1T 東壁断面では 0.88m である。底面は凝灰岩の岩盤まで達しているが、この岩盤への掘り込みは無い。

底面の勾配 底面の標高は計測した場所の数値を示すと、表 16 のとおりである。底面標高を比較すると、西の SD17 では、東から西へ傾斜するが、勾配は 1.4% でありほぼ平坦である。東の SD18 では、東から西へ向けて 30.0% の勾配で下っている。64-1T と 63T の間には NR25 が通ると予想されるので、ここへ排水したと推定される。

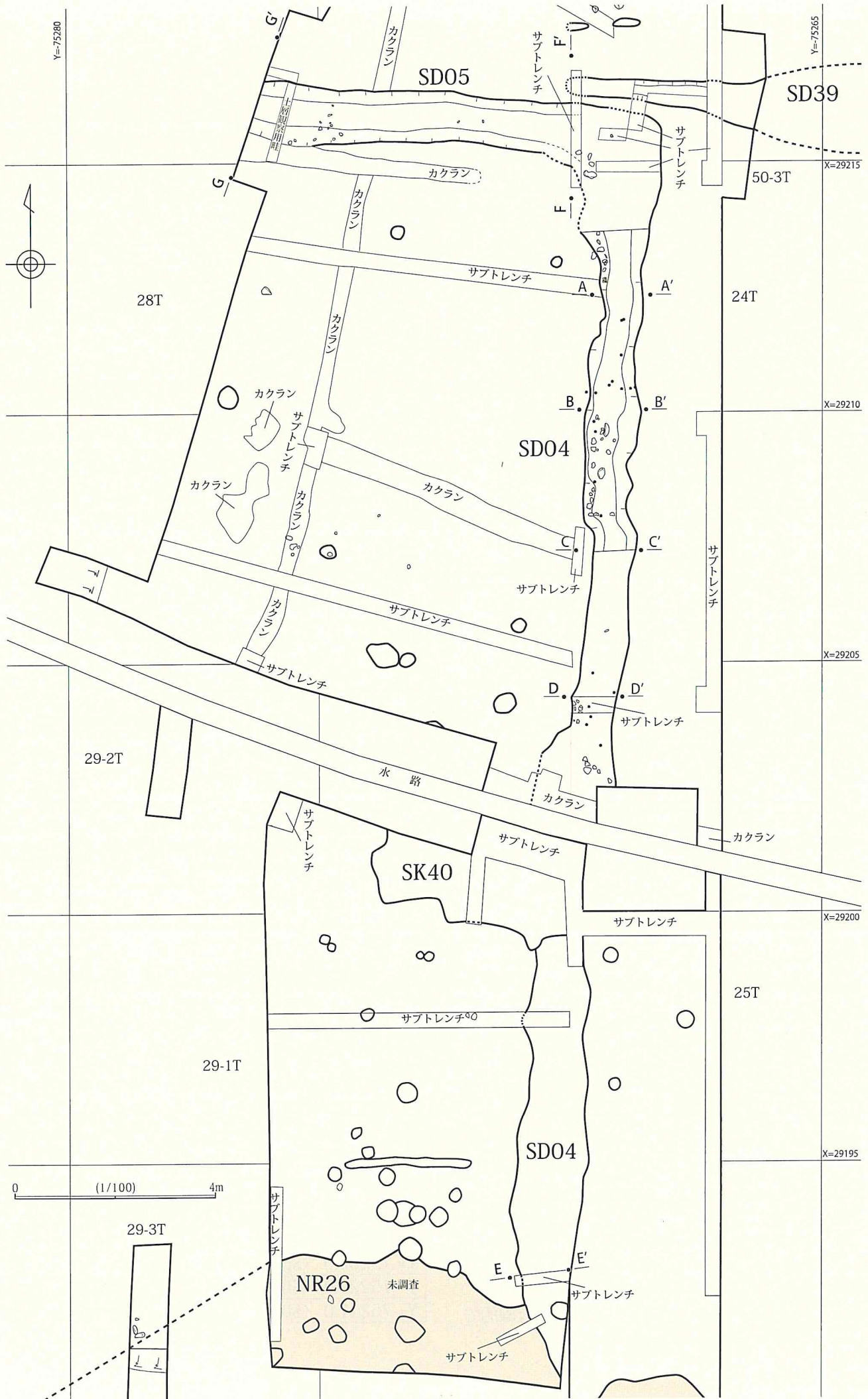
土層 溝埋土の最上層は As-B を大量に含む層であり、基本層序 III - 2 層に相当する。その下層は黒褐色～暗褐色粘質土であり、最下層は径 1～2cm の小礫および粗砂を含む。埋土の堆積状況からみて掘り直しは認められず、徐々に埋没した様子が観察できる。

遺物出土状況 64-1T においては、埋土中位から径 30cm 以下の円礫とともに瓦や須恵器が出土している。63T では円礫は出土しているが、遺物は出土していない。

土橋 (SX58) 北辺外周区画溝では地山を掘り残した土橋 SX58 を検出している。Y=-75258～Y=-75255

表 16 北辺外周区画溝 底面標高一覧表

計測地点	底面標高
Y=-75267.0 (SD17:64-1T 西側)	104.24m
Y=-75260.0 (SD17:土橋西側)	104.23m
Y=-75252.0 (SD18:64-1T 東壁)	103.85m
Y=-75220.0 (SD18:63T 西壁)	104.81m
Y=-75217.0 (SD18:63T 東壁)	104.74m



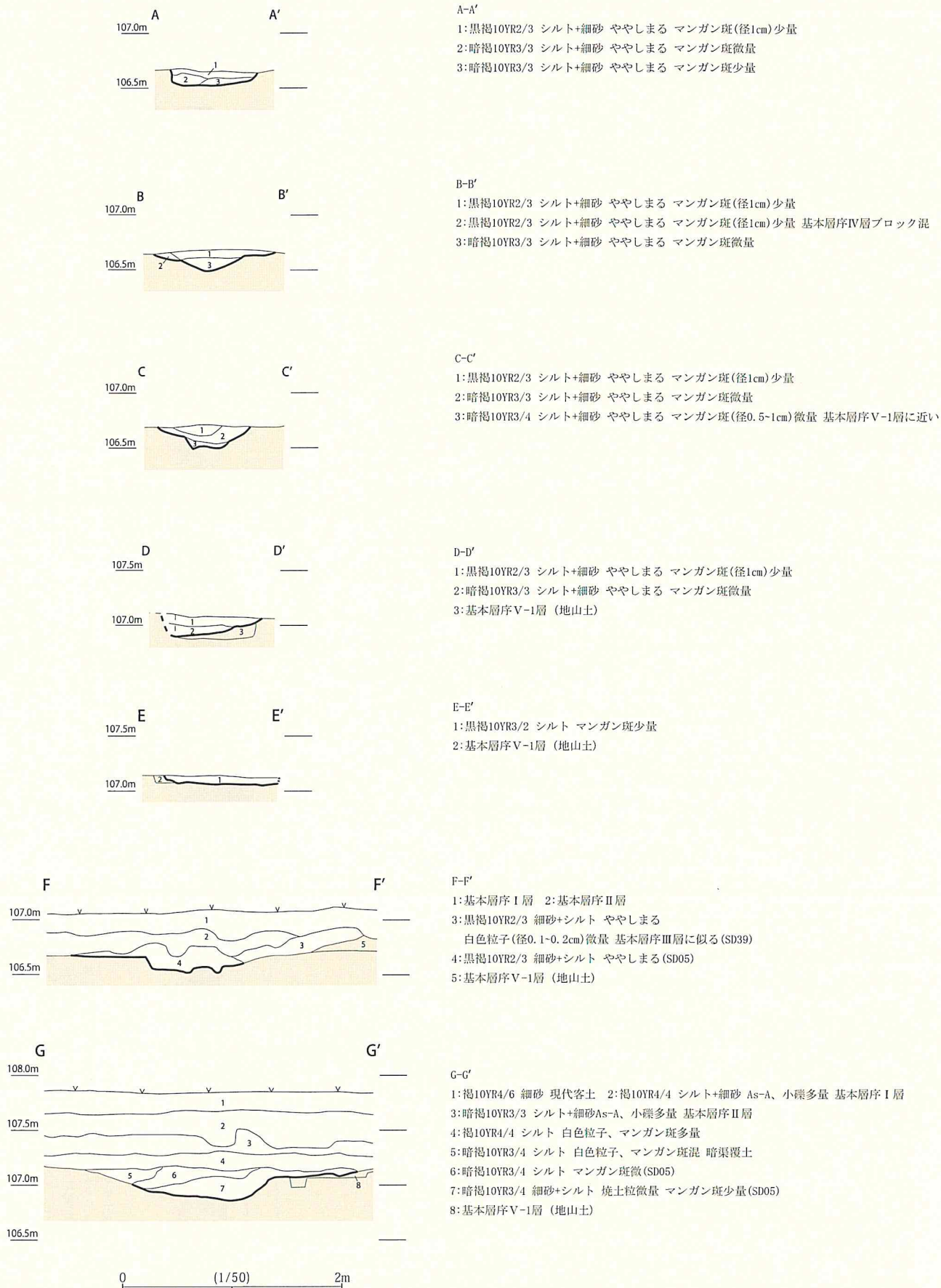


図 54 SD04・SD05 (24T・28T・29-1T) 土層断面図

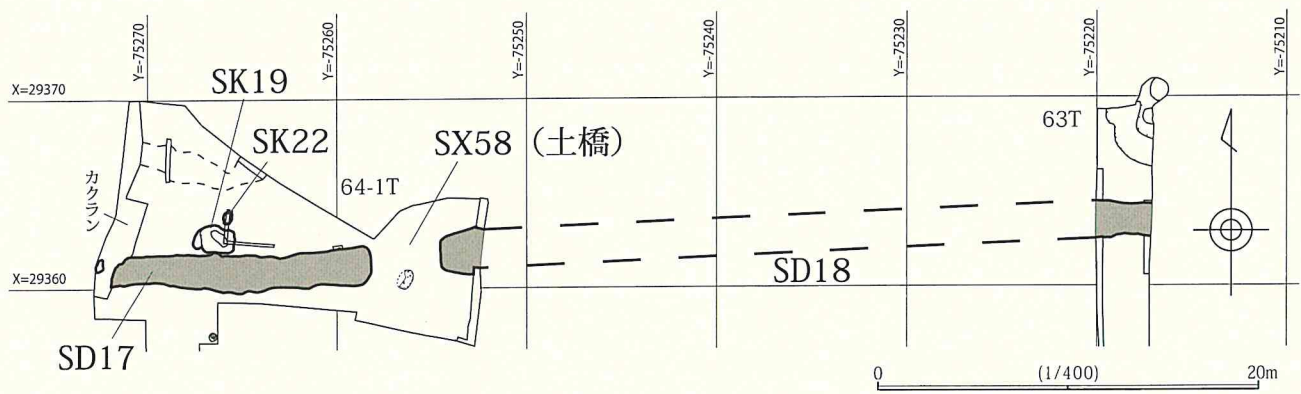


図 55 北辺外周区画溝平面図

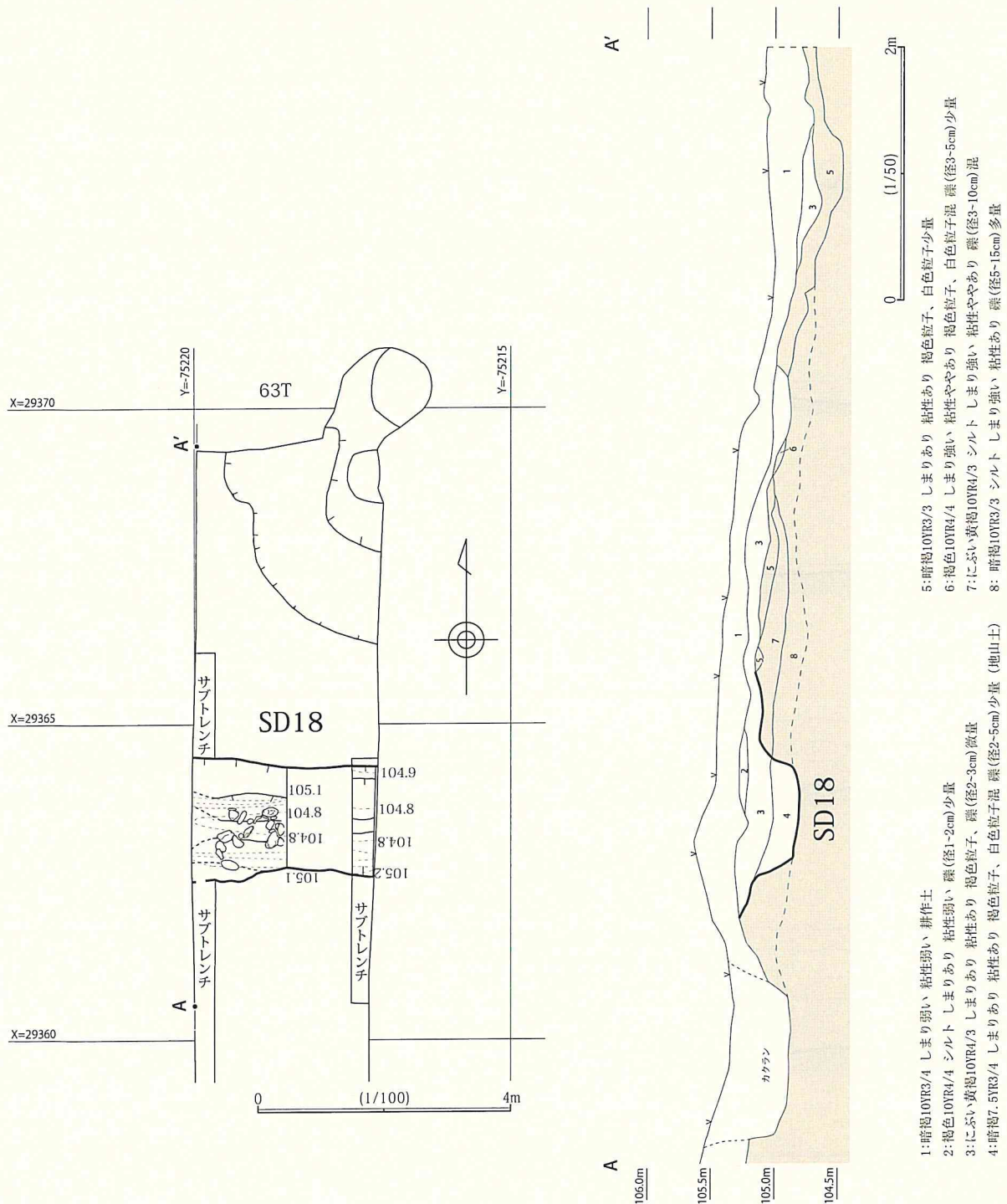


図 56 SD18 (63T 部分) 平面図・土層断面図

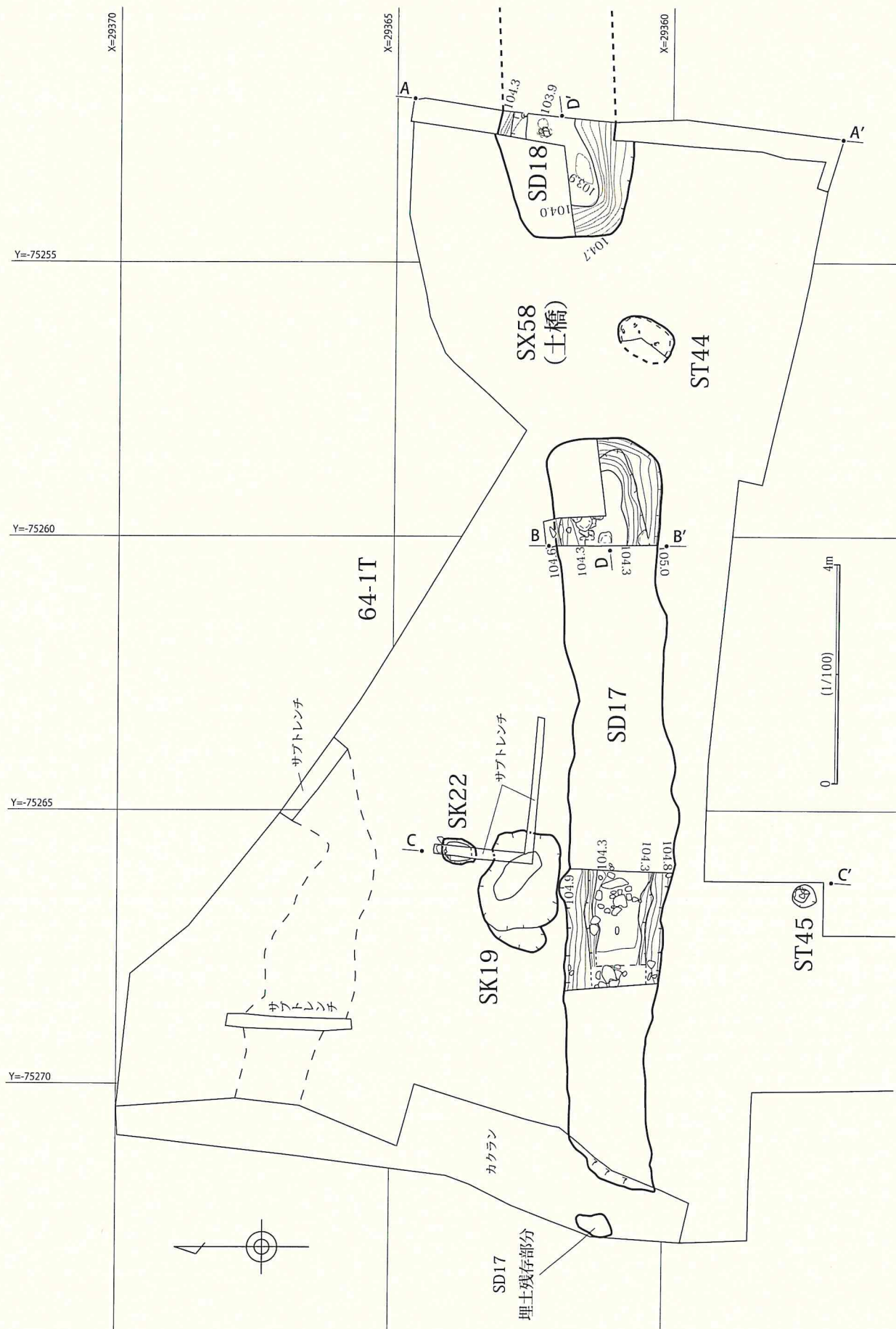
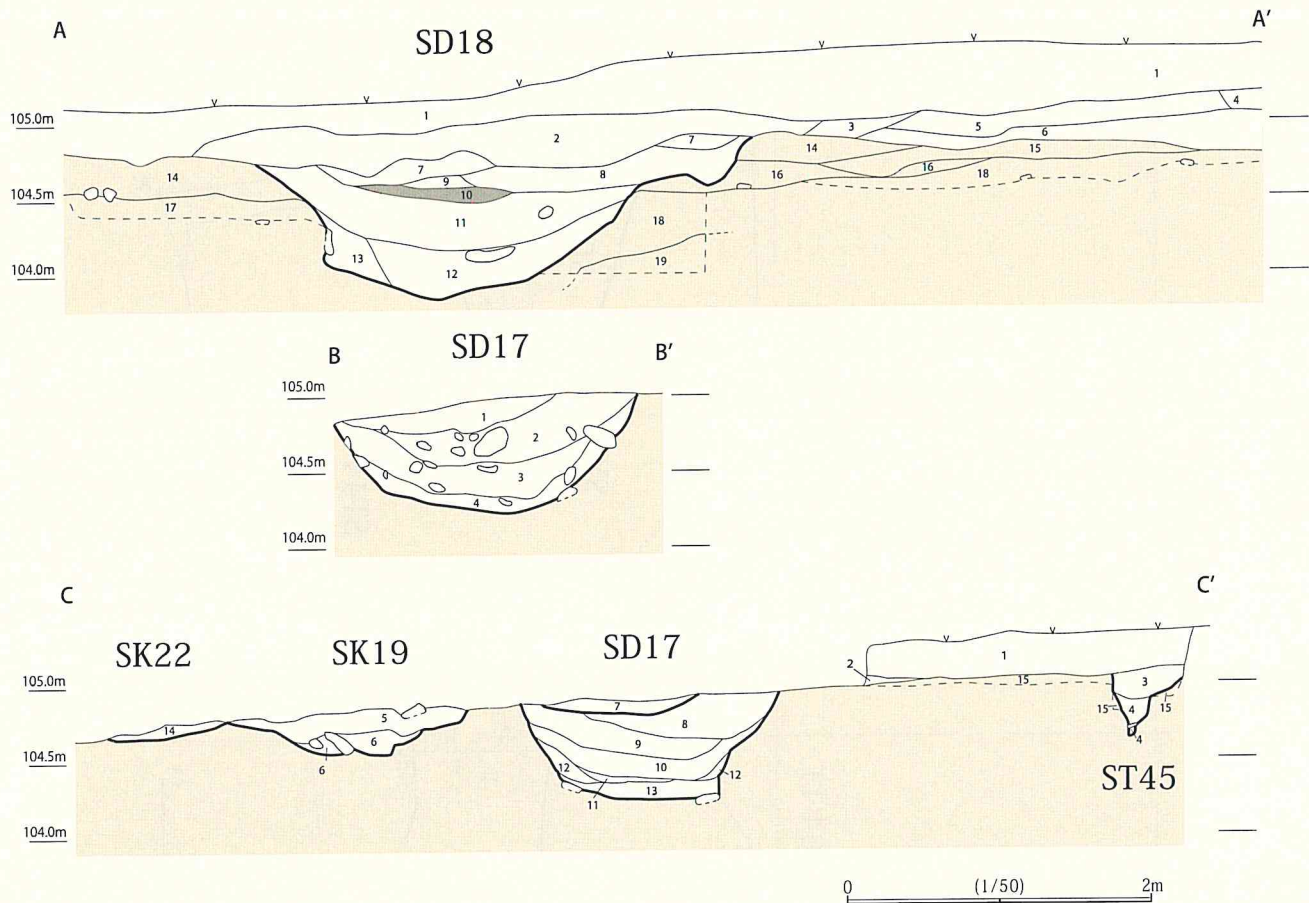


図 57 SD17・SD18 (63T 部分)・SX58 (土橋) 平面図



A-A'

- 1: 灰黄褐10YR4/2 しまりやや強い 粘性弱い As-A少量 基本層序I層
 - 2: 暗褐10YR3/3 しまりあり 粘性あり As-B、褐色粒子混 小礫少量
 - 3: 暗褐10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-B多量
 - 4: 黒褐10YR3/2 しまり強い 粘性あり As-B多量 褐色粒子混
 - 5: 暗褐10YR3/3 しまりあり 粘性やや強い As-B混 礫(径2-3cm)、褐色土少量
 - 6: 暗褐10YR3/3 しまりやや強い 粘性弱い As-B混 褐色粒子、礫(径1-2cm)、炭化物粒子少量
- SD18埋土
- 7: 暗褐10YR3/3 しまりあり 粘性ややあり As-B混 小礫、褐色粒子少量
 - 8: 黒褐10YR2/3 よくしまる 10YR5/8(岩盤)ブロック(径2-3cm)、粗砂(径0.5-1cm)微量
 - 9: 暗褐7.5YR3/4 しまりやや強い 粘性弱い As-B多量
 - 10: 黒褐10YR3/1 しまり強い 粘性弱い As-B大量 礫(径2-3cm)、褐色粒子少量
 - 11: 暗褐10YR3/4 しまり強い 粘性あり 礫(径0.5-5cm)多量 褐色粒子、白色粒子混
 - 12: 黒褐10YR3/2 しまりあり 粘性あり 褐色粒子、白色粒子混 礫(径15-20cm)微量
 - 13: 暗褐10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 礫(径1-2cm)多量 褐色粒子少量 (地山土)
 - 14: 暗褐7.5YR3/4 しまりあり 粘性あり 白色粒子、褐色粒子、礫(径0.5-2cm)混
 - 15: にぶい黄褐10YR4/3 シルト しまりあり 粘性ややあり
白色粒子、礫(径2-5cm)、褐色粒子少量
 - 16: 暗褐10YR3/4 しまりあり 粘性あり 褐色粒子、砂粒混 礫(径1cm)少量
 - 17: 褐10YR4/6 しまりやや強い 粘性あり 褐色粒子多量
 - 18: にぶい黄褐10YR4/3 しまり強い 粘性あり 礫(径2-3cm)多量 基本層序V-1層
 - 19: 基本層序V-2層

B-B'

- 1: 黒褐10YR2/2 細砂 ややしめる 礫(径1-5cm)多量
- 2: 黒褐10YR2/3 細砂 ややしめる 礫(径1-5cm)多量
- 3: 黒褐10YR3/2 細砂 ややしめる 礫(径1-5cm)少量
- 4: 黒褐10YR2/3 細砂 ややしめる 礫(径0.1-0.5cm)多量

C-C'

- 1: 暗褐10YR3/4 しまりあり 粘性あり As-A多量 基本層序I層
 - 2: 黒褐10YR3/2 しまりあり 粘性ややあり As-Bを含む
- ST45
- 3: 灰黄褐10YR4/2 しまりあり 粘性弱い
褐色土ブロック(径0.5-1cm)混 白色粒子、褐色粒子少量
 - 4: 褐10YR4/4 しまりあり 粘性あり 白色粒子、褐色粒子少量
- SK19
- 5: 暗褐10YR3/3 シルト しまりあり 粘性弱い 白色粒子、礫(径0.5-1cm)混
 - 6: 灰黄褐10YR4/2 シルト しまり弱い 粘性弱い 白色粒子少量
- SD17
- 7: 黒褐10YR3/1 しまりあり 粘性ややあり As-B 褐色粒子、白色粒子混
 - 8: にぶい黄褐10YR4/3 しまりあり 粘性あり 白色粒子、褐色粒子混 礫(径2-3cm)微量
 - 9: 灰黄褐10YR4/2 シルト しまりやや強い 粘性あり
白色粒子、褐色粒子混 礫(径2-5cm)少量
 - 10: 暗褐10YR3/4 シルト しまりあり 粘性あり 褐色粒子混 白色粒子少量
 - 11: にぶい黄褐10YR5/4 しまりやや強い 粘性あり 白色粒子、礫(径0.5-1cm)混
 - 12: にぶい黄褐10YR4/3 シルト しまり弱い 粘性弱い 褐色粒子を少量含む
 - 13: 暗褐10YR3/3 しまり強い 粘性弱い 礫(径2-3cm)多量 褐色粒子、白色粒子混
- SK22
- 14: 暗褐10YR3/4 しまりあり 粘性弱い 白色粒子、砂粒混 褐色粒子少量
- 地山土
- 15: にぶい黄褐10YR4/3 しまり強い 粘性あり
白色粒子、礫(径0.5-5cm)少量 基本層序V-1層

図 58 SD17・SD18 (63T 部分) 土層断面図

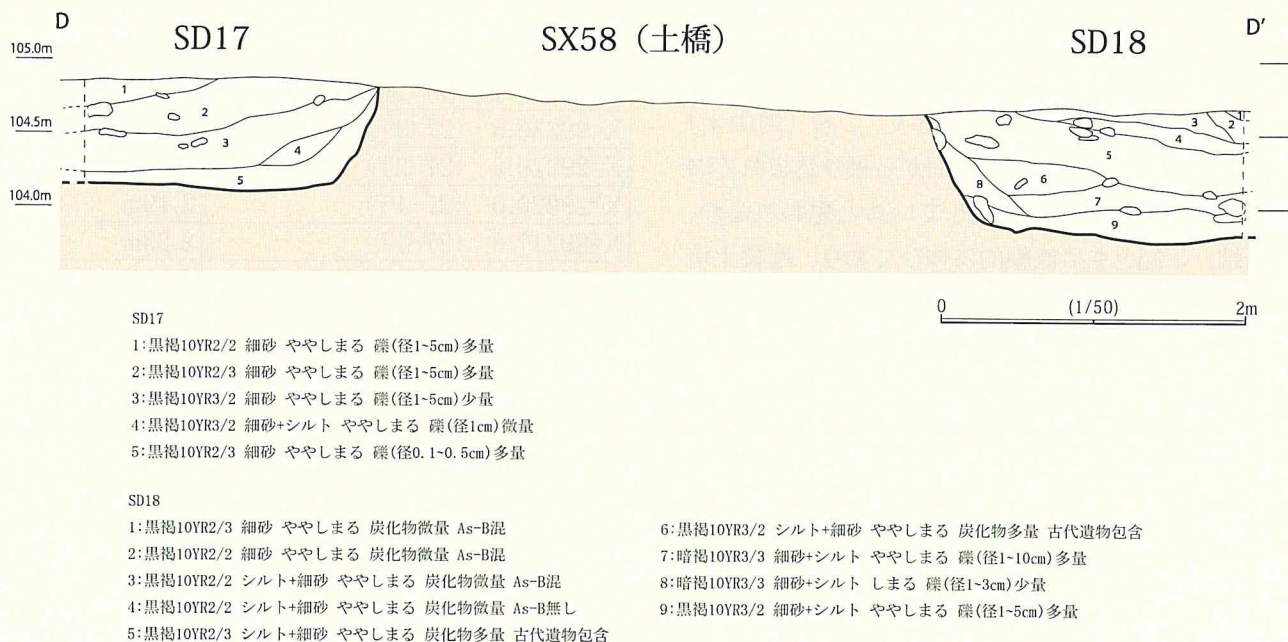


図 59 SX58 (土橋) 土層断面図

付近に位置する。東西長は 3.72m を測る。土橋西端の標高は 105.02m、東端で 104.74m を測り、東西で 0.28m の高低差がある。土橋上面は西から東へ 2.6° 傾斜しているが、これは検出面の傾斜に起因しており、このことから機能面の状況を示すと判断することはできない。

土橋付近に門などの明確な遺構は無かったが、土橋中央で中世と思われる土坑墓 (ST44) を検出した。

周辺の施設 64-1T の東壁断面 (図 58 A-A') を観察すると、区画溝南肩検出ラインから南側方向へ幅 0.5m の間がやや平坦気味になっており、この平坦面からさらに南側は 0.15m 高くなっている (第 14 層)。第 14 層の直上は As-B 混土が水平に堆積している。第 14 層上面ラインを古代の地表面に近いものとする、前述の平坦面は区画溝内部の施設であった可能性もある。この平坦面は西辺区画溝である SD20-27T 部分でも断面で確認できており、溝に沿って設けられたテラス状の施設であったとも推定できる。

SD17 の北には 8 世紀初頭の土師器壺 (図 146-220) が出土した SK22 と、瓦が出土した SK19 があるが、溝との直接的な関係は認められない。

iii 正倉院西辺外周区画溝 SD20・SD21

(図 60~66)

位置・立地 27-1T・27-2T・27-3T・71T・72T・75T・

76T で検出している。概ね Y=-75300 上を通り、X=29148 から X=29234 付近までの間で部分的に検出している。西辺外周区画溝は平坦な場所に開削されている。75T 内では SD20 と SD21 が検出されたが、重複関係からみて西側 SD20 が古く東側 SD21 が新しい。

なお、かつて区画溝南西コーナー部分については、31-1T ~ 31-6T の黒色粘質土の分布を確認し、ここ一帯が水はけの悪い低地であると報告したが⁽³⁾、75T・76T の調査において、この黒色粘質土は、谷地形 NR26 や SD21 の埋土であることが判明したので、本報告にて訂正する。

方向 溝は概ね正方位をとり、南北方向に伸びているが、27T では N-6°-E、75T では N-2°-E ~ N-5°-E の方位をとる。

この溝を北へ延長すると、X=29280 付近で現況の谷地形 NR28 にあたる。延長線上の 73T・74T ではこの溝に該当する遺構は確認されなかった。現状では、正倉院西辺北寄り自然地形である NR28 によって区画されていたと推測される。

溝は 75T 北端から 76T にかけて谷地形 NR26 と交差している。NR26 は浅い谷であったため、溝は NR26 を貫いて掘削されている。

(3) 57 頁 注 (1) に同じ。

形状・規模 底面まで検出した部分のごく一部であるため、溝の形状が明らかな部分は少ない。27-1T から 72T までの間は、基本層序 V - 1 層（地山土）の締まりのある硬質な土層上面から掘り込まれており、機能時の状況を良く残していると思われるが、溝上端、下端ともに直線的に伸びており、連続土坑状の平面形にはならない。断面形状は逆台形である。地山土が固い 27-1T では下端隅は明瞭な角を持つ。

X=29218 の 27-1T で、溝東肩がクランク状に屈曲する。下端もやや北の X=29219.9 で屈曲している。この部分の溝内部東側で長さ 1.1m、幅 0.5m のテラスを持つ。東側のテラスは断面形状からも観察でき、27-2T・27-3T や 75T C-C'・D-D' 断面の SD21 部分でも同様のテラスが設けられていたと思われる。

検出長は面的に調査した 27-1T で 2.95m、75T においては SD20 が 23.20m、SD21 が 25.76m である。西辺外周区画溝全体では 75T 南西コーナーから 27-3T まで 87.54m となる。

溝の検出幅は、表 17 に示した。

検出面からの深さは 72T 地点が最大で 0.9m を測る。

底面の勾配 底面の標高は計測した場所の数値を示すと表 18 になる。全体としては南から北へ向けて下っている。溝底面を調査した中では 75T の C-C' 断面付近が最も高所である。75T の C-C' 断面から 27-2T 北壁までの標高差は SD20 で 1.35m、勾配は 17.7%、SD21 で 1.18m、15.4% である。区画溝は 76T 付近で谷地形 NR26 の堆積土を掘り込んで構築されており、さらに北の谷地形 NR28 に向けて排水していたと考えられる。

土層 土層の残存状況が良い 76T 以北をみると、基本層序Ⅲ - 2 層に相当する As-B 混土によって完全に埋没している。27-2T と 76T の断面では、As-B 一次堆積層の根拠となる最下位ユニットの青灰色細粒火山灰層が認められ、かつこの火山灰層は溝の範囲を超えて水平に堆積している。このことから西辺外周区画溝は少なくとも As-B 降下時（1108 年：天仁元年）には、ほぼ完全に埋没していたことがわかる。

埋土は細砂が混ざったシルト質土が主体である。27-1T と 72T の埋土中位東寄りでは掘り直したような痕跡があるが、72T 以北のその他の場所では明確な掘り直しは認められない。

表 17 西辺外周区画溝 検出幅一覧表

計測地点	検出幅	
X=29235.6 (27-3T)	3.58m	
X=29229.5 (27-2T)	2.95m	
X=29220.0 (27-1T)	3.19m	
X=29217.0 (27-1T)	2.23m	
X=29207.0 (71T)	2.98m	
X=29197.0 (72T)	1.89m	
X=29186.0 (76T)	1.6m (復元値)	
	SD20	SD21
X=29167.0 (75T A-A' 断面付近)	—	3.44m
X=29163.0 (75T B-B' 断面)	1.88m	2.12m
X=29150.0 (75T C-C' 断面)	1.60m	1.90m
Y=-75301.0 (75T 南辺区画溝)	1.66m	—

表 18 西辺外周区画溝 底面標高一覧表

計測地点	底面標高	
X=29229.5 (27-2T 北壁)	106.06m	
X=29220.0 (27-1T 北壁)	106.28m	
X=29197.5 (72T 北壁)	106.62m	
X=29185.5 (76T 南壁)	106.84m	
	SD20	SD21
X=29163.0 (75TB-B' 断面)	107.30m	107.16m
X=29151.0 (75TC-C' 断面)	107.41m	—
X=29150.5 (75TC-C' 断面)	—	107.24m
X=29148.5 (75TE-E' 断面)	107.10m	—
X=29149.0 (75TE-E' 断面)	—	107.08m

27-2T や 76T 地点では、地山である基本層序 V - 1 層の褐色粘質土が薄く、その下に粗砂主体の透水層がある。溝の底面はここまで達しており、発掘作業時も激しい湧水があった。

溝の掘り直し 75T 内、区画溝南西コーナー付近では西辺外周区画溝を 2 条検出した。重複しており、西側（SD20）が古く、東側（SD21）が新しい。多胡郡正倉跡において明確に新旧を確認できる唯一の遺構である。コーナーの検出状況を見ると、南辺外周区画溝部分には重複は見られず、西辺外周区画溝のみ位置をずらして掘り直しているのがわかる。

SD20 の方位は N-2°-E である。SD21 の方位はコーナーから X=29165 付近まで N-5°-E であるが、北へ進むと SD20 と重なり、プランが不明瞭なため主軸方位を明確に計測できない。検出したプランからは西に振れ SD20 に合流する形になっているように

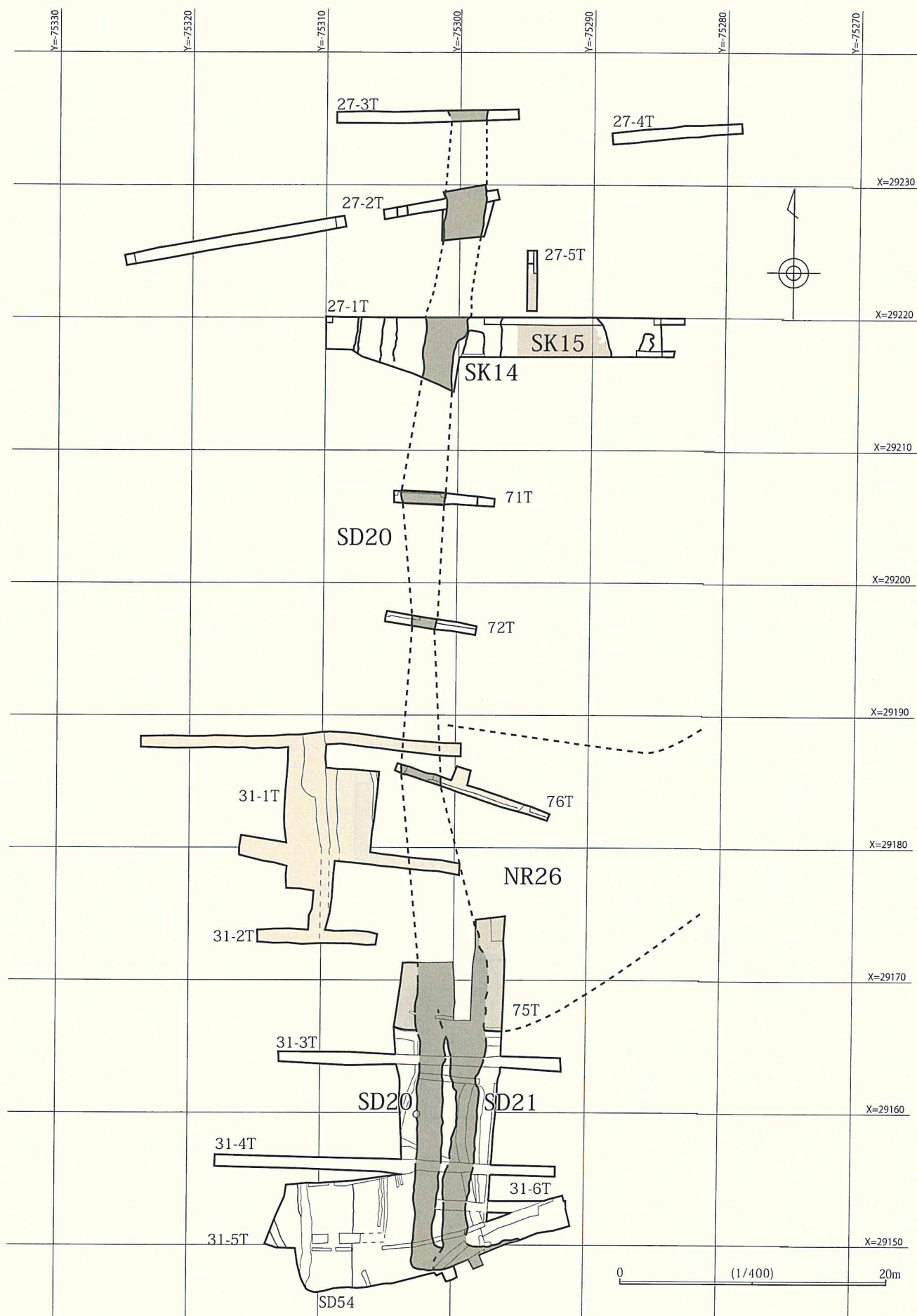


图 60 SD20·SD21 西边外周区画溝 平面图

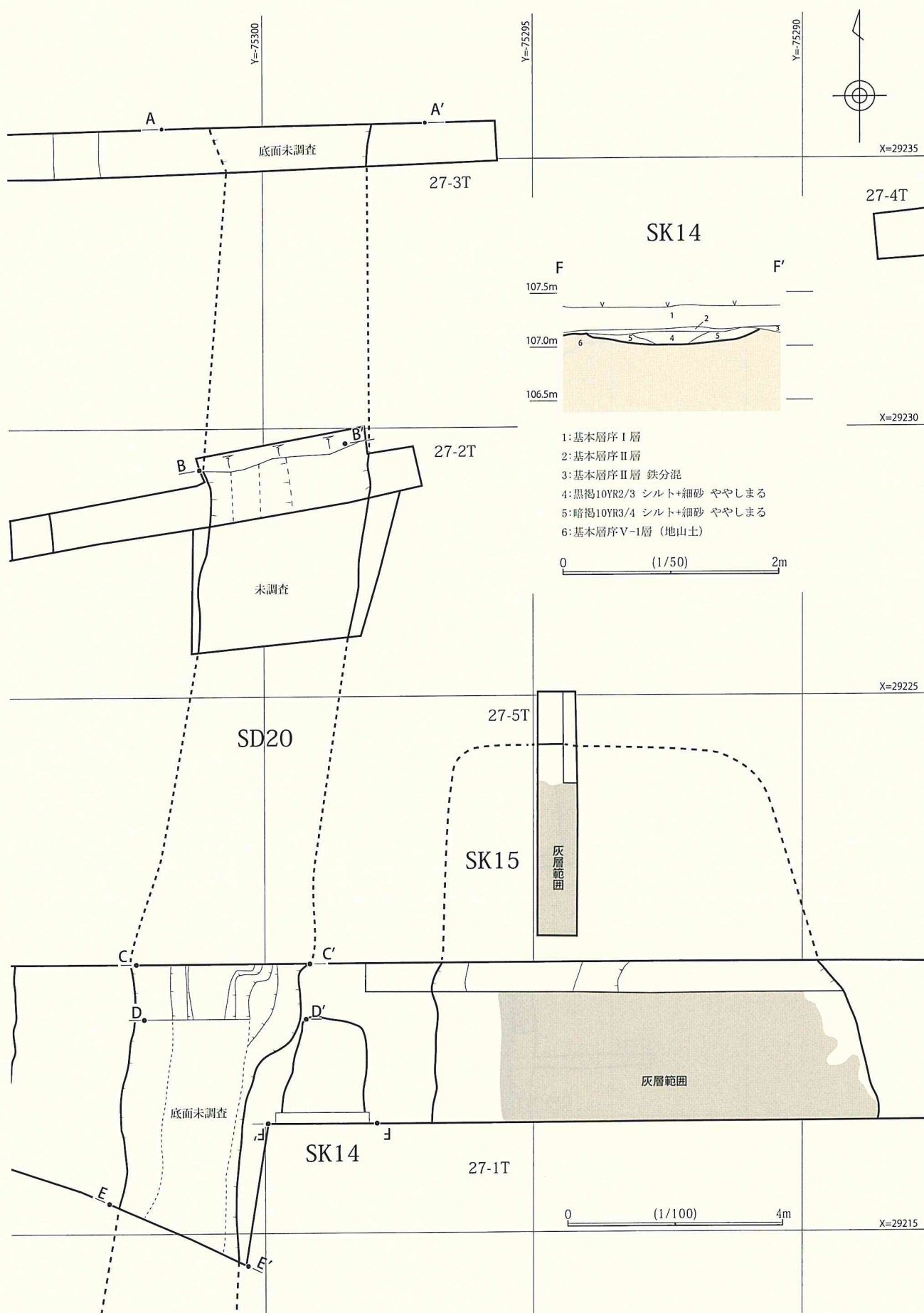


図 61 SD20・SK14 (27-1・2・3T 部分) 平面図・SK14 土層断面図

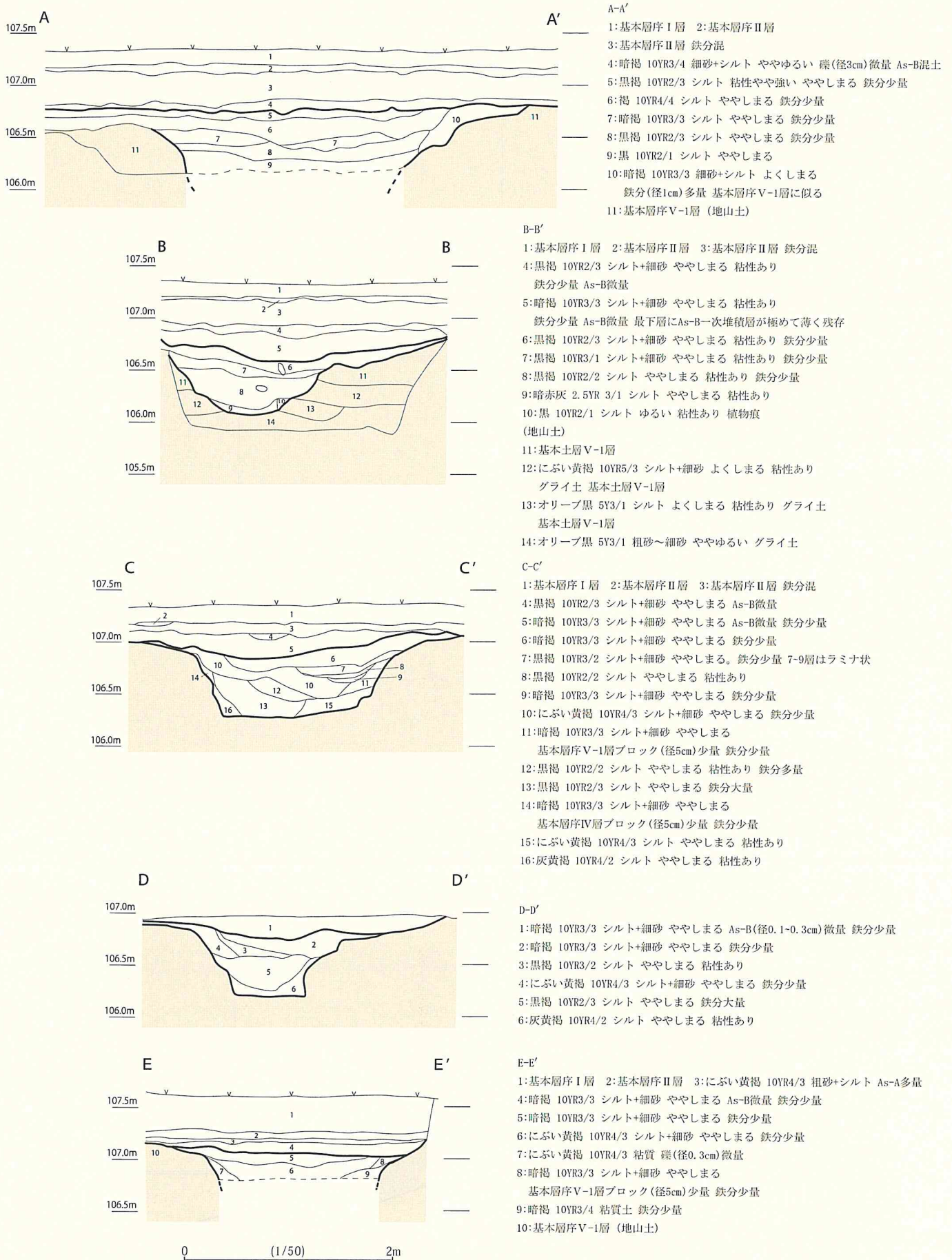


図 62 SD20 (27-1・2・3T 部分) 土層断面図

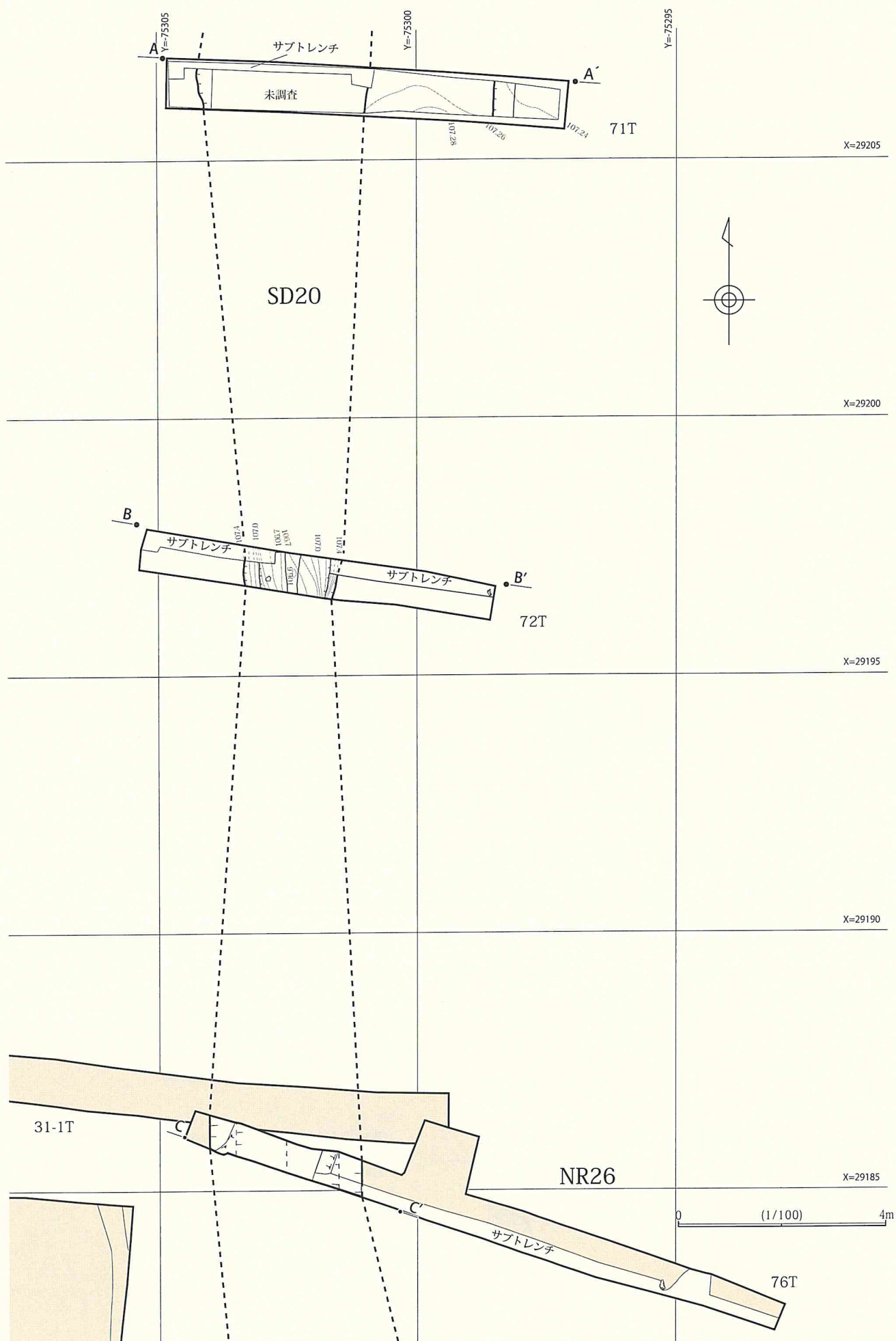
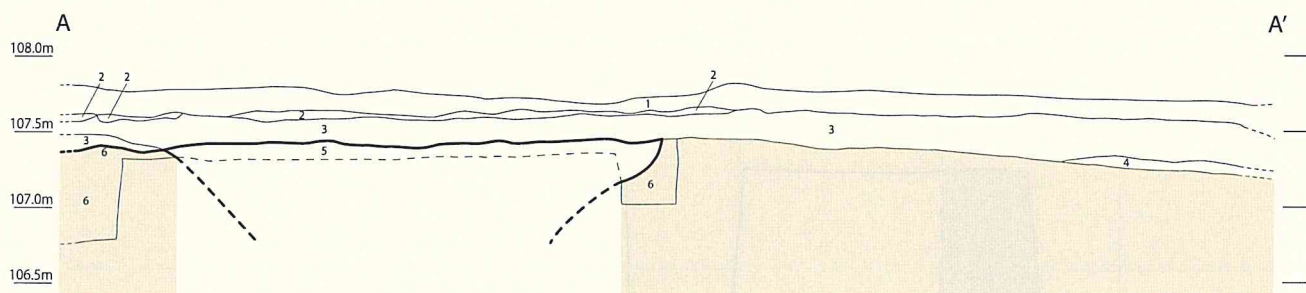
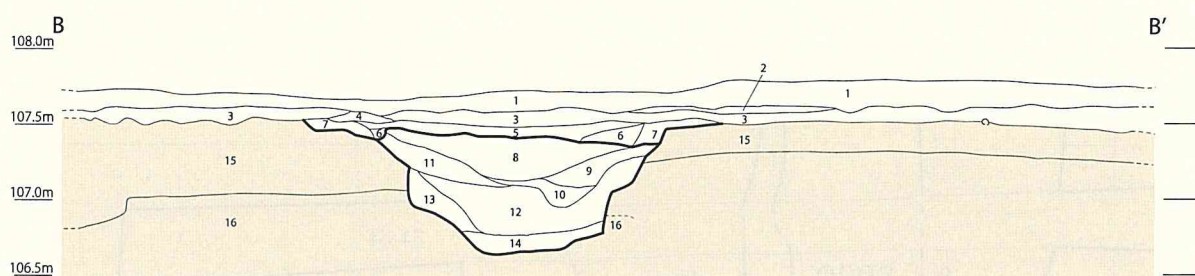


図 63 SD20 (71・72・76T 部分) 平面図

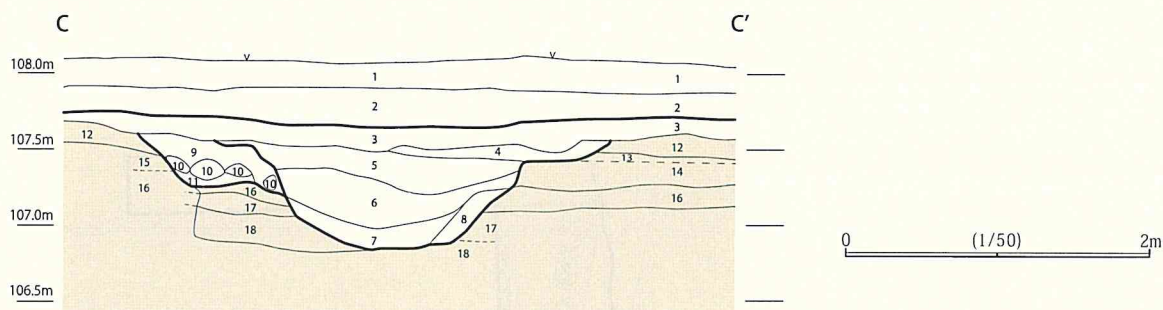


- 1:暗褐10YR3/3 細砂+シルト ややしまる As-A混 基本層序Ⅰ層
 2:褐10YR4/6 粗砂+シルト ややしまる As-A混
 3:暗褐10YR3/4 細砂+シルト よくしまる As-B混 4:As-B 二次堆積層(純度高い)
 5:暗褐10YR3/4 細砂+シルト よくしまる 砂粒(径0.1cm)少量 基本層序V-1層ブロック(径1cm)少量
 6:暗褐10YR3/4 細砂+シルト 非常にしまる マンガン斑混 基本層序V-1層 (地山土)



- 1:暗褐10YR3/3 細砂+シルト ややしまる As-A混 基本層序Ⅰ層
 2:褐10YR4/6 粗砂+シルト ややしまる As-A混
 3:暗褐10YR3/4 細砂+シルト よくしまる As-B混
 4:暗褐10YR3/3 細砂+シルト よくしまる As-B混
 5:暗褐10YR3/3 細砂+シルト よくしまる As-B混
 6:暗褐10YR3/3 細砂+シルト よくしまる As-B混 基本層序V-1層ブロック(径1cm)少量
 7:暗褐10YR3/3 細砂+シルト よくしまる As-B混 基本層序V-1層ブロック(径2cm)多量
 8:暗褐10YR3/4 細砂+シルト よくしまる 砂粒(径0.1cm)少量
 基本層序V-1層ブロック(径1cm)少量
 9:暗褐10YR3/3 細砂+シルト よくしまる 砂粒多量
 10:黒褐10YR2/2 粘土 よくしまる 管状斑鉄(径2cm)混

- 11:暗褐10YR3/3 細砂+シルト よくしまる
 砂粒(径0.1cm)多量 基本層序V-1層ブロック(径2cm)少量
 12:黒褐10YR3/2 細砂+シルト よくしまる
 砂粒(径0.1-0.5 cm)少量 管状斑鉄(径1cm)少量
 13:にぶい黄褐10YR4/3 細砂+シルト よくしまる
 砂粒(径0.1-0.5 cm)多量 管状斑鉄(径1cm)少量
 14:暗褐10YR3/3 細砂+シルト よくしまる
 砂粒(径0.1-0.5 cm)多量 管状斑鉄(径1cm)少量 (地山土)
 15:暗褐10YR3/4 細砂+シルト 非常にしまる
 マンガン斑混 基本層序V-1層
 16:褐10YR4/6 細砂+シルト ややしまる 基本層序V-1層



- 1:黒褐10YR3/2 細砂+シルト ややゆるい 基本層序Ⅰ層
 2:黒褐10YR2/3 細砂+シルト ややしまる As-B多量
 3:黒褐10YR2/3シルト+細砂 ややしまる 古代遺物包含層 SD21
 4:黒褐10YR2/2 シルト+細砂 ややしまる 礫(径0.5cm)微量
 5:黒褐10YR2/2 シルト+細砂 ややしまる 礫(径1-0.5cm)少量
 6:黒10YR2/1 シルト よくしまる
 7:黒褐10YR3/1 シルト よくしまる 10YR1.7/1シルトブロック(径5cm)多量
 8:黒褐10YR3/1 シルト よくしまる 地山土由来の崩落土か? SD20?
 9:黒褐10YR2/2 シルト よくしまる
 10:15層の地山ブロック
 11:暗褐10YR3/3 シルト ややゆるい

- NR26
 12:黒色10YR2/1 シルト よくしまる
 13:黒褐10YR2/2 シルト よくしまる As-C? 混
 14:黒褐10YR2/2 シルト よくしまる (地山土)
 15:褐10YR4/6 シルト よくしまる 鉄分沈着
 16:褐灰10YR4/1 シルト よくしまる
 17:暗灰黄2.5Y4/2 細砂+シルト よくしまる
 18:暗灰黄2.5Y4/2 粗砂 よくしまる 透水層

図 64 SD20 (71・72・76T 部分) 土層断面図

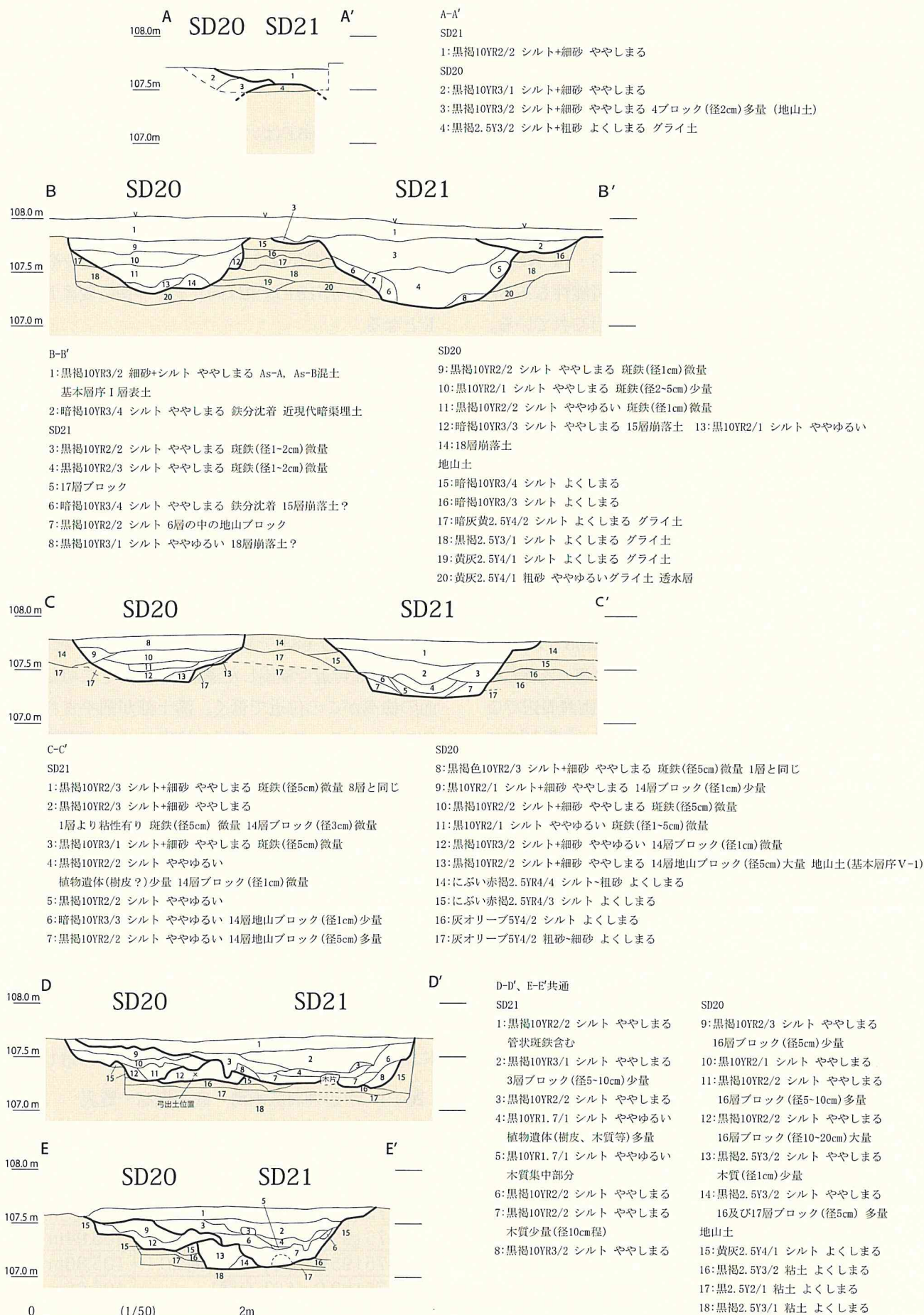


図 66 SD20 (75T 部分) 土層断面図

見える。SD21の幅はX=29165以北はA-A'断面から復元すると3.45mと広がる。新旧二つの溝は北に行くにつれて重なり、76T西寄りではSD20の痕跡も若干遺存しているが、72Tでは完全に重なっている。

コーナー付近の溝埋土は複雑に堆積している(図66 D-D'E-E')。SD20は基本層序V-1層の黄灰色地山ブロックを多量に含む。溝肩の崩落もしくは埋め戻しの土層と考えられる。第12・13・14層は堆積状況からSD20とは別の遺構になる可能性もある。SD20の埋土の上にSD21のテラスが設けられている。SD21の最上層はSD20の範囲まで覆っており、これによって、SD21のテラス部分も含めて、コーナー部分が完全に埋没している。

遺物出土状況 27-1Tおよび72Tにて、SD20の埋土のうち中位の土層から瓦が出土している。SD20の南西コーナーのからは小型弓が出土した(図149-235)。また、同地点のSD21の埋土下層である黒色粘質土中には多量の木質の植物遺体が堆積していた。

71T東側の段差 71TにおいてY=75298.5以東は一段下がり、下がったところに基本層序Ⅲ-2層であるAs-B混土層が堆積する。西辺外周区画溝周辺でこの層が分布するのは、溝や谷などの低い場所が主であるが、この場所は谷にあたっているわけではなく、西辺区画溝からも2.5m離れており、溝に伴う堆積でもない。この段差と溝との間に土塁等の高まりを持つ構築物があり、これが削平された結果As-B混土層が堆積したとも考えられる。

そのほか西辺外周区画溝周辺では、古代に属する明確な遺構は確認できなかった。

iv 正倉院南辺外周区画溝 SD23 (図67~70)

位置・立地 57T・60T・68Tで検出している。概ねX=29149上を通り、Y=75209~Y=75189・Y=75180~Y=75177の間で面的に検出している。正倉院南辺も西辺と同様、平坦な土地であり、ここに南辺外周区画溝が東西に延びている。整理等作業の段階で、53Tの南端の掘り込み(Y=75271付近)も南辺外周区画溝の一部であると判断した。なお、13T・32T・56T南端でも溝状の掘り込みを検出したが、As-Aが混入するため近現代の溝と判断している。

正倉院内を通過する谷地形NR27とY=75241以東で交差すると推測されるが、その状況は確認できていない。

57T・60T・68Tはいずれも現代の土地改良区の範囲内にあり、遺構の残存状況は悪い。

方向 75Tから68Tまでの間で溝の方向を見ると、ほぼ正方位をとる。ここから東、Y=75205~Y=75191までは残存状況が良くないが、N-88°-Eとやや北に振れる。Y=75191以東は向きをやや南に変えN-95°-Eとなる。

形状 土地改良により残存状況が悪く、平面形状は一定ではないものの、概ね直線的に延びる。断面形は逆台形であるが、68T西端と60T東端では中位に段が付く。60TのY=75199~Y=75191の間は南肩部にテラス状の段が付く。57Tではやや丸みを帯びた底面となっている。

規模 検出長は57Tで2.7m、60T~68Tでは19.24mを測る。南辺外周区画溝全体では75T南西コーナーから57Tまでの長さが125.89mとなる。検出幅は60Tおよび68Tでいずれも最大2.21mを測る。Y=75200付近で検出した溝幅は細いが、これは検出面の標高がこの付近で低く、溝上部が削平されていることによる。また、溝肩の検出ラインが直線的でないことにもよる。検出面からの深さは68T西壁で0.84m、60T東壁で1.08m、57T西壁で1.08mを測る。

底面の勾配 底面の標高は計測した場所の数値を示すと表19になる。全体としては西から東へ向けて下っている。南西コーナーである75TのE-E'断面地点と東方の57T(西壁)地点との標高差は1.63m、勾配は13.7%である。68Tから57T間だけで見ると、標高差は0.51m、勾配は24.3%である。溝と谷地形NR27との関係は未調査のため不明だが、68T以東に限れば、溝は正倉院全体の地形の傾斜に合わせた

表19 南辺外周区画溝 底面標高一覧表

計測地点	底面標高
Y=75300.0 (75T E-E'断面)	107.10m
Y=75208.0 (68T 西壁)	105.90m
Y=75202.0 (68T 東壁)	105.98m
Y=75199.0 (60T C-C'断面)	105.94m
Y=75195.0 (60T B-B'断面)	105.86m
Y=75189.0 (60T 東壁)	105.68m
Y=75180.0 (57T 西壁)	105.47m

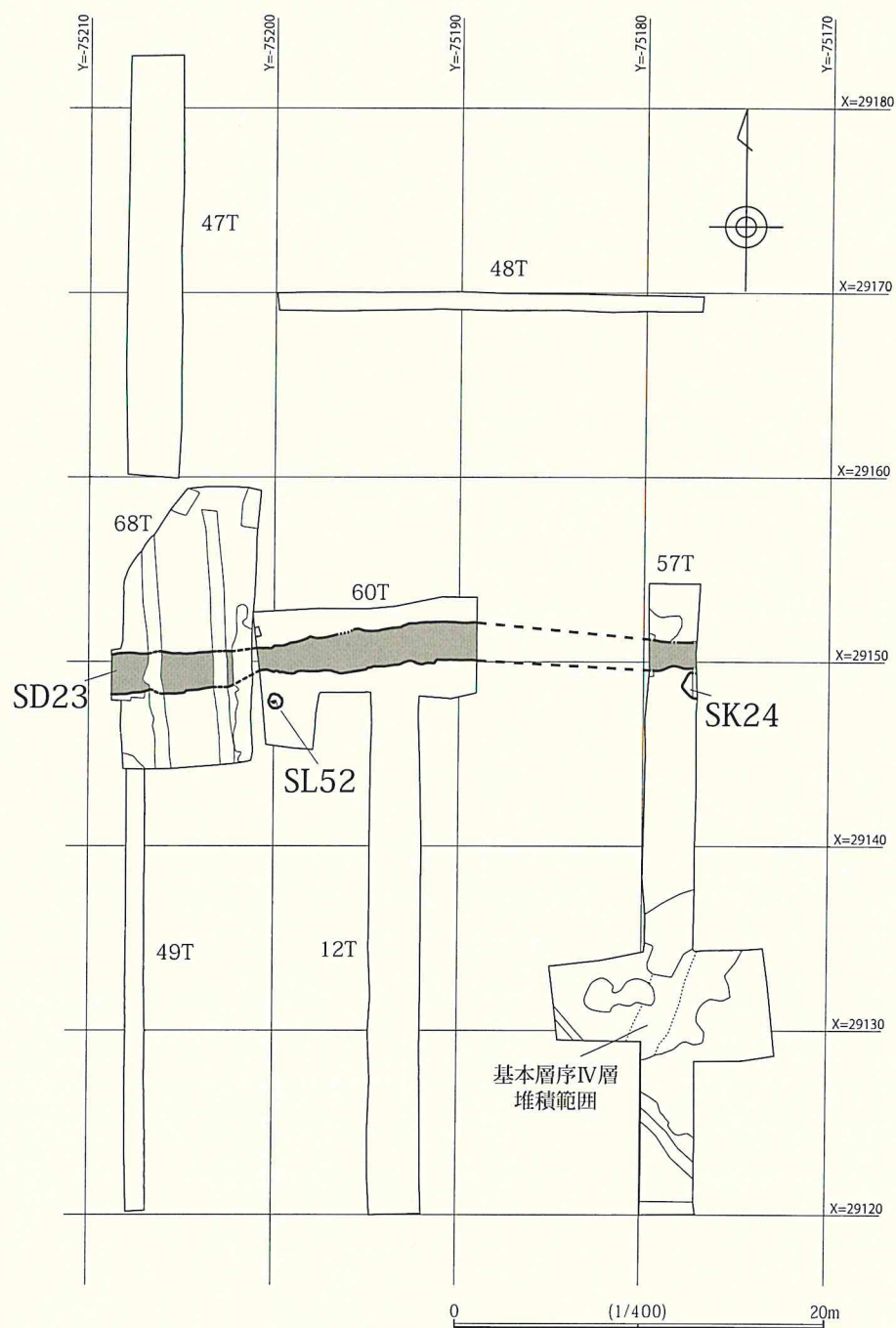


图 67 南边外周区画溝 平面图

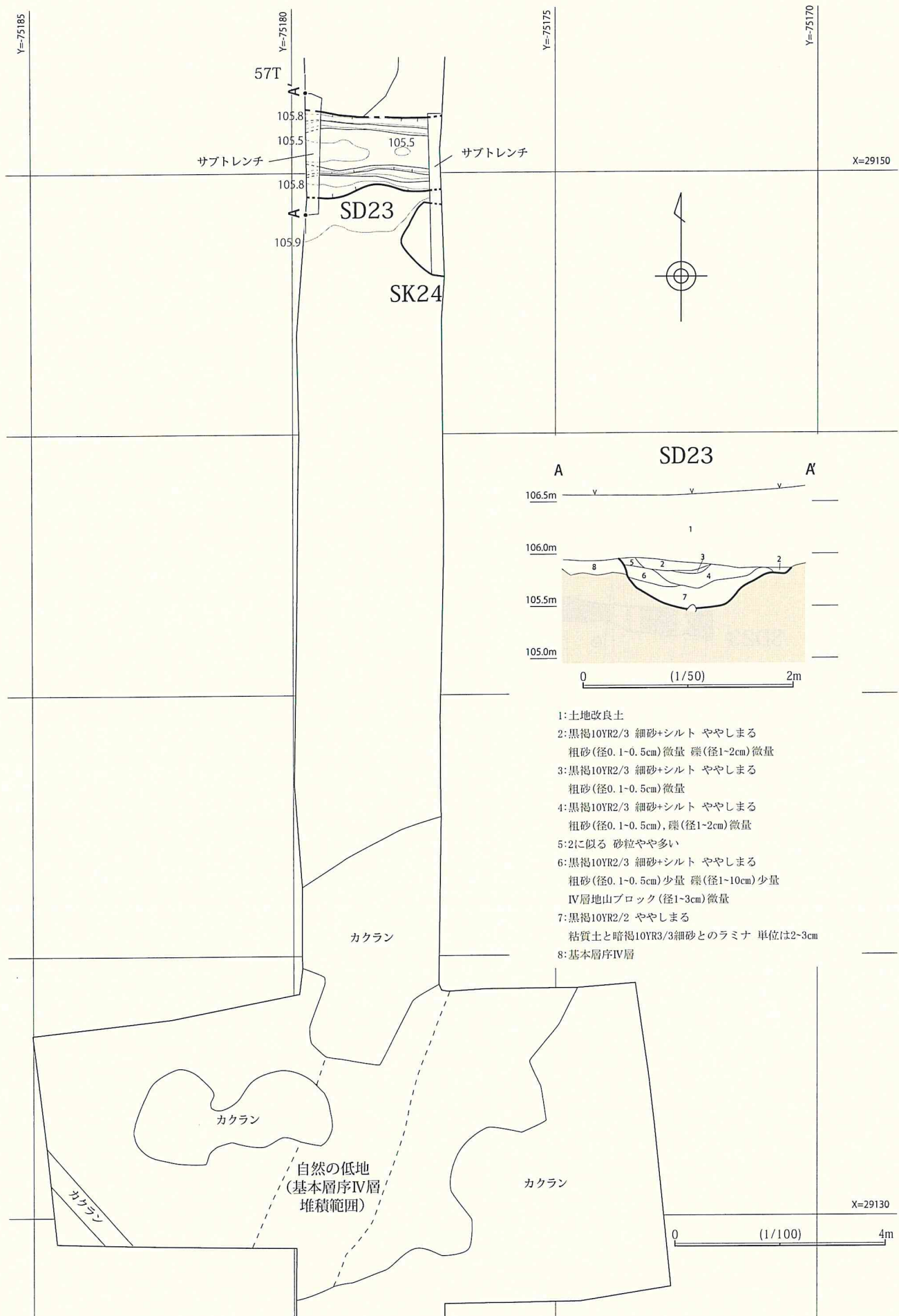


図 68 SD23 (57T 部分)・SK24 平面図・土層断面図

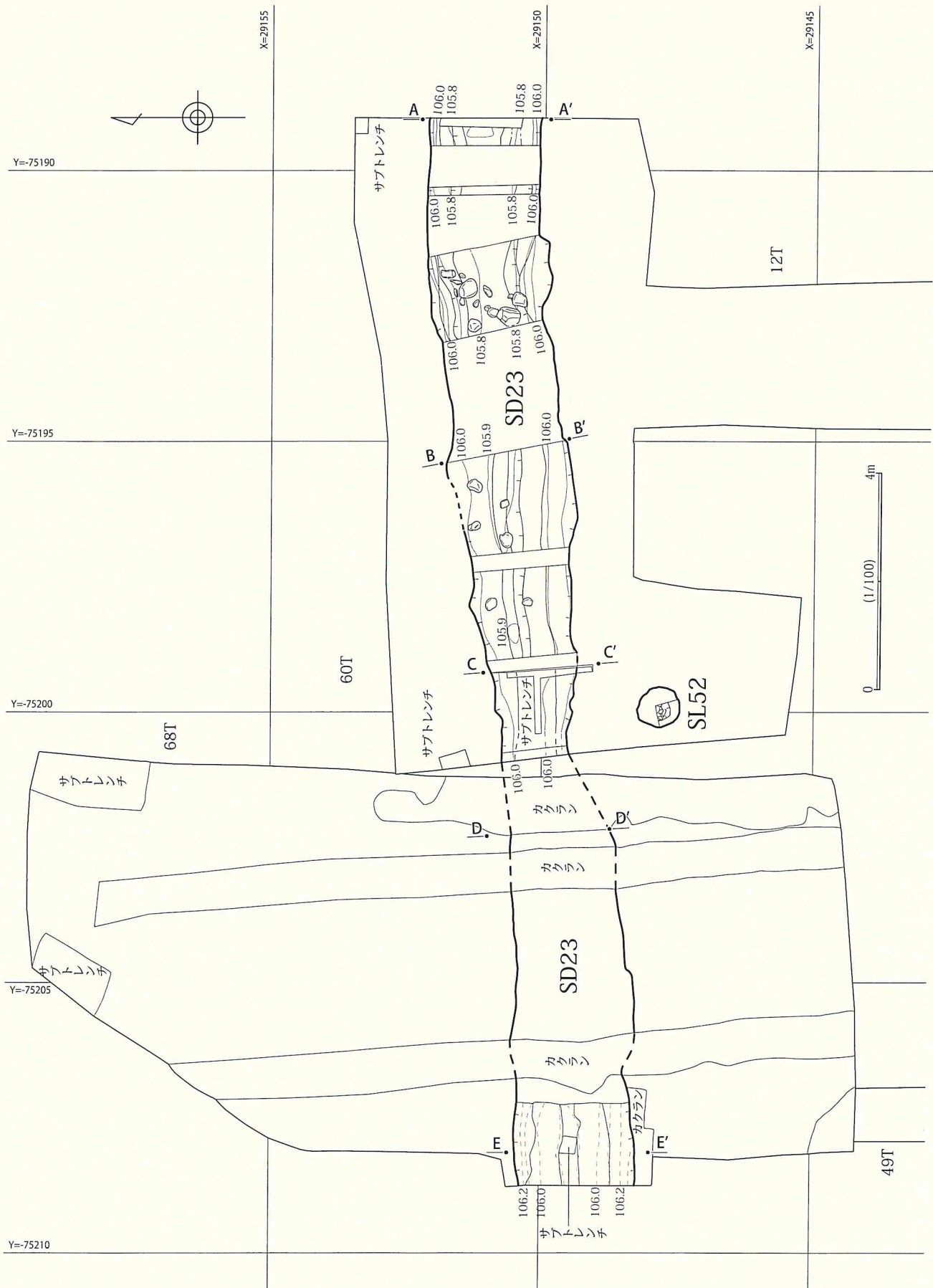
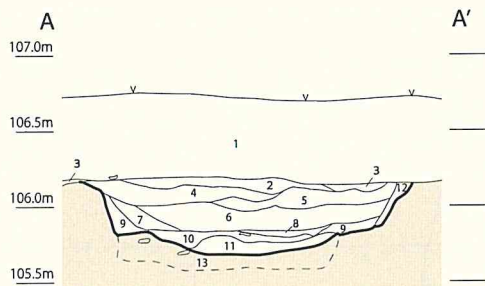
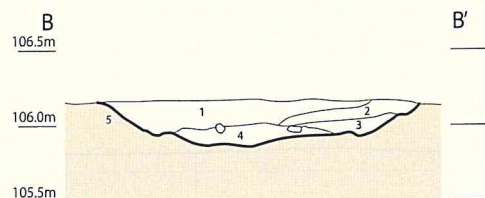


図 69 SD23 (60T・66T 部分) 平面図



A-A'

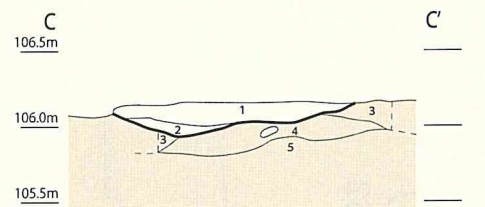
- 1: 褐10YR4/4 しまりやや強い 粘性あり 上層30cmは耕作土 下層は礫(径3~15cm程)を多く含む土地改良土
- 2: 暗褐10YR3/3 シルト+粗砂 しまり強い 粘性弱い
- 3: 褐10YR4/6 しまりあり 粘性あり 褐色土ブロック混
- 4: 暗オリーブ褐2.5Y3/3 しまりあり 粘性あり 白色粒子、鉄分混 礫(径1~2cm)少量
- 5: 黒褐2.5Y3/1 しまりややあり 粘性あり 鉄分少量 白色粒子混
- 6: 褐灰10YR4/1 しまりあり 粘性ややあり 鉄分多量 白色粒子、砂粒混 礫(径2cm)少量
- 7: 暗褐10YR3/3 しまりあり 粘性弱い 鉄分多量 褐色粒子、白色粒子混
- 8: 黒褐10YR3/1 しまり弱い 粘性あり 鉄分少量
- 9: 黒褐10YR3/1 しまり弱い 粘性あり 鉄分、白色粒子混 褐色土ブロック(径0.5cm)少量
- 10: 黒褐2.5Y3/1 しまり強い 粘性弱い 砂粒多量 礫(径1~3cm)、鉄分混
- 11: 褐灰10YR4/1 しまりやや強い 粘性あり 鉄分多量 白色粒子、砂粒混
- 12: 黒褐10YR3/1 しまりあり 粘性あり 褐色土ブロック(径1~3cm)多量 白色粒子、鉄分少量
- 13: 褐10YR4/4 しまり強い 粘性弱い 礫(径1~3cm)、鉄分大量 (地山土)



B-B'

B-B'

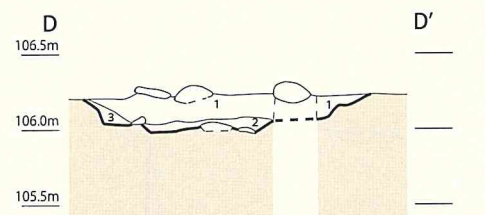
- 1: 褐灰10YR4/1 しまりややあり 粘性やや強い 白色粒子、鉄分多量 礫(径1~2cm)少量
- 2: 褐灰7.5YR4/1 しまりややあり 粘性あり 白色粒子多量 鉄分、礫(径3~5cm)、褐色土ブロック(径1cm)少量
- 3: 黒褐2.5Y3/1 しまりあり 粘性やや強い 褐色土ブロック(径1~3cm)多量 白色粒子、鉄分混
- 4: 褐灰10YR4/1 しまり強い 粘性弱い 礫(径1~5cm)、砂粒多量 鉄分混む
- 5: 明黄褐10YR7/6 しまりあり 粘性あり 鉄分多量 白色粒子少量 (地山土)



C-C'

C-C'

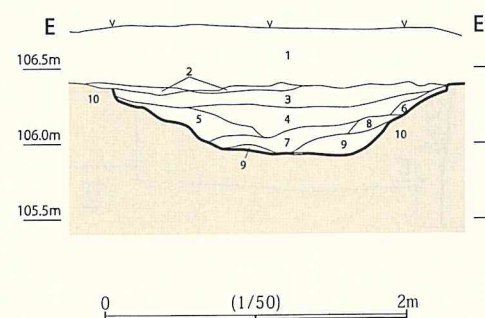
- 1: 黒褐10YR3/1 シルト+細砂 ややしめる 粘性やや強い 礫(径1~7cm)多量
- 2: 灰黄褐10YR4/2 礫+細砂 ややしめる
- 3: 黄褐10YR5/6 シルト よくしめる 粘性強い ローム二次堆積層 基本層序V-1層 (地山土)
- 4: 褐10YR4/4 礫+細砂 よくしめる 二次堆積層の間の礫凝集層 (地山土)
- 5: にぶい黄褐10YR5/4 シルト よくしめる 粘性強い ローム二次堆積層 3層より砂質である (地山土)



D-D'

D-D'

- 1: 褐灰 10YR5/1 しまりややあり 粘性強い 礫(径0.5cm)、白色粒子多量、鉄分混
- 2: 黄灰 2.5Y4/1 しまりあり 粘性あり 礫多量
- 3: 黄灰 2.5Y5/1 しまりややあり 粘性あり 粗砂少量 鉄分混



E-E'

E-E'

- 1: 黒褐10YR2/1 しまり強い 粘性弱い 現代耕作土
- 2: にぶい黄橙10YR6/4 しまりややあり 粘性やや強い 土地改良土
- 3: 褐灰10YR4/1 しまり弱い 粘性やや強い 鉄分多量 白色粒子混 炭化物微量
- 4: 黄灰2.5Y5/1 しまりややあり 粘性強い 鉄分多量 褐色粘土ブロック(径0.5~1cm)混 白色粒子少量
- 5: 暗灰黄2.5Y5/2 しまり弱い 粘性やや強い 鉄分多量 褐色粘土ブロック(径0.5~1cm)多量 砂粒少量
- 6: 黄灰2.5Y4/1 しまり弱い 粘性あり 鉄分多量 褐色粘土ブロック(径0.5~1cm)、白色粒子少量
- 7: 灰2.5YR4/1 しまり弱い 粘性やや強い 鉄分、褐色粘土ブロック(径0.5cm)、砂粒混
- 8: 褐灰10YR5/1 しまりややあり 粘性あり 鉄分多量 褐色粘土ブロック(径0.5~1cm)、白色粒子少量
- 9: 褐灰10YR4/1 しまりややあり 粘性あり 砂粒多量 鉄分、褐色粘土ブロック(径0.5~1cm)混
- 10: にぶい黄橙10YR7/4 しまりあり 粘性やや強い 鉄分多量 (地山土)

図 70 SD23 (60T・68T 部分) 土層断面図

勾配となっている。

土層 埋土は粘性がある土が主体である。南辺周辺の地山は粘性が強いV-1層が主体をなしており、これに起因していると思われる。埋土は上層と下層に大きく分けられる。図70 A-A'断面では下層最上層に薄い黒褐色粘質土があり(第8・9層)、一定期間湿った状態にあったと思われる。

出土遺物 57Tでは溝埋土の上層最下面(第6層と第7層との間)から瓦、60T E-E'断面付近では同じく上層最下面(第6層と第8層との間)から瓦や須恵器甕、68Tからも瓦や須恵器甕が出土した。また、いずれのトレンチからも溝埋土の上層最下面から円礫が出土した。また、68T西端の溝底面から曲物蓋板(図149-234)が出土した。

(4) その他の遺構

i SP08～SP13 (図49)

位置 18T内のX=29281～X=29283、Y=-75269～Y=-75260に位置する。SK07に隣接する。

立地 正倉院西寄りに立地し、西に24.45m行くと現況の谷地形NR28崖端部に至る。

検出状況 各遺構の規模は下記のとおりである(表20)。このうち、SP08・SP10・SP11が東西方向に並ぶため、発掘作業段階では柱穴列の可能性を考えていたが、正倉院内では建物は礎石建物のみが確認されていることから、礎石据付穴にあたる可能性もある。しかし、根石やその痕跡は確認できず、いずれも遺構内を掘り下げていないので、遺構の性格は不明である。

(5) 旧地形 (図71)

多胡郡正倉跡では、正倉院が機能していた時期に、

正倉院内やその隣接地に谷の窪地が存在していたことが判明している。ここでは正倉院内外の旧谷地形について述べる。谷の名称は、調査によって確認した正倉院内部のものをNR25・26・27、正倉院西側の現況谷地形をNR28、正倉院北東側の段丘崖下に沿う現況の低地をNR29と呼称する。正倉院内部においてもこれらの谷が整地されず窪地として残っていたことも多胡郡正倉跡の特徴である。

i NR25 (図72・73)

位置 正倉院北西寄りの段丘上に位置し、19T・64-1T・64-3T・69T・70Tで検出している。検出した範囲はX=29334.15～X=29353.00、Y=-75283.96～Y=-75234.00である。

形状 自然地形のため、復元できる平面形状は不整形である。NR25の西側はNR28によって開析された崖になっている。この崖下までの標高差は現況地形で約1.2m、NR25西端底面からは0.97mを測り、いずれもNR25底面の標高の方が高い。このことからNR25はNR28に切られているとみられる。一方、NR25は北東方向に伸び、北辺外周区画溝を横切り、中位面の段丘崖へ抜けると思われる。64-1Tの土橋(SX58)東側周辺は検出面のレベルが低い、これはNR25に起因していると考えられる。

断面形状は皿状で、谷としては浅い窪みの様相を呈する。

規模 トレンチでの断片的な検出であるが、東西方向で総延長56.9mを確認した。64-1Tで確認できた上幅は、17.03mを測る。

断面は64-1T A-A'断面(図73)で観察している。深さは最深部底面まで、現地表面から0.83m、古代面である第4層上面(基本層序IV層)から0.35m

表20 18T Pit計測表

遺構名	長軸 (m)	短軸 (m)	平面形状	埋 土
SP08	0.82	0.68	円	Hue10YR3/2 黒 細砂混じりのシルト
SP09	0.46	0.41	円	Hue10YR3/2 黒褐 シルト混じりの細砂
SP10	1.13	0.96	円	Hue10YR2/2 黒褐 シルト 径3～8cm礫混
SP11	0.85	0.78	円	Hue10YR2/2 黒褐 シルト 径8～15cm礫混
SP12	0.52	0.45	円	Hue10YR2/3 黒褐 シルト
SP13	0.40	0.37	円	Hue10YR2/3 黒褐 細砂混じりのシルト

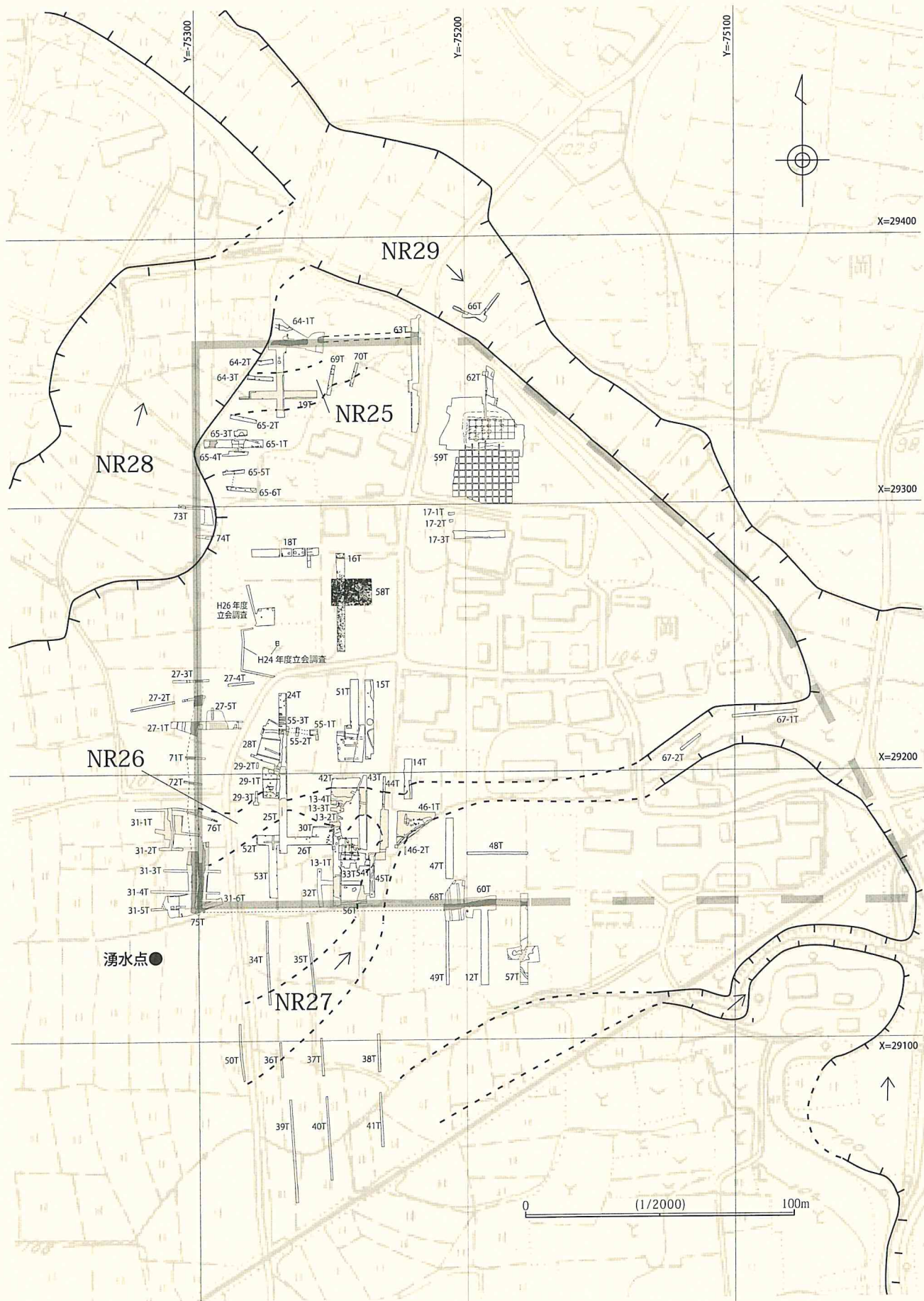


图 71 旧地形 平面图

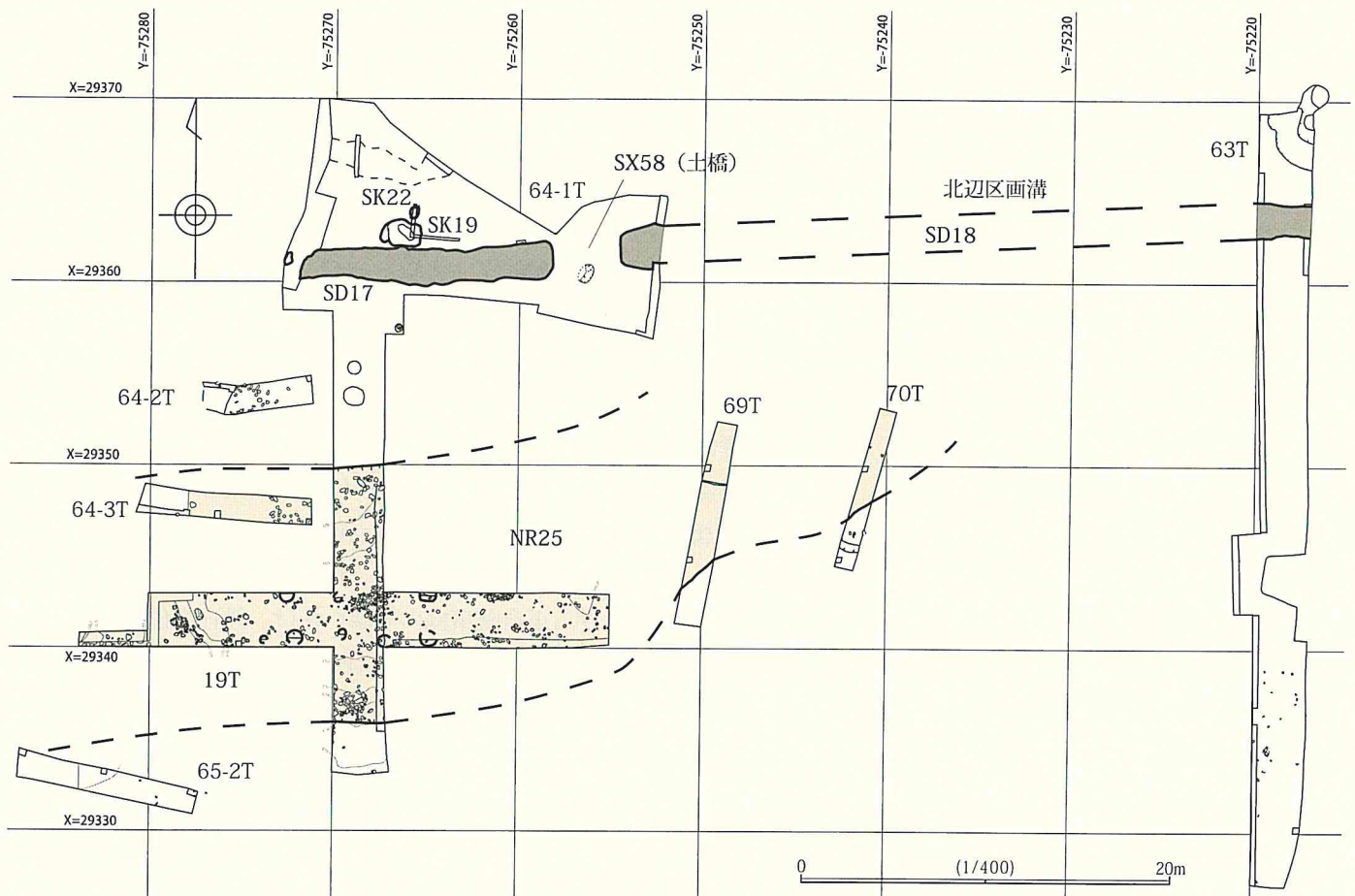


図 72 NR25 平面図

である。谷断面中心部の標高は、第4層上面が105.32m、底面が104.97mである。谷の北端の標高は105.17m、南端の標高は105.67mを測る。谷最深部と北端との標高差は0.20m、南端との標高差は0.70mである。

底面の勾配 底面において標高の最高値は19T西端の105.12m、最低値は70Tの104.52mであり、西から東へ下る勾配である。

土層 64-1T A-A'の横断面(図73)を見ると、主たる堆積土である第2層(基本層序Ⅲ-2層)、第4層および第5層(基本層序Ⅳ層)のいずれも水平に堆積している。人為的に埋められたのではなく自然堆積で埋没したと考えられる。

出土遺物 多くの遺物が出土している。第5層以下は縄文時代の包含層、第2層以下は古代以前の包含層となっている。古代の遺物としては瓦が主体であるが、そのほか有蓋短頸壺(図146-218)を含む須恵器・土師器も出土している。

表 21 19T Pit 計測表

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
SP30	0.88	(0.30)	0.26	一部のみ検出
SP31	0.90	0.80	0.53	
SP32	0.75	0.63	0.37	
SP33	0.52	0.45	0.18	
SP34	0.58	0.40	0.48	
SP35	0.75	(0.43)	0.30	一部のみ検出
SP36	0.83	0.80	0.48	
SP37	0.42	0.40	0.22	

() 内は一部のみ検出した遺構の計測値

NR25 内の遺構 19Tの谷底部ではピットを8基検出している(表21)。東西方向に2列並んでいるが、平面規模や深さに統一性は無く、建物等の遺構とする積極的な手がかりは得られなかった。

ii NR26 (図74~79)

位置 正倉院南西寄りに位置する。31-1T・31-2T・

76T・25T・13-1T・13-2T・13-3T・43T・44Tにわたり、西辺外周区画溝からほぼ真東に延びている。X=29166～X=29194、Y=75324～Y=75299で検出した。44T以東のX=29180、Y=75230付近で南から延びるNR27と合流する。上流の31-1T以西では、現況地形で見える限りNR26の痕跡は確認できない。

形状 平面形状は蛇行しているようにも見えるが、これは各トレンチにおける検出面の削平度合が一定でなく、上幅長が異なることによる。75T-76T間および13T-42T間については、基本層序Ⅳ層黒褐色土検出範囲をNR26と解したため、堆積のごく薄い谷の肩部も広く谷範囲に含めている。他の検出地点も同じように黒褐色土範囲を谷に含めたため、かなりいびつな形状となっている。

断面形はいずれも皿状で、谷としては浅い窪みの様相を呈している。

規模 検出長は東西方向で約95mである。上幅は検出状況によって大きく異なるが、最大幅は75T-76T間で約20mを測り、最小幅は25T内で約4mである。

谷の横断面は25Tと43Tで調査した。25TA-A'断面(図77)では、深さは最深部底面まで、現地表面から0.98m、古代面にあたる第6層上面(基本層序Ⅳ層)から0.63mである。谷断面中心部の標高は、第6層上面が107.17m、底面が106.98mを測る。また、43TA-A'断面(図78)では、深さは最深部底面まで、現地表面から0.64m、古代面にあたる第8層上面(基本層序Ⅳ層)から0.29mである。ここでの谷断面中心部の土層の標高は、第8層上面が106.30m、底面が106.02mを測る。

底面の勾配 25T-43T間の古代面にあたる基本層序Ⅳ層上面の標高差は0.87m、勾配は13.0‰、底面の標高差は0.96m、勾配は11.6‰である。

土層・出土遺物 NR26の土層については、テフラ分析も含めて76TA-A'断面(図75)で観察している。谷埋土の最下層は第16層である。この層の直上にはテフラを含む層(第15層)があり(第3章第4節分析3参照)、層位的に3世紀後半頃のテフラであるAs-Cの可能性が高い。25Tにおいては最下層から縄文時代中期の土器が出土している。76T第5層は水平に堆積し、西辺外周区画溝であるSD21を完全に覆う層である。この層からは瓦が出土している。第

4層は基本層序Ⅲ-2層に対応するAs-Bを多量に含む層である。NR26はこの第4層によって完全に埋没している。76TA-A'断面はNR26の縦断面であるが、どの層もほぼ水平に堆積しており、穏やかな環境の下で堆積したようである。

iii NR27 (図80～84)

位置 50T・36T・34T・35T・56T・45T・44T・46T・14Tにわたる。X=29094～X=29195、Y=75285～Y=75210で検出した。正倉院南西の外側から南辺外周区画溝を横切るように北上し、44T以東のX=29180、Y=75230付近でNR26と合流し方向を東へ変える。合流地点付近の46T以東では現況の排水路と流路が重なる。排水路を東進すると67T付近から正倉院東側の外部へ抜け、段丘中位面へ達する。一方、上流の50T以西では、現況地形を見る限りNR27の痕跡は確認できない。

形状 断面形状は45T-56T間(C-C')断面(図83)で見ると、西寄りの立ち上がりはやや急であるが、東寄り是比较的緩やかである。反対に44T-46T間(A-A')断面(図83)で東側の立ち上がりを復元するとやや急になる。

規模 NR27は正倉院内部で検出した谷の中で最も規模が大きい。検出地点をつなげた総延長は約117mである。上幅が測定できる場所は34T-36T間の約24m、44T-46T間の8.52m、14T-46T間の9.21mである。

谷の深さは、44T-46T間(A-A')断面(図83)では、最深部底面まで、現地表面から1.32m、古代面にあたる第5層上面(基本層序Ⅳ層)から0.63mである。谷断面中心部の標高は、第5層上面が106.23m、底面標高が106.50mを測る。また、45T-56T間(C-C')断面(図83)では、深さは最深部底面まで、現地表面から1.72m、古代面にあたる第9層上面(基本層序Ⅳ層:As-B直下層)から0.86mである。ここでの谷断面中心部の標高は、第9層上面が106.57m、底面が106.79mを測る。

正倉院の南側にあたる36T北端では、現地表面から深さ1.12m、(標高107.26m)まで掘り下げたが底面には至っていない。

底面の勾配 45T-56T間(C-C')断面(図83)と



図 73 NR25 (19T・64-1T 部分) 平面図・土層断面図

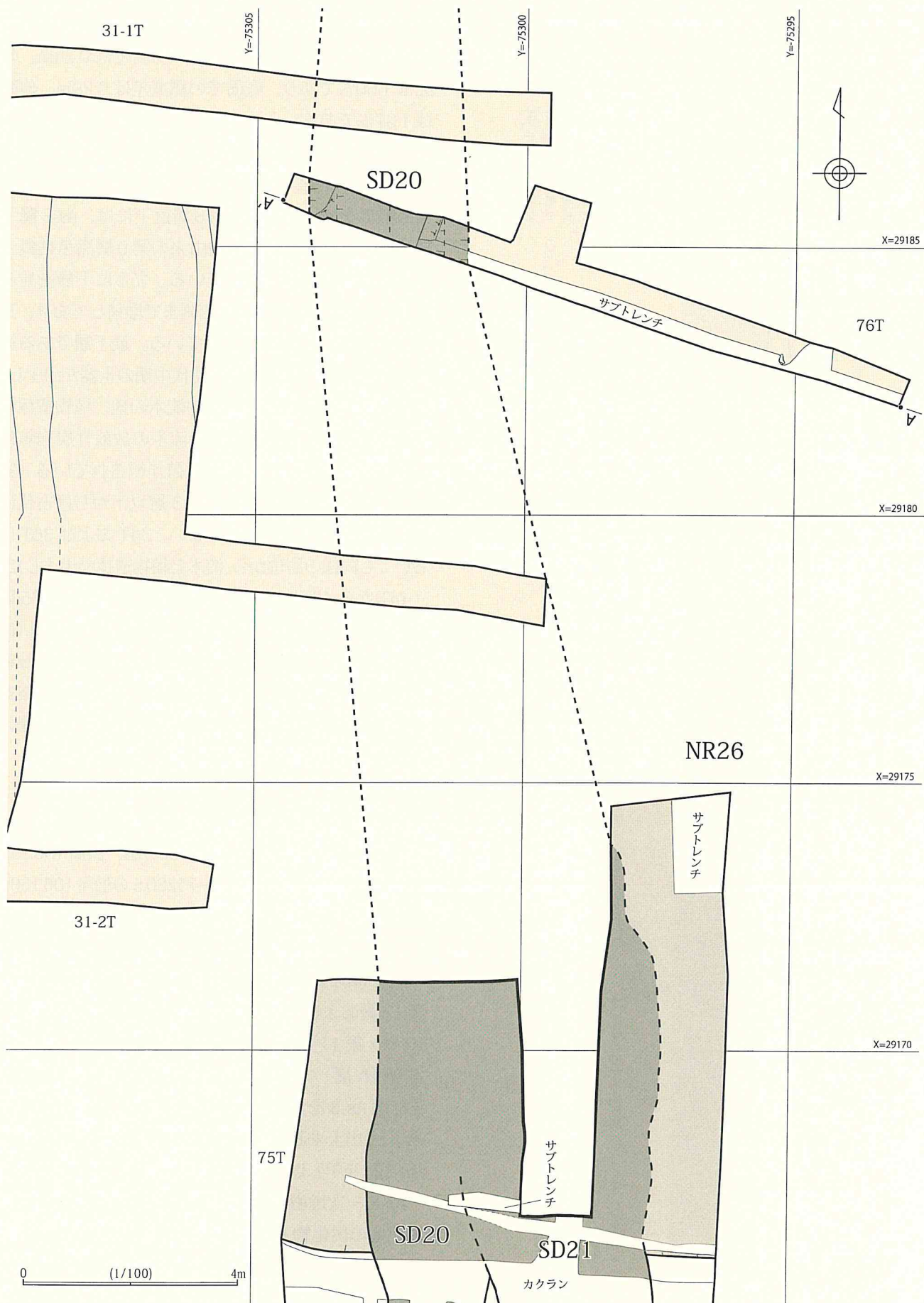


図 74 NR26 (31T・75T・76T 部分) 平面図 (1)

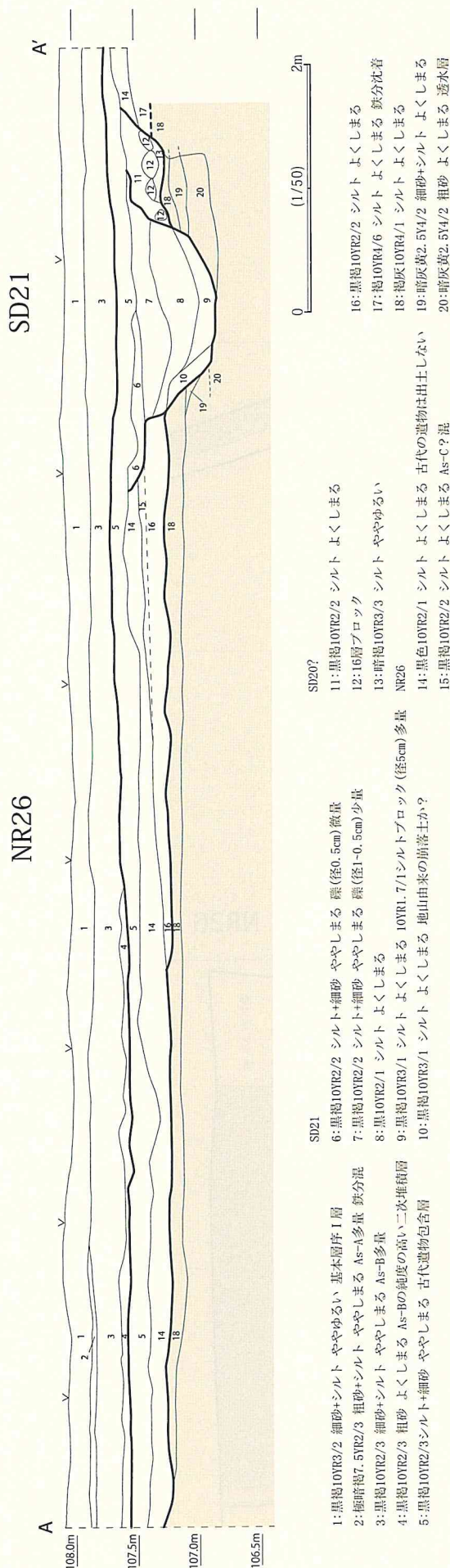


図 75 NR26 (76T 部分) 土層断面図 (1)

44T-46T 間 (A-A') 断面 (図 83) との間で、古代面にあたる基本層序IV層上面での標高差は 0.34m、勾配は 1.60%であり、底面での標高差は 0.29m、勾配は 1.37%である。

土層・出土遺物 45T-56T 間 (C-C') 断面 (図 83) の第 8 層は As-B 一次堆積層であり、ほぼ水平に堆積し NR27 を覆っている。第 8 層直下には、As-B 降下によってパックされた植物由来の第 9 層黒色粘質土が 1cm 弱の厚さで堆積している。さらに下層を見ると、第 12 層は NR27 外の西側まで堆積しており、瓦を含む古代の遺物が出土している。最下層である第 18 層や第 22 層からは縄文時代中期の土器が出土し、第 22 層からは直径約 20cm の流木その他、植物遺体の細片が大量に出土した。この流木の放射性炭素年代測定では縄文時代晩期との数値が得られている (第 3 章第 4 節分析 5 参照)。第 13 層以下からは古代に該当する遺物は出土していない。34T および 36T においても同様の層位から、流木と植物遺体が出土した。

44T から 46T にかけての X=29165 ~ X=29185 間では、古代遺物包含層にあたる第 11 層~第 12 層 (図 83 A-A' : 基本層序IV層) 中から、瓦および 50cm 程の大きさの円礫が集中して出土した。特に 44T 東寄りおよび 46T における谷埋土からは瓦と礫が大量に出土している。

出土米と炭化物 46-1T における遺物としては出土米と炭化物もある (図 82)。

出土米は、X=29176.5、Y=-75222.8、標高 106.19m 付近、および X=29179.6、Y=-75220.5 の標高 106.160m 付近、の 2 か所において、それぞれ径 60cm 程度の範囲に分布していた。

出土層位は、44T-46T 間 (A-A') 断面 (図 83) の第 11 層および対応する 46T 西壁断面 (F-F') の第 10 層・第 11 層の暗褐色土および黒褐色粘質土 (基本層序IV層) である。これらの層は As-B 一次堆積層または As-B を大量に含む層の直下である。層位からみると、出土米と炭化物の埋没時期は As-B 降下 (1108 年:天仁元年) 以前で、これに近い時期と推定される。

As-B 一次堆積層および混土層を除去すると、出土米が他の炭化物と共に出土した。両者は暗褐色土および黒褐色粘質土に含まれている。採り上げた出土米の量は約 100 点を数える。粳であることが肉眼で

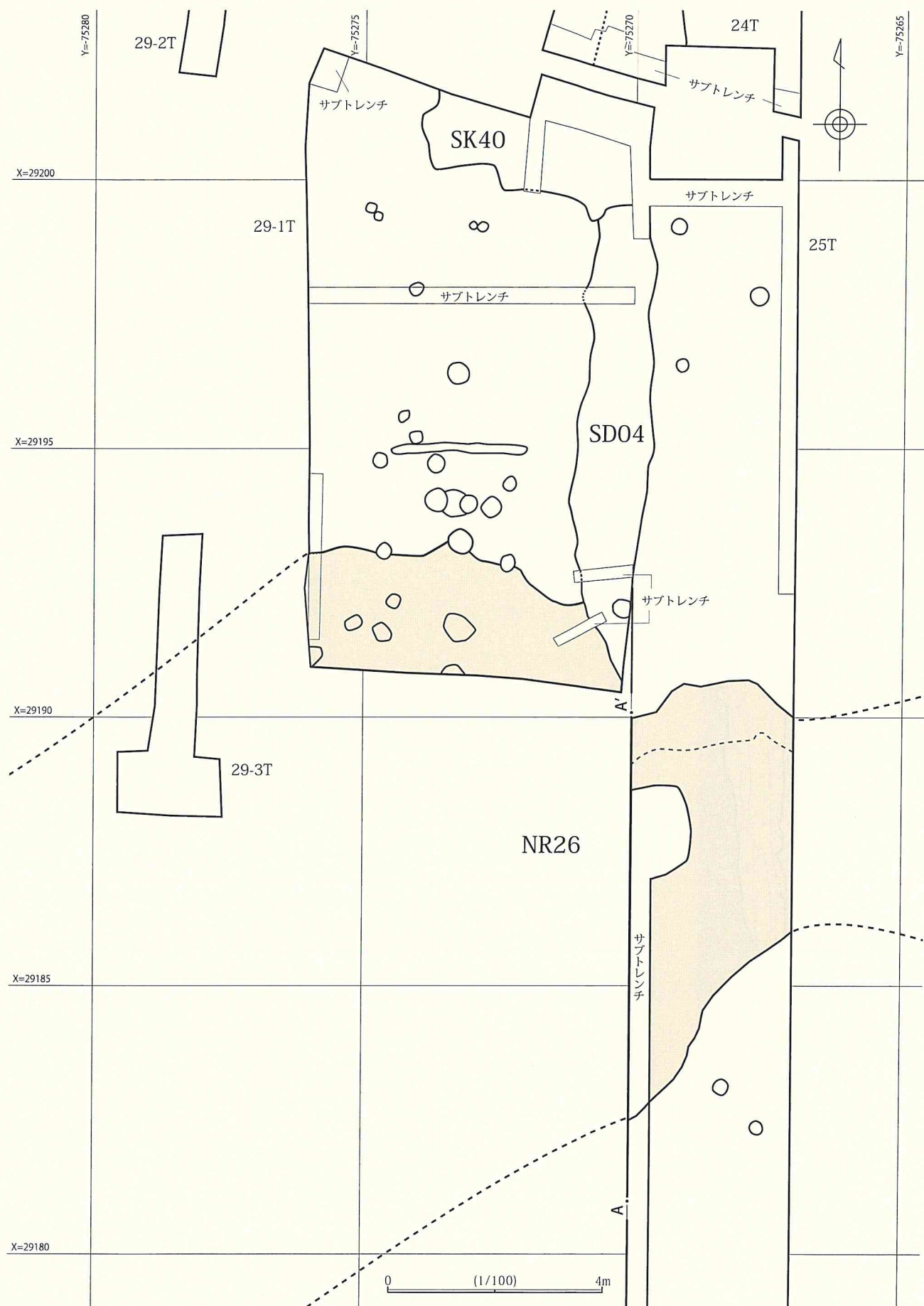


図 76 NR26 (25T・29-1T 部分) 平面図 (2)

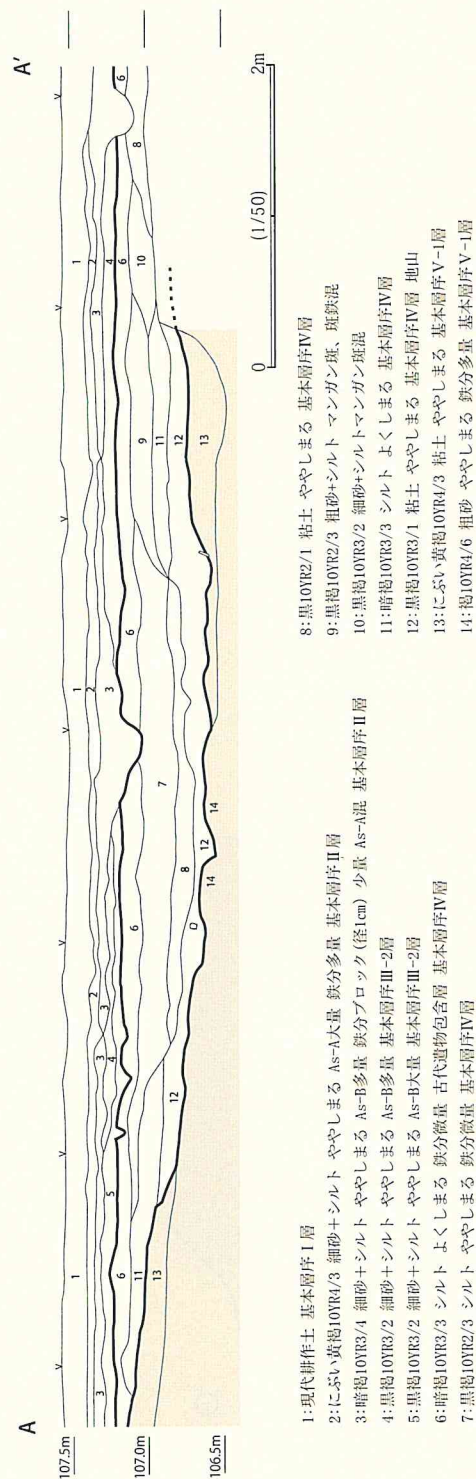


図 77 NR26 (25T 部分) 土層断面図 (2)

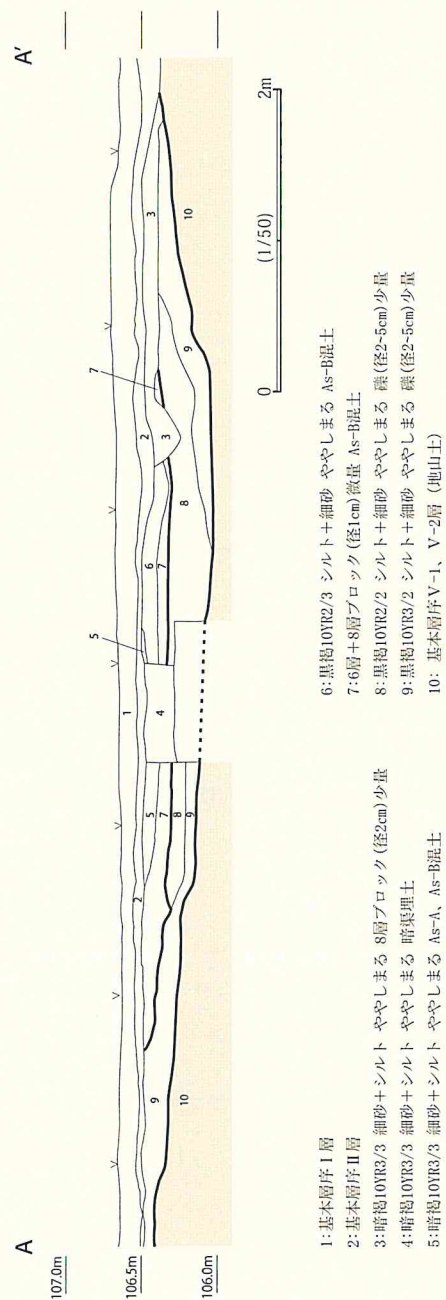


図 78 NR26 (43T 部分) 土層断面図 (3)

確認できたが、籾粒の規則的な並びは認識できず、発掘作業時には穎稻か稲穀であるか等の判断はできなかった。しかし、高分解能 X 線 CT 計測の結果、一部の出土米は穂状の状態で残存していた可能性が指摘された。また、放射線炭素年代測定においては 7 世紀中頃～8 世紀中頃の測定結果が出ている（第 3 章第 4 節分析 10 および 11 参照）。

炭化物も出土米と同様の層位から出土しているが、検出した範囲は広く、 $X=29714.8 \sim X=29180.7$ 、 $Y=-75225.6 \sim Y=-75220.0$ に渡り、さらに広がると思われる。炭化した木材片がほとんどであり、大きくても径 5 cm 程度である。

正倉院東部の調査 NR27 は現況水路に沿って正倉院東へ続くと推定されるが、正倉院の東半分は現在宅地として利用されており、発掘調査用地を確保するのが困難である。その中で空地の一角所に 67T を設定した（図 84）。

調査の結果、ここは現代に埋め立てられた場所であることがわかり、遺構・遺物は確認できなかった。67T を設定した場所は、NR27 から続く谷の内部であったと考えられる。なお、67T 西寄りで確認した谷の底部は、基本層序 V 層より下層の凝灰岩岩盤まで達している。

iv NR28（図 85～86）

位置 正倉院の北西外側に位置し、 $Y=-75270$ 以西にある。上流は正倉院外であり、西から東へ延びる。正倉院西辺に達する $X=29300$ 、 $Y=-75220$ 付近で北東に向きを変え、 $X=29400$ 、 $Y=-75270$ 付近で段丘中位面に抜ける。現況でも確認できる谷であり、これによって段丘上位面は字岡ノ西と字新井の二つの地域に大きく分かれている。正倉院北西側の 64T・65T 付近では、標高差 1.2m の崖を形成しており、この地形により正倉院北西外周が区画されている。NR28 の状況については谷の内部である 73T・74T において調査をした。

規模 上幅は、現況地形での計測であるが、 $X=29360$ ライン上で約 78m を測る。この付近での谷東肩と谷底付近の現況地表面との標高差は約 1.2m を測る。一方、これより上流にあたる西辺外周区画溝が通る $Y=-75300$ ライン上では、谷南肩と谷底付

近現況地表面との標高差は約 0.26m と小さくなる。

73T 北壁（A-A'）を見ると、底面は西から東へ向かってなだらかに傾斜している。このことから NR28 の最深部は谷の中でも東寄りに位置すると考えられる。73T での現地表面から最深部までの深さは 0.91m、最深部の標高は 106.32m である。74T ではさらに深くなっており、現地表面から深さ 1.25m（標高 104.91m）まで掘り下げたが底面は未検出である。

土層・出土遺物 埋土は底面とほぼ平行に堆積しており、強い水流の痕跡や人為的な埋め戻しは認められない。As-B 下の古代にあたる第 8 層・第 9 層（基本層序 IV 層）を見ると、正倉院に近い 73T 東端に瓦と 20cm 前後の円礫が多く含まれている。また、植物遺体も含まれている。

74T では As-B 一次堆積層の下 0.15m の第 7 層黒褐色土中に、As-C がわずかながら帯状に存在する（第 3 章第 4 節分析 3 参照）。

NR28 の東端には、谷と同じ方向に SD38 が通る。これは As-B 一次堆積層を切っており、1108 年（天仁元年）以降に掘削された溝である。埋土中にも自然科学分析により As-B が混入していたことがわかった（第 3 章第 4 節分析 3 参照）。遺物として NR28 東端同様、瓦と礫が多量に含まれている。

v NR29（図 87）

位置 正倉院の北東外側に接する段丘崖の下、段丘中位面の南端部に沿う部分には現在水路が通り、その隣地は水田として利用され、中位面でも標高が低い。このため、古代に遡る谷状の地形の存在が想定された。その状況を確認するため 66T を設定した。

調査状況 発掘調査の結果、遺構は確認できなかった。トレンチ内の谷最深部（ $X=29372$ 、 $Y=-75192$ 付近）において、現地表面から最深部までの深さは 1.2m、古代面にあたる第 5 層上面（基本層序 IV 層）から 0.34m である。第 5 層上面の標高は 100.80m、基底部の標高は 100.56m である。すなわち基底部から第 5 層上面までの厚さは 0.24m である。第 5 層は黒褐色粘質土であり、自然科学分析の結果、古代においては湿地状の土地であったと推定されている（第 3 章第 4 節分析 9 参照）。

遺物は瓦の小片が 1 点のみ出土した。

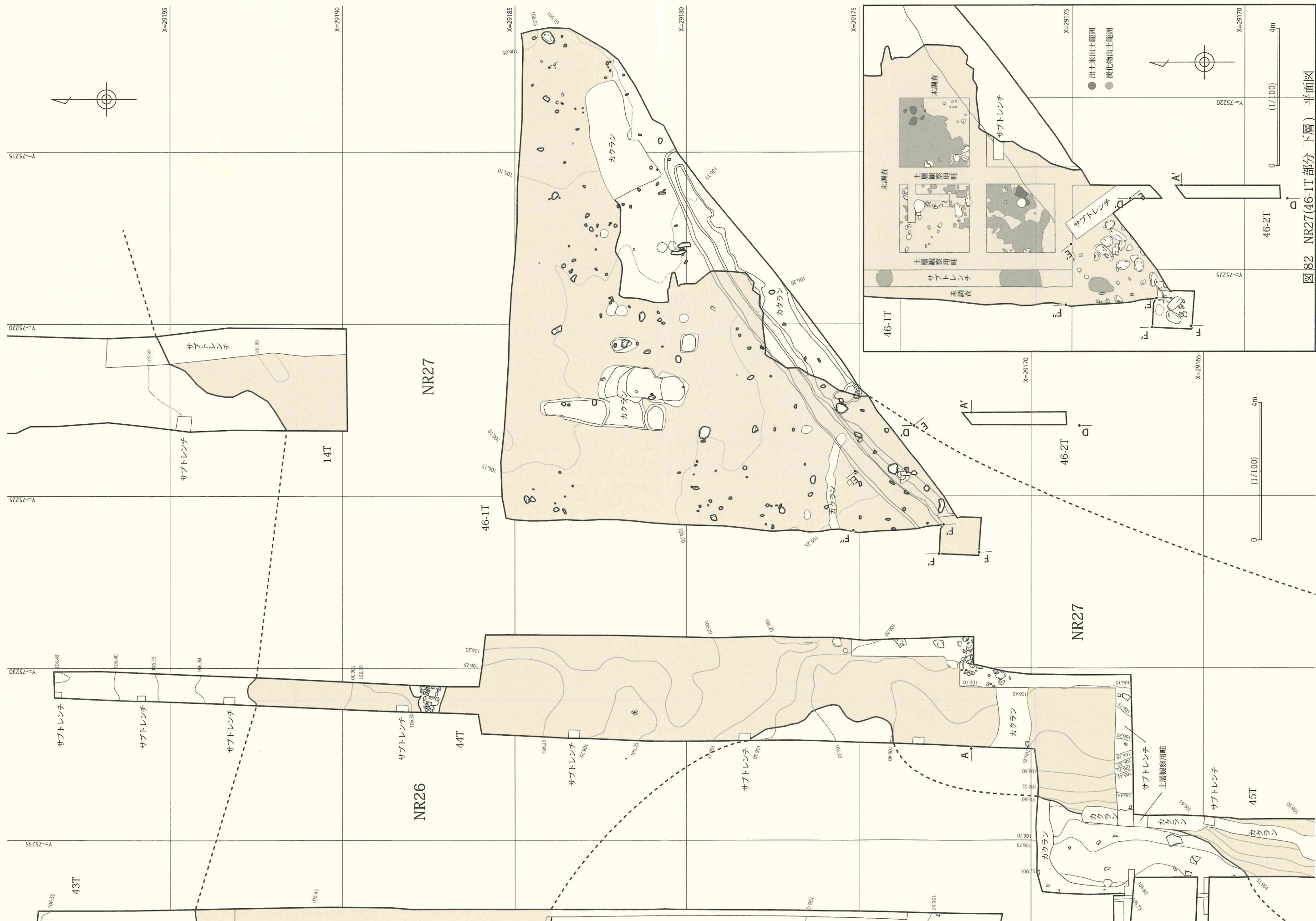


図 81 NR27 (14T・44T・45T・46-1T 部分) 平面図 (2)

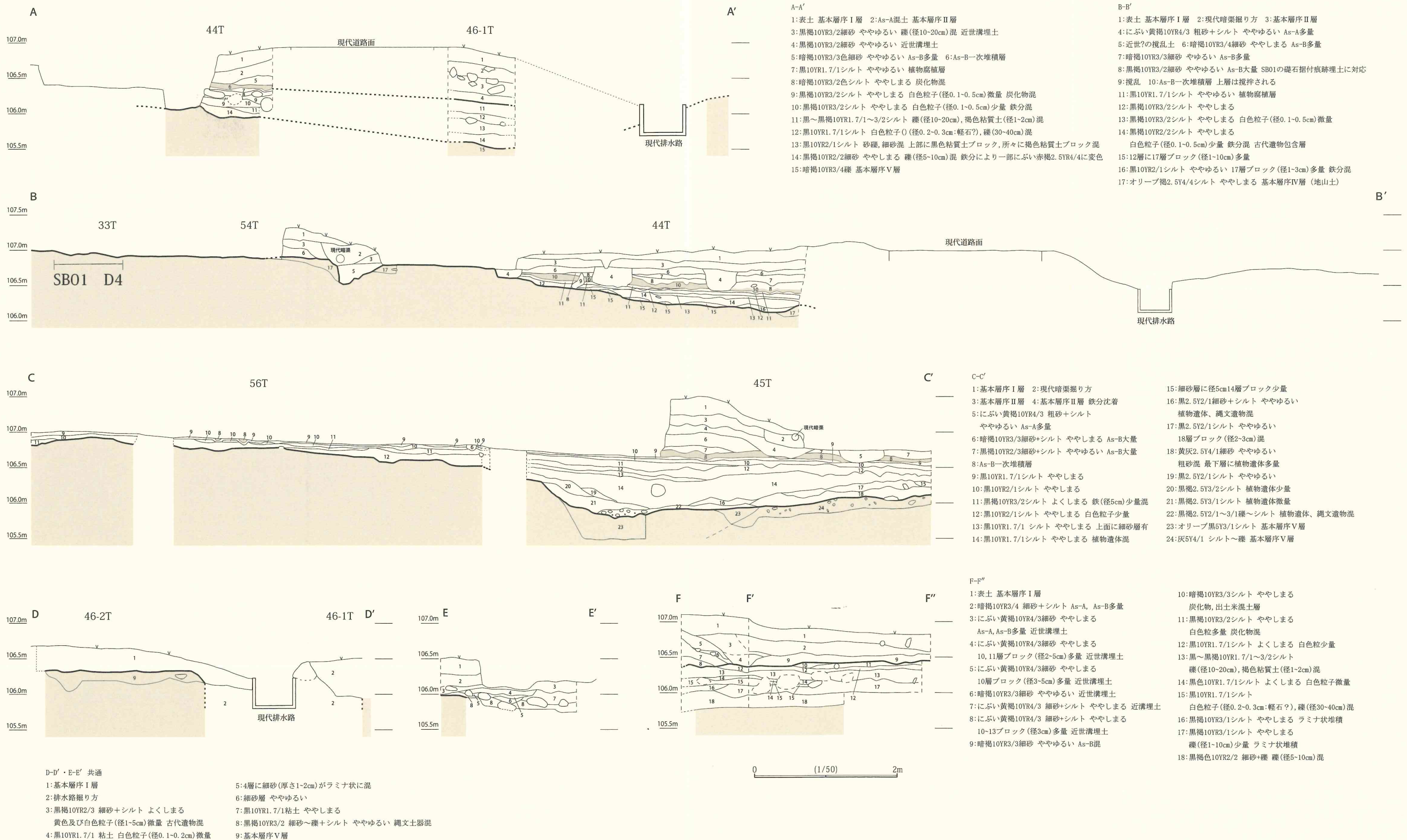


図 83 NR27 (44T・45T・46-1T・46-2T 部分) 土層断面図

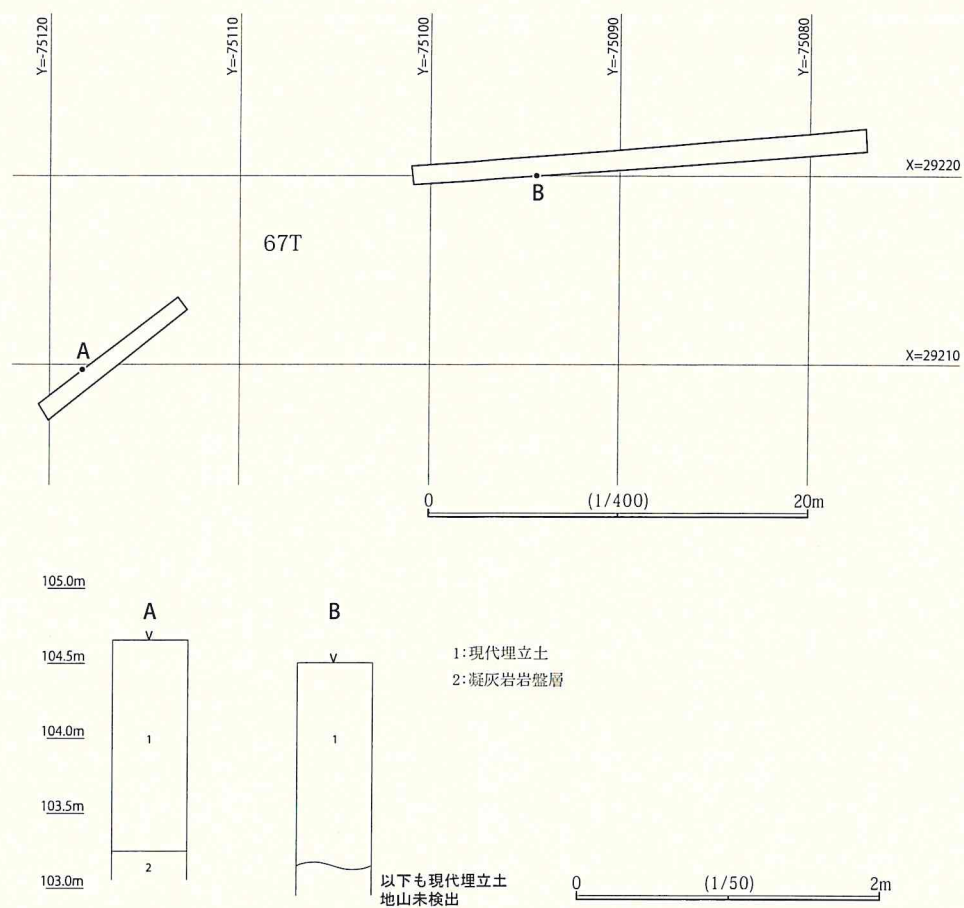


図 84 NR27 (67T 部分) 平面図 (3)・土層柱状図

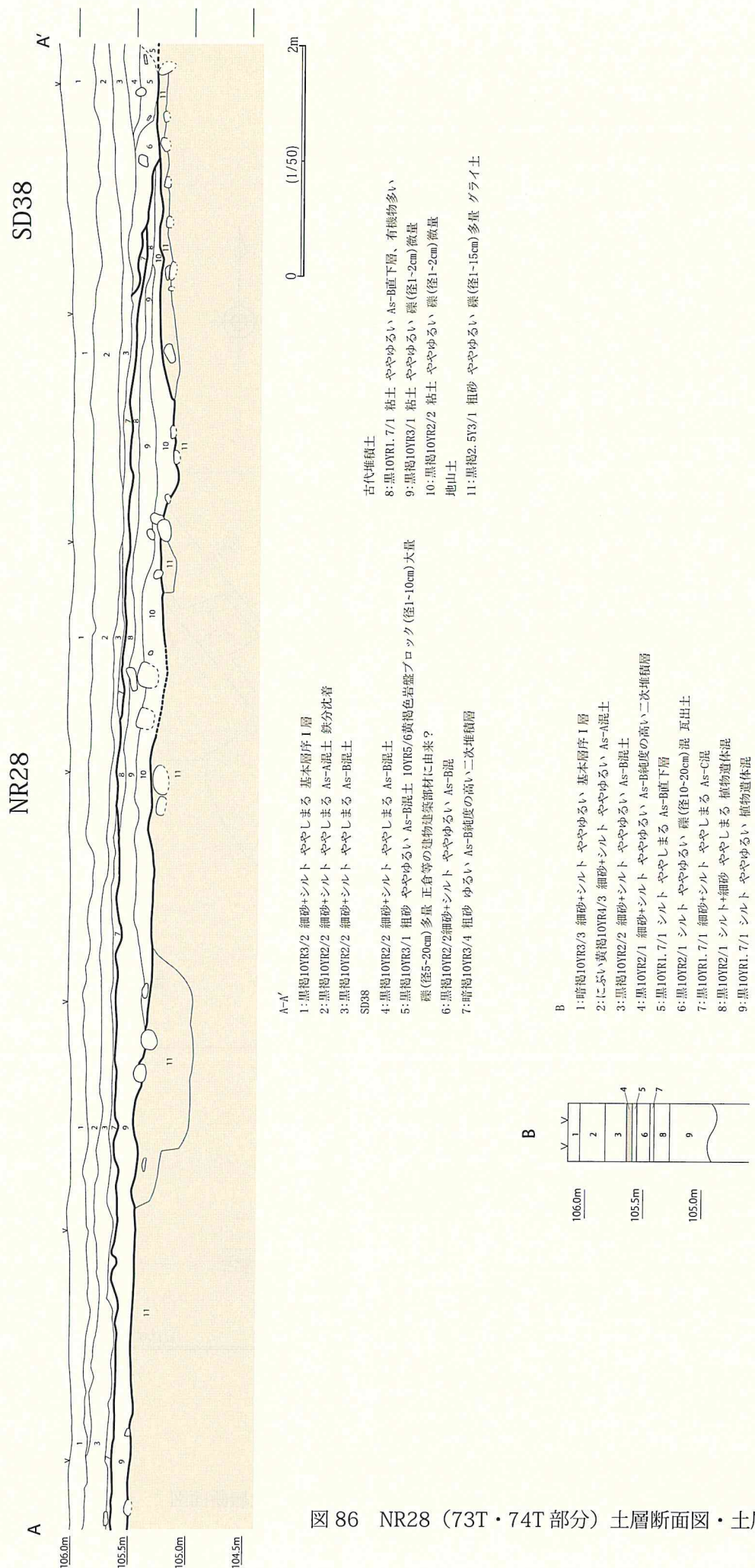


図 86 NR28 (73T・74T 部分) 土層断面図・土層柱状図

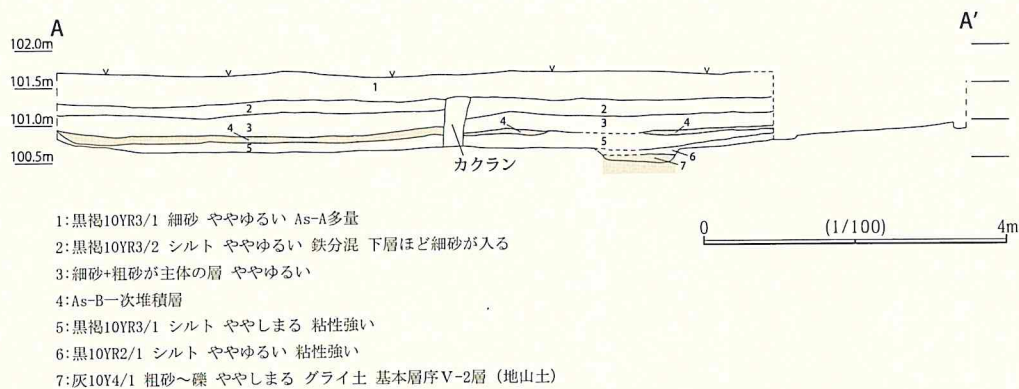
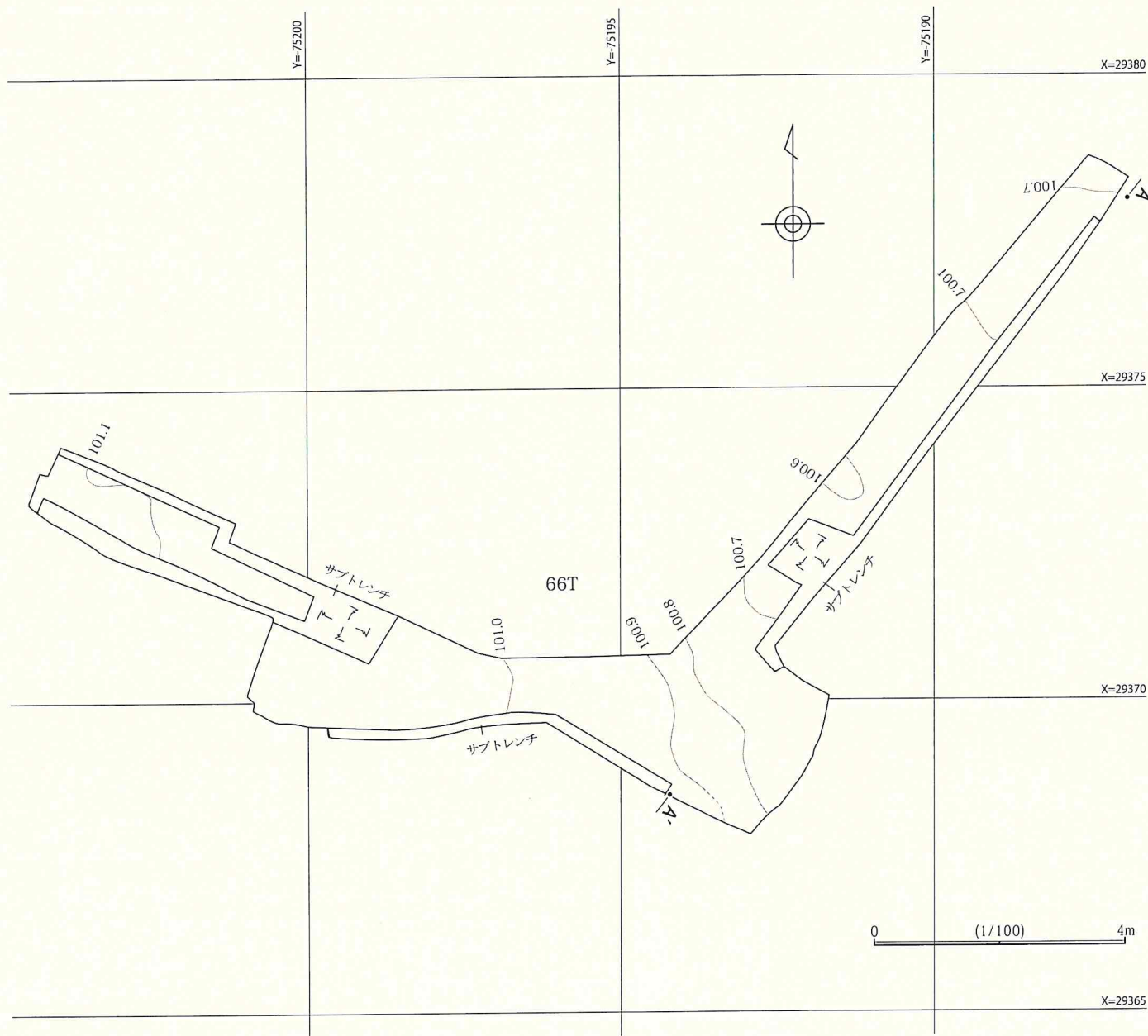


図 87 NR29 (66T 部分) 平面図・土層断面図